

わがはいは、わがはい
である

ほりいー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幻想郷を下から見あげた世界。幻想郷の上から見られた世界。

わがはい、が思いつくままに自分勝手にあちらこちらに行くのである

人も妖怪も神もわがはいにはかなわぬ

気の向くままにゆつくりといくのである

(東方Project 一話3000字縛り)

※完結しました

目次

どこにいくとも、かぜのむくまま	2
のきしたでもあたたかいものである	9
おんせんはしずかにはいるべきなのである	16
わがはいはまなあをしっておるのである	23
しゆくめいのたいけつ	30
そらをとぶのもひとくろうである	37
わがはいはしりたくなってきたのである	37
そうだおてらにいこう	51
おちやかいのおすそわけをするのである	58
つきよのうたげはにぎやかではなくとも	65
ぱーてーの誘いにはのらなければならぬ	72
かたいけついでべんきょうをするのである	79
このよは、おどろくことばかりである	86
わがはいはかさがあるくのである	86

あのねこはいいやつなのである —

101

しんじつはいつもひとつ —

109

じゆうきままにいきるのである —

117

おてんとうさまのしたは、ひろいのであ

る —

125

おまつりのそらはめぐるしいのである

—

133

どんなかたちのであいいものである

—

141

われはぼうしではないのである —

148

けんかしてはいけないのである —

155

よぞらのだんすほーるなのである

わがはいは、いたいのはいやなのである

—

169

おはなしはたのしいものである —

176

わがはいのえすこーとである —

183

つちあそびは、たのしいものである

191

おだんこのあじはどんなものであろう

199

とおくへおでかけするのはまようのであ

る —

206

よのなかはせわしないことばかりである

—

213

なかよくはんぶんこにはできぬ — 220

てんぐもたいへんなのである — 227

がんばりさんもやすまねばならぬ

234

おちていくときものんびりできるのだ

242

なかよくなるしゆんかんはきがつけぬ

250

ゆめのなかでもあいがあるものである

258

ちていのきねんである —

265

いいところをみつけることもいいところ

なのである —

273

そのかおはわがはいもすきである

281

おんせんにやってきたのである —

289

おふろでおよいではいかぬ —

297

おふろはしずかにはいらねばならぬ

305

にぎやかなのはやぶさかではない

313

ながゆはいかぬ —

321

くろねこのおさそいをうけるのである

328

おちやかいなのである —

336

ひぎのうえでくつろぐのである —

344

てーぶるのうえでおしゃべりなのである

352

さわがにとあめとにじのつめあわせなの

である

360

だれとでもなかよくできるのである

367

せいじやはいいこなのである

374

おまつりのようである！

382

わがはいにまかせるのである！

390

にじのなかをとぶのである！

397

たのしくおさけをのむのである

405

かえりみちもにぎやかである

413

おほしさまにもみせるのである

422

けなみのめんでなんすなのである

430

どうしてもおこしたいのである

438

ごはんをいっしょにたべるのである

445

わがはいはかおがひろいのである

453

あたらしいあさなのである

460

あたらしいともだちなのである

467

おでかけがたのしみである

474

ろぼである！

482

はげしいしとう

490

さっきのてきはいまからおともである！

498

はじめてのじゃんけんである

505

ろぼのうえにいきたいのである

513

あおぞらのおえかきするのである

521

あれはだれであろう！

528

そのちかくへきようそうである

536

しようじのまえのもんばんである

544

みんなでづくろいである！

552

じんじやでおいかけっこである！

560

だっこされるのもむずかしいものである

568

おはなしにみみをかたむけるのである

576

もこおはいないのである

583

おふろとばんしやくである

591

きようもいいことありそうである

599

わがはいはのどにつまらせたりせぬ

606

こうようである！

614

かしほんやである

622

だっこにもやりかたがあるのである

しやしんをとるのである！

637

かさのとんねるである

645

かさのしたでおさんぽである

653

みずあそびである！

661

みことおはなしをしたいのである

あのとのおれいなのである

677

こまのもいくのである

685

ぱーてーのじゅんびである

693

どれすをきるのである

701

ちかしつのしょうじよである

708

ぱーてーでいろんなどちとであう

のである

—————

716

せんせんふこくである

—————

724

だんまくごっこである

—————

733

おんがくはたのしくするのである

おさけをのむのである

—————

749

私の神社によく来る猫

—————

758

どこにいくとも、かぜのむくまま

欠伸が出るような日だ。

吾輩はうだるような夏の日が嫌いだ。こう熱いと何もする気が起きないのである。

それにしても人間はやかましいものだ。こう熱いというのにあつちにいたりこつちにいたりと忙しく働いている。商売繁盛といえど結構結構、と言いたいところであるが吾輩の昼寝の邪魔だけはしてもらいたくないものである。吾輩は蝉の声も中々に嫌いである。

のそのそ起き上がる。

近くを通りかかった人の子共に一声挨拶をしておく。吾輩は挨拶にはうるさいのである。おや、子供達も吾輩へ挨拶を返してくれた。感心なことである。しかし、吾輩の声を真似するのはいかぬ。

雑多な街中にはいろんなものがあるのだ。

呉服屋もあれば八百屋もあり、何を売っているのか吾輩にも分からぬ場所もある。しかし、道が舗装されているので歩きやすい。肉球が痛まぬことが何よりなのだ。

おお、あつちからやってくるのは天秤棒の魚屋であるな。

そこ行く人間よ、吾輩に一匹くらい魚を分けて欲しい物である。そう邪険にするではない。しつしと蚊を追い払うようにされると吾輩も考えがあるのだ。

てやつ、とう。天秤棒の片側に頭から突つ込むのだ。お頭が冷える。水が入っていたか。吾輩は綺麗好きでお風呂は大好きであるが。うむ。魚臭い水は少しどうかと思うのだ。

かぶつ。よし。一匹魚を啜えてやったのである。小さなヤマメであるな。山魚の中では好きである。

魚屋よそう怒るではない。吾輩を虫けらのように扱ったことがいかぬのであるぞ。魚どろぼうとは心外であるな。これは慰謝料なのである。と説明したいところではあるが「に」と「や」では少し人とのこみゆにけしよんは難しいのである。

さて、逃げよう。これこれ、魚屋。魚泥棒を捕まえてくれなどと叫ぶでない。いずれ代わりにイチジクかグミかネズミでも持ってきてやるのである。

人里の真ん中を奔ると風を感じるのである。子供達が吾輩を応援しているのである。むむ、魚屋に助つ人であるな。目の前に立ちふさがって来る者がおる。

年端もいかぬ少女のようである。黒いリボンをした銀髪の女子。吾輩は今魚を啜えておるので威嚇してあげることではできぬ。許すのだ。いのちまではとらぬ。

というよりもあの女子は腰に大小の刀を差しておるのである。むしろ吾輩のいのち

をとらないで欲しいのである。

それに肩に白い何かが乗っておる。もしやあれは人ではないかもしれないぬ。

吾輩はそうと知っていても前足と後ろ脚を止めることは出来ぬのだ。

「止まりなさい！」

言われてもとまるわけにはいかぬ。左に曲がるのだ。

「ハ」の

甘いのだ。後ろ脚で地面を蹴れば右へ回れるのである。

「わわ」

その緑のスカートの下を通り抜けていくのだ。おわつ。こやつ座りおつた。まずいのである。スカートに囲まれてしまった。出られぬのである。落ち着くのだ。吾輩。

「つ、捕まえましたよ」

よし。ヤマメをこの子の足にぬるぬると塗り付けてみるのである。吾輩も魚は好きだがぬるぬるは嫌いなのであるから。くらうがいい。ついでにお尻のあたりにヤマメをぶつけてみるのである。

「ひ、ひゃ」

よし、飛びのいた。

そして刀を抜きおつた。

わ、吾輩にそこまで本気になる意味があるのか。顔を真っ赤にしておるが、もとはと言えば吾輩を捕まえようとしたお主がいかなぬのだ。

「ゆ、幽々子様のおやつを買いに来ただけだったのに……こ、この猫!」

これはかなわぬ。吾輩は争い事は嫌いである。だがヤマメは返さぬ。それは吾輩の汚券にかかわるのだ。しかし、この殺気は凄まじい。おしりのあたりを触ったのがいかにぬことだったのかもしれない。

きよろきよろとすれば周りに人だかりができておるではないか。むむむ。これでは容易に逃げる事ができぬのだ。人間達の足元に逃げ込むこともできるが、それでは巻き添えにしてしまうかもしれない。紳士な吾輩にはそれはできぬ。断じてできぬ。

しかしこの女子刀を振り回すなど穏やかではない。それにそう吾輩を睨みつけて威嚇するのもいかなぬ。闘いとはこうするのである。

こう、身体を、くねらせて。ヤマメは傍に置いて。お腹を見せる。どうだまいったか。「……降参ということですか」

ため息をついて女子が刀を納めておる。さらに吾輩はごろごろしてやるのだ。そうするとくすくすしながら近寄ってきておる。

「もう悪いことしてはいけませんよ」

お腹を撫でるではない。おお、顎を触るな。眠くなる。だが心外なことがあるのだ。

悪いことなどしておらぬ。簡単に刀を抜くようなおぬしにはきついおきゆうをすえ、うむうむ。顎の扱いがうまいではないか。

ごろごろ。むむ、そうそうそのあたり。中々に才能があるぞおぬし。だが吾輩はきようこない精神を持つているからして、そう簡単には屈服などせぬ。これはかの諸葛孔明のようなあれである。

ぱつと起き上がる吾輩。おどろく女子の胸へ飛び込むのだ。そりやあ。吾輩のお腹を撫でたが運の尽きである。その体勢では踏ん張りがきくまいて。

「わっ。わあ」

どすんばしん。転げた女子の胸の上で勝ち名乗りならぬ、勝ち鳴きをしておくのだ。吾輩に喧嘩で勝とうなど千年早い。見れば悔しそうな顔の女子。吾輩はささっと降りて、ささっとヤマメを啜えて、たったか走りさる。

「ま、まてえ!!」

くるりと一度だけ振り向いてやるのだ。倒れたままスカートがめくれておるぞ。吾輩はそれを注意してにやーと鳴いてやる。伝わったかどうかはわからぬ。尻尾を二、三ふりふりしてから逃げるのである。



お腹がいっぱいになった。吾輩は満足である。

ここは行きつけの神社の縁側である。横にいつも座っておるのは赤白の服を着た女子は巫女というらしい。吾輩にたまにご飯をくれる、中々愛いやつである。

「あんたまたきたの」

巫女はお茶をすすりながら吾輩に話しかけている。吾輩は律儀に「やあにやあと答えてやると巫女は少し笑ったようである。この女子吾輩の尻尾をぐにぐにする癖がある。大人な吾輩は我慢してやるのであるが、これが隣町の寅やらであればまたたび一つではたりぬ。」

こうして縁側でごろごろしながら、身体を伸ばすのは吾輩、一番の楽しみである。しっかりと毛をなめて艶を出したり。大きく誰にはばからず欠伸をするのである。人前で欠伸など出来ぬ。紳士な吾輩は礼節にもうるさいのである。

巫女よ背中そのあたりが撫でるのがすごくよい。手付きが中々様になってきたではないか。吾輩が育てた甲斐はある。これであればこの猫を撫でても恥ずかしくはないぞ。

「あんた。どこから来たの？　って猫に聞いてもわからないか」

（それがとんと吾輩にもわからぬ）

「……………え？」

どうしたのだ巫女。鳩が弾幕を食らったような顔をしておるぞ。

「今喋った？ 疲れているのかしら」

ふむふむ疲れておるのであれば吾輩。昼寝の極意を教えて進ぜようではないか。日差しが強すぎるところではないかぬ。こう、縁側の奥の方の陰になっている場所に身体を移して寝転がるのである。

「あ、こら奥に勝手に行くんじゃないわよ」

両脇を持たれて宙に浮く吾輩。足が地面につかぬは少し気持ちが悪いことである。無理やり日差しの強い場所に持つてこられてもここでは寝れぬのだ。巫女よ。そのあたりのことは多めにみてくれぬだろうか。

「そうにやあにやあ鳴いたってあんたを飼う余裕なんてないわよ。用が済んだらいつも通り帰りなさい」

やはり人とのこみゆにけーしよんは難しいのである。吾輩は仕方なく欠伸をする。

のきしたでもあたたかいものである

吾輩の辞書に不可能の文字はない。しかし、とんと文字という物は読めぬ。

いきつけの神社で巫女が書物とにらめっこしているところを見ると、吾輩は思わずそんな面白くないことするくらいであれば、吾輩が遊んでやろうと目の前で転がるものだ。これがなかなかコツがいる。巫女とて最初は一顧だにせぬ。

根気がいるのである。ここでうるさくしてはいかぬ。ごろごろとしながら、巫女がこちらをみるまでやるのだ。その内にねこじやらしなる、猫としては不名誉な遊ぶ道具を巫女が持つてくるが、吾輩は紳士である。文句ひとつ言わず巫女とあそんでやるのである。

さて、今日はそれができぬ。

ざあざあと雨の降る日である。地面を叩く音に耳をびくびくさせてみる、特に意味はない。退屈なのである。

「あんた。家にはいれないけど軒下ならいいわよ」

巫女はいつも通り縁側にいる吾輩にそういった。どうやら今日の寝床を貸してくれろというのである。さらに少しのぼしを吾輩の前に置いた。かりかりと食べている

と巫女は雨戸を締めながら吾輩に話しかけてきた。

「今日は風が強いから。雨戸も締めるわよ、あんたもさつきさと軒下でも潜つてなさい」
にやあと返事をしてやるのだ。ふむ。嵐が来ているのかもしれない。見れば木々が騒めく音が聞こえる。縁側には屋根はあるのだが、さつきから横風に飛ばされてきた雨が顔を打つておる。これはいかぬ。吾輩はしゆたつと縁側を降りてこそこそ軒下へ潜つた。

床の下は思いのほか暖かいものである。我は少し砂利を踏みしめながら奥へ歩みを進めるのだ。上ではどたどたと巫女の歩く音が聞こえる。それと合わせて後ろを見れば床と地面の間に雨の降る景色が見える。吾輩は濡れるのは嫌いであるが雨の日は嫌いではないのだ。

どこで寝るかを考えねばならぬ。奥へ行くのだ。

しかし、どうやら先客がおる。人間が軒下にもぐりこんでいるとは珍しいこともあるものである。吾輩は一声挨拶をする。礼儀作法には吾輩少しうるさいのである。

「わ！　ななんだ。猫か」

どうやら少女のようである。銀髪で白い着物を着ておる。ふむ、人里でもあまりみぬ恰好であるな。胸元に烏帽子を抱え込んで腹這いになった人間は吾輩初めてである。

「おぬし。ここに住んでおるのか？　我は太子様より重大な命令を授けられて張り込み

をしておるのだ。騒ぐ出ないぞ！」

耳に響くくらいに大きな声であるな。そもそも吾輩は何も言つてはおらぬ。ふと、耳をすませば床の上から巫女の声がある。

『な、なに？ 今の声。どつかで聞いたことがあるような……』

それを聞いてから目の前の少女が吾輩に抱き付いてきた。何故か吾輩の口を押えてくる。ここが納得がいかぬ。どう思つてみても先ほど騒いだのが悪い気がするのであるが。軒下で顔が近いのである。

少女は床の天井を不安げに見ている。ばれぬか、ばれぬかと存外大きな声で騒ぐので吾輩の方が心配してしまうものである。

「猫よ……さ、騒ぐでなむぐ」

吾輩、この少女が何をしているのか分からぬが悪人には見えぬ。だからよくしゃべる口に肉球を押し付けてやるのだ。

「な、なにをすむぐ」

吾輩の親切な肉球を押しのかたのもう一度押し付ける。まったく最近の軒下はやかましい物である。別の猫がいることもある。

床の上ではどたとたと巫女の歩く音が聞こえてくる。目の前の少女も冷や汗を流しながら黙り込まざるを得ぬ。

しばらくすると音も止んだようである。吾輩は少女から肉球を外して、代わりに自分の足でかゆいところを搔く。ああ、気持ちがいいのである。それから欠伸をしようとして、目の前の少女にいたことに吾輩は気が付く。

不覚である。人前で欠伸をするなど礼儀に反するがこれは止められぬ。大きくそれをしてしまうと

「ふあああ」

少女も吾輩と同じように欠伸をするものである。これでお互いにふえあといつていいのであるな。

★

「実は暇だったのだ。我はこうして一人でずっとここにおるが、やる事がなくてな。一人でしりとりをしておった」

吾輩と少女は横になって寝ている。しりとりとは何なのか吾輩にはわからぬが、吾輩は少女の言葉をこの耳で全て聞いておる。

「おぬし、しりとりはできるか」

やったことはない。しかし、物はためしというもの。やれぬとは軽々には言えぬ。吾輩はにやあと固い意志を表示する。それを見て少女はくすりと笑ったようである。少間の抜けたところはあるが、白い肌が餅みたいで美味しそうである。もちろん食べ

ぬ。

「意味のないことを聞いた。許せ……」

少し眠たそうに吾輩に言う少女であるが、吾輩はしつかりとにやあと鳴いたのである。ううむ、人とのこみゆにけーしよんの方法はないものか。しりとりとは何か分からぬがやってみたかったものである。言葉から察するにお尻をどうするかというものであろうな。吾輩はしつかりとわかっているのである。

「おぬし……名前はなんというのだ」

少女はうつらうつらと吾輩に聞いてくるのだが、そこがとんと分からぬものの一つである。吾輩にも自分の名前は分からぬ。昔はいろいろと呼ばれたような気もするが、よく覚えておらぬ。

「我は……物部布都というのだ」

ふと、というのであるか。良い名前であるな憶えやすいのである。ふと、いやこれは名前を呼んでおるのではないのだ。ふと、いや不意になんとなく思ったのであるが吾輩も何か名前が欲しいような気もしてくるのである。

吾輩も名前を考えてみるものである。あまりありきたりな名前ではいかぬ。こう、吾輩はわがはいであるような、そんな吾輩だけの名前が欲しい物である。

ふと、いや今度は名前を呼んでいる。憶えやすい名前ではあるが妙な引つ掛かりを覚

える名前であるな。

見ればふとは寝ている、すうすうと寝息を立てておる。吾輩も眠たくなってきたような気もするのだ。だが、吾輩は綺麗好きなのである。しっかりと毛づくろいを舌でしながら、外の雨の音を聞きながら眠る準備をするのである。

「ふう……」

ふとがもぞもぞと動いておる。もしかして寒いのかもしれぬ。吾輩周りを見てみれば砂利しかないのである。こんなものを掛けてもいやがらせにしかならぬ。仕方ないのである。吾輩はすすつとふとの胸元に歩み寄り。腕の間にもぐりこんでやるのだ。

ふとは吾輩を少し強く抱き付いてくる。すりすりとなんと無意識に背中に顔を押しあてて来るのはくすぐったいものである。吾輩、こういう時の為に毛並みのめんでなんすを怠ったことはないのである。

★

いかぬ。少し寝てしまっていたようである。もぞもぞと動くとふとが吾輩を離さぬ。仕方ないのである。少し強引に体を引き抜いておる。

雨の音が聞こえぬ。蟬の声すらも遠くに聞こえるのである。吾輩は外を見る。天井と床の間におれんじ色の地面が見える。どうやらもう夕方の方である。嵐は去っているであろう。

吾輩は寝ているふとににやあと声を掛ける。すると寝ぼけていたのかふとも「にやあ……」

と返すではないか。ううむ人間とこみゆにけーしよんが取れた気がするのである。それではと頭を吾輩は下げ、風邪を引かぬようにするのであるぞともう一度鳴くと、ふとは

「たいしー」

とよくわからぬことを言う。まあいいのである。

吾輩は軒下を歩き、外に出る。湿った地面を踏みしめて夕日の暖かさを身に受ける。空を見ればちぎれた雲がどこかに行こうとしているようで、山の間におれんじ色の太陽が沈もうとしているのである。

今日も良い日であった。

おんせんはしずかにはいるべきなのである

吾輩は月夜が好きだ。涼しい風と、鈴虫の声を聞きながらぶらぶらと歩き回ることはなかなかにご機嫌なのである。

空に浮かんだ大きな満月に吾輩はにやあと挨拶をしておく。長い付き合いである。なんといつても吾輩が生まれた時からずっとお月様とは知り合いなのである。ただ、向こうから話しかけてきたことはないのが少し寂しいことである。

吾輩はいろんなところを知っている。

ねこじやらしの多く生える場所も、またたびのよく取れる場所も吾輩以上に知っておる者はおらぬと自負しているところだ。少し前に巫女が後をつけてきたのでお月様の良く見える場所に連れて行ったこともあるのである。

今日の腹は膨れている。ひよんなことで人里でご馳走になったのである。いずれはネズミでも取ってお礼に行かねばならぬ。しかし、ただでありついたらわけではないのだ。人間の子供とてらこやで遊んでやったのである。吾輩は子供の面倒を見る程度はやぶさかではない。

そこにいた少し大きな人間の女性にいろいろと貰ったのである。周りからは先生と

言われたのである。ふむ、吾輩も子供達に遊び方を教えたせんせいでないだろうか、それならば吾輩も少しそう呼ばれたいものである。

吾輩はそんなことを思いながら螢の道を歩いていくのだ。夏は森が明るくてなかなか歩きやすい。緑色のに光るあの虫を捕ることは勘弁している理由でもあるのだ。吾輩は一人である。いやお月様と二人であるか。

最近見つけた良い場所がある。

森の奥に進んで、山に向かつて歩いていくと川があるのである。そこには何故か暖かいお湯の出る場所があるのである。吾輩、綺麗好きとはいえ水は多少冷たく苦手であるからよくそこで身体を洗いに行くのである。

やはり毛のぬんてなんすはたいせつであるのだ。それにその場所は吾輩以外に知っておる者はおらぬ。少し前に山の中にか、かん……かんけつつえんせんたーなるものが出来たときくらいからお湯がでるようになったのである。

少し名前が違っているかもしれぬ。しかし、吾輩とて度忘れはある。

森を抜けると水の流れる音がしてくるのである。山から下りてきた川である。

吾輩ざあつと流れていく川を見ながら歩くのが好きである。少しだけ水しぶきが舞い上がって顔にかかってくるのも中々に涼しいのであるが、冬場はいかぬ。

そのまま河原を砂利を踏みしめながら歩くのであるが、足元が固いのである。歩きや

すいのであるが、あとあと足が疲れてしまうのである。

しかし、吾輩は知っておるのである。お湯に足を付けておけば明日には肉球が良い具合になるのである。これが生きる知恵と吾輩自負しておる。

岩をしゅつたと昇り、上り。吾輩は進んでいくのである。空を見上げれば星が流れるようである。天の川と人間は言っておるよう星の川とは吾輩も泳いでみたいものだ。どんな魚がおるのであろうか。ヤマメがおれば文句はないのである。

湯気が立っておる。ついたのである。てんねんぶろというやつであるな。今度巫女を連れてきてもいいかもしれぬ。いや、教えてしまえば吾輩以外も知ることになる。迷うところだ。

岩と岩の隙間に満々と張られたお湯は少し深い。吾輩は前足を半分だけ入れてみるが、底には着かぬ。

横に小川を見ながら暖かい湯気に当たっていると吾輩はごろりと横になる。意識的にしたわけではない。ただ、河原の石が暖められてごろごろしているると何とも言えぬ。吾輩は空で遊んでいる星を見上げながら、ゆうがなりらつくすを試みるのである。

おお、浅いお湯だまりがあるではないか。吾輩は思わずそこにそのそ入ってみる。吾輩の体を半分にも満たぬ深さであるから、ううむ。

ううむ。

ちやぶちやぶ、くしくし。ふああ。ごろごろ。

は!? 吾輩今は我を忘れておったところである。不覚である。こんなところを誰かに視られよう物ならば末代までの恥であるな。

「気持ちいいですか?」

ふゆぎやああ。

吾輩飛び上がってしまったのである。それに今の声は、アレである。違う。違うのだ。みれば吾輩のすぐ横に顔がある。このお湯だまり、すぐ横に人が入れるくらいのもので、吾輩も今日は不覚が多い。

吾輩に話しかけてきたのはどうやら女子(おなご)であるようだ。おお、瞳が紅いのである。ふむ。吾輩の姿が其処に映っておる。なかなか、はんさむではないか。

その女子は珍しい髪の色をしているのだ。紫の髪がしっとり濡れておる。ううむ。どうやら吾輩が来るずっと前からりらくすしていたようであるな。小さな敗北感があるのである。

「……………」

この女子、動かぬ。うつすらと笑いながら吾輩をじつと見ておる。こやつできる。両方の肘をつきながらそこに顔を載せてじつと見てくる。持久戦というものであるな。吾輩も負けてはおられぬ。

「たまたま見つけた温泉でたまたま出会うのも一つの偶然でしょうか。偶然と言えば最近地震は起こっていますせんが猫は地震の時にはどこにいるのですか？」

ん？　と言う感じで顔を傾ける女子。吾輩もつられて首を傾げてしまったのである。それに氣をよくしたのかこの女子はにっこりと笑っているのである。むむ。よくわからぬ。だがまあ笑うことはいいことである。

ここは吾輩がおとなの対応をせねばならぬ。先に入られてしまったことは寛大に許すのである。だがしかし、この女子吾輩の前足を掴んでぶにぶにと肉球を触るのはいただけぬ。しかし、この女子は肌も命と聞く。前に見たゆでたまごのような肌をひつかくのは氣が引けるのである。

終わらぬ。さつきからずっと吾輩と女子は手と手を取り合つて握手を続けておる。たまに顎を撫でてくるのでそれは、まあ許してもよいのだが、女子が少し大きく動くとびにその体がお湯を弾いて顔にかかる。

しかし、文句は言わぬ。吾輩は紳士であるからして、耐えて耐え抜くのである。吾輩は肉球を掴まれながらそっぽを向いておるかのようにくーるな顔をしなくてはならぬ。これも一つのマナーである。

「知らぬような顔ですわね……」

女子は少し不満のようであるが吾輩とて子供ではない。引つ張られてもはしやぐこ

とはできぬ。いや、引つ張るでない。そつちは深いから行つてはならぬ。この女子は吾輩をお湯の中に引きずり込む気であるな。

ちよつとこの女子の顔がにやけているのは気のせいなのであろうか。

それならばこちらとて考えがあるのである。吾輩は、こと何かしらの駆け引きが得意の得意なのである。こういう場合は押しして駄目なら引いてみると、今日会つたてらこやで聞いておいたのである。

吾輩は後ろ脚に力を入れて、女子に飛びつく。水しぶきを上げて女子が驚いているのである。吾輩をお湯の中に引きこんで驚かせようとするなど百年くらい早いような気がするのである。

逆に飛びかかつて女子の肩に両の前足を掛け、そこから頭のとっぺんまで登つて行くつもり、なのであるがこの女子肌が滑る。肩に前足を掛けたままのぼれぬ。ふぬ。むむむ。だんだんと体が下がっていくのだ。

後ろ脚をばだばださせて上を見れば、女子がニコニコしながら見下ろしているのである。無様な吾輩を笑っているのであらう。肩から前足が抜けていく。やられっぱなしで悔しいと思えぬ。

女子の首元に噛みやすそうな骨があるのだ。甘噛みしておどろ、滑るのである。もういかぬが最後に一矢を報いるのだ。

「ひや、さこつをな、なめ」
どぼん。ばしゃん。吾輩は沈んだ。

わがはいはまなあをしつておるのである

吾輩は夜が好きである。特に理由はない。静まった街を横切れればかすかに美味しそうな香りがするときがあると、ふらふらと人家に入つていきそうになるのである。しかし、吾輩は紳士であるから、そんなことはせぬ。

吾輩が歩くと鈴の音が響く。昨日巫女の買物になんともなしにほでえがーどとして付いていつたら無理やり付けられたのである。これが吾輩、自分では外せぬ。だから吾輩は夜の人里で一人演奏するよりほかない。

ちりんちりと夜空に吸い込まれていくような音であるな。ふむ、なかなかどうして。いやいや吾輩はただ無理やり付けられただけで気に入っているわけではない。断じてこのようなお洒落はこうはな吾輩には似合わない。

人里を歩いていると前からマントを付けた赤髪の少女が歩いてくる。吾輩はこういつた時に挨拶は欠かさぬ。にやあと鳴いてお辞儀をする。これがまなあという物であるな。相手は吾輩の毅然とした態度にひるんだようで、手加減してやるべきであったかも知れぬ。

「わ、なんだネコか。なんだか新しい鈴をつけているわね。きらきらしている」

そうであろう。

いやいや、吾輩は気に入っているわけではない。鈴など付けていては綺麗な音が、いやいや首に巻かれて迷惑をしているのである。しかし、巫女も吾輩にいつも煮干しをくれるから、仕方なく付けているのである。

「うりうり」

吾輩の心情を介さない赤髪の少女がしゃがんで頭を撫でてくると、吾輩は眼を瞑つて応じてやるのだ。夜道で出会ったのも何かの縁であろう。ここはじやれついてくる少女と遊ぶのもやぶさかではない。

「ごろり、ごろごろ。」

「お腹？ お腹がいいのかしら？」

赤髪は吾輩が寝転がると直ぐにお腹を撫でてくるのである。む、むむむ。この状態で顔を触ろうとするでない。吾輩は躡けの為に顔に延ばされた指をパンチで落とすのである。

「ふふ、あはは」

なんか笑っているのである。まあ、笑うのはいいことだから良しとしよう。この少女も夜中に歩いているのなどおそらく寂しかったに違いない。吾輩はそのあたりもしっかりとわかっているのである。それが大人の吾輩である。

そう思っていると少女が首を傾けて覗き込んで来るのだ。むむう、そんなに角度を付けて覗き込んだら痛いのではないだろうか。吾輩もなんとなく首を傾げてしまう。と、思っていると少女の首が落ち、落ちたのである！

「あ、しまった」

ころころ転がる生首が喋っておる、妖怪の類だったようであるな。吾輩は最初から分かっておった。残されたからだがのそのそと生首を追っていく、吾輩は一人寝転がっている。

★

珍しいものを見れるものだ。昔はあんなものは見れなんだ。いや、吾輩は昔など覚えてはおらぬ。だが、木の股から生まれたでもなし。きつとどこかに思い出を落としてきてしまったのであろう。

ふむ、どうやれば拾えるのであるか。思い出の拾い方は博識な吾輩にもとんと見当がつかぬ。今度巫女にも尋ねてみたいところであるが、にやあと鳴いても巫女はたまにだけ「にやあ」と返すだけでこみゆにけーしよんが取れぬ。

そう深い思索をしながら吾輩はお寺にやってきたのであるが、本堂に今日は用事はないのである。それにもう皆が寝ているであらう。

たまに髪の色が妙な女性から色々と食べ物に分けてもらえるものだ。勘違いしては

ならぬ。吾輩も蟬の抜け殻などを持つてきてはお返しをしておる。そのたびに頭を撫でてくれるのが中々に良い。

さて、裏手に回れば広いお墓である。四角の墓石が並ぶ、その間を吾輩は歩く。お供え物などが置いてあるが吾輩はそれに手を付けたりはせぬ。それが誇り高き吾輩のまなあという物であるな。

「あ、猫だ。にやあにやあ」
にやあ。

変な羽根を生やした黒髪の少女が通り過ぎて行ったのである。しかし、スカートが短いのである。あれはいかぬと巫女が言っておった。吾輩もそれには同感である。こけたら怪我をするではないか。うむ、よく考えればあれも妖やもしれぬ。まあ、少女である。鬼や天狗やぬえのような大妖怪ではあるまい。

吾輩はきよきよとあたりを見回すのである。墓石をそれぞれ物色する。何を隠そうこう顔を付けるとひんやりして気持ちいのである。暑い夜には墓で寝るのが良い。偶に傘を持った声の大きな青髪がいると、うるさくて寝れぬが吾輩は大人であるから何も言わぬ。

「なんだお前はー？」

にやあ。後ろを振り向けば何だか妙な格好をした少女が立って居る。頭に紫に星

マークの帽子を被っておるのはいいとしても額にお札のような物を付けているのだ。どう見ても普通ではないのである。

「くえるのかー？ もぐもぐ」

むむ、吾輩を食らう気であるか。そうはさせぬ、吾輩は体を伸ばして強力に威嚇する。なーご、なあああご。

どうだまいったか。

「やるつてのかあ。もぐもぐ」

相手も両手を前に突き出した格好で構えておる。なかなかやるやもしれぬ。この勝負先が見えぬのである。それにしてもこの少女さつきからゴマ団子を口に入れて喋っているのである。口からぼろぼろ胡麻を落としているのでわかるのだ。

それはお供え物に違いないのである。吾輩が後で、いやいやお供え物に手を出すとは不届き千万であるな。吾輩とその少女は一步も引かずににらみ合うのである。

「我々は崇高な霊廟を守るために生み出された戦士だあ。ここからたーちーさーれええ」

なああああご！

「なんて言っているのかわからないけど。ちーかーよーるーなー」

ふぎやああ！

「にやあー!」

にやああ!

「にやああああ!」

にやああああ!

自分でやっておいて訳が分からぬ。巫女やふとにも吾輩はこみゆにけーしよんはできぬがこの娘にはなおさらできぬ。年頃の少女が口からゴマを落としながらしやべるのも承服できぬ。

しかし食われるわけにはいかぬ。吾輩はまだ生きていなければいけぬのだ。

「こうなったらあ。実力行使だあ!」

ぱつと少女が飛びかかって来るのである。中々に早いが吾輩には遅い。ぱつと避けて、墓石に激突する少女を横目で見るのだ。がこんばきん、頭から墓石に突っ込んで変な音がしているのである。

だ、大丈夫であろうか。ちよつと心配なのである。吾輩は紳士であるから敵とはいえ情けもかける。こういうのを敵にヤマメを送るといふのである。

お尻を突き出した変な格好で少女が倒れている。

動かぬ。頭に貼つてあつた妙な札も地面に落ちていふのだ。

大丈夫であるか？　大丈夫であるか？　吾輩周りをちりんちりん動き回るのである。こういう時には焦ってはいかぬ。落ち着かなくてはいかぬ。むむ。にやあにやあ。

「…………えん」

少女が動いているのである。良かったのである。良かったのである。むくりと起き上がってお尻を地面に付けたまま空を見上げているのだ。

「う、ええええん」

泣きだした。これはいかぬ。ほれほれ、尻尾であるぞ。肉球もあるのである。

「…………えええん」

ぼろぼろ大粒の涙を流してやまぬ。吾輩は困った。お腹を見せても反応すらせぬ。何かないのであろうか、は。気が付いてしまったのである。しかしこれは、いやいや少女を泣かせていては吾輩は表を歩けぬ。

吾輩は少女の膝に載る。爪をたててはいかぬ。胸元に手をおいて身体を伸ばし、頬を嘗める。涙で潤んだ眼がこちらを見たのである。

吾輩はちりんちりんと首元で輝く鈴を何度かならず。れでいに渡せるものはこれしかないのである。泣き止んでくれねば困る。

空を見れば満月が大きい。巫女へなんといい訳をするべきであろう。

しゆくめいのたいけつ

吾輩は綺麗好きである。くしくしと右手を嘗めてから左手を嘗める。ここをよくよくまじめにやらねばならぬ。吾輩は忙しいのであるが、昼下がりの木陰で小一時間それに没頭せざるを得ぬ。

一度毛並みの手入れをし始めると止まらぬ。

それに今日は天気が良いのである。こんな日は心も軽いものである。ここにヤマメでもあれば言う事はないのであるが、あいにく食べるものはない。吾輩は人里に行くか神社に行くか迷う所である。ふむむ。

神社に行くのであれば何か手土産でも持っていかねばなるまい。ネズミなどあたりにおればいいのであるが、見当たらぬ。巫女とてご馳走に小躍りするであろう。吾輩はご馳走は自分で食わずに分け与える紳士なのである。

「はあ、おもしろい」
びくつ。

いやいや吾輩は驚いたわけではない。いきなり横に人が座ってきてちよつと体が動いただけのことなのだ。断じて驚いておらぬ。見れば頭に鈴のついた髪留めをした少

女ではないか、驚くに値はせぬ。背中に背負っておった紐で結んだ本を地面に下ろして、手で顔を扇いでおる。

鈴は持つておらぬ。そのことで今朝、巫女に怒られたのである。

「ああ、阿求のやつこれだけ借りて一気に返すんだから。たまつたもんじゃないわ」
少女は吾輩に気が付いておらぬよう一人で喋つておる。しかし本とは興味深いのである。吾輩は字は読めぬが、それでいかぬと最近思い始めてきたのである。巫女も読書をしておる。人里を歩けば書物を手にしておる者は吾輩の腕で数え切れぬほどである。

猫も杓子もと言うではないか。ところで杓子とはなんであろうか。吾輩にはわからぬ。しかし、挑戦をしなければいかぬのだ。吾輩はそう思つて少女に近づいてみる。鈴の少女は少し驚いたようであるが、吾輩はにやあと一声してお辞儀をする。

「え？　こゝ、この猫今おじぎしなかつたかしら」

驚く前に吾輩へ返礼もあつていいものである。

「え、えつとこんにちは」

鈴の少女がそういうので吾輩は一声返してやるのだ。それを聞いて少女はまたのけぞつた。いちいち動きが大きいのである。

「……………じ、実は化け猫とかじゃないわよ……………」

失礼である。吾輩はれつきとした正真正銘の猫であるが、と思いつつも吾輩「化け猫」が何を持ってそういうのかわからぬ。しかし吾輩は違う。この前に視た人の姿をした尻尾が二つに分かれた猫は多分化け猫であろう。

吾輩は深い思案をしていると、少女はまだ吾輩を疑いの目で見ておる。うむ。しかしその手に持ったねこじやらしはなんであろうか、吾輩がそんなもので遊ぶと思っておるのであるうか。この。目の前で振るではない、にやあにやあ！ ぱんちをお見舞いするのである。

「あはは。やっぱり普通の猫ね」

鈴の少女は猫じやらしを素早く動かすから吾輩の顔に当たって仕方ない。ほ、白刃取り。失敗である。この毛むくじやらの先つぽを抑え込まねばならぬ。何故か吾輩それに熱中してしまうのだ。

嘯めぬ、つかめぬ。鈴の少女はいつの間にか吾輩と同じく寝ころんでニコニコしておる。むう。今日はここまでにしておいてやると、吾輩は許してやるのである。

「あれ、ほらねこじやらし、ねこじやらし」

吾輩の尻にねこじやらしを当てるのはやめるのである。この鈴の少女はよくわからぬ。吾輩はそつぽを向いて伏せる。鈴の少女はそれに不満のようであるが、ねこじやらしを高速で動かすのはいかぬ。普通にとれぬ。

今日は風が気持ちいいのであるな。吾輩はこんな日も好きなのである。いや吾輩嫌いな日がない。朝も昼も夜も、雨もお天道様の日も好きである。雪の日はまあ、好きである。そう考えれば世の中には良い日しかない。

隣でぱらぱらと音がするのである。吾輩思わず耳をぴくりとさせてしまうのである。ちらつと横を見れば鈴の少女が本を開いて真剣なまなざしで見つめておる。積まれた本の束から取ったのであろう。

何故人間は文字を楽しんでみるのであろうか、吾輩はそれが知りたいものである。しかし、今はいかぬ。さつきまでねこじやらしで顔を叩かれた後である。

吾輩はじつと鈴の少女の顔を見つめる。大きな目であるな。真正面から見れば鏡のように吾輩が映るのかもしれない。しかし今は本が映っておるのであろうか。

「わ」

吾輩はたまらず鈴の少女のあぐらを搔いている真ん中に飛び乗った。そしてすかさずの開かれた本を見る。ううむ、墨の匂いがする。吾輩はこの匂いが好きでも嫌いでもないのである。

これは漢字というものであろうか、吾輩は肉球で文字に触つてみる。しかし、鈴の少女が吾輩を片手で抱いて直ぐに引き離してしまったのである。

「だめよ、汚しちゃ」

むむ。言いがかりである。吾輩は汚そうとしておるのではない。単に文字に触つてみたかっただけである。にやあと抗議すると鈴の少女は、

「あとでねこじやらしで遊んであげるから」

と吾輩望んでもいいことを言われてしまう。どこかに吾輩とこみゆにけしよんのとれる人はおらぬものであろうか。吾輩がそれが残念でならぬ。人間と話すことができればヤマメを平和に譲つてもらえるかもしれない。

★

本を重ねて背負つた鈴の少女が遠くを歩いていく。吾輩はただ静かに見送るだけである。視よ、この吾輩の周りに散らばつたねこじやらしを。遊び疲れて吾輩はくたくたである。途中で鈴の少女が両手でねこじやらしを持ちながら「にとりゆう」と眼をキラリとさせながら言ってきたが、何のことかわからぬ。

吾輩は再び草の上で寝ころびながら毛並みのめんてなんすを行うのである。しかし、よくよく考えれば何も食べてはおらぬ。腹も減つたが艶を出さねばならぬ。忙しさに目が回つてしまいそうになるのだ。

空を見ればお天道様も昇りきつておる。吾輩は毛並みのめんてなんすにひと段落が付くとむつくりと毅然に起き上がるのである。ちよつとどこからかい匂いがするのもあるのだ。見れば鈴の少女が歩いて行つた道から、逆にこちらに来る者がおる。手に

大きな包みを抱えているがどうやら饅頭であるな。

美味しそうに食べ歩きしておるのだ。あれだけ持っているのであれば丁寧な礼儀を尽くせば吾輩にも少しはくれるかも知れぬ。だから吾輩は艶を出した毛並みと毅然とした歩みで歩いてくる者に近寄って見るのだ。

灰色の髪に大きな耳のような物がある少女である。なんであろうか、あの耳はネズミのようである。それによくよく見れば尻尾もあるではないか、おそらく妖の類であろう。それにしても口いっぱい饅頭を詰め込んでおるのがやはり吾輩にはネズミに見えるのである。

にやあにやあ。吾輩は丁寧に頼み込んでみる。

「……なんだ猫か」

その少女は赤い瞳をしておる。あと首から綺麗なペンだんとしておる。

「猫にあげる物はないね」

ふんと鼻を鳴らして少女は足で吾輩を追い払おうとする。吾輩がこれだけ頭を下げておるのに一顧だにせぬ。むむ。これはいかぬ。少女がネズミに似ているのもあるが。吾輩は怒った。

少女は穴の開いた妙なスカートをしておるが、太腿は出ておる。吾輩は紳士であるから女子に牙はたてぬ。しかし吾輩を邪険にした足を許せぬ。だからさつと後ろに回つ

てから足首のあたりを嘗めてみるのだ。

「ひ、ひい」

少女は何か言つて飛び跳ねた。

「な、なにするんだ。この猫！ あ、あれ？ ど、どこにいった」

この手を使う時はすぐに離れなければならぬ。しかし、吾輩はこの時気が付いてはおらなんだが、吾輩はネズミの少女と争ううんめいなのである。

そらをとぶのもひとくろうである

——吾輩は食べぬ。

「そりやないぜ、せつかく取ってきたのに」

吾輩の前で金髪の白黒の娘があからさまに肩を落とした。帽子を深くかぶってやれやれと首を振るところも芝居がかつていたのである。確かに吾輩は腹をすかしている、それは正直なところである。

「ほらほら」

どう言っても吾輩とてどこで取ってきたかわからぬ赤いキノコなど絶対に口にせぬ。

この金髪の娘は何度も巫女の所に遊びに来ておるから、吾輩、顔見知りなのである。名前ももちろん知っておる。ただ少し思い出せぬだけなのである。

「ちえ、せつかく毒見させてみようと思っただけだなあ」

ふむ。吾輩はそんなことは既に見切っていたのである。それに神社の片隅で日向ぼっこをしておった吾輩ににやにや近づいてきた時から怪しいと思っていたのである。吾輩のような紳士であれば、妙な物を口にすることはないのである。

にぼしであれば考えぬこともない。

吾輩は目の前の赤いキノコを前足でどかしてから、日向ぼっこに戻るのである。空にはお天道様が輝いておる。こんな日には吾輩は横になって動かぬ。だから吾輩のお腹を指でつつくのはやめるのである。白黒の娘よ。

「猫はいいなあ」

なにやら羨ましがられているのであるな。ふむ、隣の芝生は青いと申すではないか。人の子も吾輩もそういう物なのである。しかし芝生とは吾輩羨ましいのである。あの巫女も神社に芝生を植えてはくれぬものか、いや。植えてくれぬものであろうか。吾輩は横になったまま前足と後ろ足を延ばしてリラックスするのである。ううむ、この体勢はなんどやつても楽であるな。前に「ふと」と寝た時もこんな感じであったのだ。

「このきのこの食べてもいいぜ？」

だから食べぬ。赤いキノコなど食べて腹でも壊せばどうなるかわかった物ではない。それにしても首筋がかゆい。吾輩はむっくりと起き上がって、後ろ足でごしごしと首元を掻いてみるのである。おお、おおお。気もちいい、のである。

ところでこの娘の名前を思い出したのである。確か、まりさとかいう気がするのである。巫女がそういつていたのを吾輩はちゃんと覚えていたのである。そういえば巫女の名前はなんであったか。

にやあと聞いてみようともまりさを見れば両手を組んで吾輩を睨んでおる。だが、ふと

何を思いついたのかにやにやしだした。吾輩その顔によからぬものを感じて、離れようとするときまりさに飛びつかれた。むむ、痛いのである。

吾輩は脇を抱えられて宙を浮く。巫女と言いまりさといこの持ち方をよくするのであるが、多少恥ずかしいのである。紳士な吾輩としては抗議したいところではある。

まりさはそんな吾輩の心が通じたわけではないであろうが、片腕で吾輩を胸元に抱きかかえた、首が少々つらい。上を見ればまだにやにやしておる。空いた片手で近くにあつた箒を掴んでまりさはそれにまたがった。

まりさは神社にある巫女の住む母屋に叫んだ。耳元で叫ばれるとうるさいのである。

「れーむー！ ちよつと空をとんでくるぜ！」

★

わわわ、吾輩は吾輩である。

少し下を見ればふわふわの雲が見えているのである。断じて焦つて等おらぬ。まりさの腕にしがみついておるのではない。あたる風の冷たさを感じれば、まりさとて寒かろうと思つて抱き付いてあげておるだけである。

どこまでも広がる青い空にお天道様が近いのである。ひゆうひゆうと耳元でなる風は冬の風のようなのである。吾輩は顔を上げてみれば歯を見せて笑つておる、まりさがいる。吾輩もいたずらをするにはあるが、空を飛ぶことはせぬ。

遙か下に人里が見えるのである。

ああ、あすこにはヤマメを分けてもらう魚屋がおるのであろう。そういえばこの前刀を振り回していた少女は何をしているのであろうか、何故か脳裏に昔のことが思い出されてならぬ。

「おやおや、そんなに急がれてどこに行かれるんですか?」

「げ! おまえは」

「人の顔をみてそれはご挨拶ですね」

吾輩の傍で何か聞こえてくるのである。見れば吾輩と魔理沙の上を悠々とついでくる娘がおる。頭に赤い紐を付けた六角形の帽子をかぶった、黒髪のものである。ちよつと耳が尖っておるのは、ふむなんとなく噛みついてみたいのである。

「魔理沙さん。猫なんて抱えて、もしかしてなにか異変でも?」

妙に近くを飛んでくるのである。みればまりさも胡散臭げな顔をしておる。そんなことにはお構いなしに六角帽子はシャツの胸元からメモ帳を取り出してずいずい顔を近づけてくる。こんなに早く飛んでいるのに世間話をしてくるとは、こやつできる。

「ああ、もう、うつとおしい! ちよつと買い物に行くだけだぜ」

「ほうほう」

何が面白いのか六角帽子がメモを取っておるのである。吾輩もいつかメモを試してみ

たいのである。それにはまず勉強せねばならぬ。しかし六角帽子はにやりと歯を見せて笑っておる。手にはいつの間にかカメラが一つ。吾輩は国際派であるからいんぐりっしゅもできるのである。

「まあ、記事なんていくらでもおもしろくできるわ。とりあえず魔理沙さん、写真を一枚」

「そういうのをねっぞうつていうんだろっ！ 今はそんなことしている暇はないぜ」

ぎゅんと吾輩の頭に音が鳴る、と錯覚したのである。とたんに風が吾輩の顔を叩く。まりさが空中を箒を傾けて、一直線に天空から地上へ降りていくのだ。ううむ、ううむ。止まってくれ。

「いいですねその真面目な表情。猫さんもこっち見てください」

六角帽子がすぐ横にいるのである！ カメラを手を悠々ついてきておる。侮れぬ。まりさもそう感じてか、横の上に下にぐるぐるぐる飛んでは落ちては上つては一回転をくり返して逃げようとするのだ。

ばしゃ。と音がするのだ。

いつの間にかまりさと吾輩の前に先回りした、六角帽子がさかさまに飛んでカメラで吾輩たちを撮ってきた。むむむ、た、魂だけは取ってほしくはない。

「わああああー！」

耳元でまりさの叫び声するのである。六角帽子に驚いたのであろう。

途端に吾輩、空を自分で飛んでいるような錯覚を覚えた、おお世界が回っておる。手を伸ばしているまりさが遠ざかっている。吾輩はついに自分で飛べるようになったのかもしれぬ。

「おっと、危ない」

六角帽子の体に当たった。しかし、その瞬間に視たのはにたりとしてゐる六角帽子の悪そうな顔である。この娘の体に沿つてころころと吾輩転がるのだ、捕まえてはくれぬ。おお。

「ああ、両手がカメラでふさがつていて捕まえられませんね」

わざとらしい声がするのだ。しかし吾輩は諦めぬ。前足を伸ばして必死に縋りつくだ、ずるりと何かの手ごたえがあつた。ただ目の前が真っ暗で何も見えぬ。それでいて落ちていく感触がするのだ。遠くで悲鳴も聞こえる。

ああ、吾輩の猫生もこれで終わりであろうか。もつとねこじやらしで遊びたかつたのである。黒い布で前が見えぬ。

だが、吾輩の体を抱きとめてくれたものがおる。

「ふう、危なかつたぜ」

この声はまりさであろう。恩に着るのは、もとはと言えばまりさが連れてきたのが悪

いのである。と思いつつ、それは紳士ではない。素直ににやあにやあと抱き付いて感謝するのである。

まりさが吾輩の顔から黒い布を取ってくれたのである。なんであろうかこれは。よく見れば金色の柄に紅葉の模様などもあるのである。

「あいつ、これがないと困るだろうな。ま、人を捏造記事なんて書こうとするからじごくじとくだぜ」

そう言つてまりさは空の真ん中で黒い布を捨てた。

わがはいはしりたくなってきたのである

吾輩は散歩が好きである。ぽてぽてと何も考えることなしに歩いていると、ふといいことを考え付いたりするのである。吾輩は何も考えていないつもりであるが、景色をみていると頭に浮かぶことがあるのだ。

吾輩はそんなわけで堂々と街道を歩くのだ。お天道様が少し傾いてきたお昼過ぎであるから、すれ違う人間達はせわしくなく歩いてくのだ。

おお、布都ではないか。と吾輩は知り合いにはちやんと挨拶をするのだ。

「おお、おぬしは」

布都は良い娘である。布都はかがんで吾輩の顎の下を触って来る。ごろごろ。

「おぬし。元気であるか」

布都も元気そうであるな。それでは吾輩は忙しいから行くのである。布都も名残惜しそうに手を振ってどこかに行くのだ。それにしてもどこに行くのであろうか、たまたまあの娘にであつたが、人はいつもどこに行くのであろう。何をしに行くのか気になるところである。

意外と本人達にも分かつてはいないのかもしれない。それは吾輩とて同じであるが、そ

もそも散歩とはそういう物であろう。

★

散歩とは近くへの旅であろうな。と吾輩は神社へ帰る道が遠いことに気が付いてから思ったのである。調子にのつて遠くまで来てしまったかもしれない。野宿してもよいのであるが、たまには神社へ顔を出さねば巫女が寂しがるかもしれない。

吾輩は紳士であるからちゃんとしてご機嫌を伺いに行くのである。その時に煮干しを少し分けてもらえればという事はにやあしかないのである。

とは思うのであるが、今日はもう神社は遠いのである。幻想郷は吾輩の庭のような物ではあるのだが、ままならぬ。仕方ないので吾輩は草むらに腰を下ろして欠伸をしてから、今日の予定を立てるのである。

おお、そうだ。りんのスけの所であれば雨露しのげるかもしれない。吾輩はそう思っただけで起こしてから歩き出した。胸を張りつつ、尻尾を振りながら歩くのが紳士な歩き方なのである。そういえば前に知人に渡した鈴はどうなったのであろうか、なんとなく思い出したのである。

魔法の森という所があるのである。吾輩もたまに入るのであるが、人間だけで入るのはあまりおすすぬ。吾輩も最初入って迷ったことがあるのである、あの時はありすと会わなければ吾輩はお腹がへってしまったかもしれない。

しかし、今日は入らぬ。こんどありすにはせみでも持つて行つてあげようと思つていゝ。きつと喜ぶであらう。吾輩がそんなことを思いながらぼてぼて歩いていゝと、目的の場所に着いたのである。

大きな木の下にこじんまりとしたお店がある。そこには「香霖堂」と書かれているが吾輩には読めぬ。ふむ、あれは漢字であらう。裏手には大きくて、頑丈そうな倉があるのである。その壁に立てかけられているのは外の世界のじてんしゃとかいう物であるな、その周りにも珍妙なものが並んでおるのである。

あれはどーろひようしきだとかてれびだとかとりんのすけが言つていたのである。外の世界の何かしらであるが、吾輩にはとんとその使い方が分からぬ。吾輩はそんな使い方の分からぬものにもいやと挨拶をしておくのである。いつか物にも心が宿るやもしれぬ。

吾輩には暖簾は高い。入口から入るといつも通り中は暗いのである。そこには吾輩にもわからぬいろいろなものがあるのだ。りんのすけには困つたものである。吾輩も光る物くらいはひみつのねぐらに集めていゝのであるが、ここには所狭しとガラクタが置いてあるのである。

まあ、吾輩には良い寢床になるので許してやるのである。さて、りんのすけは今どこにいていゝのであらうか。そう思つて吾輩は店の中を歩き回つてみるのである。外はもう

暗くなる手前であるが、店内はもつと暗いのである。

まあいるランプにほのかに点る明りを頼りに吾輩はきよろきよろとりんのすけを探す。しかし、よくよく考えれば吾輩夜目は効くのである。半端なあかりで目をぱちぱちするから、くしくしと顔を掻いてみる。

おお、誰かいるのである。吾輩はカビの匂いのする棚と棚の間をすりと抜けていくのだ。そこには樽に腰掛けて本を読んでいる妖怪がいるのである。なんでわかるかというならば、髪の毛が白と青で角が生えているならば人間とはいえぬ。

「……」

吾輩はその本を読んでいる妖怪に頭を下げてそろそろと離れるのだ。こういうところで邪魔をせぬのが紳士のたしなみと聞いていいであろう。

物音がした。今度こそりんのすけであろうか。吾輩はあわてて飛び出したが、近くのガラクタの山を崩してしまったのである。後ろでなにか小さな驚いた声があるのは、聞こえないこととするのである。

吾輩が音のした方へ行ってみるとまたりんのすけではない。むう、いつになったら食事にありつけるのであろうか。前にりんのすけに分けてもらった「かりかり」をまた食べたいものである。

「あら、ねこのお客さん？」

そこにいたのは妙なシャツを着た娘であった。首輪のような物を付けて、そこから鎖が三本伸びているのである。その鎖には一つ一つ色の違う「ボール」がついて宙を浮いているのである。頭の上にボールを乗っけているところが珍妙としか言えぬ。スカートも妙な柄である。

「奇妙なものを置いてある店があるからつて来てみたけど、店主は留守。ざんねんね、猫さん」

ふむ、りんのすけは留守であるか。吾輩は少々肩を落とすのである。この娘も何かを探しに来たのであろうか、手に持っているのはやはり吾輩にもよくわからない何かである。小さなリングと手のひらより小さな箱に見える。

「ああ、これはポケットベルよ。懐かしいから手に取ってしまった」

吾輩の目線で察してくれたのか、娘は応えてくれた。しかし、ぼけつとべるとはなんであろうか。いんぐりっしゅであろうとおもうのである。

しかし、その変なシャツの娘はその疑問には応えてはくれぬ。ぼけつとべるなるものを適当に柵に押し込んで、腰をかがめて吾輩を撫でる。

「こんなところで迷っているなんて、迷子……迷い猫？」

吾輩は迷ってはおらぬ。ただ、娘とはやはりこみゆにけーしよんはとれぬ。

「まあ、ここには忘れられたものが集まっている。この猫が迷い込んでしまったのもそ

れだけの理由かもしれない」

言っている意味が分からぬ。しかし見上げれば物が詰まった棚。天井にも何かわからぬものが吊つてあるのである。そういえば、この物たちも迷い込んだのかもしれない。

だがよいではないか、迷い込んだ先でも楽しめるであろう。吾輩は迷つてはおらぬが、明日はどこに行くかは知らぬ。それより変なシャツではあるがよい手つき、ごろごろ。

「お客さんか」

りんのすけの音がするのである。吾輩と変なシャツは声の方向を見て、同じように動くのである。おお、この娘裸足である奇妙な。吾輩はその横をするりと抜けようとして、尻尾が触ってしまったのである。

「く、くすぐりたい」

変なシャツがよろけて棚に手を突こうとするので吾輩を無視してかけよったりんのすけが抱き留めたのである。ちよつと吾輩を抱くときのような形で変なシャツをりんのすけがかかえておる。

「あぶないな。倒れたら一大事だった。商品が……」

吾輩はそれを傍観しているのである。ふむ、昼頃も思つたのであるが吾輩は今日であつた者が何者で、何をしているかを知らぬ。そう考えるとむくむくと知りたい気持ち

が湧いてくるのを感じる。

ところで柵の間から本を抱えた妖怪がなぜか顔をむくれさせて突っ立っているのがある。何か怒ることがあったのであろうか。

そうだおてらにいこう

最近吾輩は良い発見をしたのである。行きつけの神社のお参りする場所にさいせんぼこなるものがあるのだ。吾輩はそれに乗って一つお昼寝を試してみたのであるが、これが中々に良い。偶に来る参拝客にはしっかりと挨拶もしておるから巫女も文句はないであろう。

中を覗き込むとほとんど何も入ってはおらぬ。お金を入れるというが、おかねという物を何故人が欲しがるのか吾輩にはわからぬ。あれは嘗めてみたが、どうともいえぬ味である。

あれを貰えるのならば、吾輩は煮干しの方がよい。そんな形で吾輩は賽銭箱の上で思索にふけつていたのである。

「あんた、なにやってるのよ」

吾輩は体を起こす。見ればちよつと怒った顔の巫女が立っているのである。手に持った箒が怖い。まあ、落ち着くのだ巫女よ、吾輩は何もやってはおらぬ。たださいせんぼこの上を少し借りているだけである。

「降りなさいっ！」

巫女が箒を吾輩に向けて振ってくるものだから、吾輩はバツと飛び上がって避ける。ううむ。急な事だったので巫女にとびかかる形になった。

「ふゆぎや」

失敬。顔にのしかかってしまったのである。巫女が変な声を出している。

すぐにどこう。だが巫女よ、気に食わぬからと言って暴力はいけぬ。吾輩はそう冷静になるように「にやあ」と鳴きながら地面に降りる。見上げてみれば巫女はこめかみをびくびくしながら怒っておるのである。

これはいかぬ。

吾輩はまるでウサギのようにその場から離れた。後ろから巫女の声があるが、ううむ。少し申し訳ないかもしれぬ。あのさいせんばことやはそんなに大切なものなのであろうか。ならば今度は蟬の抜け殻でも入れておけば許してくれるであらうか。

★

さて、今日は神社には行けぬ。

そうだ、寺に行くのである。

今日はあのひじきはおるであらうか、うむ。たしか名前はひじきであったと思うのであるが、うろ覚えかもしれぬ。それにしても昨日りんのすけにご馳走してもらった「ひじきのかんづめ」とやはうまかったのである。

——ふむ。消費期限切れていても食べられるのか。缶詰とは便利な……

りんのすけが意味の分からないことを言っておったのが気になるところではあるが、吾輩は思いもかけずにご馳走にありつけてよかった。吾輩は昨日のことを思い出しながらとことこ道を歩くのだ。

神社から見れば人里の向こうに「寺」はある。中々遠いので片方に行けば、もう片方にはいかぬが今日は仕方ない。前に行ったときは夜であった。

お天道様が真上から少し傾くくらいの間歩くと、目的のお寺に着いたのである。

すっかりとした瓦葺の門がその目印である。神社の鳥居なるものの方が大きいが吾輩こんな門の方がよじ登っていけるので好きである。屋根に上ってお昼寝はまた格別なのだ。

「おぬし。おぬし」

うむ。なにか声が聞こえてくる。吾輩は背筋をピンと伸ばして、あたりを伺うのである。こういう時には耳を立てておいた方がよく物音が聞こえるのである。

よく見れば門の中の陰にいるのは見慣れた烏帽子である。ふとではないか。いつも真つ白な服を着て、妙な被り物をしているからよくわかるのである。ふとは吾輩につかつかと歩み寄り、しゃがんだ。顔が近い。

「奇遇であるな。我も今からこの寺に忍び込もうとしているのだ」

吾輩、別に忍んではおらぬ。

「この前には神社の軒下で会ったが今度も太子の命でな……」

こそこそあたりを伺いながら吾輩の耳元に話しかけてくるふとであるが、こんなところまで四つん這いになって猫に耳打ちしている者は怪しいのではないだろうか、相も変わらず隠れるのが苦手そうである。

ともあれ、元気そうで何より。吾輩はどここ物陰に歩いていくと、ふとは「ど、どこにいくのだ」という。いや、目立ちそうにない物陰にふとを誘導しているである。そう思っているとふとが吾輩を抱きかかえてため息をついたのである。

「全く猫は気ままだな。あまりうろつく寺の者に追い出されるであろう」

どうやらふとも吾輩が寺の者に追い出されないか心配してくれているようである。吾輩とふとは言葉は通じぬが気は合うかもしれない。

ともあれ旅は道連れという、ふとは吾輩を抱きかかえたままこそこそと目立ちながら中に入っていくのだ。ふと、いや不意に気が付いたが人に抱いてもらいながら歩くと楽しんである。石畳の階段の左右の木々、その影が揺れているのだ。

「ふう、ふう。お、もい。猫を抱えて階段はきついであろう……」

なかなか石段は続く。左右に赤い「毘沙門天」と書かれた幟（のぼり）が整然と並んでいる。あれは何と読むのであろう。吾輩はふとにやあと聞いてみる。

「ふ、ふふ。我を応援してくれおるのか」

なにか別な感じで伝わったようである。まあいいのである。

石段を吾輩とふとが昇りきると、広い広場に出た。ここで祭りなどすればよい塩梅になりそうである。そして石畳自体は真つ直ぐに続き、その先には大きな本堂があるのだ。吾輩はいつもあそこでひじきに何か貰っている。

「げっ。いちりん」

ふとが何か驚いている。見れば青い髪で袈裟を着た少女が近づいてくる。

吾輩は初めて見るのである。濃い藍のフードを被って、胸元に赤い宝石を付けているのである。もしや、ふとのいう「いちりん」とは名前であろうか。

ふとはきよろきよろとあたりを見回して、吾輩を持ったまま、横にあつた赤い幟の裏に隠れた。いや、ふとよ。幟の後ろなど丸見えであろう。吾輩は真剣な顔をしているふとが見つかる前に囷をしてやろうと思うのである。吾輩はふとの右手を嘗めた。

「ひっ」

高い声をだしてふとは吾輩を離してくれたのである。さつさと吾輩は走り去る。もちろんさつきの広場に出るのだ。ちゃんと近寄ってきていた「いちりん」も吾輩に気が付いたようである。

「あ、猫だ」

吾輩は地面の剥き出しになっているところに寝そべって首を掻いてみるのである。この隙にふとを逃がそうというのであるが、ここから見れば幟からふとの足が見えていゝ。ううむ。隠れるとか以前の話であろう。

しかし、いちりんは吾輩に近づいてくるのである。何故かニコニコしながら、腰をかがめて話しかけてきた。この少女意外に派手な服を着ているのだ。この袈裟爪でちよつと破いてみたい、ううむいやいや紳士な吾輩は人様の物を粗末にはせぬ。

「今日はなんできたのかにや？」

妙な話し方をするやつであるな。

「おまえは聖様といつても遊んでる猫ね。聖様は留守よ」

おおう何故か頭を撫でてくるのである。そういえばひじきではない「聖」であつたな。昨日のりんのすけのひじきしか頭になかつたのである。いちりんよ感謝するのである。

「そうだ！ 実はお前が来るかと思つて煮干しを少し持つているのよ、ほらおたべ」

にやあにやあ。そういうえば聖と遊んでいる時に後ろの方に「いちりん」もいたのである。今思えば遊びたそうな顔をしていたのだ。煮干しうまい、うまいのである。かりかり。

「おいしいかにや？」

微笑みながら聞いてくるいちりに吾輩はにやあと答えると、嬉しそうにしているの

である。しかし、吾輩は驚いた。いちりんの真後ろにふとが口を押えて、笑いをかみ殺しながら見下ろしている。

な、何故隠れておかぬ。吾輩は怒ったのである。せつかく囹になったというのに、と吾輩は抗議の声を上げるのだ。

「な、何でいきなり怒っているの……あ」

後ろを振り向きたいちりんがふとを見て固まっている。

逆にふとはこらえきれぬとばかりに高笑いした。

おちやかいのおすそわけをするのである

しばらくすると袈裟を着た御坊が一人帰ってきたのである。その顔は吾輩よく見知っている。妙な髪の色をしているその女子を見間違えるはずはないのである。

聖であるな。わがはいこの名前を忘れたことはない。いや、少し間違えていたことはあるのである。ふと、といちりんは庭で弾幕ごっこをしているのである、それを聖は首を振りながらため息をついて見ているのである。

「あとでお仕置きね」

ちよつと吾輩も怖くなってしまうのである。それはともかく、聖は吾輩に挨拶してくれたのである。

「こんにちは猫さん」

にやあ、吾輩も挨拶は欠かさぬ。これは人としていや猫として当たり前のことである。そんな吾輩は背筋を伸ばして、かくりと首を垂れる。これが人の挨拶であろう。ごうに入ればごうに従うのである。しかし、はて「ごう」とはなんであろうか。吾輩にもとんと分からぬ。

聖はニコニコしながらいつも通り吾輩を縁側に連れて行ってくれたのである。そこ

で聖も座りながら、吾輩はそのひぎに寝転がる。ううむ、てーいちというものであるか。

今日は良い天気であるな。聖の着ている袈裟はふかふかしているのである。こう膝の上に乗ってごろんごろんしてみると肌触りがいい。服という物を吾輩着たことはいないのであるが、ううむ吾輩におあつらえ向きの服はないのであろうか。

暖かいお天道様の下でこうお昼寝していると吾輩は感無量であるな。ううむ聖よお腹をさする手がくすぐったいのである。吾輩はそう簡単な抗議をしようと体を起こしかける。親しき中にも礼儀はあるという、ここはびしりと言わねばならぬ。

「ほら、今日は里で煮干しを貰いました」

にやあにやあ。は、いかぬ。これでは「わいろ」というやつではないか。しかしわいろとはなんであらうか、食べられるのであろうか。かりかり。ううむ。これは良い味。

「お茶が欲しいわねえ」

何か言いながら何故か聖も煮干しを齧っているのである。ううむ吾輩と聖は煮干し友達というところであらうか。

「聖様、お疲れ様でした」

いい香りがするのである。吾輩が身体を袈裟の上で動かしながら見てみると、金色の髪をした派手な格好をした女子が立っているのである。それは湯呑の入ったお盆を

持っているのである。おそらくお茶を持ってきたのであろう。

それも二つ湯呑があるのである。吾輩の分もあるのであるな。好意はありがたいのであるが、吾輩はお茶を飲んだことがないのである。だが、物は試しであるな。吾輩はちやれんじやーなのである。

「ありがとう、星」

聖が湯呑を受け取ったのである。ううむ、この女子はじよーというらしいのである。妙な名前であるな。いんぐりっしゅであろうか。

じよーは聖に湯呑を渡した後にその場に座ったのである。着ている服はまるでアレであるな、良くお寺の奥の方にいる人間のおじさんの銅像のようである。しかし、なぜ頭に粒々を付けたあやつは寺の奥にいるのであろうか。もしやあれがうわさに聞く仏というものであろうか。

ううむ？ 吾輩ちよつとわからぬ。この近くにお寺と言えばここしかないのである。しかし、昔どこかで見たことがある気がするのである。はて？ いつ寺などみたのであろう。

まあいいのである。

ずずーと音がしたので吾輩の耳がびくびくしてしまう。見ればじよーが湯呑からお茶をすすっているのである。……聖ともう一つはじよーの分の湯飲みであったか、吾輩

はやとちりをしてしまったのである。

「あつこ」

じよーが舌を出して熱がっているのである。こやつ、自分で持ってきた気がするのがあるがそれにしてもこういうのを猫舌というらしいのである。吾輩心外である。吾輩は我慢強い方であると自覚しているのである。

縁側から見える庭にはいちりんとふとが寝ころんでいるのである。引き分けであるか。あたりに割れた皿が散らばっている光景は、こう吾輩には言い表すことが出来ぬ。

「ほら猫さんもう利益があるかもしれないよ」

聖が吾輩を抱え上げて前足を取った。それから肉球と肉球を合わせた。それからじよーに吾輩の体を向けたのである。おお、これはよくおじぞうさんにあきゅーがやっているポーズではないか。吾輩祈ったのは初めてである。

しかし、お茶で熱がっているじよーに祈って何かあるのであろうか。まあいいのである。

じよーもにこにこしながら片手をあげている。ううむ少しおじぞうさんのポーズに似ているのである。

「ふふ、その猫よく寺に来ますね。聖様」

「私のおともだちですから」

えっへんと胸を張る聖が吾輩を抱えてたかいたかいする。おお、たかい。しかし吾輩この前にもつと高いところに行ったのである。

「ご主人様」

ほう、また声が聞こえるのである。どことなく気の抜けたような声であるが、吾輩どこかで聞いたことがある気がするのである。

「あ、ナズーリン。こっちです」

「……ご主人様。こっ所り食べたいからって人里に買いにいったお菓子がありますよ」

「え、ええ？ あ、いや違う。聖様違います。な、ナズーリン！」

慌てるじょーが声の主を呼んでいる。吾輩はじとつとじょーを見ている聖に抱えられたままである。声の主が近づいてきた。

そこに立っていたのは、あつと驚きながらお盆に乗ったお菓子を持った少女である。吾輩も固まったのである。あやつはケチンボではないか、以前何もくれなかったから嘗めてやったことがあるのである。

「そ、その猫は。なんでここにいるんだ！」

なんか怒っているのである。吾輩も負けずに鳴くのだ。というか、このナズーリンなる女子、口元に何か付けているのではないか。お菓子をつまみ食いしたに違いないので

ある。

にやああ。

「な、なんだこいつ」

にらみ合うナズーリンと吾輩。見れば見るほどネズミ顔であるな。いや、似ているかと言われれば似ていないのであるがなんとなくネズミっぽいのである。何故であろうか。

「こら、ナズーリン。私の客人ですよ」

聖が怒ったのである。ううむ吾輩の味方をしてくれるのは嬉しいのであるが、胸に押し付けられるように抱かれると息が苦しいのである。にや、にやあ。

ナズーリンも味方を探すようにじょーを見ているのであるが、何故かため息をついて座ったのである。ううむ、今日は雌雄を決するときではにやい、いやないようであるな。

「ご主人様。お菓子です。ご主人様の言った通りにこっそり買ってきましたよ」

「……………あ、あのナズーリン。…………えつとひ、聖様？ こ、これは違うんです」

「星。お菓子くらい正直に食べたいと言えはいんですよ？」

★

それから吾輩はお寺でのんびり過ごして、夕日が沈む前にふと一緒帰ったのである。本当は泊ってもよかったのであるが、どうにも気になることがある。

今朝は巫女の顔に乗ってしまったのである。紳士としてあるまじきことであるな。

しかし、吾輩はとんと謝る方法がわからぬ。こみゆにけーしよんの難しいところである。そこで少し聖たちの食べている「きんつば」なるものを分けてもらい、巫女にあげようと吾輩は思ったのであるが聖たちとは喋れぬ。

吾輩にやあにやあと訴えてみると、なぜかじよーが「きんつば」を袋に包んで首にかけてくれたのである。

「ほら、これでいいですか？」

じよーの情けないところばかり見てしまっていたのであるが、お地藏さんのように優しい顔をしていたのである。なぜ、吾輩の思っているところがわかったのであろうか、実は猫かもしれぬ。

ともかく、吾輩は月夜を神社に急いだのである。

つきよのうたげはにぎやかではなくとも

吾輩はとことと帰路についている。

おお、間違えたのである。吾輩が今から向かつているのは神社である。あそこは吾輩の家ではないが、まあいいのである。この空の下は吾輩の庭のような物であろう。

それにしても首についた袋入りの「きんつば」が重いのである。こう落とさないようにじよーが付けてくれた紐が首に食い込んでいたのである。ううむ、だがしかし吾輩はこれをもって巫女と仲直りしなければいけないのである。

吾輩は目の前にあつた小石をすりと追い抜き、なんとなく後ろ足で蹴ってみるのだ。別に意味などはない、こうそれを見た時に遊んで、いやいや蹴ってみたくないのである。

歩いているとさらさらと風に揺れているねこじやらしが生えておる、しかし吾輩は急いでいるのである。相手をしている暇はないのである。だからそのけむくじやらの先つぼを二度、三度ばんちをして素早く通り過ぎるのである。

吾輩は急いでいる。ううむ、しかし路上は誘惑が多いのであるな。こうこの世は面白いことがあふれているかのようである。それに今日は道が明るい、空を見ればお月様が

ぼっかりと浮かんで吾輩を見下ろしてくれている。ううむ、いつ見ても丸いのである。吾輩は紳士であるからやらぬが、昔は丸い毛糸の玉に乗っては落ちてをしたものである。

もし吾輩がもう少し大きければお月様に乗れるのであろうか、惜しいところである。一度くらいはころころしてみたいものである。

そんなことを考えていると吾輩は神社の石段まで来ていた。なんであろうか、お寺からここまで一瞬であったようである。一度も退屈しておらぬ。吾輩は夜に冷やされた石段をしゆたしゆたと昇ってみるのである。

赤い鳥居が見えてきた。吾輩は石段の最後の一段を大きく蹴つて、しゆつたりと神社に着いたのである。後ろを振り向けば今まで昇ってきた石段が見えているのである。ううむ、いつも思うのである。昇っている時には考えぬが高いところに来てから後ろを見ると、良く昇った物であるなど我ながら感心するところである。

夜風が吾輩の毛並みを撫でる。おお、首がかゆい。前足でこう、搔くと。くしくし。気もちいいのである。

吾輩はそれから勝手知ったる神社の境内を悠々と優雅に歩いていくのである。吾輩は巫女がどこにいるのか知っているのである。吾輩も風流を知っているつもりであるが、人もお月様が出ている日にはちゃんと挨拶をする習慣があるのである。前に巫女も

「ろうそくがたかい」と言いながら縁側で月明りを楽しんでおった所だ、それにしてもろうそくがたかい、とは何の事であろうか。

おお、白い着物を着た巫女がおるではないか。いつものリボンを外しているということは、寝間着であるな。一人で広場に立っているのである。顔を上げているからお月様を見ているのであろう。吾輩はそちらに近寄つて、下から見ながら挨拶をしたのである。

にやあ

「わあっ!?」び、びっくりした。なによ。あんたか……」

巫女は心底驚いたようである。上を見ている時に吾輩が下から話しかけたからであろう。ううむ悪いことを下のである。それはそうと巫女よ、今日は良いものを持つてきたのである。そう吾輩は巫女に説明しようとしたのであるが、その前に巫女が腰をかがめて頭を撫でてきたのである。

「あんた。今は朝人の顔に乗っておいて、よくのこのこ来られたわね」
ううむ済まぬ。しかし巫女とて箒で吾輩を叩こうとしたのである。

今日の巫女の頭を撫で方は良い。ううむ合格である。しかし人は吾輩が来ればよくなのであるな。さーびすが行き届いているのである。

「ふふ」

何故か巫女が笑っているのである。何故であろうか、吾輩は昔から人にしろ妖怪にしろ猫にしろ笑っている相手が好きでたまらぬ。それにしても巫女よもう少し右、お、お。

「あんた何を首から下げてるのよ……。この前やった鈴はなくしたくせに」
それも済まぬ、墓場で会った妙な少女にあげてしまったのである。

巫女は吾輩の首から下げている包みをとって、中を開けて見ている。巫女は眉を寄せているのだ。包みの中には四角の固そうで黒い塊が入っているのだ。

「なにこれ？」

きんつば。である。なにやら甘いというではないか、吾輩はたまに花の蜜を嘗めてみることもあるのであるから、それ以上に甘いのであろう。ううむ、吾輩もちよつと食べていたないのである。

「黒くてかたい塊ね……。いい包みに入っていたからあんた、どこからかもらってきたの？ ……ああ、猫に話しかけてもしようがないな」

吾輩は見上げるだけである。こんな時にこみゆにけーしよんが取ればいいのであるが、とんと方法が分からぬ。じよーを連れてくればよかつたであろうか、いや連れてきてあまり役には立たない気がするのである。

「まあいいわ。どうせ一人で暇だったしね……。ほら来なさい」

にやあ。吾輩は巫女についていく。

☆

割れた茶碗に巫女がぬるいお湯を注いでくれたのである。舐めてみるとほのかに味がするのである。

「流石に猫に酒はあげられないからね。重湯で我慢しなさい」

ここは座敷であろう。畳の匂いが鼻に心地よいのである。巫女は酒瓶と赤い盃を用意して畳の上に置いているのである。盃がきらきらと月夜に光っているのだ。

舌でぴちやぴちやと飲むとやはりほのかな味がするので。それに身体があつたまつてくる気もするのである。最近の夜はとみに寒いの中からであろう。吾輩は口周りについた重湯もしつかりと嘗めておくのだ。巫女はそれを黙ってみている。

「にやああ」

にやあ

巫女が不意に吾輩と同じように鳴いたから、紳士な吾輩もしつかりと返すのである。見れば巫女は少し笑っているような気がするのだ。

それにしても吾輩わからぬことがある。吾輩と一緒にいる時には巫女もたまに「にやあ」となくのであるが、まりさや他の人と一緒にいる時には巫女は鳴かぬ。これはどういうことであろうか、吾輩とんと分からぬ。聞いてみたいところであるが、吾輩には聞けぬ。

寂しいものである。吾輩はいつか、誰かと心行くまでこみゆにけーしよんをしてみたいものであるが、巫女とはこうして重湯を飲むよりほかはない。吾輩はそう思つて舌で茶碗を嘗めて見るのだ。

いや、そこで吾輩は思いついたのである。

人は酒を飲むときにお互い盃にお酒を入れ合う物である。吾輩にもできるやもしれぬ。吾輩は思い立つたがよい時である。ぱつと身体を起こして巫女へそう伝えてみる。

「……う？　なににやあだか、なあだが、鳴いているのよ」

首を傾けて聞かれてしまったのだ。ええい、吾輩はじれつたくなつてとことこ近づいてみるのである。酒瓶を見れば吾輩の顔が映っているのである。

「ああ、近寄るんじゃないわよ。零れるから。……あ」

あわてた巫女が手を伸ばしてカツンと手が酒瓶に当たつたのである。おお、吾輩の顔が迫ってくるのである。酒瓶が倒れようとしておる。吾輩はとつさに酒瓶に身体を当てて、支えるのだ。ちよつと零れた。吾輩の体と畳にしみこんでキツイお酒のにおいとしみこんでいく。あと、重いのだ。

「ああ、畳が」

巫女よ、そつちであるか。

「あー、あんたも」

そうである。吾輩も心配してほしいのである。

巫女は吾輩が支えていることには手を貸さず、どたどたと雑巾を探しに行ってしまったのである。吾輩はそれで困った。重くて動くことが出来ぬ。

その時ふと声があったのである。縁側の方からであろう。

「咲夜。座敷に猫がいるわ」

誰であろうか。

ばーてーの誘いにはのらなければならぬ

吾輩は驚愕したのである。ううむ。だれやらが神社に来たことは覚えているのである。この耳がしつかりと「さくや」なる声が聞いたのだ。

この目をぱちくりさせて、うなうなと唸りながら考えてもわからぬ。さつきまで吾輩は巫女のお酒の瓶を体で支えて零れぬようにするというししふんじんの働きをしておったはずである。

それというのに、吾輩はだっこされているのである。

「お嬢様。猫を捕まえましたわ。如何いたしますか？」

「いや、誰も捕まえてなんていつてないのだけど……。まあいいわ。そのまま邪魔にならないように持つていなさい」

吾輩が見上げると顔の左右で三つ編みを結っている少女がおるのである。このおなごの手に抱かれて吾輩は揺られている。ううむ。吾輩、だっこされておることは慣れておるが、いつの間になだっこされたのかとんと分からぬ。

おそらくであるが、このおなごが「さくや」であろう。にやあにやあ。三つ編みをことう、はつ。少し揺れている三つ編みをパンチしてしまったのである。ふかこうりよくと

いうものである。

「はいはい」

さくやよまるで人の赤ん坊を揺らすように吾輩を揺らすではない。こう見えても吾輩は紳士で通っているのである。おお、顎の下を撫でるな、ごろごろ。

「はいかしたら」

ううむ。これはゆだんできぬてくにしゃん。しかし吾輩とてこう捕まっているままでは折れぬ。この撫でる指をこう噛んで威嚇するのである。

「はいはい」

吾輩に指を噛まれて笑うとは面妖であるな。しかし安心するのである、少女にけがをさせるつもりはないのだ。こうかみかみ、と吾輩をぞんざいに扱うとこうなるという脅しである。これ、鼻をくすぐるでない。

「なにやっつてんのよあんたら」

この声は巫女が戻ってきたのであるな。

「ああ、霊夢。この猫なにかしら？」

別の声があるのである。そういえばさくやと一緒に誰か入ってきたのである。それをおお、お腹をさするのみなかなか……ううむ、考え事が出来ぬ。巫女よ助けてくれ。

「野良猫よそいつ。で？ レミリア、あんた何しにきたのかしら。まさかそいつに猫を

撫でさせるために来たんじゃないでしょ？」

もう一人をレミリアというらしいのであるな。おお、にやあ。

ええい。もう我慢できぬのである。さっきから何か吾輩が考えようとするたびに執拗にマツサージをするではない。憤怒にかられた吾輩は、もぞもぞと咲夜の手の中で体を立て直して、そこから飛び出したのである

吾輩はさくやにだっこされているのである。なぜ。なぜであろう。とんとわからぬ。確かに脱出したはずである。目の前に畳の折り目まで見ておったのに、次の瞬間にはここでおお、おお背中をささるのもうまい。

「この猫大人しいですわね」

さくやが何か言っているのだ。

「いや、あんた今……まあいいか」

巫女が何かを言いかけて止まったのである。何を言いかけたのであろう。

「ああもう、話が途切れた。で？ あんたら何しに来たのよ」

「月が綺麗だったから寄ってみただけよ」

「ああ、そう」

レミリアという少女は小柄であるな。頭にこうりんのところで見たどあのぶかばー

のような物を被っておる。

肌が白くてほっぺたが柔らかかそうである。ちよつと噛んでみたいのは悪いであろうか。

そんなことを思っているとレミリアがさくやに抱かれています。吾輩をちらりと片目で見してきたのだ。八重歯？ であろうか、きらつと光る歯を見せてから両手を組んでいるのだ。

「うちのツパイの方が可愛いわね」

ううむ。それは吾輩のことであるか。巫女よ何か言つてやるのだ。

「ああ、そういえばなんだっけ。ちゆ、ちゆばなんとかをあんた飼つてたわね」

突然さくやが吾輩を撫でるのをやめたのである。今である。脱出を試みたのだ。

なぜさくやの手の中に吾輩はいるのであろうか。離れられぬ。さくやを見上げると何故か笑っているのだ。ううむ。何でであろう。さくやは吾輩を抱いたまま言うのである。巫女に向かつて。

「ばちえ？ といいたいの？」

「そんな名前だったかしら。前に狸から聞いたんだけど……」

ふむふむ見えてきたのである。このレミリアは「ばちえ」なる猫を飼っているのである。しかし、凜々しく野原を闊歩する吾輩も負けぬ。まだ見たことはないのである。

が、吾輩はばちえには負けてはおられぬ。

「いや、ばちえじゃないわよ。咲夜」

「あら。違うのですか？ てつきり私はそうかと思いましたが、今日も本を読んでいらしたのですね」

「…それになんの関係があるのかしら……？ 咲夜、貴女はたまに妙なことを言う気がするのだけれど」

ばちゆは本を読めるのであるか！ 吾輩、負けたのである。吾輩はよい木の実の成るところは良く知っておるが、人の書いた文字は読めぬ。だが、吾輩は紳士であるから負けは負けとして認めねばならぬ。だが、いずれは吾輩も読めるようになるのである。

まだ見ぬばちえよ、見ておるがよい。猫として吾輩は追いついて見せるのである、ああごろごろ、さくやよ決意している時に顎を撫でるでない。

巫女よ助けてくれ。

「まあ、何でもいいけど。私はそろそろ寝ようと思っただけだ。レミリア。あんたがただ寄っただけとは思えないわ」

「ふふ、そうね。半分は本当だけど、半分はこっちよ」

レミリアは懐から一通の手紙を出したのである。それを巫女に渡そうとして、手を滑らせて落としたのだ。レミリアは自分で拾って巫女に渡した。

「……今度、我が紅魔館でパーティーを開くことにしたの。これは招待状よ」
ぱーてーであるか、吾輩には招待状はないのであろうか。

「くく、その猫も連れてきてもいいわよ。あの子の遊び相手になりそうだから」

吾輩も行ってよいのであるか。中々話しが分かるではないか。しかし、ご馳走をくれとは吾輩は言わぬ。ヤマメと煮干しがあればそれで充分なのである。それにさくやよ、巫女とレミリアの話に聞き入って油断しているのであるな。今である——

「わああ」

わ、吾輩いつの間にかレミリアの頭の上に載っているのである。いつの間に移動したのであろうか。それに驚いてレミリアのかぶっていた帽子をずり下げてしまったのである。こ、これレミリアよ暴れるでない。

「ま、前が。ちよつと咲夜！」

「はい」

「なんで猫が頭の上にいるのよ」

「その子が急に飛び出したので」

吾輩はレミリアとは別方向に飛んだはずであるが、気が付いたらいつの間にかその上に載っていたのである。まるで吾輩、前に耳にしたわーぷをしたようである。いつの間にかレミリアの頭の上に「置かれていた」かのようなのである。ちよつと招き猫のようであ

るな。いや、今は関係ないのである。

「はいはい、もう。ほらレミリアじつとしなさい」

レミリアと吾輩が一緒に右往左往しておると巫女が吾輩を抱き寄せてくれたのである。なんとなく安心するのはなぜであろう。さくやがにこにこしているのが少し怖い。

「とりあえず、この招待状は預かっておくわ。いい酒用意してなさいよ」

「愚問ね。私が客人をもてなすのに抜かりがあるわけないわ」

帽子を被り直しながら、レミリアは言ったのである。

★

二人が去ってから吾輩と巫女は縁側で月を見ながらぼんやりしているのである。胡坐をかいた巫女の膝に乗って、吾輩はかりかりと煮干しを噛んでいる。

「招待状か。あ、これ英語じゃない。読めないわよこんなの」

巫女は酒を飲んでいるからか、顔が少し赤い。ツマミは月と、吾輩ときんつばである。

「これ、おいしいわね」

きんつばを食べながら吾輩を巫女は撫でる。

かたいけついでべんきようをするのである

吾輩も負けてはいられぬ。

今日は暖かい日であるが、吾輩の心は燃え盛っているのである。人であれば胸が躍るといふらしいのであるが、吾輩が自分の胸のあたりを見ても吾輩自慢の毛並みしか見えぬ。ううむ、どうやって踊るのであろうか。

いやいや、そうではない。

この前に巫女と話をしていたさくやとれみりあは「ぱちえ」なる猫を飼っているといふのである。なんと、驚いたことに人の字が読めるというではないか、それができるのであれば人とこみゆにけーしよんも取れるかもしれぬ。

そこで吾輩は思つたのである。人の子が通う寺子屋とやらで書物を勉強しようと、固い決意である。

だからこそこんな草むらで寝転がっている場合ではないのである。ちようどお天道様も真上に来たからには、そろそろ起きねばならぬのだ。ごろごろ、起きねばならぬ。その前に毛並みを手入れせねば。

少し吾輩は前足を嘗めておめかしをするのである。決してまだ起きたくないわけ

はない。こう、ちゃんとしておかねばならぬ。後ろ足も、こう。楽しくなってきたわけでは決してない。

★

吾輩はしつかりと健康に気を遣っているからこそ時間がかかってしまったのである。紳士であるからには毛並みの手入れを欠かす訳にはいかぬ。まんぞくしたのである。

吾輩はすくつと立ち上がり胸を張って歩くのだ。行動はめりはりが大切というであろう。ところで「めりはり」とはなんなのであろうか、とんと分からぬ。ぱちえならばわかるかもしれぬ。

しかし、吾輩他の猫に頼っている時ではない。向上心に燃えている吾輩を止めることのできる者は何もない。おお、手ごろな石があるのだ。ころころと転がしてみると中々におつであるな。

はっ。いかぬいかぬ。遊んでいる場合ではない。吾輩道草を食うような暇はないのである。速く人里に行かねばならぬ。吾輩は街道にでた。

「おお、猫ではないか」

にやあ、ふとではないか。いつも妙な帽子を被っているものであるな。そういえば吾輩も帽子が欲しいと思うことがあるのであるが、猫用の帽子はないであろうか。

それにしてもふとはよく会う。もしかしたら吾輩を慕っているのかもしれない。

「最近よく会うな、もしや我を慕っているのか?」

ふとよ、それは吾輩がさつき思つた事である。

だからにやあにやあと吾輩が鋭い抗議をすると、ふとはわかつたわかつたというではないか。

「我を慕つてくれるのは嬉しいが今は何も持つてはいない。今度にぼしをもつてきてあげるから」

どうであろうと鼻を鳴らして吾輩を見下ろしてくるふとである。

何も分かつておらぬようであるが、にぼしとなれば話は別である。吾輩、ここは大人で寛大な心を持つて全面的に許すのである。うう、ふとが頭を撫で始めたのであるが、吾輩は忙しい。今日は人里に行かねばならぬ。べんきようせねばならぬ。

「ここがよいのか」

もつと首のあたりがよいのである。

★

じんそくな行動とは難しいものであるな。ふとの遊びに付き合つてあげたら、時が走るように過ぎてしまったのである。今日はもうどうしようもない、夕日が沈んで遠くで鴉がかあかあど鳴いているのである。

そういうえば鴉天狗とは鳴くのであろうか? 吾輩はとんとわからぬ。前にもみじな

るものにご馳走を貰ったことがあるが、あやつは元氣であろうか。台風の時の疲れがでたと云つておつた。

そんなことよりも吾輩は今日の寢床を探さなければならぬ。吾輩ほどになればこの幻想郷は庭のような物であるが、逆にどこで寝るか悩むところであるな。いや、それよりも吾輩は大変なことを思い出してしまったのである。

今日、吾輩は大事なことをしていないことに気が付いてしまった。不覺である。嘆かわしいことである。これではまだ見ぬ「ぼちえ」に笑われてしまう。そうである、吾輩今日は、

ごはんを食べておらぬではないか。

そう思うととたんに腹が減ってきたような気がするのである。ううむ、ここからは寺も神社も遠い。りんすけの所に行ってもよいのであるが、たまにゲテモノを出すから考え物である。

うむ？ なんかいい匂いがあるのである。おお、なぜであろう体が勝手にそちらに動いていくではないか。不思議なことである。確かこの先には沢があつたような気がするのである。

夜の道は暗い暗いというが、吾輩の眼にはそこまで暗くは見えぬ。何故であろうか、それよりも夜は寒いのがいけぬ。お月様もお天道様のようにあつたかになればよいと

吾輩は常々思っているところである。

うむ、ほのかに明かりが見えるのだ。あれは沢のほとりであるな。火を起こしているのであれば人か妖怪であろう。吾輩は恥ずかしながら火というものを扱ったことはないのである。

草むらを抜けると小さな滝のある沢に出たのである。周りを木々に囲まれた場所で吾輩は始めてくるのだ。庭とて見た事ないところくらいはあるであろう。

「あ、ねこだ」

そこにこんがり焼かれたヤマメを木の枝にさして食べている少女がいたのである。

たき火の前の石に座っているから、顔がよく見えるのだ。銀色の髪に赤い瞳がきれいであるな。頭には大きな赤いリボン。それにしても上着がぼろぼろである。寒くなってきたのに半そでとはいただけぬ。下に穿いているものをよく知っておるのだ、人里でもんぺといわれているものである。

「なんだ。これを食べにきた？ ほらおいでおいで」

たき火の周りにはさらにヤマメが焼かれているようである。わ、吾輩の足が勝手に動いていくのである。これはふかこうりよくというものである。吾輩は一つ身をもつて知識を得たのだ。

「猫か、昔からいるんだよね。名前とかあるの？」

吾輩を少女はだっこして何か聞いてくるのである。わがはいは、わがはいである。それに昔からとはよくわかつているのである。吾輩はこのあたりでは少し有名になってきたかもしれぬ。

「私は妹紅……って。猫に自己紹介してもなあ」

もこおであるか。それよりもこおよ、吾輩お腹が減ったのである。吾輩の眼はさつきから炙られているヤマメにしか向いてはおらぬ。それに気が付いてくれたのかもこおは自分が食べていたヤマメを地面に近くにあつた岩に置いたのである。

「ほら、おたべ」

もこおとは初対面であるが一匹のヤマメを分け合うことになるとは思っていないかつたのである。食べかけとはいえ、贅沢は言つてはいられぬ。吾輩は紳士であるから、貰つたものに文句など言わぬ。

吾輩がもこおのひざ元から足を伝つて降りる。

「おー。体が長い」

降りるときに足を延ばすから、身体も伸びるのは当たり前であろう。しかし、感心されることには悪い気はせぬ。

吾輩がヤマメに近づくと、良く焼けた皮からいい匂いがする。それに一部で剥き出しになった白身からほんのり湯気が立っている。はむはむ。はむはむ。ううむ。もぐも

ぐ。

吾輩はまなーにはうるさいのであるから、食事は静かにとるのだ。虫の声と沢を流れる水の音くらいは許すでしょう。それにたき火からぱちぱちと音がしているのだ。もこおも火にあぶっていたヤマメをとって食べ始めた。

「あち、あち」

なんか言っているのである。吾輩はちらつと見て、すつと視線を戻す。口に物を入れて喋るわけにはいかぬ。もこおは別に吾輩を撫でてくるでもなしに、岩にもたれかかって食べているようである。

「明日は何をしようかな……ふあーあ。眠い」

涙を浮かべてもこおが欠伸する。それからぼんやりと空を見ているのである。

吾輩つられて大きな欠伸をしてしまう。

このよは、おどろくことばかりである

朝に眼が覚めると、今吾輩がいる場所が分どこだかわからなくなつてしまふことがあるのである。今日もそうである。周りを見渡してもここがどこかよくわからぬ。

吾輩はそんな時には体を伸ばしてからゆつくりと考え直すことを日課にしているのだ。

そうである。

昨日はもこおと知り合つてヤマメをご馳走になつたのであつた。それからたき火の火がぱちぱちと拍手をしている音を聞きながら眠つてしまつたのであろう。最近思つたのであるが、吾輩は「ふと」の口調がうつつてしまつたのかもしれない。

たき火はもう黒い煤を残して見る影もないようである。ううむ、ちと寒いのである。吾輩はできることも多いのであるが、火を起すのは苦手である。岩の上には昨日もこおが着ていた服が干してあるのである。遠くには行つてはいないようであるが、吾輩は寒いのである。沢の清流が目の前を流れているのはいいのであるが、それが冷たい風を運んできているかのようである。

吾輩はもこおを探そうとしたが、そこではたと気が付いたのである。これも一宿一飯

の恩。もこおが戻ってくる前に温かい火を起こしておくことに吾輩が挑戦するべきであらう。

早速吾輩は昨日はぱちぱち燃えていたたき火の後を調べることにしたのだ。しかし、ぐるぐるその周りをまわってみても匂いを嗅いでみても、とんと火を起こす方法が分からぬ。

にやあ、これは困つたのである。吾輩はその場でうづくまつて考えるのであるが妙案は浮かばぬ。その内もこおが戻ってくるかもしれぬ。もしかしたら煤を触ってみれば何かわかるかもしれぬ。

吾輩は勇気をもつて肉球を煤に押し付けてみる。さらさらざらざらしているのである。なにもわからぬ。

しかも吾輩のじまんの毛並みに煤が付いてとれぬ。

吾輩は近くの岩に手を擦りつけてみるが、とれぬ。

煤が取れぬ。

ふぎやあ、にやあ。にやあ。

いかぬ。今しばし我を忘れてしまったのである。ここは落ち着くのである。落ち着いていつも通り、前足の毛並みを嘗めて艶を出すのである。

苦いのである。煤を嘗めたのは吾輩初めてである。

「……おーい」

吾輩は突然の声にびっくりして後ろを見ると岩に寄りかかるようにずぶ濡れのもこおがいたのである。髪まで濡れているのは何であらう。もこおは吾輩に近寄ってくると吾輩の両脇を抱えて持ち上げたのである。しばし見つめ合う。

「なんでたき火の跡に近づくんだ……。ああいろんなところが汚れているわ」

もこおが帰ってくる前にあつたかいたき火をもう一度起こしておきたかったのである。見るからに寒そうな恰好で何をしていたのであらう。

「おまえも一緒に水浴びするしかないな」

「……!? ……!?!? この寒い朝に水浴びは嫌である。吾輩はその言葉を聞いた瞬間からもこおの手からもがきにもがくのである。体を捻り、ひねり。なんとか離してほしいのである。もこおの背中に上ろうともしたが、もこおは強く抱いてくるのである。」

「……こら。暴れるな」

そんな吾輩の抗議も空しくもこおは吾輩を抱くとぺたぺた水の中に入っていく。綺麗な川の流れではあるが、入りたいなどと思わぬ。尻尾で少し触ってみれば飛び上がりたくなるほど冷たいのである。

「あ、おとなしくなった。観念した?」

もこおよ、吾輩の知っている温泉に連れていくのである。だから屈んでいくのをやめ

てほしい。そして仮に吾輩が暴れてもこおが水の中に吾輩を落としてしまえば元も子もないではないか。

もはやどうにもならぬ。

もこおの胸板に抱かれた吾輩はまさにまな板の上の鯉。いやまな板の上の吾輩なのである。だから吾輩はもこおから落とされぬようにするしかないのである。

尻尾をもこおのお腹のあたりに巻き付けてみる。首を振つてごろごろ鳴いて頼んでみてももこおは「つめた」などとしか言わぬ。そんなことは分かっているのだ。

にやああ。肩まで浸からなくてもよいであろう。冷たいのである、冷たいのである！
にやあにやあ。

「ほら、手の煤を落とすから」

そんな悠長なことを言っている場合ではないのである

★

お昼は吾輩ともこおで散歩をしたのである。もこおは空を見上げながら何を言うでもなく歩いてるのである。水浴びをしてさっぱりしているからかもしれない、しかし二度とあれはしたくない。

今日もいい天気であるな。吾輩はもこおの横について歩きながら思っている。それにしてももこおは何を見ているのであろう。青い空には雲が泳いでいるだけである。

もこおは口を開けて髪を揺らしながら歩く。髪を一本にまとめているのはぼにーと聞いたことがある。それに両手をもんぺのぼけつとに入れてあるくのはぶりようかもしれぬ。そんなもこおに吾輩は「なあご」とどこに行くのか聞いてみるのである。

「……………」

返事はない。吾輩は仕方なくもこおと同じ姿勢で、空を見上げながら歩いてみる。

どこに行くのかはわからぬ。もこおが歩いている方向に吾輩はついて行っているだけなのである。

「あんたは」

突然もこおが聞いてきたのである。吾輩は紳士である。折り目正しく答えねばならぬ。しかし、折り目とは何であろうか。

「さつきからどこにいらしているの？」

もこおよ、吾輩は付いてきているだけのはずだったのであるが、もこおはもこおで吾輩に付いてきているつもりであったのかもしれぬ。目的地などもとからありはしなかったのではないだろうか。これは由々しきことかもしれぬ。

「まあいいや」

まあいいのである。

吾輩には今日は何も用事はないのである。強いていうなら、ぱちえに負けぬために勉強をする程度のことなのであるが。

そうであった！ 吾輩昨日はかたいけついでぱちえに負けぬために勉強をするつもりであったのだ。それをすっかりとわすれ……いや、忙しさにかまけて後回しにしてしまったのである。

こうはしておれぬ。吾輩は急ぎ足で人里に行かねばならぬ。寺子屋に行つて今度こそ人とこみゆにけーしよんを取るのだ。

「なんか、いそぎでした」

もこおはぼけつとから手を出さずに走つてついてくるのである。吾輩の健脚についてこれるとはなかなかやるのである。吾輩はちゃんともこおが置いてけぼりになつて泣かぬように手加減ならぬ足加減をしながら走るのである。

★

「おまえ、自分で走れ……」

もこおは息を切らせて吾輩にいうのである。

すまぬもこおよ、意外に人里が遠くて吾輩途中で疲れたのである。もこおは吾輩をだつこしてここまで走ってきたのである。言葉は通じぬ。それでも方向でなんとなくわかつてくれたのかもしれない。

「それにしても……」

もこおと立派な門の前に立つ。中では子供の声があるではないか、吾輩はもこおにやあ、とお礼をしつかりと言って下に降りる。寺子屋の前はいつも掃き清められているのである。

「うらめしやああく!!」

ふゆあぎやあ。

吾輩、突然飛び出してきた不審者に驚いてしまったのである。急いでもこおの足元に逃げ、いやせんりやくてきなてつたいをするのだ。

しかも見れば飛び出してきたのは、蒼い髪をした少女である。なんだ、恐るるにたらぬ。少女は手に持ったナスビ色で口と舌の飾りのついた傘をばらつと、開いてくすりとしているのである。

「なんだ、ネコか……。貴女は驚いてくれた?」

貴女とはもこおのことであろう。もこおは表情を変えることなく、ぼけつとに手を入れたまま答えるのである。

「……わあ。おどろいた」

傘を持った少女が「そ、そう」といいながらしよんぼりしたのである。

わがはいはかさをあるくのである

吾輩、今日は寺子屋で勉強しに来たのである。それというのに、門の前に隠れていた傘の少女に驚かされてしまったのは不覚というしかないのである。吾輩はもこおの足元から伺い見てみるのだ。

「へへー。ここなら人間の子供達がいっぱい集まるからまちぶせしていたのよ。出てきたり、入って来る時にうらめしやーって驚かすのよ」

少女は傘をさしてくると回っているのである。足には赤い下駄を履いている。うむそういうえば吾輩は下駄を履いたことはないのである。

「へー」

もこおの気の抜けた声を聞きながら、吾輩は傘の少女を見るのだ。

それにしてもこの少女は不思議な目の色をしているのである、片目が赤で、片目が青いのである。

片目だけ充血しているのではないであろうか？

吾輩も巫女に眼が赤い時には心配されたものである。吾輩は紳士であるから、傘の少女に近づいてうでできるだけ、吾輩が心配していることを伝えるように「にやー」と声を

出してみるのである。

足もとに寄ってみれば下駄を裸足で履いている。体の調子が悪い時には温かくしなければならぬ。吾輩は体を擦りつけてみるのである。

すると傘の少女は膝を抱えて屈み、吾輩の顎のあたりをさすり始めたのである。

「この猫は私に驚かされて懐いたみたいね」

鼻を鳴らしながら吾輩の気持ちに全く伝わっていないことが分かったのである。どことなく「ふと」と同じ感じがするのは気のせいであろうか。少女は傘を首で支えて、吾輩を両手で持ち上げたのである。

吾輩と目と目が合うのだ。やはり眼が赤い。医者に行つた方がよいかもしれぬ。

「私は多々良小傘よ。これ以上驚かさなから、だいじょうぶ、だいじょうぶ」

小傘というのであるか。

「べー」

小傘はいきなり。にやけた顔で吾輩に舌を出してきたのである。吾輩、不覚にもびくつとしてしまったのである。反対に小傘はさらに顔をほころばせているのである。

「うーん。やつぱり驚かせるっていいなあ。……このごろお腹が減つてるのよ」

こんどはいきなり暗い顔で空腹と言い出した。忙しいやつである。

それにころころと表情が変わるものであるな。お腹が減つているのであれば、何か食

べ物を上げたいところであるが、吾輩は何も持つてはおらぬ。だからもこおを見たのだ。

もこおを見たのであるが、どうみても何も持つてはおらぬ。よく見れば服もぼろぼろであるな。

「それで人間を驚かせているの？ あんまり目立つと紅白の巫女に退治されるんじゃない？」

「そうなんですよー。ひもじいのにあんまり頑張るとすつ飛んでくるし……。この前は針を作り直してからコテンパンにされたし……。うーん。あのぼうりよくみこー」

「どこかにいるかも？」

「うそです。……こわいこと言わないで……」

小傘よ。

いくら巫女であるからと言ってお腹が減っているから攻撃してくるなどはせぬであろう。あ、いや。吾輩も「さいせんぼこ」に乗っているだけで箒をぶつけられそうになったことがあるのである。やりかねぬ。

「とりあえず今日は猫しか驚かせてないけど、あとでいっぱい人間を驚かせるのよ」

小傘よ。それよりも先に眼の医者に行くべきである。そう思って吾輩は小傘に前足を伸ばした。

「あの、ふえ。ちよつと」

ほつぺたが柔らかいのである。ちよつと噛んでもよいのであろうか、いやいや何でもないのである。小傘が吾輩の前足から逃げようと顔を振る。いかぬ。爪が当たるではないか、吾輩前足を下げてからもう一度、伸ばすのである。

「へふつ」

すまぬ。パンチしてしまった。わざとではないのである。小傘はのけぞってしまった。

誤解しないでほしいのである。吾輩は心から小傘の健康を気遣っているのだ。

しかし、のけぞりから体勢を立て直した小傘は鋭く吾輩を見てきた。眼をらんらんと光らせているのである。それにしてもららんらんとは、楽し気な響きであるな、人のひょうげんとは妙な物である。

「このいたずら猫。私の恐ろしさを見せてあげるわ!」

小傘は傘を畳んで、片手で吾輩を抱えたまま、寺子屋の前の大通りに走り出したのである。もこおよ、なんとか説得してほしいのである。そんなにゆつくり付いてくると間に合わぬ。ぽけつとから手を出して追ってほしいのである。小傘の下駄のからんからんという音の方が速いのである。

「よーし」

小傘は吾輩に自分の傘をあてがったのである。それをばつと開かれると、吾輩の前に大きな目玉が開かせて、なすびのようなそれに押し上げられたのである。おおう、空にあげられていくような感覚。

小傘が大きく開いた傘の上に吾輩は載っているのである。見れば地上はかなり下、見物客も周りから集まってきているではないか。

「どうだ、まいったか。高くて怖くて、おどろけー」

いや、吾輩この程度の高さでは驚かぬ。

一度、雲の上まで行った事があるのである。それにこの程度なら神社の屋根の上の方が高いのである。だが、しかしちよつと足場が不安定であるな。吾輩はとてとて傘の上で歩いてみるのである。

——おおー

うむ？ 下の方から歓声が聞こえるのである。周りには小さな人ばかりがあるではないか。

「わ、わ。ちよつと、あんまりうごかないでよー」

小傘が何か言っているのであるが、吾輩の足が止まらぬ。傘が動いているのに合わせで動かなければ落ちてしまうのではないか。小傘が傘をもう少し早く回してくれなければ、歩きにくいのである。

——いいぞー

——がんばれー

——ねこまわしだー

何であろうか、下が騒がしいのである。

「お、おもしろー」

いや、小傘よ。自分で吾輩を上げたのであろう。吾輩は不可抗力というやつである。それにしてもこの傘、妙な目の模様と舌であろうか、変な飾りが邪魔であるな。吾輩はその「舌」を踏みつけて、転びそうになる。邪魔である。噛んでみるのである。

赤くてなんだか湿ったそれを、吾輩はがぶりと噛んでみる。すると、いきなり傘が上に押し上げられて、吾輩は傘の上でジャンプしてしまったのである。

「痛ったああ!!」

小傘の悲鳴が聞こえるのである。何故いたがるかわからぬ。しかし、傘がぐらぐら揺れて、落とされぬように吾輩は傘の上で走るのである。にやあ。傾いてきたのである。下から「危ない」と聞こえてくる。

吾輩、宙を飛んだ。くるりくるりと回転してみながら、何故か痛がつている小傘の前ですとんと着地してみるのだ！ 着地するときには胸を張らねばならぬ。吾輩はこだわりがあるのだ。

意外と大勢集まっているのである。皆が吾輩を見ているのである。

「舌噛まれだあ」

小傘よ、吾輩は傘しか噛んではおらぬ。それに――

ぱちぱちぱちぱちぱち!!

吾輩びくつと驚いてしまったのである。いきなり周りの人が拍手をしてきたのである。もこおもちよつと見開いて拍手をしているではないか。おどろいた、などすごいなどと吾輩を褒めるのである。やめるのである。

照れるではないか。

「ええ? 驚いてくれたの?」

小傘も何故か笑顔になつているのである。よくわからぬが小傘は人を驚かせるのが好きなようである。吾輩が少しでも手伝えたなら、良しとするのである。それにしても拍手が続くのである。

小傘も頭を掻きながら照れているのである。

何はともあれ、終わりよければすべてよいのである。

「い、こんな驚いてくれたの初めて」

吾輩を抱えて小傘が言う。だが、小傘はもう一つ付け加えたのである。

「……で、でもこれ何か違う気がする……」

何が違うのであろう。吾輩にはとんと分からぬ。

あのねこはいいやつなのである

「よいしょっ」

大きな傘の上で吾輩は歩くのである。この紫の傘も見慣れてくるとおつなものであるな。

ついつい吾輩も見物している人間達が驚きの声を上げるともう一度やってあげたくなるのだ。小傘も歓声上がるたびににこにこしているのである。

ぱちぱちぱち、わーわーわー。

寺子屋から出てきた人の子供達が笑っているのである。吾輩も嬉しくなってくるのだ。

笑う門にはふくきたるといのである。それにしてもふく、とは誰であろうか。名前からして「ふと」の親戚かも知れぬな。

そんなことで吾輩は小傘のまわす傘に乗って歩き続けたのである。

道端で小傘と一緒に歩く練習をしていたら、もう遠くで鴉が鳴いているのである。いつも思うのであるが、遊んでいると時間は早く過ぎていくのはなんでであろう。もしかしたら時間も吾輩と一緒に遊んでいるかもしれない。

「あーつかれたー」

小傘が吾輩を下ろして、言うのである。見ていてくれた人も帰って行ったから、道には吾輩たちしかおらぬ。もこおはどこに行ったのであろう。

そういわれると吾輩も疲れたのである。もうかれこれ、どれだけ歩いたかわからぬ。小傘がよろけるたびに飛び降りたりしたから、吾輩肉球が疲れたのである。そんな吾輩の両前足を小傘が手に取ったのである。

ふにふにと吾輩を肉球を揉んで来るのである。いい感じである。

「今日は久しぶりにいっぱい人を驚かせたわ！……やっぱりなにか違う気がするけど、でもやればわたし……わちきにもできるのねっ！」

ほっぺたを膨らませて小傘が吾輩を見るのである。ううむ、やはり柔らかそうであるな。それにしても、人を驚かせるのが好きとはなんだか妙な趣味であるな。そう言えば吾輩には趣味を持たぬ。そろそろ何か考えなければならぬかもしれない。

ふと横をみるのだ。おお、お天道様が吾輩にさよならをしているのである。

お天道様は山の間で沈んでいく時が一番きらきらしているのである。吾輩と小傘は並んでみているのである。吾輩の眼に映る景色がオレンジ色の変わって行く夕方は、なんとなく好きである。

「ふふふ。今からは夜、おばけの時間よ」

小傘が何か言っているのであるが、吾輩にはほとんど意味が分からぬ。

それから小傘は吾輩を抱き寄せて、ぐりぐりと顔を吾輩のお腹に当てるのである。

「ふかふか」

吾輩は毛並みのケアは怠らぬのである。それによく吾輩行きつけの山の中で風呂にもはいる。吾輩は綺麗好きなのである。それにしても小傘は、あれであるな、吾輩からみてもだ——

ちゅっ。

吾輩の額に小傘が顔を寄せているのである。ちよつと吾輩の額が濡れた気がするのである。

小傘は吾輩を下ろしてから「それじゃあね、ねこさん」というのだ。吾輩もちやんと挨拶をする。

「うーん。猫の挨拶はわからないけど……にゃーお」

吾輩の真似をしてから、小傘は片目をつぶってから舌を出しているのである。なんだかわからぬが、笑いながらであるからよいのである。

小傘の背にした夕日がまぶしいのである。

小傘は傘をくるりと回してから夕陽の方へからからか下駄を鳴らして帰っていくのだ。曲がり角でひらひら手を振っているのは、人間の挨拶であろう。別れるときは少し

寂しいのはなんでであろう。

影が小傘から吾輩に伸びているのだ。

小傘も、影も手を振っているのである。影はまだ、帰りたくないのであろうか？

それでも吾輩も頑張つて手を振るのである。こう、前足を上げて。こう……、吾輩はこけた。

★

寺子屋にやつと入ることができた。吾輩、ここまで来るのは長かったのである。

ううむ、玄関は閉まっているのだ。吾輩の前足では開けるのは難しいと思わざるをえぬ。吾輩は仕方なく庭の方へ回つてみるのだ。

それにしても吾輩は、人の見方を一つわかつているのである。

庭が歩きやすいように掃除しているものに悪い者はおらぬ。この寺子屋も何度来ても、小石も落ち葉もあまりないのである。

「今日は外がにぎやかだったな」

声が聞こえるのである。この声はけーねであろう。よく吾輩にいろんなものをくれるのである。

「寺子屋の前でまさか唐傘お化けが大道芸をしているなんて思いもしなかったけど、妹紅がああ猫を連れてきたの？ いつも私に会いに来てくれる猫だよ」

相手はもこおであるな。吾輩はけーね達がどこにいるのかきよろきよると探してみるのだ。

だんだんと周りが暗くなつていくのである。そうすると、ぼんやりと明るい部屋があるのが外からもわかつてくる。吾輩はそちらに歩いていくのだ。走る必要はないのである。

「連れてきたのは私だけど……なんだ、慧音の知り合いだった？」

「……ふふ。そう、猫の知り合い」

吾輩のことを話しているようであるな。吾輩は縁側に前足を変えて「みゃー」と鳴いてみるのである。そこにはいつの間にかいなくなつていたもこおと、青い髪の毛をしたけーねがいたのである。

「おや、噂をすればだな」

けーねが立ち上がって吾輩に近づいてきたのである。いつものを頼むのである。けーねは縁側に置いてあつた水の入つた盥とそこから手拭いを出して、吾輩の足を拭いてくれるのだ。

「お前は外の世界で言う紳士だからな。ちゃんと足を拭かないとだめだぞ」

けーねよ、それは吾輩が来るたびに言っているのである。ちゃんと吾輩はけーねの言う通りいつも「紳士」であろうとしているから、心配しなくてもいいのである。

「よし」

みゃー。

お礼も吾輩は忘れぬ。

けーねの部屋にあがつていく。うむ、ここの畳を吾輩好きである。巫女のところでもこの前寝転がったのであるが、こう、畳の匂いが吾輩はたまらなく好きである。そうは思わぬか、もこお。

「おまえ。慧音の知り合いだったとはねえ」

もこおが吾輩の顎を撫でるのである。ごろごろ。

ごろごろ。

いかぬ。吾輩は今日こそばちえに勝つために勉強をしに来たのである。もこおにかまっている暇はないのである。吾輩は顎撫での誘惑を力強く振り払ったのだ。

「なんだ、お腹がいいのか」

もこおが今度は吾輩を掴んで腹を撫でてくるのだ。

「そらそら」

ええい、もこおよ。そう吾輩にかまうではない。けーねも吾輩を助けてほしいのである。そう思つて吾輩はけーねに助けてほしいような目で見るのだ。

「楽しそうだな」

けーねも吾輩を見ながらうつつすら笑っているのである。いや、楽しそうだななどと言つてほしいわけではないのである。吾輩は勉強を試みなものどこみゆにけーしよんを取らねばならぬ。吾輩はもこおの指をパンチして跳ねのけるのである。

「おお」

悪く思うなもこお。吾輩はすーこうな思いでここに來たのである。吾輩はすくつと体を起こして、油断なくあたりを見回すのである。けーねの前に机があるのだ。そこに書物が置いてあるではないか。

吾輩、一目散にそこに駆け寄るのである。机の上に載つて広げられた書物を見るのである。おお、これはカンジがいっぱい並んでいるのである。吾輩は字に肉球をあてて、読んでみるのだ。吾輩は熱心に書物を読みふけるのだ！

「こちら、その本は逆向きに置いてあるんだ。読めるのか？」

……………けーねよ、それは先に言うのである。

けーねが吾輩を抱きかかえるのである。

「さて、今日はなんの話をしようか。猫さん」

はあ、今日もけーねの話を聞いてやらねばならぬのである。いつも長いのである。それでもけーねの話をいつも聞いていて、吾輩は、

吾輩

つ
で
あ
る。
と
い
う
響
き
が
大
好
き
に
な
っ
た
の
だ。
け
ー
ね
の
話
し
て
く
れ
た
そ
ー
せ
き
の
ね
こ
は
い
い
や

しんじつはいつもひとつ

はんにんは吾輩ではない。

いい天気だったので吾輩はいつも通り、神社に来てみたのである。しかし、巫女が庭のどこにも居らぬ、にやおと挨拶しても返事もない。

吾輩は巫女がおらぬので仕方がないと諦めて、賽銭箱の近くに寄りかかって眠っていたのである。日差しがたいそう気持ちのいい日であるから、眠った時のことを覚えておらぬ。

そして吾輩が起きたら、いきなり目の前に怒った巫女がいたのだ。吾輩には訳が分からぬ。

「あんた、私のお饅頭食べたでしょ？」

巫女よ吾輩のほつぺたを両側に引っ張るのはやめてほしいのである。

とりあえず、吾輩はお饅頭を食べたことがないのである。甘いと聞くそれを、いつかは食べてみたいものであるが、吾輩は紳士であるからして盗もうとは思わぬ。

「白状しなさい！」

どう言われても吾輩にはとんと分からぬ。吾輩は無実である。べんごしを呼ぶの

である。吾輩は何かけんかがあると仲直りさせにべんごしとやらが来ると聞いたことがあるのである。それにしてもべんごしとはいいいやつである。

「……うー。ああもう。猫相手に言っただって仕方ないか」

吾輩を巫女がやつと離してくれたのである。

巫女はその場でうんうん唸っているのだ。それにしても心外なことである。吾輩はただ寝ていただけなのである。悪いことは一切しておらぬ。

「それに、こいつの口元に何もついていないし。勢いでいったけどこいつか魔理沙しかないし」

ちらりと吾輩を疑いの目で巫女が見てくるのである。

しかし、巫女自身の言うとおりである。吾輩は巫女の前で口の周りを舌で嘗めてみるのである。もしも吾輩がねぼけて饅頭を食べていたのであれば、口元が甘いかもしれぬ！ ……ちよつとそれはいいかもしれぬと吾輩は思うのである。

「あーもう。まだ饅頭はあるからあきらめるしかないか……」

巫女がとぼとぼと背中を見せて歩いていくのである。

ううむ、吾輩が犯人という誤解が解けたのか、解けておらぬのかわからぬ。もやもやするのである。

★

吾輩はもやもやしたから、神社の境内を歩き回ったのである。相変わらず人があまりおらぬから、気兼ねなく散歩できる。それに巫女も掃除をちゃんとしていることを吾輩は木の陰からしつかりと見ているのである。

吾輩は知っている。安心するがいいのである。

吾輩はひとしきり神社を一周したから、また巫女の所に戻ってきたのである。うらむ。縁側で書物を広げているのである。傍に小さなお盆があるではないか、その上に栗色の何かが置いてあるのである。

吾輩は気になって寄ってみるのである。

「そこで止まりなさい」

だんつ、と巫女がその場で立ち上がって。吾輩を止めたのだ。

「あんたの疑いが解けたわけじゃないから。それ以上近寄るんじゃないわよ？」

むむむ。吾輩は饅頭など食べていないのである。こう、どこかに吾輩の気持ちを代弁してくれる者はおらぬであろうか、もしくは吾輩が喋ることができればこみゆにけしよんがとれるのであるが……

巫女は警戒しながら座り込んで書物を読み始めたのである。仕方ないのである。吾輩もその場でまるくなっておくのである。

それにしてもいい天気であるな。最近雨も降らぬ。

吾輩はうとうとしてきたのである。ああ、寝る少し前が一番気持ちいいのである。

うむ？

なんかへんな物が見えるのである。

書物を読んでいる巫女の後ろに変なスキマがあるのである。吾輩、眼をぱちぱちさせてから起き上がってみる。

なんであろうか、空中に何故スキマが空いているのであろう。どうやら巫女は気が付いていないようであるが……にや、スキマが開いたら目みたいになったのである。紫色の眼が空中に浮いているのである。不気味で吾輩はびっくりしたのである。眼の中に眼がいつぱいあるのである。

おお、そこから白い手袋をした手が伸びてきたのである。

その手がお盆に乗っているおまんじゅうを摘まんでスキマの中に持って行ったのである。巫女は気が付いておらぬ。

吾輩。この目で犯人を見たのである！

巫女よ、吾輩の話聞いてほしいのである。

「あ？なににやあにやあ鳴いているのよ。今いいところなんだから」

書物に夢中になっている巫女の後ろでまた、白い手が伸びてきたのだ。そうはさせぬ。吾輩はだつとその場を蹴り、縁側に乗ったのだ。

白い手にパンチをお見舞いしたのである。

驚いた白い手が紫色の眼に帰っていく。

吾輩の勝利である！ おそるるにたらぬ。

「あんた、もう！ おまんじゅうはあげないっていったでしょ」

ううむ吾輩の両脇を持って巫女が持ち上げてくるのである。吾輩の活躍を伝えられぬのはもどかしいところであるな。

巫女はそのまま吾輩を地面に下ろしたのである。

……まあよいのである、吾輩は謎のどろぼうを撃退したのだ。これで巫女もへいわにおまんじゅうを摘まむことができるであろう。吾輩はそう思って、その場でまた丸くなったのである。

ふと、影がかかったのである。吾輩がいぶかしく思って起き上がってみると、傘を持ったおなごが吾輩をにこにここと見ろしているのである。いつの間に来たであろうか、金髪をしたそのおなごは、日傘をさしているのだ。

なるほど、それで吾輩に影がかかったのであるな。

「げ、ゆかり」

巫女が何か言っているのである。どうやらこのおなごはゆかりというらしいのである。

ゆかりは吾輩の頭を撫でてくるのである。何だか変に手のひらが柔らかいのは何であらう。

「こんにちは、霊夢。最近猫を飼い始めたのね」

「いや、そいつ野良よ
な〜」。

何だか気持ちよくなってきたのである。吾輩は丸くなつたまま、頭を撫でられるのはなかなか好きである。このゆかりという者もやるのである。

「野良ねえ。でもこの子はただの野良じゃないわ
「どういふことよ、ゆかり」

「幻想郷の賢者だつて撃退したこともあるのよ？」

おお、気もちいいのである。うにやうにや。

「そんな嘘を信じるわけないでしょ」

「あら、霊夢も助けられたのに……恩知らずね」

「わけわかんないわ」

ゆかりの手が離れていくのに吾輩はふと寂しくなつて立ち上がったのである。耳が勝手にびくびく動くのである。吾輩は歩いていくゆかりの足元をなんとなくついていくのである。

ゆかりと巫女が並んで縁側に座ったのである。吾輩も昇ろうと思ったのであるが、スキマがないのである。そう思っているゆかりが自分の膝のあたりをぼんぼんとしたのである。吾輩はにやあと一礼してから、上るのである。

おお、中々に寝心地がよい膝である。しかもゆかりがまだ撫でてくれるではないか。

「どうみても、普通の猫ね」

巫女の声があるのである。巫女よ、吾輩はそこらの猫と一緒にしてもらっては困るのである。さつきもちちゃんと泥棒を退治したのである。

「この栗饅頭を食べようとしたのよ」

だから巫女よ、吾輩はそんなことしておらぬ。何か言つてやるのだゆかりよ。

「霊夢……貴女はまだまだ修行がたらないようね。真犯人は他にいるわ」

「じゃあ、だ、だれよ」

「ふ、ふ、ふ、ふ」

ゆかりが笑いながら吾輩を撫でてくるのである。ゆかりは右手に吾輩をそして左手に栗饅頭を手にして、ぱくりと食べたのである。

「お茶はあるかしら？　　霊夢」

「……はいはい」

巫女が歩いていくのである。吾輩が見上げると栗饅頭をおいしそうに食べている

かりがいたのである。吾輩もちよつとほしいのである。だから、のっそり起き上がって
ゆかりの肩に手を掛けながら口元についた欠片を食べてみたのである。
うまいのである!!

じゆうきままにいきるのである

吾輩は今日がご機嫌なのである。昨日は巫女にあらぬ疑いを掛けられたのであるが、ゆかりの膝でよく眠れたのである。

吾輩はどんなことでも一度眠ればよい思い出になるのである。

それに今日は一つ楽しみがあるのである。この幻想郷は吾輩の庭のようなものであるからして、どこに行けばまたたびをよく取れるかを吾輩以上に知っている者はおらぬ。

気が向いたから、吾輩は森の中に入ってまたたびを楽しみに行くのである。

吾輩は草むらを抜けて、剥き出しになった木の根っこを飛び跳ねながら進むのだ。

またたびはたまには巫女にも分けてやらねばならぬと思いつつも、吾輩がまたたびを啜えて持つていくわけにはいかぬ。途中で転んでしまうのだ。仕方ないであろう。良い気持ちになつてしまうのだ。

それでも吾輩は反省している。これではいかぬとおもいつつも、まだ吾輩にはほとんど妙案が浮かばぬ。

巫女にまたたびをやったことはないのであるが、おそらく好きであろう。いや、嫌い

な物がおるのであろうか。吾輩はその場で考え込んでみたのである。

みんなまたたびは好きであらう。うむ。

ちやんとけつろんをだしてから、吾輩は前に進むのである。それにしても今日もきょうとてよい日である。

温かい日はいつもよいである。いや、雨の日もよい日であるし雪の日は……よい日である。しかし、雷はいかぬ。あのぼこんという音が吾輩は苦手である。偶には手加減してくれも罰は当たらぬと思つているのである。

そういえば、昨日神社から帰る途中に妙な猫と会つたのである。

頭に緑色の帽子を被つた、黒猫であつた。片耳にイヤリングをしているお洒落な猫である。

お月様もちよつとだけ顔をだした日であつたから、顔はよく覚えておらぬ。ただ、尻尾が二股に分かれていたのである。吾輩は痛くないであらうかと氣遣つたのであるが、大丈夫とのことであつた。

吾輩それで安心してから、みやあとちやんと挨拶をしてそばを抜けていこうとしたのである。ただその猫は吾輩に妙なことを言つてきたのである。

遠くの山の奥に猫の楽園があるというのである。

そこでは「ちえん」なるぼすがいて、食べ物もまたたびもいっぱいくれるというでは

ないか。その猫が言うには「ちえん」は猫たちに慕われているというのであるが、今なら楽園に迎えてくれるというのである。むしろ「ちえん」に従うならゆうぐうしてくれるというのである。

吾輩は興味ないのである。

その二股尻尾の猫には悪いのであるが吾輩は自由気ままに生きていきたいのである。それに楽園などに行かなくとも、吾輩は神社やら寺やら人里やらに出入りしているのである。

中々に毎日が楽しいのである。

そういつて断るとその猫は、それでも楽しいことはいっぱいあるのだとにやあにやあいうから、吾輩も悪い気が深まってしまったのだ。

せんざいもつけるというのであるが、なんのことかわからぬ。

こんなに熱心に誘ってくれても吾輩は応えることが出来ぬ。そこで吾輩はその猫に「またたびのいっぱい取れる場所」をこっそり教えてあげたのである。

その猫は眼をぱちくりさせから喜んでいたのである。

★

あの猫は元気であろうか、ぜんいで吾輩を楽園に誘ってくれたのであろうから、吾輩もついつい秘密の場所を教えてしまったのである。

まあ、吾輩もまたたびを独り占めはできぬ。ちゃんと教えてあげることが紳士なのである。

おお、そろそろ秘密の場所につくはずである。吾輩は背の高い草を押しつけながら、途中で休みつつ、毛づくろいしつつ迅速に行動をするのである。

開けた場所に出たのである。このあたりはまたたびがいっぱい取れるのである。

木になっているまたたびは、吾輩が空を見上げればいっぱい……

ないのである。

なぜであろうか、吾輩にはわからぬ。あたりを走り回ってみても全くないのである。かりかり。

はっ、気が動転して木で爪とぎをしていたのである。こんなことをしている場合にはない。

吾輩はその場でぐるぐる回りながら、なんでまたたびが一つもないのかを考えているのである。もう一度上を見ると、またたびのなっている木の枝に葉っぱもかなりむしられているのである。

うーむ。これはいかぬ。どろぼうである。

二日連続でどろぼうと会うとは思わなかったのである。

吾輩はだれが犯人かを考えながら、その場でぐるぐるぐると回ってみるのである。す

ると視界の端っこに黒い影が見えるではないか！

吾輩はすぐさまそれを追っていくのである。その場をくるくる回つても追いつけぬ。中々逃げ足の速いやつである。犯人に違いあるまい！！

かぶり、吾輩はかみついた。はみはみするのである。まいったか！

……これは吾輩の尻尾ではないか。ぐるぐる回つていて気が付かなかつたのである。

吾輩は恥ずかしくてあたりを見回してみるのである。背筋を伸ばして、首を回してみるのだ。すると近くの茂みがかざりと動いたのである。吾輩はそれに素早く反応したのである。

しつぷうのように茂みに突撃する吾輩。がざりと入り込むと、がつんと頭に何かがあったのである。

「わ、わっ、いたあ」

どしん、ばたん。ぐちゃ。何か音がしたのである。

見ればひとりの少女がうつ伏せで倒れているのである。あたりに葉っぱが舞い散っている。これはまたたびの葉っぱではないか。

少女は赤い服を来て、お尻から二股の尻尾の飾りを付けている、ううむこの程度の変装で猫に成りすます気であるな。それに胸元でつぶれているのはまたたびの実である。胸でつぶしたのか、あたりに匂いがするのである。

うにやあ。

は、いかぬ。木をしつかり持つのだ吾輩。いや木の枝を何故嘯んでいるのだ吾輩。氣をしつかりもつのだ。

吾輩は少女のお尻から背中の上りにやあと抗議するのである。茶色の髪をパンチしてみるのである。頭に被っている帽子は昨日の猫と同じようなものであるな。

ともかく観念するのである。

「……にやあん、ごころにやああん」

少女は赤い顔でごろごろもぞしながら、何か唸っているのである。……またたびを潰したときに酔ったのではないであろうか。

「うにやあ」

「ごころごころ」

なんであろうか。もはや話が通じぬくらいにまたたびに酔っているのである。

吾輩が一度パンチしても、意味がないのである。しつかりするのである。吾輩はこの少女の気付けに舐めてみるのである。

「……ー……」

なんだかびくびく痙攣するだけで変わらぬ。

「……ぐす、ぐす」

な、なんで泣くのであるか。どこか痛いのであるか、吾輩心配なのである！

吾輩は降りて少女の顔をのぞきに行つたのである。頭におおきな耳があるのである。それよりも大粒の涙を流すのはなぜであろうか。

にやあご。

吾輩は聞いてみるのであるが、通じぬ。少女は誰に言うでもなくぼそぼそなにかを言っているのだ。

「いふこと……きいてよ、もうまたたび……ないけど」

何を言っているのだろうか。と吾輩は思ったときに思い出したのである。昨日の猫の言葉を。

もしかしてこやつ「ちえん」ではないであろうか。

楽園のまたたびやご飯を一人で用意しているというのであるから、それはそれは毎日大変なのであろう。

「らんしやまあ」

うなされておるのである。きつと「らんしやま」は楽園の猫の一匹であろう。

うむ、わかつたのである。……吾輩は寛大な心で全てを許すのである。またたびを持つていくがよいのである。

そう思って、吾輩はおそらく「ちえん」の少女に肉球を当ててみるのである。

「がぶっ」

噛まれたのである！

おてんとうさまのしたは、ひろいのである

吾輩が数日ぶりに神社に顔を出してみると、なにやら何かを広場で作っているのである。

それはまるで塔のようであるな。周りには青い服を着た女子が力仕事をしているのである。おそらく何かの妖怪であろう。大きな木造の塔に紅白のめでたい垂れ幕を付けているようである。

まあ、吾輩には関係ないのである。

いつも通り、良さげな場所を探して日に当たりながら丸くなるのである。うむ、このあたりが良い感じに草が生えている。ここにするのである。

吾輩はそこで丸くなった。だが、怠けているのではない。吾輩はとても忙しいのである。

前足を嘗めて毛並みをしっかり整えなければならぬ。

ううむ、それにしても顎のあたりがかゆいから後ろ足で掻くととてもいい気持になるのだ。おお、おお。

『よーし。それはそこにやってー』

青い服を着て、青い髪をした少女は他の者たちに指示をしているのである。吾輩はそれを内心応援しつつも、眠くなってきたのである。それにしても平和そのものであるな。

そう思つて吾輩は後ろをぐるりと向いて視るのだ。特に意味などはない。

「……………」

そこに一人、歩く途中で固まった様な少女がいるのである。

なんだか桃のような髪の色をした少女である。吾輩のするどい視線を受けてもびくりとも表情を変えぬのだ。こやつ、やるのかもしれない。

まあ、いいのである。吾輩は一旦神社の方をちらりと見て、もう一度後ろを見たのである。

「……………」

なんか近づいてきているのである。それにしても表情が全く変わらぬ。頭に狐のお面をかぶっているのであるが、それ以外は普通の、いやよく見たらあまり吾輩も見ぬような服装である。

穴ぼこだらけのスカートを穿いているのである……貧しいのであろうか。吾輩は少し心配なのである。ちよつと自分でも心配性かもしれないとこの頃思っているのだ。そう思つて少し眼を閉じてしまったのだ。

吾輩はつとしてすぐに少女を見たのである。

近いのである。しゃがんで地面に手をつけてしまっているのだ。その無表情な顔がすぐ目の前にあるのである。

「……………かんねんしろ」

いきなり言われても困るのである。いったい何がしたいのであろう。

少女は吾輩に手を差し伸べてきたのである。吾輩の前で手のひらを広げているのだ。吾輩も意味が分からずに少女をみると、全く表情が変わっておらぬ。しかし、心なしか眼がきらきらしているような気がするのである。

わけがわからぬ。吾輩はとりあえず手を嘗めてみるのだ。

すると少女は自分の掌をじつと見つめて首を振るではないか。

「ちがう。……………そうじゃない」

いや、わからぬ。

少女がまた吾輩に手を差し伸べてきたのである。今度ばかりは流石の吾輩にもわからぬ。だからちよつと首を傾げて少女をみると、手を差し伸べたまま少女も首を傾げているのである。……………吾輩と一緒に動きをしてどうするのであろう、説明してほしいのである。

『そっまでだ面霊気よ！』

吾輩たちが悩んでいるとどこからか聞き覚えのある声が聞こえてきたのである。

吾輩はそちらをむくと神社の軒下からずりずりと烏帽子をかぶった少女がはい出てくるではないか。うむ、ふとであるな。なんで軒下にいたのであろうか、もしや住んでいるやもしれぬ。

足を広げてから右手をちよつとあげ、さらに左手を吾輩たちに突き出してくるのである。妙なポーズであるな。

「でたな、ようかいのきしたやろう」

無表情の少女がなにか言っているのである。それにふとが怒った。

「わ、我のどこが妖怪だ！ これは深いわけがあつてのことだ」

「……ふつう軒下にもぐらないと思ふけど」

「そうなのよねー。いや、我も太子の命で神社の下にいたのだが、さびしくつて。あ、いやなんでもない」

無表情の少女とふとは知り合いのようであるな。吾輩はさつきから一步も動いてはおらぬが、なんだかあつちを向いたりこつちを向いたり忙しいのである。

「よいか、面霊気よ。この猫は我を慕っているのだ」

慕つてはおらぬ。

「おおー」

少女よ、騙されるでない、と言いたいところであるがまあいいのである。なんだか楽しそうであれば吾輩とやかくいわぬ。

ふとは吾輩の前に両膝をちやんとつけて座って、吾輩に手を差し伸べてきたのである。

「お手」

ふふんと鼻を鳴らしながら吾輩にふとは言つたのである。

なるほど、吾輩に人里で飼われている犬のようなことをさせるつもりであるな。吾輩はそれはできぬ。他を当たつてほしいのである。できれば犬辺りがいいのではないであらうか。

「……ほれほれ」

手のひらをひらひらさせても吾輩はせぬ。ふとよ……いや、そんな不安そうな顔になつて行かれると困るのである。吾輩もぷらいどはあるからして、できぬものはできぬ。

横を見ると無表情の少女がふとをじつと見つめているのである。ふとは汗を掻き始めている。

「……できない?」

「い、いや。こ、これは我もまだ教えていなかったからな。ほら猫よ。手を出すのだ」

なんだか可哀想になってきたのである。吾輩されるがままである。

「よいか、猫よ。お手とは手のひらをこう広げて」

といいつつ、吾輩の前足をふとが持つて肉球を上に向けたのである。それからふとが自分の右手を肉球の上からゆっくりと下ろしてきたのだ。

「よいか、こうするのだ！」

吾輩の前足の肉球にふとが手を乗っけているのである。

自信満々な顔をしているふとを吾輩はどうすればいいのかわからぬ。悩まし気に横の無表情の少女を見れば、吾輩から眼をそらしてくるのである。どうしようもできぬ。

「……………」

ああ、いい風が今日は流れているのである。こんな中お昼寝をすれば気持ちがいいであらう。

「こ、これではまるで我が猫にお手をしているみたいではないかっ！」

……吾輩に言われても困る。勝手にやってきたのである。ふとは吾輩の両前足を持つて振るのであるが、これが握手というやつであらうか。

「我は………なんで、猫に怒っているのか」

きつと疲れているのであらう。吾輩はうにやあとその場で鳴いて、ぐるぐると回つてから横になるのである。ふとをちらりちらりと見てみるのだ。

吾輩はこみゆにけーしよんは難しいが伝わってくれると嬉しいのである。吾輩の思っていることわかってくれればよいのであるが、

「我と昼寝がしたいのか？」

嬉しいのである。

「し、仕方ないな」

ふとはその場でころりと吾輩に並んで寝ころんだのである。

何故か吾輩を抱き寄せて仰向けになったのだ。おお、今日も青い空に雲が泳いでいるのである。気持ちがいいのである。

「私もねむくなつてきちゃった」

無表情の少女よ遠慮することはないのである。ごろ寝するのである。

なに、この幻想郷の土地はどこでも寝ていてもお天道様が照らしてくれるのである。心配するでない。

★

どれくらいだったのであろうか。

ふとに抱かれているとなんだかあつたかいのである。

それでも吾輩少し寝ぼけているのかもしれない。

『ああーもう、なんでこいつらいるのよ』

巫女の声ができる気がするのである。

『こいつ、なんで猫を抱いて寝てるのかしら。それにこころも寝てるし。……お祭りで踊ってもらうから、風邪なんてひかれたらこまるけど』

まつりをするのであるか。吾輩やたいの裏でよくいい匂いを嗅いでいるのである。

『……仕方ない。掛ける毛布とかあったかな。まったく人の神社でなんて寝てんのよ』
巫女が歩いていくのである。

吾輩は、それを呼び止めようとして声が出ぬ。代わりに二人の少女の寝息が吾輩の耳に響くのである。

おまつりのそらはめまぐるしいのである

それにしても今日はやかましいのである。

なんでも神社でなにかしらのお祭りをするからと屋台がどんどんやってきているのである。

吾輩は昨日ふとたちとお昼寝をした草の上でくつろぎながらそれを見守っているのである。仮に不正があれば吾輩は見逃さぬ。いまのところは何もないようではある。

昨日は吾輩たちが起きてみると掛け布団を掛けられていたのである。誰が掛けてくれたのであろうか。吾輩はとんと分からぬ。親切なものもいるのだと吾輩感心していたところだ。

そんな吾輩も今日はかぼちゃのようなスカートの上で丸くなっているのである。

「……………」

吾輩を膝の上に載せたままじつと神社の広場を見ているのは、昨日知り合ったところである。全く表情が変わらぬから、吾輩をしてもこのころのことはよくわからぬ。しかし、この少女の周りに妙なお面が浮いているのが不思議である。

たまに近くに寄ってきた時には吾輩のぱんちで追い払ってやるのだ。

おお、話をすれば吾輩の隣に笑った女のお面が近寄ってきたのである。……怖いと思つてはいかぬ。吾輩はすくつとスカートの上で体を伸ばしてから、パンチするのである。

「うっ」

なんでこころが痛がるのであろう。それに全く表情が変わつておらぬ。

「あばれるんじゃない」

何か言いながら吾輩の背中をこころが押さえつけてきたのである。吾輩はその手には乗らぬ。するりと草むらにおりたのである。それにしてもこころの履いているスカートは穴だらけであるな。

なんでであらう、吾輩こういう狭い空間があると入つてみたくなつてしまふのである。スキマの中に顔を入れてみようするのである。

「は、はいるな、はいるな」

途中でこころに抱き上げられたのである。しばしこころの無表情な顔とにらめっこするのである。人里ではよくにらめっこを人の子から挑まれるのであるが、吾輩負けたことはないのである。

相手が勝手に笑顔になるのである。吾輩は特に何もしておらぬ、目の前でじつと相手の顔を見ているだけにすぎぬ。それでも負けたことはないのである。偶に巫女にも勝

つのだ。

吾輩はむてきである。

ふふ、そうとも知らずに吾輩ににらめっこを挑んだことを悔いるのである。こころよ、さあ笑うがいい。

.....

「なぜ見てくる?」

それは吾輩の台詞である。本当にわずかも表情が動かぬ。まさかこやつは、にらめっこの達人なのかもしれぬ。しかし、吾輩とて負けられぬ。にやあと鳴いてみるのである。にらめっこで吾輩が鳴くと相手が笑顔になることもしばしばである。

「にやあ」

にやあ

ううむ、けつちやくがつかぬ。鳴き合っているだけではいたしかたないのである。

吾輩はちらりと見て、そっぽを向いてみたりとひじゅつの限りを尽くしたのであるが、こころは一向に笑わぬ。にらめっこをして吾輩は生まれて初めて苦戦しているのである。けいねにも吾輩は負けたことはない。

「わかつたわ。お散歩をしたいのね」

こころはそういうと吾輩を抱いて立ち上がったのだ。軽やかに屋台の準備が進む広

場へ足を進めているのである。もしかしてこれはにらめっこではなかったのかもしれない。こころのこみゆにけーしよんだったのかと吾輩は思うのである。

それはそうとだっこされたままの移動は楽ちんであるな。

★

吾輩は昔からお祭りの雰囲気が好きである。こころと一緒に神社をあてもなく歩き回り、たまに縁側に座って休んだりしたのである。

お天道様もお家に帰っていく。吾輩はそれを名残惜しくいつも見守っているのである。

お月様はいつもいつの間にか空にあがっているのである。吾輩に昇ってくるところをみせぬ。いつかはかならずどこから昇ってくるかを暴くのである。

こころと一緒に縁側から空を見上げると、夕焼けと黒い空がまじりあっているのである。黒い方にはお星さまがだんだんとやってきたのである。

「はい」

こころの言葉にやあと答えて、吾輩は縁側から軽くジャンプしたのである。

境内にいくつかの屋台が立ち並ぶと里からだんだんと人が集まってくるのである。

その内に人の子などが走り回り始めたり、もう何かを焼いている屋台のいい匂いがしたりするのである。

それでいて、だんだんと暗くなつてくると赤い提灯が空に浮かんでいるのである。あれは糸かなにかでつるしていると吾輩はちゃんとわかっているのである。

「うまいなあ。これ」

吾輩はこころの後ろを歩いているのである。こころはさつきヤツメウナギなるものの串焼き貫つて食べ歩きしているのだ。これはいかぬ。ちゃんと吾輩が注意してやるのである。

「……………これは食べれない」

こころが吾輩をちらりと見てから言うのだ。いや、吾輩はねだっているのではないのである。それにしても今日は何の祭りであろうか、さつきちらりと見た巫女が何かを売っていたのである。

まあ、いいのである。

楽しいことは毎日しても、きつと楽しいのである。

しかし、人が多くなつてきたのである。吾輩踏まれぬかちよつと心配なのである。

むむ。吾輩の前から歩き食いをしている少女がやってくるのである。肉まんのような物を口に啜えて楽しそうにしているのであるが、吾輩は一つ「にやあ」と注意するのである。

頭におだんごのような髪飾りを二つ付けた少女であるな。

少女は吾輩の毅然とした鳴き声に驚いているのである。しかし妙な格好である。頭はこころと同じような桃色であるが、片手には包帯でぐるぐる巻きにして、片手にはくさり？ を巻いているのである。胸元には大きな花をつけているのである。

これはおしやれであろうか。吾輩にはとんとわからぬ。
まあ、なにはともあれ歩き食いはいかぬ。

「……………、ごめんなさい。わ、私が猫に……………」

なんか謝られたのである。

うむむ。吾輩の言葉がわかったのであろうか？ いや、そんなわけはないのである。そうであれば吾輩もこみゆにけーしよんには苦勞せぬ。こころもそう思うであろう？

うむ？

にやあ？

みやあみやあ？

こころがおらぬ。というか周りに知った顔がないのである。

こころが迷子になってしまったのである！

これはいかぬ、どこかで泣いているかもしれぬ。吾輩はあわてて体を伸ばして探して

みるのである。さっきの包帯の少女もどこかへ行っているのである。というか、おぬしは誰であろうか。

吾輩の後ろに小さな女の子が泣き顔で立っているのである。どこかで見たことがあるのである。たしか人里の子供……迷子であろうか！遊んだ記憶があるのである。もしかして親と離れて、知り合いの吾輩に助けを求めにきたのであろうか。

な、泣かないのでほしいのである。安心するのである。吾輩は少女になあごと声を掛けるのである。

人の足が吾輩の前を通り過ぎていくのである。

吾輩はきゆうしたのである。だれも見捨てるわけにはいかぬ。

どうすればいいのか、吾輩は深く考えるために眼を閉じたのである。

それから眼をあけると、目の前につくりのしつかりとした靴があったのである。

見上げれば赤い瞳が吾輩と少女を見下ろしているのである。

緑の髪を片手でよけながら優しい顔をしているのである。吾輩はふと、綺麗なお花を見た時のような気持になったのである。

少女はひまわりのような色のリボンをして雨でもないのに傘を持っているのである。

「おじょうさん、子猫さん？ まいごかしら？」

緑の髪をした少女は言ったのである。がやがやと周りの声がするのにしつかりと吾

輩にも聞き取れるきれいな声である。
しかし、吾輩は、迷子ではない。

どんなかたちなのであいいいものである

祭りの時に空をみると不思議なのである。

提灯がゆらゆらしていて、吾輩の周りは明るいのであるが、空の上は暗いのである。上を見ながら吾輩は人に踏まれぬように歩く。

そうやってしきくにふけてみるのである。

それにしてもいい匂いがそこらじゅうからするのである。吾輩もおかねがあればやたいとやらで何かしてみたいのである。それにしても不思議である。おかねなんて嘴んでも、嘗めてもおいしいものではない。

あんなものを取り合う物ではないのである。それよりも煮干しのほうが吾輩は嬉しいのである。

「猫さん。付いてきているかしら」

吾輩を呼ぶ声がするのである。ちゃんと付いてきていると吾輩は前をむいて、にやあというのだ。

緑の髪の女子がいるのである。

吾輩のことを迷子と間違ったことはまあ、吾輩の広い心にはなにほどのことでもな

い。緑の髪の女子は吾輩を頼ってきた迷子の少女と手を繋いでいるのである。

どうやら迷子の少女のほごしやを探すことを手伝ってくれるようである。吾輩はほっとしているところである。

「猫さんの飼い主はどこにいるのかしら？」

吾輩に飼い主などおらぬ。自由気ままにどこにでも行くのである。

緑の髪の女子はずっとえがおである。迷子の少女もそれにつられて笑顔になっているのである。

うむ、よいことである。

会話にびくびく聞き耳を立ててわかったのである。どうやらこの緑の髪のおなごは「ゆうか」というらしいである。

吾輩はその名前を忘れぬようにしっかりと覚えたのである。吾輩は記憶力にはすこしじしんというものがあるのだ。いちじいつくたがうことはない。

ゆうかと迷子の少女の後ろを吾輩はてくてくついていくのである。

……ゆうかの足取りが遅いのである。もしかして吾輩や少女に合わせているのだろうか、吾輩は二人の後ろを歩かなければ踏まれぬかもしれぬ

屋台の前で2人が止まったのである。

お、りんごあめであるな。吾輩あれを食べたことはないのである。

りんごあめの屋台をやっているのはどうみても河童であるな。いつも暑苦しそうなへんな青い服でいるからわかりやすいのである。

「そうね。ひとつ」

ゆーかがりんごあめを貰っているのである。そのまま迷子の少女にあげたのである。

吾輩には……いや、なんでもない。

ねだるなど紳士ではないのである。ところでりんごはどこで手に入れているのだろうか。

もしや妖怪が作っているのだろうか？

いやいや、たぶん人里で作っているであろう。吾輩も山芋を掘り出してみることがあるのである。あとで口がひりひりするから食べぬ。掘り出すだけである。

りんごも地中に埋まっているのであろう。吾輩は今度見つけるつもりである。それは食べてみるのである。

縁日はいろんな屋台があるのである。

ゆーかよ射的をするのはいいのであるが、あつちを狙うのである。吾輩にじゆうを向けるではない。それを迷子の少女も真似ているのである。

おそらくわからぬであろうが、吾輩よりも背の高い2人にじゆうを突き付けられる吾輩の身にもなつてほしいのである。そうそう、ゆーかよじゆうを引くのである。

いや、店主をじゆうで脅すでない。いいけいひんをまえに、とは何を言っているの
あろうか？

迷子の少女に狙わせているのである。あ、あたったらしいのである。吾輩からは見え
ぬ。

しばらく歩くとゆーかと迷子の少女がまた立ち止まったのである。

縁日は子供が遊ぶものがいっぱいあるのである。こう周りを見回すと人の子はいっ
ぱいいるのである。

うむ？ あそこで何かを食べている子供は着物をちゃんときてはいるのであるが、頭
にお椀のようなものを被った妙な格好をしているのである。いや、なんで頭にお椀を
被っているのであろうか。おしやれというものであるな。

吾輩もお椀を被ったらお洒落であろうか……？ とんとわからぬ。

「猫さん」

ゆーかの声がするのである。後ろを向いてみると手にほかほかの串にささったヤマ
メを持っているのである。屋台でもらったのであろう。

屈んで吾輩の前に持ってきてくれたのである。

にやあ、にやああ。

いかぬ、我を失っていたのである。吾輩は紳士としてちゃんと挨拶をしてからいただ

くとするのである。

ゆーかよ、さあ吾輩にくれるのであるというさきから吾輩の前でもぐもぐたべるのをやめるのである、ちよつとくらいほしいのであるそこがいちばんおいしいのであるあ、えがおでたべるのをやめるのであるふぎやあ！ なああご。

なんで吾輩を呼び止めたのであろうか!?

ゆーかは自分で食べているのである。それもすぐくうれしそうなのはなんでなのであろうか。ううむ、そんな食べ終わった串などいらぬ。

いや、この串ちよつと味がするのである。少しだけ嘗めてみるのである。ううむ。このあたりがちやんと味がするのである。ゆーかが頭を撫でてきたのである。

☆

ゆーかと少女と吾輩で縁日を回ってみたのである。

お団子をもぐもぐしているきんぱつのウサギのような耳の少女の足を踏んでしまったのである。まあ、お団子のかけらを貰ったから許してやるのである。

ちらりと小傘の顔を見たのである。ゆーれい屋敷をしているようであるが、なんだか笑い声が聞こえるのである。

それでも吾輩は2人から離れられぬ。

迷子の少女はゆーかを笑顔で見上げているのである。

ゆーかは迷子の少女を笑顔で見下ろしているのである。

笑い合いながら、歩いていくのであるな。

うむ？ ということは吾輩も笑顔なのであろうか。吾輩は鏡はあまり見ぬ。水面にうつる吾輩の顔をたまに見る程度である。だから笑顔がよくわからぬ。

とりあえずにここにこしているゆーかと笑顔の迷子の少女が吾輩を見下ろしているのである。吾輩はそれでもいいのである。

ふと、声がしたのである。

誰かを呼んでいるのであろう。

ゆーかと手を繋いでいた迷子の少女が「あ」と声を出して駆けだしていくのである。人をかき分けておとなのにんげんに抱き付いているのだ。おそらく親であろう。

吾輩がゆーかを見ると、まだ笑顔のまま片手を迷子の……いやもうただの少女に向けて小さく振っているのである。ほんのり吾輩は寂しくなってしまうのである。

ゆーかはどうかであろうか。

吾輩はにやあと聞くとゆーかは吾輩をゆっくりと見下ろして優しそうな顔をしているのである。しかし、吾輩はさっきのヤマメのことは忘れておらぬ。油断はできぬのである。

提灯の明かりがゆーかを照らしているのである。ほんとうにやさしいとおもってし

まうようなかおであるな。髪がきらきらしているのである。

周りをひとが歩いていくのである。

吾輩もここを探さなければならぬ。

「猫さんも行くのかしら？」

仕方ないのである。吾輩はもうひとりの大きな迷子を捜さねばならぬ。

吾輩はにやあとゆーかに挨拶をしてから、後ろを向いて歩きだしたのである。

またね

後ろから聞こえてきた声が吾輩には聞き取れなかつたのである。

ゆーかが吾輩に何か言ったのかもしれない。だから吾輩は振り返ってみると、そこに

ゆーかはおらぬ。

こんなにひとがいっぱいいるというのにほんのりさびしいとはなんでであろうか？

吾輩にはわからぬ。明日にはきつとまたどこかであえると分かっているとしても、こ

うなんとなくそう思ってしまうのは吾輩にはえいえんの謎かもしれない。

それでも吾輩はもう振り返ってはおれぬ。

いろいろとやることは多いのである。なに、吾輩にはわかっているのである。きつと

まだまだ何か楽しいことがあるに違いないのである。

われはぼうしではないのである

ふむ、吾輩はどうしようか迷っているのである。

無事に迷子もいなくなつてから、ゆーかもいなくなつたのである。吾輩が次にするべきことは突然いなくなつたところを探しに行くことであろう。

それにしても皆突然いなくなるのである。吾輩にはとんと分からぬ。全くしかたのない者たちなのである。吾輩はその場で後ろ足で首元を搔いてみるのだ。ううむ、いい。

生きていくことは出会つて別れるという事らしいのである。

けーねに聞いたことがあるのである。

いちごいちえというのである。吾輩はいちごを食べたことはないのであるが、出会いといちごは切つても切れぬ関係なのである。不思議である。いつか音に聞くいちごを食べてみたいものである。いや、やまいちごなら食べたことはあるのだ。

しかし、吾輩にはわからぬ。いちごはともかく「いちえ」とは何であろうか、まあ何かの果物であろう。

そんなふうには吾輩は思索にふけっていると、空が光つたのである。

見れば花火が上がっているではないか、大きな花が空に咲いているのである。ぱあんなばらばらと音をたてては散っていくのだ。吾輩はそれを見てにやあと一声、綺麗である。まわりの人々も立ち止まってぱちぱちと拍手しているのである。

いかぬ、こころを探さねばいかぬ。今頃泣いているかもわからぬ。

そう思つて吾輩はとことこ石畳を歩き出すのだ。空ではぱんぱんと花火が上がつて、立ち止まつて見ている人々の間を吾輩が歩いていく、みんな止まつているから歩きやすいのである。

吾輩は歩きながら考えるのである。

さつき別れたからには次は誰かに会えるのであろう。吾輩のふかい経験からすれば、別れても寂しがることはないのである。ちよつと寂しいのであるが、また誰かに出会えるのである。

「おお、おぬしは」

後ろから誰かが吾輩を呼んでいるのである。吾輩はくるりと後ろを振り向くと、団子を持った「ふと」が吾輩を呼び止めているではないか、相手している暇はないのである。

「ちよ、む、むしするではない」

吾輩は忙しいのである。

「おぬしとはお昼寝をした仲ではないか……」

ふと両脇を抱えられて持ち上げられたのである。うむ、今日は頭にあの長い帽子を被っていないのであるな。

「なあ、おぬし」

顔を近づけてくるのである。空には綺麗な青い花火が上がっているのである。

「我の烏帽子を知らないか？」

知らぬ。えぼしとはあの頭にいつも載せている物のことであろうか、逆に吾輩が知っていると思うのであろうか？

「祭りではしやぎ……ごほんげふん、げほげほ。年甲斐もなくはしやぐ屠自古のやつと大人な我がいろんな店を回っているといつの間にか頭から帽子が消えていたのだ……盗まれたのかもしれぬ」

ううぬ。もし本当であればそれは由々しき問題であるな。しかし、頭から盗むとはすごいことである。吾輩ならば、ふとの足元から飛びかかるくらいしかできぬ。

「……………」

うむ？ ふとが何か吾輩を見ているのである。なぜそんなに見つめるのであろうか、照れるのである。いや、なぜ持ち上げるのであるか。そしてなぜ自分の頭に吾輩を載せようとしているのであろうか。

吾輩はふとの頭に載せられたのである。おお、しかいがたかい。空に桜の花みたいな
火花が上がったのである。

「重い……」

失礼であるな。それに勝手に吾輩を載せたのはふとであろう。吾輩はにやあと鋭い
抗議の声を上げたのである。それにこれは帽子の代わりをするという事であろう。自
分で言つてて意味が分からぬ。

「しばらくこれで我慢するか」

いや、ふとよ。これでいいのか。

☆

くすくすくす。

吾輩とふとが歩くとまわりが笑っているのである。まあ、笑う門には福が来るとい
うから悪いことではないであろう。しかし、吾輩の大変さもわかつてほしいのである。

なんといつてもこのふとは暴れるのである。

「おお！ あれはなんであろう」

などと言いながら屋台に向かつていくのはかわいいものである。

時にはジャンプしたり、吾輩を載せたまま屈んだりする。振り落とされそうになつた
ことはもう何度もあるのである。吾輩が必死になつて組み付くのである。

「おお。そう我を慕うのは分かるが、あまり動くではない」

こみゆにけーしよんがしたいのであるな。ふとは話が合う様で合わぬ。

「我も何を言っているのか。こういう時に猫と話ができればいいのに……」

ちよつといしそつうができたのであろうか。ふとは腐れ縁を感じるのである。

うむ？ あちらで何か笑い声がするのである。吾輩がそちらを見ようとすする前にふとが首をぐるりと向けたのである。実は吾輩とふとは既にこみゆにけーしよんできているのやもしれぬ。

人だかりができていたのであるな。

そこにひよこひよここと動く烏帽子が見えるのである。うむ……あれは見たことあるのである。誰か知らぬが頭に被っているようであるな。遠くから見れば着物をきた女子のようであるな。髪が桃の花のような色なのである。

「あー、あれは私の烏帽子ではないか」

どたどたと走るのはやめるのである。いきなりのことに吾輩もしがみついていたのである。

「いたい!!」

ふとのあたまにつめを刺してしまったのである。おおおお、ふとよその場でぐるぐる回転されると吾輩も酔ってしまうのである。吾輩は振り落とされぬ様に頭にしがみ

つくのである。やっと止まった時にはふとも眼をぐるぐるさせているのである。

騒がしいふとであるな。まったくこのふとは。

「あらあらあら」

烏帽子をかぶったおなごが近づいてきたのである。手に扇子を持つて顔の半分を隠しているのである。目元が優しげであるな。青い着物を着ているのである。

その後ろには緑の服を着た、うむあれは刀を振り回す危険な少女である。あちらも吾輩に気が付いているようである。確かに昔にちよつといざこざがあつたのであるが、吾輩は水に流しているのである。

だから吾輩がにやあと挨拶をすれば、あちらも驚いてかぺこりと頭にを少し下げてくれたのである。これこそそれーぎであるな。紳士な吾輩は嬉しいのである。

「かわいらしいことね？　頭に猫さんの帽子」

にっこりと烏帽子の女子が言うのである。吾輩またまた照れるのである。

「ゆゆこさま、ゆゆこさま。さつき拾った烏帽子。この人のじゃないですか？」

刀振り回す少女がゆゆこことやらに耳打ちしているのである。やはり、ふとの烏帽子であつたのであるな。まあ、こんなもの持っているのはふとくらいしかないのである。当のふとも肩をふるふると震わせているのである。

「お、おぬし。その烏帽子は我の物だ。返すのだ！」

「……だーめ」

くるっとゆゆこがきびすを返したのである。ふとは手を伸ばしながら追うのである。

「あ、あの。ほんとに我の物だとおもうのだ」

「ほんとかしら。なにか証拠があるのかしら？」

「な、名前は書いてはおらぬが……」

意外とふとは気弱であるな。ゆゆこの後ろでばあんと花火が上がったのである。振り返ったゆゆこがふとに笑いかけているのである。

「そう、じゃあそこの屋台でやっている型抜きでこの妖夢に勝てば返してあげるわ。負けたらそうね、その猫さんを貰おうかしら？」

我は景品ではないのである。あ、いや吾輩は景品ではないのである。

「な、なに!? ……な、なんで我が、それに我が勝ったら我の烏帽子が帰ってくるだけではないか!」

「そうねー。だったら、貴女が勝ったら妖夢がなんでもするわよ?」

「え?」

刀を持った少女が驚きの声を上げたのである。

けんかしてはいけないのである

吾輩と烏帽子を掛けた勝負は熾烈を極めていたのである。

ふととよーむという二人の少女が「かたぬき」なる遊びをかりかりかりとさつきからずつとやっているのである。二人とも凄まじい集中力であるな。手に持ったおかの板を爪楊枝でちまちまやっているのである。

ふとが負けければ烏帽子も吾輩も取られてしまうのである。がんばるのである。ふとよ。

「う、うう、ううう、ここがこうなって……」

ふとがうなりながらちくちくしているのである。爪楊枝を使っておかしをいい形に切りとつた方が勝ちらしいのである。それにしても地味であるな。よーむというもう一人の少女も頭をあつちに動かしこつちに動かししながら頑張っているのである。

むろん吾輩は紳士なのであるから心の中で応援はしても実際にえこひいきはしないのである。吾輩はさつきまで載っていたふとの頭から降りて、座っているゆゆこの膝の上でのんびりしているのである。

「ひまねー猫さん?」

吾輩はにやあとゆゆこに返事をしたのである。

なかなかゆゆこの膝はいい。それに吾輩を常に撫でていてくれるのである。

「ふふふ。猫さんはここがいいのかしら」

吾輩はゆゆこの膝の上で転げまわる。うむ、お腹をさするやり方が中々にいいのである。合格である。

「ゆ、ゆゆこさま！ 気が散ります」

怒られたのである。ゆゆこは「これも修行よ妖夢。あとで貴女にもやってあげるから」と軽くあしらっているのである。よーむはむつと顔を赤くして。

「い、いりません！」

というのである。その横でふとがにやにやしているのである。

「ふ、そんなに余裕を見せていいのか？ もう我は削り終わるぞ！」

「な、なに!？」

ふとはかりかりと手を動かしているのである。あまりに地味なのであるから、観客はいいのである。むしろ空ではあんと景気よく上がっている花火を見上げているのである。吾輩が頭を上げてみるとゆゆこの顔がきらきら光っているのである。

ああ、花火に照らされているのであるな。そう言えば吾輩「花火」がどうして空を飛んでいるのか知らないのである。ひゆるーと音がしてばあんとしてからすばあんと空

に光るのである。それにしても忙しいやつであるな。少しゆっくりしてもいいのであるが。

「できた!! 我の勝ちだ!」

おお、ふとが出来たと騒いでいるのである。ニコニコしながらゆゆこに近づいてくるのである。手には小さな、なんであるうあれば、何かしらの形をした桃色のおかしを持つているのである。

「どうであろう。これで我の勝ちだな!」

その変な形のおかしをゆゆこに見せているのである。吾輩もちよつと触つてみたいのである。ここの肉球をちよつとふとの手に載せようとすると、

「これこれ、だめだめ」

ふとに止められたのである。ううむ、いずれは吾輩も自分でかたぬきをできるようにならねばならぬようであるな。吾輩はにやあとゆゆこに鳴いてみるのである。特に意味はないのである。

「ねこさんの言う通りよ」

ゆゆこが言うのである。吾輩は何も言っておらぬが……

「この形では駄目ね。貴女はいつた何をかたぬきしたのかしら? 猫さんもこれではだめとはつきり言っているわ」

いや、言っておらぬ。吾輩にやあとしか言っておらぬ。

「な、なに！ ね、ねこよ。おぬしどっちの味方だつ！」

勝負にはふえあせいしんが必要なのであるからして、どちらにもえこひいきはせぬ。それでもゆゆこは吾輩の手を掴んで、ふとに向けたのである。吾輩はされるがままである。

「猫さんはこう言っているわ。せめてなんの型を抜いてきたのか一目でわかるくらいきれいにしないさいと」

「……さっきのにやあにそれほどの意味があつたのか……？」

ふとよ騙されるな。いやしょんぼりした顔で吾輩を見るではない。なんとなく悪い気がするのである。

「とりだったのに……」

「あ、それはおいていっていいわよ」

ゆゆこはふとの手からお菓子をとってひよいと食べたのである。それから「それじゃあがんばって」というのである。なにか言いたそうなふとは肩を落として席に戻っているのである。新しくやるつもりなのであろう。がんばるのであるふとよ。

「できました！」

そうこうしているうちによりむが立ち上がったのである。そう言えば負けたらなん

でもする約束であつたな。吾輩としては暇なときに遊んでくれればいいのである。

それでも刀をちやりちやりならせながら満面の笑みで近づいてくるよーむは自信満々であるな。両手で捧げるようにお菓子を持っているのである。ちよつとほつとしているようであるな。

「あひっ」

あ、こけたのである。お菓子が、鳥の形をしたお菓子が宙に浮いているのである。吾輩はどうしようもできぬ。ひらひら落ちてくるそれにゆゆこがちよつと顔を動かしてぱくりと食べたのである。器用であるな。

「やりなおしよ。妖夢」

「な、何ですか!!?」 幽々子さま。綺麗にできていたじゃないですか」

「確認する前に食べたからわからないわ……。食べ物で遊んではいけないということよ。猫さんの言う通り」

吾輩もその意見には賛成であるが……今回吾輩は何もしておらぬ。

「この猫さんの目が言葉でいわずとも語っているわ」

ゆゆこが吾輩を持ち上げてよーむの前に出したのである。よーむの大きな瞳と見つめ合うのである。おお、吾輩が瞳に映っているのであるな。

「いや、ゆゆこさま。この猫きよんとしてきますよ」

「可愛いわね」

「そ、そうではなくてですね。はあ、わかりました。もう一度します」

よーむも席に戻っていくのである。吾輩は仕方なくゆゆこの膝の上で遊ぶしかないのである。ふともよーむも頑張るのである。ゆゆこが吾輩の顎を撫でてくるのである。おおう。むう？ 指先が甘いのである。もしやさっきのお菓子のあまりであろうか。

「くすぐつたいわ」

ニコニコしながらゆゆこが言うのである。吾輩もにやあおと答えておくのである。

「できた！」

「できました!!」

びくつ。吾輩びつくりしたのである。見ればふとよーむが同時に立ち上がっているではないか。見ればその手には鳥の形をしたお菓子をそれぞれ持っているのである。今度はふともうまくできたのであるな、ああ多分じかんをかけて頑張ったのであろう。

「ええい、我の方が速くできたであらう！」

「いや。私の方が速くできたわ！」

おかしを持ったままふとよーむが身体で押し合いをしているのである。ううむ喧嘩は良くないのである。ゆゆこよこは止めに入るのである。

ゆゆこを見上げるとやさしく笑っているのである。吾輩をそつと地面におろしてか

ら二人に歩み寄るのである。

「喧嘩は良くないわ。妖夢もあなたもこんなものがあるからいけないのね」

そういうとうゆゆこはひよいひよいとよーむとふとの手からお菓子をとって食べてしまったのである。

「あー!」

おお、仲良く二人が驚いているのである。ゆゆこはもぐもぐとしているのである。吾輩にも、ちよつとほしいのである。うむ？ ふとが烏帽子を返してもらっているようである。良かったのであるな。

「もう喧嘩したらだめよ」

「う、うむ。いや烏帽子が帰ってくれば我はいう事はないが……」

そうこうしているうちに吾輩ふわつと空にあがり始めたのである。

おう!? なんてであろう地面が遠くなっていくのである。誰かに持ち上げられたのである。

「もしもーし、今あなたのうしろにいるの」

吾輩はいきなることにびっくりして体をよじたのである。そこには歯を見せて笑う少女がいたのである。

よぞらのだんすほーるなのである

急に吾輩は抱きかかえられて空にあがっていくのである。ううむ。あれである。下を見たら祭りの火がだんだんと遠くになっていくのであるから、ちよつと怖いのである。

吾輩が上を向くと、少女の顔が見えたのである。緑の髪をした少女であるな、なにが面白いのか笑顔である。いいことなのである。

おお、ちょうど上にふんわりした雲が迫ってくるのである。吾輩は一度雲を食べてみたいと思っていたところである。吾輩は口を開けてみるのである。

少女と吾輩は雲に突っ込んだのだ。

目の前が真っ白になったのであるが……雲は味がせぬ。人間の食べるわたがしも雲の親戚だと思っていたのであるが、現実は甘くないのである。

そう吾輩が思うと、急に視界が開けたのである。吾輩は眼を疑ったのである。

満天の星空とお月様がいつもより近いのである。

下にはふかふかの雲が敷き詰められているではないか、空の上とはこんなにも綺麗

だったのであろうか。でもちよつと寒いのである。吾輩は少女にやあと訴えてみるのである。

「はじめましてね、こいし」

うむ。初めましてなのである。別にさっきのは挨拶ではないのであるが、まあいいのである。吾輩は紳士なのであるから、ちゃんと挨拶はするのである。それにしても空の上で挨拶するのは初めてなのである。何事も経験であるな。

「私は古明地こいし。猫さんはこんばんは」

にっと歯を見せて笑うのが似合っているのである。こいしよ、吾輩は吾輩なのである。

こいしは吾輩を両手で持つて、向かいあつたのである。こいしの周りに紫の目玉のようなものが浮かんでいるのは何であろう？ パンチしたくなるのである。

「今日はおまつりなのに誰も私に気が付いてくれなかつたの」

ううむ……確かに何事もみんなでやった方が楽しいのであるな。そう言えばふとはどうなつたのであろうか、結局ゆゆこが全て食べていたのであるが勝敗が分からぬ。まあ、ふとが食べられるわけでもない、大丈夫であろう。

「でも、寒い」

そうであるな。吾輩も寒いのである。おお、吾輩のお腹に顔を当ててではない。

こいしは吾輩を抱いたままくるくとゆつくり飛んでいくのである。まるで空の上で寝そべるように吾輩を抱いているのである。

空にはお星さまがきらきら光っているのである。吾輩は結構高いところに来たと思つたのであるが、上には上がいるのであるな。お星様は飛ぶのがうまいのである。吾輩も鳥くらいにはなればいいのであるが、

それにしても綺麗であるな。吾輩はお月様にもやあと挨拶しておくのである。

「しずかだなあー。ねえ猫さん」
「なんであろうか？」

「いま私は貴方の後ろにいるの」

……うむ。まあ吾輩を抱いたままであるから、後ろと言えば後ろであるな。こいしは吾輩をじつとみていうのである。

「猫さんは電話って知ってる？」
「もちろんである。」

よく村の子供達が作っている糸のついたやつであろう。遠くでも声が聞こえると評判のあれであるな。なんで急にそんなことを聞くのであろう。吾輩は首を傾げたのである。

「わからないかー。メリーさんって有名じゃないかもね。幻想郷では人の後ろをとって

も電話が掛けられないのが問題よね」

いや、わかるのである。今首を傾げたのは分からない合図ではないのである。

しかし、めりいとやらには会ったことがないのである。話からすれば糸のついたあれを人の後ろから掛けてくるのであろう。……奇妙な奴であるな。一度見てみたい気がするのである。やっていることがさと似ているのである。知り合いであろうか。

こいしと吾輩はそんな形でのんびり空の上で泳いでいくのである。

「そうだよ」

急に声を出したこいしを吾輩が見るのである。こいしも吾輩を見ているのである。

きらきら光るこいしの瞳はまるでお星さまのようであるな。にこにこしているのはいいことなのである。

「さつき能だとか、踊っているお面をいっぱい持つているのが注目を浴びていたわ。私もダンスがうまくなればみんな話しかけてくれるかも？」

さつきからそうであるが、こいしはいろいろと突拍子がないのである。それでも嬉しそうに吾輩を抱いて、くるりくるりと空を泳いでいくのである。楽しそうなのはいいことであるが落とさないようにして欲しいのである。

「そうと決まったら練習をしないと、どこかに練習相手はいないかなあ」

これ見よがしにこいしが吾輩を見てくるのである。いいのである、吾輩だんすはした

ことがないのであるが、これも経験なのである。こいしは吾輩が何か言う前に、吾輩を左手で抱いて、右手で吾輩前足を持ったのである。

「こんなに素敵なダンスホールがあるんだから。踊らないと損だもん！」

こいしよ、だんすほーるとは何であろうか？

ここは空の上である。雲の上で踊る吾輩たち。見ているのはお月様とお星さまたちだけである。吾輩は疑問に思ったのであるが、こいしが吾輩を抱いたままくるりくるりと踊り始めたのである。

こいしが何か歌っているのである。

気持ちよさそうにしているのである、綺麗な声であるな。これはいんぐりっしゆかもしれぬ。吾輩もなーごと合わせてみるのである。

こいしは吾輩をみてニツト笑うと、またくるつと回ったのである。吾輩は初めてだんすをしたのであるが、こんな感じなのであるだろうか。なかなかうまくできているのかもしれぬ。吾輩にはさいのうがあるのだろうか。

いやいやここで慢心してはいかぬ。吾輩は紳士であるから、謙虚にならねばならぬ。

「ねこさん。今度地底に遊びにこない？ お隣も喜ぶかもしれないわ」

おりんとやらが喜ぶのであればいかねばならぬ。吾輩誰かが喜ぶのであるならどこにもでも行くのである。

吾輩の返事も待たずにこいしはまた歌いながら踊るのである。

☆☆☆

今日は疲れたのである。

吾輩はあれからこころいくまで踊ってからこいしと地上に下ろして貰ったのである。そう言えばこころはどうなったのであろうか、もう祭りも終わっているのかもしれない。それでも心配ではあるな、吾輩は神社に急ぐのである。

それにしてもこいしも吾輩をよくわからぬ人里の一角に下ろして、急に消えたのである。全くどこに行つたのかわからぬ。掴みどこのないやつであるな。ふと以上である。

ともあれ吾輩は神社にたつたか急ぐのである。疲れてはいるのであるがこころも泣いているのかもしれない。結局ゆーかと遊びふとと遊びこいしと踊つたのである。なかなか充実していたのかもしれない。

吾輩はいつもの石段を駆けあがるのである。逆に人々が石段を下りていくのである。

——たのしかった

おお、もう終わっているようであるな。

口々に楽しかったと言いながら帰っていくのである。

吾輩はふと立ち止まったのである。それから後ろ足で頭を搔いてみるのである。祭りが終わったと聞くと……妙に寂しくなってしまったのである。なんでであろうな。

「お」

と声があるのである。顔を上げるとそこにはようむがいたのである。相変わらず刀を腰にぶら下げているのである。

「どこに行っていたの？ 迷子になったかとあいつが探していたわよ」

あいつとは、アレであるな。ふとであろう。

うむ？ ようむよ、なんでそんなに吾輩を見てるのであろう。照れるのである。

「こいつを、百物語の間抱いていけば……怖さがまぎれるかも」

なんだか眼が怖いのである。ようむが両手を広げて吾輩を抱っこしようとするのである。

「こ、こわくない、こわくない」

いや、怖いのである。普通に近寄ってほしいのである。

わがはいは、いたいのはいやなのである

ほうほうとどこかで鳥が鳴いているのである。

吾輩は吾輩を捕まえようとしてくるようむに連れられて神社の広場にやってきたのである。なんだか必死であったので吾輩は人助けのつもりで来たのである。

吾輩とようむは紅白の掛物がされた、大きなやぐらにあがったのである。そう言えば青い髪の少女が立っていたのである。

高さは神社の屋根よりは少し低いのであるが、上がってみれば大勢で寝そべることができるくらい広いではないか。周りにはほんぼりが輝いているのである。

「あら、猫さんを連れてきたの？ ようむ」

すでにゆゆこが座っていたのである。扇子で顔を半分隠しながら吾輩を見てきたのである。ひさしぶり……いや、さつき会ったのであるな。吾輩はちよつと空の上まで行っていたのである。お月様が綺麗であった。

「ねこさんこつちに来てもいいわよ」

ゆゆこが膝を叩いているのである。吾輩は軽く返事して近寄っていくのである。

「だ、だめですよ。幽々子さま！ この猫は私が」

「妖夢。今から百物語をするのがあんまりこわいから、その間ねこさんを抱いて怖さを紛らわせよう、なんて考えていないかしら」

「……………」

うむ？ ひやくものがたりであるか、それは何であろう。そう言えば蠟燭がいつぱいあるのである。ようむよ、にやあ。ようむ？ 何であろう赤い顔で固まっているのである。

「そ、そそそそ、そんなことあるわけないじゃないですか！」

びつくりしたのである。急に大きな声を出されたので吾輩耳がびくびくしたのである。

「こっこ子供じやあるまいし。私はただ猫が迷子になっていたのを保護しただけですよ。決して幽々子さまがおっしやられたようなことはありません」

ようむが滝のような汗を流しながら何か言っているのである。それからその場に座って幽々子に言ったのである。

「も、もちろん幽々子さまが猫を抱かれています、い、いいですよ」

「そーう？ じゃあ猫さんこっちにいらつしやい」

うーむ、吾輩はその場でゆゆことようむを交互に見比べてみたのである。よくわからぬがようむが何かに怯えているのは分かったのである。

ゆゆこが吾輩に手を差し伸べてきたのである。吾輩は肉球でその手に触つてからにやあと答えるのである。そしてくるりと後ろを向いて妖夢の膝の上に乗つたのである。

「あら」

済まぬ。ゆゆこよ。吾輩は紳士であるから困つた者がいれば見過ごすことはできぬ

吾輩が上を見ればようむが眼をぱちぱちさせているのである。吾輩は挨拶を忘れぬ。ちやんとにやあと言つておくのである。ちよつと膝の上を借りるのである。

「ふふ、妖夢。まるでこの猫さんには私たちの言葉がわかつているかのようね？」

「ま、まさか。これは、たぶんこの猫……」

なんであろうか、吾輩は初めて会つた時から刀を振り回すのはどうかと思う以外、おぬしのことを悪く思つたことはないのである。仲良くしたいものであるな。今度お昼寝をするのである。

「私のことを慕っているのかもしれない」

……ううむ。ふと、と同じ程度のことを言うのはやめるのである。

☆

時間がたつにつれてやぐらの上に人が上がってきているのである。おお、巫女である。吾輩ちゃんと挨拶をするのである。巫女は吾輩をみてため息をついているのであ

る。

「……はあ、なんで普通にいんのよ。まあいいけど」

次はまりさもきたのである。相変わらず大きな帽子であるな。吾輩が挨拶するのである。

「おつす」

軽い挨拶をであるな。吾輩気に入ったのである。

ところでようむよ、膝が固いのである。正座しているからであろうか、吾輩座り心地がよくないのである。もっと楽にしても苦しゅうないのである。

「……………」

固まっているのである。吾輩は仕方なくようむの膝の上で一番過ごしやすいぼーずをあれこれ研究してみるのである。ごろごろ、ううむ。これでもないのである。ごろごろ、おおうひぎこぞうがいたい。

そういえばさつきからゆゆこたちの言う「百物語」とはあれであるな、怖い話をするらしいのである。怖い話であるか……ある日突然にぼしがこの世から無くなつてしまったら、吾輩あまりの悲しさににやあにやあ鳴いてしまいかもしれぬ。

考えるだけで恐ろしいのである。そんな話を百個もするのであるか、にぼしがいくつあつても足りぬ。いや、百個あれば足りるのであるか。いやいやそれであるなら吾

輩が食べたいのである。……これは難しい問題であるな。

「こいつ、のんきですね」

ようむよ吾輩は今難解なことを考えているのである。

「きつとにぼしのことを考えているのよ。妖夢も一緒に考えてあげなさい」

ゆゆこよ！ 吾輩は今その通りのことを考えていたのである。もしかするとゆゆことはこみゆにけーしよんが取れるかも知れぬ。吾輩そう思つてゆゆこを見たのである。ゆゆこも吾輩につこりと笑いかけているのである。

「いや、幽々子さま……にぼしなんてどこにもないじゃないですか」

ようむよ修行が足りないのである。

「妖夢。修行が足りないわね」

また、意見があつたのである。吾輩とゆゆこは気が合うかもしれぬ。ゆゆこは膝で吾輩たちになじり寄つてきて、吾輩の頭を撫でてくれるのである。ゆゆこの手は綺麗であるな。

「いい、妖夢」

吾輩を撫でながらようむにゆゆこが言うのである。

「猫の気持ちになるには猫と同じことをしないとわからないわ」

「え。猫の気持ち……ですか？」

「そうよ。虎穴に入らずんば虎子を得ずというじゃない、猫の穴に入ってみないと猫を手に入れることはできないわ」

「え？ え？」

ううむゆゆこの言葉は深いのである。吾輩にはよくわからぬ。それより撫でる手付きがいいのである。気持ちいいのである。ようむはこんわくした表情をしているのである。まあ、あれである。むずかしいことはてきとうに考えておけばいいのである。

「妖夢」

おお、ゆゆこが吾輩のなでなでを中断したのである。そしてなんと、ようむを撫で始めたではないか。

「は、はずかしいです幽々子さま」

「猫の気持ちになりなさい」

「……ね、猫ですか」

にやあにやあ。吾輩も撫でていてほしいところである。吾輩は顔を後ろ足で立ってゆゆこに前足を何度か振ってみるのである。ゆゆこはそんな吾輩を見て言うのである。

「ほら、妖夢。お手本通りにしなさい」

ようむが吾輩をちらりと見てきたのである。何であろうか。

「にや、にやあ」

……ようむが吾輩のぼーずを真似してきたのである。ううむ。顔を真つ赤にするくらいならば、なぜ真似をするのであろうか。それに周りを見ればいつのまにやら大勢が座っているではないか。みながようむを見て微笑んでいるのである。

「は、は、」

ようむもそれに気がついて変な声を出しているのである。吾輩をそんな抱きしめたら苦しいのである。ゆゆこも微笑んでいるのである。扇で半分顔を隠しながらである、吾輩もそれをこんどしてみたいのである。

まずは扇を用意せねばならぬ。

それよりも苦しいのである。ようむよ、抱くのは吾輩も文句は言わぬ。だが恥ずかしいからと言ってそこまで強く抱かれると胸元というか壁に押し付けられているかのようである。

ええい、苦しいのである。

吾輩はうなうなと体を抜け出させたのである。吾輩やぐらの隅に避難したのである、なんとなく下を見れば、広場に浴衣姿の少女が立っているのである。緑の髪でなんだろう、右だけ長いのである。

おう、そんなことよりも百物語が始まるのである。ようむよ痛いのは吾輩嫌なのである。

おはなしはたのしいものである

「——それでは本日はお集り頂き有難うございます」

鈴の少女が皆の前で挨拶をしたのである。

「それでは納涼祭のメインイベントの百物語を」

吾輩はようむの手の手の中で周りを見渡すことにするのである。

あの頭に鈴をつけた少女が以前に吾輩がねこじやらしで遊んでやったことがあるのである。たしかあの日は良い日差しの日であった。

今日はちよつと曇り気味ではあるが、お月様が偶に顔を出してくれるいい日である。

今から「百物語」とやらを始めるらしいのであるが、大勢集まって車座になるのはこう、よい事であるな。皆で一か所にあつまるところ、なんとというか落ち着くのである。

周りを見渡せば巫女にまりさもいるのである。あとは、頭に蛇を巻いた変な奴がいるのである。恰好は巫女に似ているのであるが、髪が緑色であるな。あとは、さくやであるな……この間は大変な目に会ったのであるから、そつとしておくのである。それとそれのみりあもいるのである。

おお、あれは浴衣を着たゆかりであるな。こつちに手を振っているのである。吾輩も挨拶をしたところであるが、身動きが取れぬ。

「うう、うううう」

ようむが吾輩をしっかりと抱いているのである。痛いのである。吾輩は抗議の意味を兼ねてようむの手を嘗めたのである。

「ひゃ、ひゃあ!! お、おばけゆゆこさま」

びくつ。

びっくりしたのである。そこまで驚かなくてもいいのである。みんなこつちを見ているのである。

「はいはい。おばけのゆゆこさまですよ」

となりでゆゆこも何か言っているのである。おばけとはあれであるな、こがさのようながんばりやさんのことを言うのであろう。ということはゆゆこもがんばりやさんなのである。ようむもそうであらうか。

「はっはっは。始まる前からぎやかじやの」

おお、にぎやかなのはいいことなのである。吾輩がそれを言ったものに首をぴんとあげて、顔を向けたのである。頭に葉っぱをつけた女子であるな。手にはきせるを持っているのである。あれはいかぬ、きせるを持った人間はこう、匂いがあるのである。

それにしてもきょうはあれであるな、頭に葉っぱを載せていたり蛇を巻いていたりと妙な格好が多いのである。吾輩も何か頭に付けた方がいいのであろうか……。

なあご、なあお

吾輩は心配になってようむに聞いてみたのであるが、ようむは青ざめた顔で正面を見て動かぬ、吾輩はそのほつぺたを軽くたたいてみたのであるが、ようむ反応がない。まるでしかばねのようであるな。

「ご主人様はどうやら集中しているようじゃの」

後ろを見れば葉っぱを頭にした女子がいるのである。なんであろうか、何故か狸を思いだすのである。訳が分からぬ。

☆

ううむ。百物語とはあれであるな、一人一人が何かを話して蠟燭を消していく遊びのようである。さつきから深夜の街をお面をして歩いていた人がいた話など、中々に面白い話があるのである。

吾輩もお面をかぶってみたいものである。うむ……そういえばこころはどこに行つたのであろうか。

「ひいひい」

びくっ！

話が終わるたびにようむが吾輩の耳元で叫びのである。それがとてもこわい。

ようむよ、吾輩がちゃんといっているのであるからして、いきなり叫ぶのをやめてほしいのである。

「あら、猫さんも怖いのかしら」

ゆゆこよ、違うのである。ようむが締め付けるから声が出るのである。

吾輩は吾輩の名誉の為ににやあにやあとちゃんとじじょうを説明したのであるが、ゆゆこはちゃんとニコニコしながら聞いてくれたのである。

「お腹減ったのかしら？」

……。吾輩の意図が伝わってはおらぬ。

まあいいのである。吾輩はさっきから叫び続けているようむの口に肉球を当ててみるのである。ようむは吾輩の前足を手で持つて口元から外したのであるな、なんでここだけ冷静になつているのであるう。

☆

それにしても面白いものであるな。あの葉っぱの頭のおなごもかーなびとやらの話をしてくれたのである。ううむ、ゆかりもなかなか面白いことを言っているのである。

吾輩はひとの話聞くのが大好きである。こみゆにけーしよんは取れぬが、こう寝そべつて何かを聞いているのはいつでも楽しいものであるな。

「退屈なのかしら」

ゆゆこよ違うのである。吾輩は楽しいのである。そもそもようむがいつ叫びだすかが気がかりで全く気が抜けないのである。

「ひいひい」

びくっ！

いうそばからこれであるな。ゆゆこが吾輩にしゃべりかけてきたから身構えておけなかつたのである。間違いなく今日一番吾輩を驚かせているのはようむではないだろうか。

また吾輩はようむにぎゅうと抱きしめられるのである。

にやあ……くるしいのである。もう少し弱めに抱いてくれればいいのであるが、吾輩は紳士なのである。怖がっている少女に対して無下にすることはできぬ。そもそもようむをみればあれである、ほっぺたを赤くしているのである。

なあご、んなーお。

吾輩は腕が緩んだすきにほっぺたを嘗めてやるのである。まあ、安心するのである。あれだ、悪いおぼけがでてきても吾輩には恐るるに足らぬ。こうぱんちでげきたいしてやるところである。

「……………くすぐったいわ」

ようむが吾輩の脇を持って体から離してきたのである。よかつたのであるな、思いのほかほつぺたが柔らかくて噛んでしまいそうになつていたところである。

目の前のさくやの顔があるのである。わ、笑つてゐるのである。

ふぎやあ、にやああ!?!?

ようむがいきなりさくやになつてたのである。吾輩は思わずさくやのほつぺたにばんちをしてみたのである。

「ふえっ!」

ようむのほつぺたにばんちが当たつてしまつたのである。

いきなりさくやが出てきて、いきなりようむに変わったのである。わ、わけわからぬ。お、怒るでない。いまのはふかこーりよくというやつである。吾輩は急いでさく

やを振り返つたのである。

「ところでお嬢様。諸葛草を召し上がられますか?」

「なんでいきなり野草を食べないといけないのかしら。咲夜」

れみりあと何かしやべつてゐるのである。むむ、さくやがちらつとこつちをみて片目を閉じて舌を出したのである。やはり犯人はさくやなのである! ようむよ、はんにんはあつちなのである。いや、刀を抜こうとするのを止めるのである。

こ、ここは一時退却なのである。百物語を全て聞けぬのは残念であるが、斬られては

たまらぬ。吾輩は脱兎のごとく飛び出したのである。吾輩はやぐらに足を掛けて、ぱあつと空にジャンプしたのである。

意外に高いのである。後ろから巫女の声が聞こえる気がするのである。吾輩は空中でくるり、にやあおと皆に挨拶をしておくのである。紳士は常にれいぎただしくあらねばならぬのである。巫女が吾輩に手を伸ばしているのである、何をしているのである。

吾輩はくるくると回転してから、地面にすたりと着地したのである。

やぐらの上から拍手が聞こえてくるのである。照れるのである。

それでも吾輩はやぐらの上に戻る気はないのである。ようむとは今度お昼寝でもするとしよう。そうだ、ここを探さねばならぬ。そろそろ泣いているのかもしれない。そう思つて吾輩は駆けだしていくのである。

ごちん。

いたいのである。吾輩は誰かにぶつかってしまったのである。

「……大丈夫ですか？」

吾輩が見上げると浴衣を着た女性がいたのである。お月様がちようど出ているからして、げつこうを背に吾輩に手を伸ばしてくるのである。緑の髪は右側だけ長いのである。

わがはいのえすこーとである

吾輩としたことがあわてていたようである。

まさか他のことに気を取られて緑の髪の少女とぶつかってしまったのである。不覚である、紳士としてここは深く謝るのである。

にやあ

吾輩はぴんと背を正して顔を上げたのである。吾輩を見下ろしている少女はくすりとしていようであるな、どうやら許してくれたようである。少女は藍色の浴衣を着ているのである。

親切であるな、屈んで吾輩と視線を近づけてくれたのである。

「ねこさん。お祭りに参加したのですか？」

そうである。吾輩は今日はいかつやくだったところで、といたくともこのころの行方が分からぬ……。ようむとふとが遊び過ぎたのである。

「はい」

おお、吾輩を見て少女が笑っているのである。なんであろうか、優しい顔であるな。ここのお地蔵さまのようなほんわかした笑顔である。

「私は部下が怠け者で……すこしおくれてしまいました」

それはいけないことであるな。吾輩はいつもまじめにしているとどこであるから、こんどそのぶかとやらをちゆういしてやるのだ。吾輩はうなうなと少女に言つてあげたのである。

「にやあ……」

にやあお

優しい顔のまま吾輩の声を真似ているのである。指で吾輩の顎をこしよこしよしてくるのである。吾輩がその程度で、うむ。ううむ。もう少し力を入れてもよいかもしれぬ。少女は片方だけ長い髪を手で軽く払つたのである。さらさらとしているのであるな。

吾輩も負けないのである。吾輩はその場で座り込んで背中を見せたのである。吾輩は毛並みには自信があるところだ。さらさらの髪にも負けぬ。

「毛づくろいをよくしているようですね」

何故か背中をなでなでしてくれているのである。その場で、吾輩はあたりを見回してみるのである。あたりで屋台を仕舞つて帰っているようである。

さつきまであんなに騒がしかったのであるが、吾輩はきよう何度目かのしようしんを味わつたのである。そういえば味わうというが、吾輩は「傷心」の味を知らぬ。甘い

であろうか？

吾輩はふと、ふとのことを。いやいやあやつことはどうでもいいのである、「ふと」と思うたびに思い出してしまふのがダメなのである。とにかくふと、後ろを体をひねってみてみるのである。

緑の髪の少女も寂しそうな、いやあまり寂しそうではないのである。綺麗な目で終わったお祭りを見ているのである。吾輩が寂しいのであろうか、確認したくなつて「にやあ」と聞いてみると少女は「ふふふ」とまた優し気に笑つたのである。

吾輩はその顔が大好きになつたのである。こう、見ていると落ち着くのである。吾輩はたまに道のわきにあるお地藏さまに挨拶をすることがあるのであるが、いつも笑つているのである。ううむ。なんでであろう、やはり少女とお地藏さまは似ているのである。

吾輩は体を起こして少女のふともものあたりに身を寄せてみるのである。すりすり。固くないのである。あと、あつたかいのである。お地藏さまはあれである、暑い日は凄まじく熱いので触りたくはないのである。そのあたりは似ておらぬな。

「いはいはい」

なぜか怒られたのである。

吾輩はすいと上を見てみたのである。星空が出ているのである。いい日である。

だから、もう少し今日は冒険するのである。

吾輩はにやあと一声、飛び出したのである。少女よ、ついてくるのである。吾輩は何度も後ろを振り向きながら誘導したのだ、ううむ小さく手を振っているのであるな。違うのである、付いてきてほしいのである。

吾輩は一度少女の足元に戻って「にやあにやあ」と訴えてみるのである。

「どうしたのですか？」

ん？ とまた優しい気な顔で聞いてくるのである。さあ、こつちである。吾輩がえすこーとするのである。星空のしたでーとである。けいねが言っていたのである、仲良くおさんぼすることを「でーと」というのだ。吾輩は物知りである。えへんえへん。

からからとげたを鳴らしながらゆつくりと少女が付いてきてくれたのである。

吾輩はちゃんと遅れないようにたまに止まって、後ろを向いて「なーお」と声を掛けるのである。

まだ、提灯の火は消えていないのである。

石畳の上を吾輩と少女で歩くのである。ゆったりしているのであるな。

「今日は涼しい日ね」

少女の声は耳に心地よいである。吾輩は耳をぴくぴくさせながら聞いているのである。

「どんなことも本来善いことでも、悪い事でもありません。それは感じる心次第ですから」

いきなりむずかしいことを言い出したのであるな。でもそうであるな、吾輩はみんな好きである。これがせけんばなしというやつであろうか？　そういえば――とはこれだけでいいのであろうか。

うむ？　こつちからあまいにおいがするのである。片付け途中の屋台であるな。吾輩はたつたか駆け寄ってみたのである。あまいのがほしいのである。

「わ、なんだ」

おかつば頭の店員であるな。

ポケットの多い青い服を着ているのである。口元に赤いものを大量につけているのはなんであろうか。手にも赤い玉が突き刺さった棒を持っているのである。齧りかけであるな。

「あ、余ったからって猫にリンゴ飴はやれない！　しつゝぐるるるる。」

「う、うなつたつてやらないってー」

その手に持った大きな赤い玉みたいなものが甘いやつであるな。りんごあめというのであろう。吾輩ちゃんと聞いたのである。ぐるるる。それがほしいのである。吾輩

が食べるわけではないのである。

「大量に余つて頑張つて仕方なく食べてたけど……猫にはなあ」

おかつぱよそこを何とかするのである。

「何をしているのですか？」

緑の髪の少女が来たのである。おかつぱがそつちを見たのである。

「あんた飼い主か！ こいつリンゴ飴欲しいみたいだけど……お安くしておきますぜ」

「これだから河童は……。商魂たくましいと言えば耳触りがいいのかしら」

はあとため息をついて、少女は袖の下から袋を取り出したのである。そこからきらきらお金をおかつぱに渡したのだ。「まいど」と言いながらおかつぱは少女にリンゴ飴を渡したのである。

少女は赤いリンゴ飴をじつと見ているのである。吾輩はちゃんと少女にリンゴ飴をふれんとできて満足である。にやあにやあと吾輩は少女に言うのである。悪いのであるがそろそろこころを探しに行かねばならぬ。

吾輩はにやあと挨拶をしてからだつと駆けだしたのである。

「あ」

少女が何か言っているのである、吾輩が振り向くとリンゴ飴を両手で持つてこちらを見ていたのである。だからもう一度、にやあと挨拶をしたのである。少女はまたあの優

しい顔で吾輩を見送ったのである。

☆

それにしてもこころはどこに行つたのであろうか。

吾輩は神社の周りを歩いてみたのである。ううむ、おらぬ。

「ぐう……ぐう」

うむ？ 何か聞こえるのである。

吾輩は声のした方へ歩いて行つたのである。神社の縁側の方であるな。

巫女はようむのところだから、縁側の近くは星明りしかないのである。

というか居たのである。

吾輩が縁側にと、と載つてみると座敷に大の字で寝ているところがいたのだ。お腹に

蒲団が掛けてあるのである。

「ぐうぐう」

ううむ。良く寝ているのである。神社の建物の中で寝ていたのであるな、道理で見つからないわけである。

吾輩はそのそと足から胸のあたりまで載つて歩いてみるのである。

「う、うう」

苦し気であるな。心配させたバツである。吾輩は肉球をほつぺたに押し付けたので

ある。

それから吾輩はその場で丸くなったのだ。今日は、疲れたのである。

つちあそびは、たのしいものである

いい天気なのである。

吾輩はごろりと日当たりの良いぼしよでくしくし後ろ足で首を掻いているのである。それにしても昨日のお祭りは大変だったのだ。迷子のところを探してほうぼー駆けずり回ったところである。

吾輩のあんよはなかなかにくたびれているのだ。だから今日はのんびり過ごすことにしよう。それに今日はよい「ねどこ」もあるのである。

昨日吾輩は巫女の家座敷でぐーすか寝ているところの上で寝ていたのであるが、朝起きてみれば目の前におらぬ。代わりに吾輩の体の下に橙色の布が敷かれていたのである。これがなかなか寝心地がよい。まるでかぼちやのような色であるが、ところどころに穴が開いているのが不思議である。

吾輩はとろりと落ちてくるまぶたに抗う事が出来ぬ。なかなかのきようてきであるな。

それにしてもこころはどこにいったのであろう……またいなくなったのである。

「わー！ あ、あんだなんでそんな格好しているのよ」

ねむいのである、遠くでぼんやり巫女の声が聞こえてくるのである。

「目が覚めたらねこが私のスカートの上で猫が寝ていたから、仕方なく」

「仕方なくって……いや、なんであんたもあの野良も私に無断で寝てんのよ……あー、

あ、頭が痛い。二日酔いかも」

「こころのこえが、するのである。あと巫女よあたまがいたいのは、ゆゆしきもんだいな、であるろうのう、わがはいがなでて、来るので、ある………また、たび。

ぐう。

「ともかく！ あんたもこつちに来なさい、みつともない」

「おお、これは驚きのお面」

「うるさい！」

☆

「おーい」

ゆさゆさと吾輩が揺られているのである。吾輩はむくつと体を起こしたのである。

目の前に巫女がいるのである。吾輩を揺らしていたのはお主であろう。

ううむ？ 見慣れぬ巫女であるな。髪が桃色なのである。いや、この無表情はどこか

で見たことがあるのである。むむむ、吾輩は考えたのだ。

ふと、座敷から見える庭を見たのである。なんとなくそうして見たくなつたのである

そうしていると視界の端から桃色の髪の巫女が膝立ちで歩いてきたのである。明るい庭を背景にして赤い袴を摘まんでいるのである。やっと気が付いたのであるが、この巫女装束の少女はこころである。

なぜいつもの服ではなく、白い上着に赤袴を着ているのであろうか？　もしや、巫女になったのかもしれない。それならば吾輩も悪い気はせぬ。

「……………」

こころよ、吾輩を無表情で見下ろすのはやめるのである。すつと立ち上がってこころは袴を指でつまんでいるのである。それからくるくると回った。桃色の髪がきらきら光りながら揺れているのである、ちよつと手でパンチしてみたいのである。

「あたしきれい？」

止まって言うのである。

こう、良く晴れた日の座敷は狭いのであるが、お天道様の光を後ろに受けながらこころは首をちよつと傾けているのである。

吾輩はもちろんにやあおと答えておくのである。

こころは……なぜ右手を上には振り上げるのであろう。無表情で怖いのである。そう言えば巫女とは違い、腕に何もつけていないから涼しげであるな。腋も開いているのである。

まあ、どうでもいいのである。吾輩はこころの横をととて抜けて、縁側からすつとジャンプしたのである。うむ。昼も好きであるが、こう地面をふみふみするのもいいのであるな。

いい天気ではある。良い木陰はないであろうか……あのあたりがいいのである。

「急に外に出てどうしたの」

「こころも外に出てきたのである、一緒に外でお昼寝してもいいかもしれぬ。吾輩はにやあと答えておいたのである。

だからであろう、吾輩がととて歩くとこころもついてくるのである。大きな幹の良木があるのである、風と葉っぱが歌っているのである。

このあたりにするのである。

吾輩はかりかりと地面を掘ってみるのだ。もちろんこころとのこみゆにけーしょんの為である。このあたりで寝てはどうであろう、ちらりと吾輩は心を見るのだ。

「……いきなり猫が動く。まさかここほれワンわ……ここほれにやーにやー？　つまりこの下におたからがある……？」

顎に手をあてて何か言っているのである。いや、こころよ急いでどこに行くのだ。そしてなぜスコップを片手に戻ってきたのであろう……土遊びであるな！　吾輩もそれはやぶさかではない。

ざつくざくとその場をこころと共に掘るのだ。土のにおいがすると吾輩ちよつとわくわくするのである。

「あ、あんたたち！ な、なんで穴なんて掘ってんのよ!？」

吾輩とこころが振り向くと巫女がいたのである。こころよじじよーを説明するのである。

「まて、これには深いわけがある」

「はあ？ あんた、私が貸してやった服も汚れてんじやない!」

「猫がこころにやーにやー言つて地面を掘り進めていた。おそらくお宝がある」

「おたから〜?」

巫女が吾輩を見てきたのである。何だか胡散臭げであるな。

そして、吾輩もわかつたのである。どうやらこころは吾輩がおたからの場所を教えたと思つているようである。誤解である。そんなことは一言も言つてはおらぬ。

巫女よ、こころに言つてやつてほしいのである。

「たしかに最近オカルトボールみたいなのもあるし、この野良もたまにへんなこともあるし」

うむ? 何を考えているのであろうか。ちらちらと吾輩を見ないでほしいのである。

「もしかして本当におたからが……?」

でぬと、思うのであるが……。

☆

吾輩とても悪いことをしたような気がするのである。

吾輩の目の前には大きな穴が開いているのだ。巫女とこころと吾輩で掘ったのだ、手伝わぬわけにはいかぬ。

お昼には少し休んただけで、それ以外には作業が止まらぬ。

そういえば吾輩がお昼にもらったねこまんまなるものを食べていると、穴の近くに狸がいたのであるが、あれは何であつたのだろうか？

「はあはあ、結構掘ったのに……」

巫女よ、そろそろ諦めていいと思うのである。

「もう少し」

こころよ諦めるのである。

吾輩はそろそろ穴の底から自力で上がれぬようになるから、そのあたりをうろうろしているのである。うむ？ だれか来ているのである。あの片手にキセルを持ったおなごは百物語で見たことがあるのである。

それより吾輩は恐る恐る穴の中を見下ろしているのである。

吾輩、困ったのである。

巫女とこのころの頑張りを無駄にしたくないのである。

どうすればいいのであろうか？　こうなったらまたたびでも持ってきて埋めてもいいのである。いや間に合わぬ。

吾輩がぐるぐると自分の尻尾を追いかけていると、突然音がしたのである。

がキン！

「な、なんか見つかったわ」

「おおー」

吾輩は急いで穴の中を見下ろすのである。巫女が地面をばっばと手で払っているのである。するとばあああときらきら光ったのである。

巫女が地面からおおばんこばんを持ち上げたのである！　きらきらときらきらしているのである！　巫女は肩を震わせながらいったのだ。

「ほ、本当にあった　………やった、やったわ！」

「おおおお、これは喜びのお面」

巫女とこのころが抱き合いながらくるくると穴の中で踊っているのである。吾輩はあまりに驚きすぎて訳が分からぬ。不意に鼻をつくようなにおいがしたのである、吾輩が後ろを向くと、キセルを持った女子が笑っているのである。

吾輩ににこにこ笑いかけてから、踵を返したのである。

——葉っぱのできるお宝たいけんじや

何か聞こえたのであるが、意味は分からぬ。

ま、吾輩は巫女とところが喜んでくれればそれ以上言うことはないのである。

おだんごのあじはどんなものであろう

吾輩は人里にやってきたのである

ここはいつ来ても人が多いところなのであるな、吾輩はがらがらと車輪を回して大きな車が横を通るのを見ながらとて歩いていくところだ。それにしてもだいはちぐるまはずごいのである。いろんなものが載せることができ、吾輩もちよつと乗せてもらえぬだろうか？

車には上に多くのお米をいれた俵が乗っているのである。これを引いているおじさんは吾輩もたまに遊びに行く八百屋のおじさんであるな、頑張るのである。

吾輩は砂埃が目に入らぬように路地に入っていくのだ。

ここは涼しいのである。陰になっていて地面すらもひんやりしておるではないか。そこで吾輩ははつとしたのである。気になってあたりをきよろきよろ、にやあにやあと鳴いてみるのだ。

ふとは、おらぬようであるな。

なんだかこう、じめじめとした場所をよく会うから警戒してしまったところだ。だが、勘違いしてほしくはない。吾輩はふとを慕ってはおらぬがなかなか気に入ってい

るのである。

よいしょ。吾輩はそこで腰を、いや体を下したのである。おおう、やはり地面がひんやりしていて吾輩大好きなのである。足をなめてまっさーじするにはいい場所であるな。

それはそうと今日はどこにあそび……いやいや、伺いに行こう。

りんのすけのところでもよいし、巫女のところはこの頃入り浸っているところである。うとうむ悩むのである。こういう時に誰かどこみゆにけーしよんが取ればいいのであるが……お寺でもいい……とそこで吾輩は名案を思い付いたのである。

りんのすけと巫女を誘ってお寺に遊びに行くのはどうであろう。

それであればみんな楽しいかもしれない。あと、ついでにふとも見かけたなら誘うところだ。こうなつては善は急げというのである。ちゃんと体中をまっさーじしてから向かうのだ。

ペロペロ、はむはむ。

忙しいのである。あと首のあたりも搔いておこう、あとではかけぬかもしれない。

吾輩はじんそくに準備を整えとすつくりと立ち上がったのである。ちゃんと毛並みが整っているかその場で回って確かめるにゆうねんさが大切なのである！ おお、このあたりがまだ、なむなむ。

なむなむというと、お経のようである。そういえばあの猫舌のジョーはどうしているのであろうか。

「なんだとー!」

うむ? どこかでけんかの声があるのである。初めて聞いた声であるな。

「そんなふうには鈴瑚(りんご) がいうからお客さんに仲悪いって言われるんじゃない!」

いかぬ。どこかでリンゴにけんかを売っている者がいるのである。声の主よ、リンゴはあれである。しゃべれぬし吾輩ともこみゆにけーしよんが取れぬ。勘弁してやるのだ。つい最近リンゴ飴にお世話になった吾輩としては見過ごせぬ。

吾輩は忙しい体を起こして喧嘩の仲裁に向かうのである!

☆

「そうやってみたらし団子だとか黒ゴマだとか、団子本来の味に自信がないから清蘭はダメなのよ。売り上げはうちの方が上だしねー」

吾輩が駆け付けると二人の少女が喧嘩をしていたのである。

片方は声の主であるな。青い髪で頭にウサギの……耳を生やしているのである。お、驚きなのである。せいらんというのであるか、えぶろんをつけてお団子を持っているのだ。

もう片方はさきほどくろごまだとかみたらしだとか言っていた方である。頭にウサギの……お揃いであるな。ただ髪が金髪で短いのだ。あと妙な帽子をかぶっているのである。

ところで喧嘩に巻き込まれたリンゴはどこにいたのであろう。吾輩がころころしてこの場から逃がさなければならぬ。

おらぬ。もしかすれば走って逃げられるリンゴであつたのかもしれぬ。吾輩も少し見たかつたのである。

どうやらこの二人はお団子やのようであるな。道端に幟（のぼり）を立てて商売をしているのであろう。それぞれ「清蘭屋」と「鈴瑚屋」であるか……よめぬ。なんと書いてあるのであろう。

「鈴瑚なんて三色団子なんて地味なやつじゃん」

うむ？ リンゴ？ どこにいたのであろう。空にはお天道様しかおらぬ。おおい、お天道様は知らぬであろうか。駄目であるな、聞こえておらぬ。

吾輩はお天道様に聞くことをあきらめてせいらんを見ると、金髪と近い距離でにらみ合っているのである。少し怖いのであるな。

「三色団子の良さがわからない清蘭なんかにお団子を売ってほしくなんてないわ！」

金髪の手には串にささつたお団子があるのだ。上から三色、桜色に吾輩のおなかのよ

うな白に、ようむの服のような緑であるな。つやつやしておいしそうである。吾輩はお団子は食べたことはない、一つくれぬであろうか？

「このお団子を作るために地上の人間にどれだけ頭を下げて材料を手に入れたか！ 朝早くからヨモギを取りに行ったり……うんぬんかんぬん……」

金髪が早口でしゃべっているのであるが、吾輩はとてもしやないのであるが聞き取れぬ。せいらんもたじたじで涙目であるな。それにしても金髪がウサギ耳をフリフリしながらしゃべっているのは新鮮であるな。こう耳を振りながらしゃべるものはそうはおらぬ。

しかし、目が血走っているのはいただけぬ。お団子とは奥が深いのかもしれぬ。

吾輩はふと、自分の耳を見ようとしたのであるがどうにも見えぬ。耳を動かしてどうにかしてみようとその場をくるくる動いてみるのであるが、おお視界の端で動いているのである。

「う、うっさいなあ。鈴瑚のばーか」

むむもしやリングゴとは金髪のことであつたか、吾輩不覚であつたのである。ただ、吾輩は頭にウサギ耳をしたリングゴがようかいであることはちゃんと見抜いていたのである。おそらくウサギとリングゴのようかいであろう。

りんごはせいらんに「ばか」と言われて思わず三色団子をもぐもぐしているのである。

吾輩もほしいのである。

しかしせいらんよ、ばかとはいかぬ。悪口を言っただけとはいけないとけいねも言っておったのである。吾輩は紳士であるからしてせいらんに「にやあ」と注意してやるのである。

「な、なにこの猫」

ぱちくりしながらせいらんが見下ろしてくるのである。しかしすぐりんごに向き直りつつ、吾輩を指さしたのである。

「じゃ、じゃあこの猫にお団子で釣って食べたほうのお団子が魅力的じゃない!」

吾輩にもお団子をくれるのであろうか? 大歓迎である。

りんごももぐもぐつくつくしてから、串を口にくわえながら返したのである。

「ほほむところよ」

りんごよ。口の中のをきれいに食べてからしゃべるといいのである。

☆

「ほーらほら、あまいよー。おいしーよー。みたらしだんごだよー」

吾輩の前に二人の少女がしゃがんでいるのである。

せいらんが吾輩の目の前でとろとろで甘い匂いのするもののかかった団子を左右に振るのだ。吾輩は無意識に目で追っているのである。

「もぐもぐもぐ」

りんごは片手でお団子を自分でたべつつ、吾輩にもう一つ三色団子を差し出してくるのである。これがじつえんはんばいというやつであるな。ううむ、しょうばいじようず。

なやむところである。吾輩はどちらかを選べといわれると迷ってしまうのである。ううむ、うううむ。せいらんとりんごの目がいがいと必死でこわい。

「待ちなさい」

おおう？　せいらんとりんごどわがはいが声のした方を見たのだ。

「猫に甘いものは毒よ。その勝負は私が判定してあげるわ」

道の真ん中に編み傘をかぶった薬売りが立っていたのである。

長い紫の髪がさらさら風にゆれているのはきれいであるな。一体だれなのであろう。

とおくへおでかけするのはまようのである

怪しいやつである。菓売りの格好をした編み笠をかぶったふしんしゃがいるのである。

急に現れて吾輩のお団子をとろうとはふといやつである。紳士な吾輩はせいらいんとりんごの前に出たのであるのだ。不審者から守らねばならぬ。ふうう。

「な、なに？　なんで威嚇してくるのよこの猫」

片足を挙げてふしんしゃはびびっているのである。吾輩はお団子が食べてみたいのである。いきなり来ても渡さないのである。

「そりゃあ鈴仙があやしいからでしょ」

せいらいんが言ったのである。吾輩がせいらいんを振り向くともぐもぐと「みたらしだんご」を食べているのである。そ、それは吾輩がたべ……吾輩は紳士である……意地汚い真似はせぬ……。ううむ。

「怪しいって、むしろ堂々と商売しているあんたたちの方がおかしいのよ」

菓売りが編み傘をとると、ぴよこんと二つのよれよれうさぎみみが現れたのである。なぜよれよれなのであろう、猫にでもかまれたのだろうか。それに紫色の長い髪がさら

あとしているのである。

なんだ、知り合いであるか。れいせんとさつき言われていたのである。せいらんたちもふしんしゃと知り合いとは珍しいことであるな。

「こつちはこんな頑張って正体を隠しつつ商売しているつてのに」

れいせんは編み笠を片手に持つて自分の顔を仰いでいるのである。あの編み笠は吾輩の寢床にぴったりかもしれぬ。よくよくみればれいせんの瞳は赤々としてきれいである。まるでほうせきのようなようである。吾輩はほうせきは見たことはないが、たぶんあんな感じなのであろう。

れいせんは編み傘をかぶりなおして吾輩たちに向き直ったのである。笠の下で赤い瞳がぎらつと光っているのだ。

「でもあんたたちもひまねー。こんな道端でお団子談義なんて」

れいせんがふはーとため息をつきながら、やれやれと首を振っているのである。

吾輩がせいらんとりんごを振り向くと二人はむつとしながら、もぐもぐとほほを動かしているのである。

ずるいのである。お団子を食べながられいせんの話を聞くとは、吾輩もほしいのである。吾輩はにやあにやあ鳴いて、抗議をするのだ。

「まあ、元同僚として見かねてからね。ここは公平に私が裁断をしてあげるわ。……猫

にお団子あげるよりは現実的でしょう？」

ううむ、聞き逃せぬ。吾輩は怒ったのである。お団子をこう、ぐつと我慢して意地汚いことをせぬようにこらえていたところである。だからこそ吾輩はふぎやあと一声鈴仙にとびかかったのである。

「わー、なによこの猫！」

その場でぐるぐる追いかけてこである。

れいせんを吾輩はせいらんたちのままで円を描くように追いかけまわしたのである。まいったか。まあ、追いついても何もせぬ。

「はあはあはあ、もう」

れいせんが膝に手をつけて止まったので吾輩も止まったのである。疲れたからその場で腰を下ろしておくのだ。れいせんは吾輩をちらりと見て「な、なんなのよ」といったのである。なにもなにも、なんであったか？ 追いかけてこは楽しかったのである。

「まあ、なんでもいいんだけどさー」

せいらんが言うのである。

「お団子を食べてどつちがおいしいかあんたが判定してくれるんでしょ」

「はあはあ、そ、そうよ」

せいらんとりんごが目と目を合わせているのである。

☆

「それじゃあ。いただきます」

れいせんが両手に、いや片手にみたらし団子と片手に三色団子をもっているのだ。両方とも串にみつつつであるな。そしてみたらし団子にはんむと食らいついた。うらやましいのである。ねたましいところであるが、吾輩は紳士であるから何も言わぬ。

「はむはむ……うんほどよい甘さね……」

「でしよでしよー」

嬉しそうに両手でがつつぽーずするせいらんに軍配が上がるのであろうか。れいせんは片目でちらりとせいらんを見てから、三色団子ももぐもぐし始めたのだ。

「これはもちもちしてて……それでいて歯ごたえがある……。シンプルだけど、おいしい」

「ふふん」

鼻を鳴らしてりんごが両手を組んでいるのだ。これはわからぬ。どちらがおいしいのであろうか。れいせんはまた片目でりんごを見たのだ。それから微笑んでいるのである。ごつくんとお団子を飲み込んだのである!! ……いや、ちよつと感情が入ってしまつたのだ。

「確かに両方とも、あんたたちが頑張ったことが伝わってくるもの」

「鈴仙……」

おお、はもつたのである。さらに鈴仙はふふーと顎を挙げて得意気に何か言おうとしているのである。

「お互いにいいところがあるからこそ……」

れいせんの言葉の途中でりんごが手を挙げたのである。なんであろうか。

「鈴仙。それぞれにいいところがあるから引き分けとか言ったら、お代をもらおうよ？」

「……え？」

れいせんが固まっているのである。

吾輩蚊帳の外であるな、ふああとあくびが出てしまったのだ。それにしてもおなかが減ったのである。ヤマメが地面から生えてこぬだろうか？

「そーそー。まさか鈴仙。私たちの言い争いにかこつけてただでお団子を食べようとしてたんじゃないよね？」

うむ？ せいらんがお餅を搗くときの杵を持ってきたのである。おもちをつくのであらうか。れいせんよ……？……ぼたぼたとすさまじい汗をかいているのである。

「そ、そんなわけないじゃない。あ、あんたたち何を言ってるのよ。あは、あはははは」ざつと下がりつつれいせんが言っているのだ。顔が青ざめているのである。

せいらんが杵を肩に担いで「ふーん」という。りんごも手をほきほきと鳴らしている

のである。これは、ふおんな空気を感ずるのだ。吾輩はすくつと立ち上がったのだ。なんとなくここを離れなくてはならぬ。

おお空に浮かんだのである。れいせんが吾輩の両脇をもつて持ち上げたのだ。離れられぬ。

「お、落ち着きなさいよ二人とも……それに、お代なんて……買い食いなんてしたらお師匠様に怒られる……」

語尾がどんどん小さくなるのであるな、こう言つては何であるが吾輩を盾にしてどうするのであろう。吾輩はなされるがままである。

りんごがずいっと近づいてきたのである。

「ふーん、じゃあ永琳様に怒られないために私たちのお団子をただで食べようとしたつてことね？」

「ぎへり」

れいせんの手が震えているのである。吾輩が間に挟まれているのでまるで吾輩が怒られているかのようなのである。背中にれいせんの顔が当たっているのだ。

「まあ私達としては払うもんは払ってもらわないとね」

りんごが手を吾輩に出してきたのである。だからなんとなく吾輩の手をのせてみたのだ。

「いや、ちがう。猫の手がほしいわけじゃ……にくきゅうぷにぷにしてる。お団子みたい。じゅるり」

た、食べられないのである

☆

吾輩とれいせんはなんとなくとぼとぼと歩いているのだ。

「うう……帰ったらなんていいわけしよう。あんなのカツアゲよ……」

そうしたを向いて歩いているとけがをするのである。れいせんよ、おかねなど硬いだけでおいしくもないのである。りんごとせいらんに与えてもいいのではないだろうか？

「あなた、のんきそうな顔をしているわね」

失敬であるな。吾輩はれいせんを心配しているのである。

「あーあ。このまま帰っても売り上げもないし、あるのはお団子だけだし。どこか遠くにいきたいわ！ どーせ、また私の帰り道にてゐが落とす穴仕掛けてるだろうし!!」

ううむ、どことなくかわいそうであるな。吾輩になにかできることはないであろうか？ とおくにと言われても、吾輩今すぐには思いつかぬ。

よのなかはせわしないことばかりである

吾輩はぼてぼてとあてどもなく歩いているのである。

横にはあくびをしているれいせんがいるのだ。吾輩が誘ったわけではないが、たびは道連れというものであるな。旅をしているわけでもないのであるが、まあいいのである。おお、いい小石が置いてあるのだ。えい、えい。

「なーに遊んでんのよ」

れいせんも小石を転がして遊ぶのである。今なら一つ譲ってもいいのである。にやあと伝えて見るのだ。れいせんはきよろきよろしてそのあたりの石に腰を下ろしたのだ。吾輩はころころと石を転がすのを見ているのである。

「ほーら」

おお猫じゃらしとかいう草であるな。吾輩はじゃらされはせぬ、れいせんが目の前でふりふりしても……ううむ。手が勝手に動くのである。にやあ、にやあ。

「あはは。はああ」

吾輩は猫じゃらしの先つぼのふわふわしているところをつかんでみるのだ。なかなか柔らかいのであるな。吾輩はこれがなかなか好きなのである。れいせんよ、なかなか

猫じゃらしの見る目があるのである。

「ああ、薬を売ったお金がお団子に化けたなんてどうやって言い訳しよう……」

何か悩んでいるのであるな、まあなるようになるのである。吾輩はいろんな者にあつたが、みんな優しいところは一緒なのである。だいじょうぶである。

「にやあにやあつてまるで励ましてくれているみたいね」

励ましているのである。

「まあ、悩んでてもしょうがないしわ」

吾輩もそう思うのである。こう吾輩は考えることがあると地面に転がってお天道様と一緒に昼寝をするといいいと思うのだ……あ、れいせんよどこに行くのであろうか。

「かえるわ、じゃあね」

そうであるか、寂しいことであるな。吾輩はにやあと挨拶したのだ。

行つてしまったのである。

吾輩も行くでしょう。

この先は神社であるな。巫女は今日いるのであろうか。

とてとて、ころころ。吾輩は歩くのは好きなのである。走ったら疲れることもある。

今日はいれいせんと一緒にお散歩できてよかつたのだ。毎日何か、いいことがあるものがあるな。ああ、今日も素敵な日である。ううむ、生まれてこの方、素敵ではない日がない

いかもしれぬ。

神社が見えてきたのだ。山の上に続く石段があるのだ。

おう？ 誰か立っているのだから。いや……あれは。誰か大きな傘を持った少女がいるのである。ううむ、なすびみたいな傘に大きな目玉が描かれているのだ。

目立つのである。こがさであるな。吾輩の知り合いである。

とつとつと、走って近づいてみるのだ。吾輩が走るとまるで風が顔を仰いでくれるのだ。風もいいやつであるが、走ると体が熱くなるのがいかぬ。風がせつかくすすしくてくれたに申し訳が立たぬ。

それはそうと、
にやあ。

吾輩は挨拶をしたのだ。こがさよこんな神社の石段で何をして……

「う、うう」

くると振り返ったこがさは大粒の涙を流していたのだ。ど、どうしたのであろう。どこかが痛いのであるか、ああ、まだ片目だけ赤いのである。おいしやに行かなければならぬ。吾輩は心配なのである。

「わああん」

むぎゆ、吾輩は抱き着かれたのである。

「このごろ人間にだいたいどうげいにんあつかいしかされないの……」

ううむ、ゆるせぬ。よくわからぬが弱いものをいじめてはいかぬ。だいたいどうげいにんというのはよくわからぬが、こがさよ悲しんでばかりではいかぬ。この前に吾輩と一緒に人里の皆を驚かせたではないか！

「あなたのせいでもあるんだからねー。このー。ねこー」

泣きながらこがさが吾輩のほつぺたを伸ばしてくるのである。両側から引つ張つてはいかぬ。辞めるのである。

やつとやめたと思つたら、こがさは吾輩を持ち上げたのである。

顔をすぐ近くにしてほつぺたをぶつくりと膨らませているのであるが、もしかして怒っているのであろうか。おおう、揺らすでない。吾輩は上下に揺らされて目の前のこがさが数人に見えるのだ。

いきなり止まったのである。こがさに「にやあ」と聞いてみるのだ。

「肩がつかれたー」

じゃあやらないでほしいのである。吾輩はこがさのほつぺたにばんちしたのだ。あ、動くではない。ぜつみようなタイミングで動くから、軽く当てたつもりが強く当たってしまったのだ。

「ぎゃっ」

すまぬ。吾輩驚いたこがさに投げられても華麗に着地したのである。こがさよこちらを涙目でにらまれたら困るのである。わざとではない。吾輩は必死に訴えたのだ。

こがさははあと大きなため息をしているのだ。ちらちらと吾輩を見ながら言う。

「人里に驚かせてほしいって言われて行ってみればねこまわし、ねこまわし。私がうらめしやくっていつても全然驚いてくれないし……。もう異変でも起こして巫女を倒さないとだめかなーっておもったけど……。こわくて」

ねこまわし、とは何であろうか。もしかしてこの前、傘の上で歩いたことであろうか。心外な気もするのであるが、吾輩はじつとこがさを見るのだ。泣くほどのことであるならば、吾輩も真剣に聞くのである。

じー、

じー

じー

「う、うう。そ、そんな目で見ないで。いきなりあなたのせいにしたことは謝るからー。じつと見られたらちよつとこわ……。こ、怖くはないけど」

なんだか謝られてしまったのである。吾輩もまだまだこみゆにけーしよんが取れぬ。仕方なく足をなめて、落ち着くのだ。毛並みのブラッシングはいつでもせねばならぬ。紳士は身だしなみにはうるさいということである。

そういうえば吾輩以外の紳士は身だしなみになると大声で叫んだりするのであろうか？ うるさいというのも考え物かもしれぬ。

そうである、こがさも足を舐めれば元気になるかもしれぬ。

吾輩は落ち込んだこがさの足元に行つて、素足を舐めてあげるのである。

「ひつ、くすぐつたい！」

やはり元気になつたようであるな。足の指がわきわき動いているのだ。吾輩下駄をはいたことはないが、……うむ？ 神社の石段の上から誰か降りてきたのである。吾輩はよく確かめるために小傘のスカートの下をくぐりぬけ……

「(うら)うら」

なぜ怒るのである。この前のこころに怒られたばかりである。今度けいねに聞いてみねばならぬ。吾輩にはとんとわからぬ。

吾輩はこがさを見上げながらにやあと聞いてみたのだ。いや、今気が付いたのであるが……こがさよ……真後ろにこいしが立っているのである。

「もしもし、今あなたの後ろにいるの」

「ひいひい!? びつびつくりした!」

こがさがすさまじい勢いでジャンプして、前方に転がったのだ。吾輩といきなり現れたこいしは目を合わせて、互いに小首をかしげざるをえぬ。こいしは片手に紙束をたく

さん持つて、もう片方の手の人差し指を自分の唇に当てているのだ。

それから歯を見せて吾輩ににっと笑ってくれたのである。

「こんにちはー猫さん。こんど地底でこんなことがあるけど、ごらいじようおまちしていまーす」

紙束の一枚をくれたのである。ふむふむ、読めぬ。こがさよ、これを読んで……へんじがないのである。ぴくりともせぬ。

「ごうがーい、ごうがーいだよー」

訳の分からぬことを言いながら、こいしは紙束をばらばらとばらまきながらどこかに走り去ってしまったのである。いや、これは何が書いてあるのであるうか。吾輩はもう一度こがさのおしりのあたりをたたいてみたのであるが……動かぬ、ううむ。

その紙には大勢の人が、温泉につかっている絵が描かれているのである。

まずは読める相手を探さねばならぬ、吾輩はすつと立って神社を見上げたのである。口にこの紙を咥えたのだ。

なかよくはんぶんこにはできぬ

とてとて、吾輩は石段を上るのだ。

神社の石段はいつ昇つてもしつかりして上りやすい。ただお天道様が頑張りすぎた日は吾輩の肉球が熱くて登ることができぬ。程よい日には、あれである。よい日陰を見つけてごろごろするのもおつなものである。

まあ、だいたいそういう時には巫女に箒で追い払われてしまうのであるが……あれはりふじんとしかいいようがない。

それはそれとして、吾輩は生まれて初めてチラシを配るところなのだ。こいしが持つてきた絵のついた紙を口にくわえているのだ。石段を半分くらい上つたところで後ろを見れば、広い空が見えたのだ。

おっと、吾輩はあくびをしようとしたところであつた。今はならぬ。断じてならぬ。いったん頭を手で搔いておちつこうと……ううむ、ちよつとチラシがくしゃくしゃになつてしまったのだ。まあ、よいのである。大切なのはきもちというであろう。

吾輩はあくせんくとうしながら神社の石段を登りきる。最後の一段はすたつと飛ぶのが作法なのである。姿勢よく着地せねばならぬ。

境内には誰もおらぬ。吾輩とさいせんばこまで石畳が一直線に伸びているだけなのだ。のどかである。吾輩はいつもの通り、真つ赤な鳥居をくぐって中に入っていくのだ。吾輩はこの鳥居には上つたことがない。柱が丸くてつるつるするので、どうにも登れぬ。

とういか誰もおらぬ。いったんチラシを置いて、にやあにやあと鳴いてみても返事もない。

ううむ、ごろん。ごろごろ。これはゆゆしきじたいであるな。

せつかく巫女にチラシを配ろうと思つたというのに……

ごろごろ、くしくし。どうしようか考えねばならぬ。そうである、こころはいないであろうか、昨日は巫女の服を着ていたはずである。おらぬな。このさいふとでもよいが、肝心な時にはおらぬ。こがさは下で寝ておるし……。

どうしようかと吾輩はころころ転がりながら考えているのだ。石畳は体が汚れぬからよい。空に、くもが、うかんでいる。

「なんだ、おまえ」

おお、吾輩びつくりして、後ろを向いてしまったのだ。逆に驚いている声の主がいたのだ。髪の毛の白いおなごであるな。巫女のような……服であるが、頭に紅の六角帽子をかぶっているのである。……腰には剣であろうか。

にやあ。吾輩は挨拶をしたのだ。挨拶は関係のはじまりとけいねも言うところである。

しかし、白髪のおなごはじろつと吾輩を見ているのだ、切れ長の目であるな。まつ毛が長いのがあれである。吾輩まつ毛の長いものにすりすりされるとたまに痛いのだ。

「……………ご主人様はどうしたんだ？」

むむう。こやつ挨拶を返さぬ。吾輩はゆるせぬ。こうなつたら挨拶をするまで見てやるまでである。あと、ご主人様とは誰のことであるか。

「ねこに話しかけても仕方ないか……神社の適当なところに射命丸さ……まあいいか。巫女への新聞をおけそうな場所は……まったく、あの人もたまに会いに来たと思ったら雑用を……こんな時だけでもみじーもみじー。あーあ」

じー。ぶつぶつ言いながら歩いているのであるが、吾輩は一生懸命見ているのだ。このおなご「もみじー」というらしいのである。

「適当に縁側にでも放り込んでおこうかな。はあ、山の上に住み着いた連中は変なことするし、休みはないし……上司はあれだし……はあ」

なんだか肩を落として歩いているのだ。手には丸めた新聞紙を持っているのだ。吾輩もあれにはたまにお世話になるのだ。寒い日に巫女が吾輩をくるくるまいてほうちするのである……思い出したら寂しくなったのだ。

じいい。それはそうと見るのである。

「このねこ……なんでついでくるの？ なにか啜えているな、チラシ？」

なあーご。チラシをとろうとしてもそうはいかぬ

「ちよつ、離してつて。かたくなに離さない。まあ、いいか。よつと」

もみーじ、いやもみじーは吾輩を抱いて胡坐をかけたのだ。なるほどこれなら吾輩がくわえたままでも読めるのである。やるのである。

「なになに。温泉巡りイベント……地底か……。おんせんかー。疲れが取れるだろうな。なんでこの猫はこんなのを持っていたんだろうか、なあおまえ」

「いやあお。吾輩ちゃんと返事するのだ。もみじーは吾輩の頭の後ろの方を撫でてくるのだ。おおう、なかなかいいのである。吾輩はもみじの膝の上でコロコロ動くのである。」

「どうしてこんなチラシを持っていたんだ。あは、こいつ。ここか」

おなかを撫でるのもきゆうだいてんであるな。そういえばきゆうだいてんとは何であらうか。まあいいのである、誉め言葉なのである。

「まあ、猫に聞いてもしたかないか。言葉が喋ればなあ」

それは吾輩も思うところである。こみゆにけーしよんができればいいのであるが、

「そういえば地底には心が読めるとかいう妖怪がいるらしいけど」

!!! 吾輩はぴーんと来たのである。誰かわからぬが、こみゆにけーしよんができるやもしれぬ。もみじーよ。地底とはどこであろうか、にやあにやあと聞いてみるのだ。

「お、お。暴れるな。もう。なんなんだ」

立ち上がろうとするではない。吾輩は切実に巫女ともこころとも小傘とも、ついでにふとともこみゆにけーしよんがとりたいのである。吾輩はもみじーを逃さないために腕に飛びついたのだ。

「(い)う」

それでも立ち上がろうとするのであるな、こうなつたら頭を押さえるのである。吾輩はもみじーの細い腕をすたすたと伝っていくのである。結構こわい。

「わ、わ、わああー」

もみじーが驚いて中腰になったのである。ええい、ここで落とされてはたまらぬ。吾輩はもみじーの背中に飛び乗ったのだ。

「せ、背中に乗るな」

顔をあげないでほしいのである。

まるまったもみじーの背中がぴんとなつては吾輩落ちてしまうのだ。そうはさせぬ。吾輩は前足に力を込めて、もみじーの肩に引つ掛けたのだ。

張り切りすぎたのである。吾輩はもみじーの肩を起点にジャンプしてしまつたのだ。

くるりと一回転して、もみじーの肩に着地したのである。吾輩落ちるようなへまはせぬ。そして胸をしつかり張るのが紳士なのである。

「ぐえ、おもっ!?!」

失礼であるな。おお、もみじーが肩に乗った吾輩をつかんできたのだ。勢い余って、吾輩を抱いたままもみじーもちよつと回転したのだ。

ちゅんちゅん。

鳥が鳴いているのである。もみじーは吾輩を変なぼーずで抱いたまま固まっているのだ。何をしているのであろう。顔がだんだんと赤くなつていつて、口をへの字に結んでいるのだ。

それから大きくため息をついたのだ。

「何が悲しくて一人で大道芸をしないとイケないんだ……」

吾輩を向かい合うように持ったままいうのである。すまぬ。こみゆにけーしよんがしたいのである。吾輩はもみじーの顔をじーと見てみるのだ。するとくすりとしてくれたのである。

「地底は遠いし、めんどくさいことも多いし、どうしようかな。ん?」

もみじーが急に横を見たのだ。吾輩も横を見る。

そこにはほっぺたを膨らませたこがさがいたのである。何を怒っているのであろう。

「わ、わたしというものがありながらー」

なにか変な方向に怒っている気がするのである。こがさはからから下駄を鳴らして近づいてくるのだ。それからおお、もみじーから吾輩を取ろうとするのだ。

「おい、いきなり来て誰だおまえ！」

「私の方がうまくねこまわしできるんだからー」

吾輩を取り合うのではない。ここはなかよくはんぶんこに………されては困るのである。ちよつとようむを思い出してしまったのだ。

てんぐもたいへんなのである

吾輩はものではないのである。

またたびのように二つにすることはできぬ。いやしかし、またたびをふたつにするこ
となどあるのだろうか、吾輩にはわからぬ。それはともかくこがさともみじにみやあ
みやあとげんじゆうなこうぎを行うまで、引つ張られ続けたのである。

それからお天道様がほんのり傾いたくらいである。

お天道様はいつものんびりしているのである。

吾輩はこがさに抱かれながら深くしあんをしている。

こがさは吾輩を両手で抱きかかえながら、器用に自分の傘ももっているのである。腕
で挟んで首で支えているのは吾輩もやってみたいところであるが、吾輩は傘を持つてお
らぬ。

「ところで天狗がなんで神社にきているんですか？」

「それはまあ、うん。……お前には関係ない。いや、それを言うならなぜ唐傘風情がいる
んだ」

じろじろと怪しげな瞳でもみじがこがさを見ているのである。

それを見てこがさがむっとしていたのである。

火花が散りそうならみ合いであるな。

吾輩は心配して後ろを向こうとするのであるが、ちよつと強く抱かれています。うごけぬ。もぞもぞ。しかし、もみじはいかぬ。こみゆにけーしよんはえがおとうのである。

喧嘩もいかぬ、こがさももみじも仲良くしてほしいのである。吾輩は付き合いは長くはないが、みんなが笑顔の方がいいのである。ううむ、こんな時にふとがいればよいと思ってしまうのだ。

吾輩はしばし考えていいことを思い付いたのである。二人が笑わぬのであれば、吾輩が笑顔になればいいのである。そうであるな！吾輩はもみじとこがさを見ながらいいっぱい喧嘩を辞めるように鳴き声を上げたのである。

んなーお

おお、なんかへんな声が出たのである。吾輩初めてのことに感動したのである。

「な、なんだ、へんな声を出して」

もみじもひるんでいるのだ。吾輩はここで畳みかけるように声を、くしゅん。いかぬ、くしゅんをしてしまった。にやむにやむ。口の中で舌を動かして、吾輩の声を整えるのだ。こがさがなぜか頭を撫で始めたのである。

「よしよし」

なぜ吾輩の頭を撫でるのはわかからぬが、こがさよもうちよつと上の方がいいのである。耳のあたりをこう、おお。よい。

「それにしてもおとなしい猫……そんなことはないか。唐傘、おまえの」

「もう天狗は居丈高だねえ。私の名前は多々良小傘。あなたは？」

「……犬走 椀。それでその猫はえつとこ、小傘の猫なのか？」

「うーん」

小傘が吾輩を持ち上げたのである、見つめあう吾輩たち。こがさはなぜか何かの自信にあふれた顔で吾輩を見つめているのである。

「あなた、私の猫？」

吾輩はわがはいである。誰のものでもないとはこりに思っているところである。吾輩はきりりと表情をひきしめてうにやあと答えたのである。

するところがさにはあと笑顔になって、吾輩のおなかに顔をうずめてきた。

「ふかふか」

「いや、あの。それは小傘の猫……」

もみじが近づいてくるとこがさがにやりと笑ったのだ。この顔はわるいかおであるな。いがいとごくあくにんかもしれぬ。こがさもみかけによらずあなどれぬ。みかけ

によらぬといえどもごくあくに……それはないのである。

「あなたもやってみる？」

「いや……いい、うわっ」

こがさが吾輩のお腹をもみじにおしつけ始めたのである。なんだかくすぐつたいのである。もみじが何かうめいているのであるが、吾輩には見えぬ。吾輩の前にはもみじの白い髪と六角帽子が見えているのである。

「ほらほら」

「やめ、やめ……」

「ぐりぐりー。おどろけー」

「……!!」

あ、もみじが逃げ出したのである。

こがさが「まてー」などといいながら、吾輩をもって追いかけているのである。神社の周りをぐるぐると走り回っているのであるが、ううむ。これは意外と楽しいのである。というか、吾輩は走らぬから楽である。なぜがきもちよい。

それにしてもこがさももみじも仲良しになってよかったのである。二人とも息を切らしておいかけっこしているのである。じつにたのしそうであるな。しかし、吾輩もそろそろ降りるのである。こがさ手で体をひねって、ぬけだすのだ！

「いら、ど、どじようみたいに」

いや、どじようではないのである。たとえがひどい。せめてあれであるな、こう……
思いつかぬ。吾輩は難問をかかえつつもこがさの「まの手」から逃れたのである。しゆた、なんだかひさびさの地面である。くしくし、前足で首を搔いた。かゆかったのである。

「はあはあ、なんで私に猫を押し付けてくるんだ」

おお、もみじも戻ってきたのである。おいかけっこはたのしかったのであろうか。そういうえさつきまで喧嘩していた気がするのであるが、もうとおい昔のことのようである。いい思い出になったのである。

そうである。そういうえさ、吾輩はチラシを持ってきていたのである。あれはどこに行つたのであろう。吾輩はもみじにやあと聞いてみる。

「にやあにやあ、つて私が鳴いてもな」

ううむ、話を通じぬ。寂しいのである。それではこがさはどうであらうか。吾輩はこがさに呼びかけてみたのだ。

「こがさー」

なんでかわからぬが、舌をべろりと出して吾輩の真似をしているのである。……ぜつたいに通じてはいないのである。

こまった。吾輩は地底にいかねばならぬ。そして「こころのよめる妖怪」とあつてみたいのである。もしもこみゆにけーしよんが巫女と取れるのであれば、吾輩はうれいとして言いようがない。

吾輩は悩んでしまうのである。こがさにもみじにも伝えるすが吾輩にはない。ううむ、ううむ。こころとその場で転がりながら思案してみるのだ。

「あはは、猫さんこころこころ」

こがさの声がするのだ。

「くす」

控えめなもみじの声もするのだ。いや、そうではない。吾輩はこみゆにけーしよんがとりたいのである。どうすれば――

「ふむふむ。地底で温泉ですか。これは面白い記事になるかもしれないね」

うむ？ 吾輩のふさふさの耳に新しい声がするのだ。二人も驚いているようである。どこであろうか、こくくせものは。そういえばくせものとはなんであろう。つけものの親戚であろうか？

「く、く、くの声は」

もみじよ知っているか。……よく考えたら吾輩も知っている気がするのである。声

は上からしているのである。吾輩はその場に座り込んでお天道様の方向を見上げた。

おお、ひらひらくろいはねが落ちてきているのである。そこには空中で腰かけたようなポーズでチラシを見ている少女がいるのである。

いや、以前に吾輩は空の上であつたことがあるのである。あれはまりさと一緒に空を飛んだときであつた。

「射命丸様。……ちつ」

「おやおや、下つ端白狼天狗から何か聞こえてきましたね」

しやめいまる、へんな名前である。空に浮かんでいる少女があの日のままのしやつとすかーとであるな。あと頭に六角帽子をつけているのである。

「椀が神社で巫女と鉢合わせすれば面白いこともあるかと思いましたが、このチラシ」

しやめいまるが手元でチラシを動かしているのである。にんまりと赤い目を光らせながらもみじに話しかけているのだ。チラシには「おいでませちてい」と書いているのであるが、読めぬ。でも絵は楽しそうである。

「とても楽しそうですね。椀。特別に休暇を与えますから、取材に行つてきてください。よかつたですね。ひさびさのおやすみですよ」

「な、そ、それは！　ち、地底にはお、鬼が……」

しやめいまるの顔が楽しそうな笑顔になつたのである。

がんばりさんもやすまねばならぬ

しやめいまるという少女は天狗のようである。もみじとは知り合いということなのであるが、なんだかふんいきがちがうのである。

「部下を思いやって温泉旅行も考ええるとは、いやはや、少し甘すぎますかね」

ばさばさ、黒い羽を鳴らしながらしやめいまるが地面におりてきたのである。もみじは何かいっているようであるが、顔にじんだ脂汗がすごいことになっているのである。

「いや、し、しかしですね。わ、私は」

もみじが吾輩をちらりと見てきたのである。がんばるのである。何をしているかはよくわからぬ。もみじはなぜかため息をつけてから、しやめいまるにむかいあつただ。

「私は仕事が好きなので休みはいりません……」

「おやおや、それは感心ですね。椀」

「そ、それほどでも、だ、だから地底には……」

「もちろん。そんな椀には温泉旅行から帰ってきてから、たと仕事を用意しておきますから。安心してくださいね」

「は、ははは」

もみじは頑張り屋さんなのであろう。

たまには休んだ方がいいのである。吾輩はちゃんと休む時はやすんで、がんばるときはてきどにがんばるのである。またたびを取ることに関して吾輩のみぎにできるものはないのである。

そういえば、吾輩のひだりにはだれかいるのであろうか、気になって横を向いてみる。うむ。こがさがいるのである。

「なんだか蚊帳の外なきがするわ」

こがさよ、吾輩がちゃんと相手をしてあげるのである。さみしがることはない。

そう思つて吾輩はこがさの足にあたまをすりすり、してみるのだ。

「くふふ、くすぐつたい」

こがさが軽くにげたのである！ 吾輩なんとなく追いかけてしまうのだ。

くるくるその場で追いかけてつこをして、吾輩は疲れたのである。座つて休むのだ。めりはりが大事とけいねも言っていたのであるが、めりはりとはなんであろう。

ふと目が合ったしやめいまるは吾輩を見て、ちよつと呆けているようである。

「ああ、お久しぶりですね。空の上であつて以来ですか。猫さん。いや、ひどい目にあいましたよあれは」

よくわからぬが吾輩も久しぶりだと思うのである。

しゃめいまるはひどいめにあったらしいのであるが、吾輩もむりやり空の上に連れていかれたのである。それにしてもしゃめいまるよ、なんでえがおで吾輩に近づいてくるのであろうか、なんとなく怖いのである。

吾輩はそれとなくもみじの足元に隠れたのである。

「い、こら私を盾にするな」

な—お。

かくまってほしいと吾輩はうったえる。

「おや、椀。猫さんとお友達になつたのですか」

「い、いえ。こら離れろ」

冷たくされるとさびしいのである。吾輩はひつしにめで訴えるともみじも困つたような顔をしているのである。吾輩はわかつているのである。もみじは悪いようかいではない。きつといういろいろいいこともしているであろう。

「そうですね」

ぱんとしゃめいまるが手をたたいたのだ。吾輩びつくりして椀の足につかまってしまったのである。しつれいしたのである。吾輩びつくりして椀の足につかまってしまったのである。しつれいしたのである。

「椀。それに猫さんと、その付喪神さん。三人で地底を取材してきてください。椀が

引率するように」

「ま、待つてくください。なんでですか」

「おもしろそうですし。それに上司の命令です」

おお、吾輩地底に行けるのである。うれしいのである。

「お、おうぼうだー。それにおもしろそうって普通は婉曲的というものじゃないのですか？」

「そうそう、付喪神さん。いや小傘さんでしたね」

「無視し始めた……」

もみじよ、そう肩を落とすことはないのである。

吾輩にはちゃんとわかつているのである。吾輩も巫女に相手をされぬことがあれば寂しいこともあるのである、もみじはきつとしゃめいまるがすきなのであるな。

「うー」

うなりながらもみじが爪を噛んでいるのである。なんとなく怖いので吾輩は小傘の足元に移動するのだ。

「おいでませー」

こがさが両手を広げて吾輩を迎えてくれたのである。吾輩もおとなしく抱かれるのだ。こがさも地底に行くのであろう。しゃめいまるが言っていたのである。こがさは

吾輩をよしよししながら話し始めたのである。

「私も今日はお墓でおどろかせる日だから」

「こがさはいかぬのであるか……さびしいのである。

そう思っているとしやめいまるがこがさの肩をもって言ったのである。

「小傘さんとは以前取材でお会いしたことがありませんね。どうですか、人間をたくさん驚かせておなかいっぱいになりましたか？」

「う、ま、まあ。ぼ、ぼちぼち……こ、このまえは人里で大勢おどろいてくれたわ」

吾輩が傘の上に乗って歩いたときのことであるな。あれは盛り上がったのである。

「なるほど、なるほど。さすがですねえ」

「そ、それほどでも」

「前もかなり恐ろしいお化けだと思っていました、いまでは里の人間たちを手玉にするほど成長しているとは……感服しました」

「……………ま、まあ。それほどでも」

なんであろうか、吾輩を抱いているこがさが小刻みに震えているのである。吾輩が見上げると、目がやまめのように泳いでいるのである。しやめいまるも横を向いている……うむ？ 目だけこちらを見ているのだ。流し目というやつであろう。吾輩もやつてみるのである。いみはない。

「地底に住んでいる鬼の一人や二人驚かせに行つてみてはどうですか？ いや……鬼を驚かせるくらいだったら、人間などいつでも驚かせることはできるとは思いますが」

こがさが吾輩を見てきたのである。こころなしか目がきらきらしている気がするのである。

「お、鬼を驚かせることができれば、きつと人里の人間たちも私を恐れてくれるに違いないわ！」

にやあにやあ。吾輩はよくわからぬが、楽しそうなので吾輩も鳴いておくのである。なんであれ、楽しいことはいいことに違いないのである。吾輩はよくわかつておるのだ。

「そうそう、その意気です。さて、権」

「はい……なんでしょうか」

「ということで取材を願いますね。カメラくらい持っているとありますが、いろいろと面白い話を期待していますよ」

「……………なんでこんなことに」

もみじはなんだか元気がないのである。吾輩たちをどんよりもりぞらのような目で見ているのだ。しゃめいまるはなんだかにこにこしているのである。

なにはともあれ、吾輩はこがさともみじが一緒に地底であそべることが何よりもうれ

しい……むむむ、いやいや、吾輩は本当は地底にいるという「こころがよめる」という
ようかいと会うというすうこーな理由があるからして、遊びに行くのではない。

……ちよつと遊んでもいいであろうか？

吾輩は元氣のないもみじにやあと聞いてみたのだ。

もみじは目をぱちくりさせて、ほんのり笑顔になったのである。

「にやあ」

おお、もみじが吾輩がなんでか鳴き声をはなつたのだ。これは遊んでもいいというこ
とであろうか。

まあいいのである。吾輩はもぞもぞとこがさの手の中で動く。

そろそろ降りてもいいであろうか。

こがさが放してくれたから地面に着地したのだ。吾輩はだつこもすきであるが、こう
地面をふみふみするものやぶさかではない。

「それでは皆さん、よい旅を……」

しやめいまるがばさつと羽を鳴らして空に上がったのだ。吾輩が見た時にはあおい
そらにすうと上がっていくのが見えたのだ。てんぐはとべていいとおもうのである。
吾輩も練習すればできるであろうか？

「それじゃあ、いこー」

「……おー」
こがさも元気であるな、傘をくるくるまわして片目をつぶってきたのである。

もみじはなんだか疲れているのである。

おちていくときものんびりできるのだ

幻想郷はどこもかしこも吾輩の庭である。

吾輩は日陰にある、よさげな岩の上でのんびりだらりとしてみたのである。こうごつごつしているところが冷たくて気持ちいいのであるが、吾輩は前足をしっかりと踏み、きれいにしておくのである。

なんといつてもこれから初めての地底なのである。おめかしせねばならぬ。

ペロペロ、にやむにやむ。……うむ！

吾輩はどこにでもいくのである。幻想郷はどこもかしこもが吾輩のにわであると重ねて言うのだ！ ……なんとなく気合が入ってしまったのである。

はずかしい、吾輩は岩の上できよきよとだれもみていないか見てしまったのだ。誰も見ておらぬ、吾輩は安心してさらなるけなみのめんてなんすを開始したのだ。

それにしてもこれはすごいのである。

吾輩は地底にどうやって行くかはしらなかつたのであるが、吾輩の目の前におおきなおおきな入り口があるのだ。まっくらでおおきな穴が吾輩の前の地面に開いているのだ。

吾輩は地面におりて、その「おおきなあな」をのぞきこんでみたのである。そこがくらくてよくみえぬ。手じかにあったこいしをおとしてみたのである。

ひゆうーとおちていつてみえなくなったのである。

こいしも怖かったかもしれぬ。悪いことをしたのだ。

——いてつ！

なんか下の方で声がしたのである。しかし、相手は見えぬ。誰かは知らぬがすまぬ。わるぎはなかったのである。吾輩ははんせいしつつ、とてとて穴から離れていくのである。

それにしてもおそいのである。こがさはなにをやっているのだろうか。

「そろそろいきませんか」

なんだか情けないこがさのこえがするのである。吾輩はそちらに歩いていくのだ。みればこがさともみじの肩をもんでいるのである。なぜであろうか。

もみじはその場にしゃがんで大きなため息をついているのである。やはりつかれているのかもしれない。吾輩はこがさの足元に歩いて行く。

「はあ、なんで地底なんかに行かないといけないんだ……」

「まあまあ」

こがさがもみじを慰めているのだ。吾輩もしやがんでいるもみじの前に回り込んで、にやあと声をかけてあげたのだ。もみじはため息をつきながら吾輩を撫でてくれるのだ。

「おまえ、なんにも考えていなさそうでいいね」

しつれいである。吾輩は撫でてくる手を首を振って払ってみるのだ。こうぎである。するともみじは吾輩の鼻を指で押してきたのだ。まけぬ。まけぬのだ、吾輩はそのゆびをなむなむと舐めてやるのである。にげるではない。吾輩はもみじの手をつかんで舐めるのだ、なんであろう、くせになる。

はむはむ、なむなむ。

「くっくっ」

びくっ。

吾輩はおどろいてもみじをみると、なんだかやさしそうな眼で吾輩を眺めていたのである。それからもみじは立ち上がって、言うのだ。からりと腰の刀が音を立てている。「しかたない。まがりなりにも休みだから、せいぜい楽しもう。……鬼の皆さまのことはできるだけ考えないようにしよう……」

「そうそう。これを逃す手はないね！」

こがさが元気に言うので、吾輩もにやあにやあと相槌をしてあげるのである。なんだ

かこがさとは息があっている気がするのだ。もみじもくすりとしているのである。吾輩の勝ちであるな。……いまのはときとうなのである。

でも、まあ、あれである、どんな時でもたのしくすることはいいことだと吾輩は思うのである。

「よし、いこう」

もみじの声に吾輩とこがさがおーとにやーで合わせたのだ。

「ほら、おいで」

……？ なんでもみじは吾輩をつかもうとするのであろうか、吾輩は意味もなく逃げってしまったのである。こがさのスカートの間をくぐりぬけて、草むらをとつと歩くのである。

「わあ」

こがさの声がしたので吾輩は後ろを振り向いてみるのだ。不覚である。

「捕まえた」

もみじにつかまってしまったのである。鬼ごっこであろうか。吾輩はみやあともみじに聞いてみるともみじは困ったような顔をしているのである。

「おまえ、飛べるのか」

やってみねばわからぬ。しかし、ちよつと怖いのである。

なるほど地底に行くには飛ばねばならぬのであるな。吾輩はもみじにつかまることにしたのだ。だつこである。こういうのをたくしーというらしいのであるが、吾輩は「たくしー」を知らぬ。たくわんの仲間であろうか？

「それじゃあ小傘もいくぞ」

「はい、いて」

こがさが石につまづいた。持っていたかさが勢いあまつて吾輩ともみじに振られたのである！

「……ひゃあ」

もみじが情けない声をだして横に飛んでいるのである。うむ？ こがさともみじがそれぞれ遠くに見えるのである。くるくるせかいが回っているのだ。これはもしや、吾輩離されたかもしれないぬ。

……！ 地底の穴に落ちていくのである。おお、体が動かぬ。手足をじたばたしてみるがつかむところがないのである。どんどんお空が遠ざかっていくのである。もみじよ助けてほしいのだ。

「助けにいくからまっている！ えつと、ねこー！」

もみじが吾輩を呼ぶ声がするのである。吾輩は安心して落ちることにしたのである。こういうときは慌ててはいかぬ。落ち着いておちることがいいのである。

「おや、猫のお客さんとはめずらしいねえ。おいそぎ?」

にやあ! いきなり真横から話しかけられたのだ! みれば、吾輩の横をねそべるような格好で一緒に落ちていく少女がいるではないか! めずらしいのである。

まあ、急ぎといえば急ぎであるな。体が勝手に急いでいるのだ。

そんな吾輩に少女はのんびり話しかけてきたのである。落ちていくときでもれいせつを忘れぬ吾輩も姿勢を正したのである。くるくる回つて目が回るのであるな。

「私は黒谷ヤマメ。いごおみしりおきお、なんて言つてみたり」

なぬ!? ヤマメ? 地底にもいるのであろうか。食べたいのである。

吾輩はみやあみやあとくろたにに聞いてみるのである。ヤマメのことははだいすきなのである。くろだによ

「猫さんは地底にいくのかい。最近温泉がいい感じらしいから、楽しんでおいで」

くろだにはからからと笑っているのである。頭のリボンが揺れているのである。とても楽しそうであるな。吾輩はまんぞくである。なんとなく誰かが喜んでいるのはいい気分である。だからヤマメを欲しいのだ。

「猫。そいつから離れろ!」

白い光が落ちてくるのである。

いや、もみじであるな。すごい速さで吾輩をつかもうとしているのである。

「よつと」

「いやあ！ くらだにが吾輩のしっぽをつかんで投げたのである。そのせいでもみじにつかまれなかったのである。おおはやい、おちていくのである。吾輩の下は底がみえぬ。」

「邪魔をするな、土蜘蛛」

「おやおや、友好じゃないなあ。あの黒い髪はやつといい、なんで天狗がこうもけんかつばやいのかねえ」

もみじとくらだにが落ちながらにらみ合っているのだ。どうでもいいのであるが、吾輩は尻尾をさすりたいたのである。きよろきよろしても吾輩は飛べぬ。

「きやつち」

「おお、吾輩を柔らかいものが包んでくれたのである。みればこがさではないか。おぬしがすべて悪いのである。しかし、吾輩は過去はとわぬ。許すのである。こがさは吾輩を抱いてくれてすいーと空を飛ぶのだ、うらやましいのである。」

「どうせ地底に行くんなら、地下に落とされた妖怪達の力を味わうがいい。毒符『樺黄小町』！」

「白狼天狗の力をなめるな。牙符『咀嚼玩味』」

もみじとくらだにがふところからカードを取り出したのである、綺麗であるな。うう

む、吾輩はどちらを応援するべきであろうか。

なかよくなるしゅんかんはきがつけぬ

吾輩はこがさに抱かれて地底に落ちていくのである。

最初はもみじが吾輩をのせてくれるはずであったが、今はこがさが飛んでくれているのである。吾輩は自分では飛べぬ。これがよくない。今度練習をしてみようと思うのであるが……そらをとぶ練習とはどうすればいいのであろう？　ううむ。

「ながいなあ」

たしかにどこまで行っても暗闇が終わらぬ。吾輩はうむうむとうなづいてみたのだ。

「にやあにやあつて、まるで相槌を打ってくれているみたい」

くすくすところが笑っているのであるが吾輩は相槌を打っているのである。ちやんとわかつてほしいのである。

吾輩は真つ暗なやみのそこを見たのだ。この下はこころが読めるといふ妖怪がいるらしいのである。吾輩はこみゆにけーしよんが取れるかもしれないと思うと、むねが踊るのである。ところでむねが踊るとはどうやって踊るのであろうか。

吾輩、踊ったことはないのであるが、盆踊りのまねを今度してみるのもいいかもしれない。

それにしてもいい風である。吾輩のけなみがさらさらゆれるのである。

そんなことをおもっているときまわりがぱあと明るくなつたのだ。まるで花火のようである。

きらきらの光の塊がそこらじゅうを飛んでいく。吾輩はそれをつかもうと前足を伸ばしても届かぬ。地底に向かつてきらきら落ちていくのだ。

「おお、さすがに天狗はやるね」

くろだにが吾輩とこがさの目の前を通つたのである。その時吾輩に対してくろだにが片目をぱちんと閉じて、サインを送つたことを吾輩はちゃんと見ていたのである。

次の瞬間吾輩とこがさの真上から光が落ちてきたのである。吾輩、にやあと鳴くことしかできぬ。こがさよたのむだ。

「わああああ」

おお。おお。

こがさがくるくると空中を飛んでいくのである。吾輩目が回る。

吾輩たちの周りを白い光のたまがすごいはやさで落ちていくのである。あれがだんまくとつというやつであろう。このまえお寺に行ったときふとといちりんが喧嘩しているのを見たのである。

「ながれ弾幕に注意ってね」

くろだにがまた吾輩たちの前にやってきてけらけら笑っているのだ。それから光を発するとぶわつと泡のように消えたのである！ これは手品であるな。吾輩は初めて見たのだ。

「さて！ 土蜘蛛……にげたか」

いれかわりにもみじがやってきたのだ。盾と剣を抜いているのである。もみじよ、地底に落ちていくときくらいは喧嘩を辞めるのである。こがさからもいつてやるのだ。

「あの一。弾幕ごっこは遠くでやってくれませんか……？ スカートが焦げた……」

うむ、確かにこがさのスカートの端がこげこげである。もみじよこれはいかぬ。さっきの光の玉を撃つたのはたぶんもみじである。あんずるではない、あやまつてもみじよーじよーしゃくりようのよちはあるのだ。べんごしを呼んでもかまわぬ。みんなで仲良くするのである。

「……ふん」

鼻を鳴らしてもみじが盾と剣を収めたのである！

もみじはいじつぱりである。吾輩がちゃんと教えてやらなければならぬ。悪いことをしたらちゃんと謝らねばならぬ。吾輩はみやあみやあと訴えたのである。

もみじが吾輩を見たのである、そして、なんで吾輩の鼻を押すのだ。

「こいつ、怖かったのか。もう大丈夫だ」

「え、こわかったの？ 猫さん」

もみじとこがさよ。そういう話はしておらぬ。

「神社でもいきなり飛びついてきたり、妙になつかれているからな」

ううむ。なんでふともみじも吾輩がなついているや慕っていることにしたのであろうか。吾輩には永遠の謎である。おおう、もみじよ吾輩の頭をなでるではな……やぶさかではない。

「ふふふ」

「あはは」

まあ、なんだかもみじもこがさも笑っているからよしとするのである。吾輩はなされるがままである。ここは吾輩が大人にならねばならぬ。

今気が付いたのである。吾輩は見知らぬ地底で二人が迷わぬようにほごしやとしてしっかりせねばならぬのだ。こころとお祭りを歩いた時のようにはぐれてしまつともみじが泣くやもしれぬ。

これは顔を引き締めねばならぬ。きりり。

「なに、見ているんだ。さあ、行こうか」

もみじが吾輩から手を離れたのだ。少し名残惜しいのである。

吾輩をこがさがのぞき込んできたから、吾輩は「にやあ？」となんでのぞき込んでき

たのか聞いてみたのだ。するとこがさは大きなめをぱちぱちさせて、につこり笑ったではないか。

「にやあにやあ」

ふむふむ。わからぬ。

吾輩のことばを真似してくれるのはうれしいのであるが、吾輩にはとんとわからぬ。まあ、いいのである。もみじとこいしと吾輩達は地下に降りていくのである。もみじが先頭であるな。

それにしても深い穴である。まだ底が見えぬ。

うむ？　なんか変なのである。いわかんがあるのだ。

「おい……こがさ」

きようである。もみじはこつちを向いて飛んでいるのだ。

「な、なんですか？」

こがさがなんとなく情けない声を出しているのである。安心するのである。もみじはがんばりさんでいじっぱりなのは知っているのだ。吾輩はちゃんと叱れるからして、こがさもあんしんするのである。

「なんか変じゃないか？」

「え？」

「なにが変かはわからないけど……おかしいような気がする」

吾輩とこがさは目を合わせてみるのだ。何がおかしいのであろうか、ちゃんと吾輩合わせても4人そろっているのだ。どこもおかしいことはないのである。

いや……よく考えたら吾輩もさつきおかしいと思ったのだ。うむ。こいしよ何か知らぬか。

「別におかしいところはないかなあ？ 気にしすぎじゃないですか」

こがさもこう言っているのだ。

「気のせい、なのかな？ 弾幕ごっこをして疲れたのかも」

もみじが大きくため息をついたのである。お疲れ様なのである。

こがさよ何か元気になることを言っただけである。こがさは吾輩のほつぺたつつきながら言うのだ。

「地底には温泉もあるんですよ！ きつと椀の疲れも取れるわ！ ね、猫さん」

「温泉もって、私はそれが目的なんだけど。ああそういえば、写真撮らないといけないな」

「地底によーこそー。ぱちぱち！ ねこさんこつちおいで」

「温泉かー。猫さんも入るのかしら。……でも地底では鬼を驚かせてみせるわ」

「小傘には、むりなきがする……」

「む」

こがさよ膨らむではない。手でつつきたくなるのである。それでももみじとこがさはお互いにほほえんで、くすくすと笑っているのである。なんだか仲良くなったようである。吾輩は満足である。

吾輩はこいしに抱かれながら満足げに二人を見ているのである。

？
? ? ? ? ?
? なんて吾輩はここにいるのであろうか？

「おひきしじぶりー」

こいしである。いつの間にいたのであろう。それにしてもまつ毛が長いのである、いやどうでもいいのである。それよりもあれである「にやあ」と挨拶をしたのだ。

「あ、いつのまに」

こがさが気が付いたのである。たすけて……いや別に助けは必要ない気がするのである。こがさがにやりとしているのである。もみじも剣を抜いているのであるが、いらぬ。しまつてほしい。

「よーし。さつきは楯にしてもらったから今度は私が……」

こがさが大きく傘を振りかぶったのだ。

「つひやあ!」

もみじの背中にちよくげきしたのである。

「あ、ごめんなさい!？」

などと言っているうちに勢いのついたもみじが背中からつ込んでくるのである。こいしよ、どうすればいいのであろう。

うむ。もうおらぬ。吾輩は空中で一人である。

むぎゆ。吾輩にもみじのおしりがげきとつした!

ゆめのなかでもあいがあるものである

吾輩が目を覚ますと空にお星さまがいっぱい浮かんでいたのである。

さつきまで小傘ともみじと一緒に遊んでいたような気がしていたのであるが、いつの間にか夜になってしまったのであろうか。吾輩は落ち着いて前足を舐め見る。ぺろぺろ……わからぬ時には毛並みのいれが一番であるな。

それにしてもきれいな空である。お星さまがしかいっばいに広がって、きらきらと流星が落ちていくのだ。流れ星はいつも急いでいるのである。それでも今日は嫌に多い。吾輩はその場であたりを見回してみたのだ。

なんだかしつかりした作りの足場であるな。吾輩はとても気に入ったのである。

うむ？ そういえば吾輩はさつきまで神社にいたはずである。ここはどこであろう。きよろきよろ……にやあにやあ……。

まあ、いいのである。ここがどこかはわからぬが、吾輩の庭には変わりない。吾輩は安心してその場でうずくまったのだ。夜風も涼しい、吾輩の好みの季節である。

もし、目の前にヤマメが置いてあればいうことはないのであるが……吾輩は思わず舌でぺろりと口元を舐めしまったのである。いかぬいかぬ。吾輩は紳士であるからして、

こうはしたない真似は出来ぬ。

うむ？ おお？

吾輩は後ろを向くと皿に入ったヤマメが置いてあるのである。吾輩はびつくりして飛びつこう……いやいや、吾輩は用心深いのである。あたりを見回して持ち主を探す。ちやんと一声かけてから頂かねばなるまい。

じゆるり。

いやいや、まだいかぬ。

ちらり。

ヤマメが置いてあるのだ。吾輩は警戒しながら円の動きで近づいていくことにした。さすりさすり、ヤマメを触ってみてもどこもおかしいところはないのである。一体だれがこれを置いたのであろう、もぐもぐ。まったくわからぬ。

「それは食べてもいいんですよ」

吾輩は飛びあがったのである。

急いで振り向くのであるが、最近なんだか脅かされてばかりである。ちよつと悔しいところであるな。今度ふとでも脅かしてみるのもいいかもしれない。

「ほんばんは」

吾輩に挨拶をしてきたのは、椅子に座りながらまゝに肘をのせてにやに

やしている少女である。けいねから聞いたことがある、頭にさんたくろうすのような帽子をかぶってるのだ。

「猫の夢も久しぶりですね。私は獺……そうですね。ドレミー・スイートといった方があなたにはわかりやすいかしら」

はじめましてなのである。吾輩はちゃんと頭を下げて挨拶をしたのだ。ドレミーはにやにやしているのである。なんであろうか、ふとやこがさとは違う感じがするのだ。

「……は夢の世界」

何を言っているのでしょうか。吾輩は眠ってなどおらぬ。

ドレミーは立ち上がって肩をすくめたのである。それからゆつくりと空を見た。満点の星空であるな。吾輩の好きな景色である。よくよく見ればあそこにヤマメの形をした、星座がいるではないか！ 吾輩今まで知らなかったのである。

「よい夢ですね。食べが……。ふふふ。楽しみは後に取っておきましょうか。私もあなたのような猫が迷い込んでくる、いや。この場合どういえばいいのかしら」

にやけ顔のままドレミーが吾輩の周りを歩くのである。頭の帽子は後ろが長くてそれが、先つぽがふらふらしているのである。吾輩の手元にあれば、こうねこじやらしのよように使ってしまうかもしれぬ。

ドレミーは吾輩の前でしゃがんだのである。つま先で立ちながら吾輩の顎の下を撫

でてきたのである。

「なかなかいい毛並みですね」

それほどでもないのである。えっへん。

「その蝶ネクタイも似合っていますよ」

？ 何を言っているのでしょうか。吾輩は何もつけては……なんであろう、吾輩首にちようちよのような飾りをつけているのである。い、いつの間につけたのであろう。吾輩は手で、ちよつと触ってみる。りんりんと真ん中についた小さな鈴がなっているのがある。大変である。こんなもの……なかなかよいではないか。

それでも吾輩はとんとわからぬ。にやあとドレミーに聞いてみたのである。こやつならなんとなくコミュニケーションが取れぬやもしれぬ。しかし、ドレミーはにやけ顔のまま小首をかしげただけである。

そんな顔のまま、吾輩から目をそらしたのである。

「すべての夢はつながっています。それは人であれ妖怪であれ変わりはないわ」

吾輩は今夢を見ているのであろうか。なるほど、ううむ。不思議である。それにしても約束もしておらぬのにドレミーと夢の中で出会ったのは奇遇であるな。気が合うかもしれない。

「その蝶ネクタイも誰かの夢からの贈り物かもしれませんね。ふふふ」

ドレミーが笑っているのである。吾輩もなんだかうれしいである。笑う門には福が来ると言っている人がいたのだ。福とはどんな顔であろう。

うむ？

誰か立っているのである。もしやあれが「福」であろうか。

福は変な格好をしているのである。ギザギザ……なんだかまがった矢印の並んだような紫のスカートをはいて片手で口元を隠しているのである。銀色の髪がきらきら光ってきれいだである。

「……………」

何もしゃべらぬ。吾輩がすくつと立ち上がって挨拶をしても、軽くうなづいてくれただけである。福はシャイやもしれぬ。

「もうすぐこの猫は夢から覚めるでしょう、どうしますか？」

にやけ顔のままドレミーが言うのである。福は後ろをちらつと見るのだ、背中に片方だけ白い羽が生えているのだ。なかなか柔らかそうであるな。しかし、吾輩も負けぬ！！

吾輩はその場でごろりと寝転がったのである。毎日手入れしている吾輩の毛並みは、自信があるのである。福も片手で口元を隠したまま、吾輩を撫で始めたのである。

どうだ、まいったか。

「……………」

何も言わぬな。まあいいのである。ごろごろ、吾輩撫でられながらこうするのがたまらぬ。

「……………」

さすさす、さわさわ、なでなで。こしよこしよ。かきかき。

終わらぬな。

ちらりと福を見ればうつすら笑っているのである。それでも何もしやべらぬ。赤い瞳がちよつときらきらしている気をするのは気のせいであろうか。それにしてもなかなかいい手際である……吾輩、眠たくなってきたのである。

そういうえば、夢の中であつたはずであるな。このまま寝てしまつたらどうなるのであろうか。

「猫さん。いい夢でしたか？」

ドレミーの音がするのである。

★

「おーい」

吾輩はこがさの声で目が覚めたのである。見上げればこがさもみじが吾輩をのぞき込んでいるのである。それにしても、もみじよ。なんで蜘蛛の巣まみれなのだ。吾輩

は首をかしげたのだ。

「うらやましいな。お前が気絶している間また土蜘蛛には襲われるは、首を取りに来るやつや妬ましいなんて言いながらハイテンションで向かってくるやつもいるわ……あーもーつかれたー」

その場でごろんでもみじが寝転がったのである。こがさも「おつかれー」と言っておるな。ううむ。思い出せぬ。吾輩は何をしていたのであるうか、空はきらきらいろんな色の星が光っているのである。こがさに抱かれたままそれを見上げてみたのである。

そういえばさつきまでこんなきれいな空を見ていた気がするのであるが、とんと思い出せぬ。

「きれいだけどあれって怨霊らしいですわねー」

こがさよ、何を言っているかわからぬ。ここはどこであろうか。吾輩はもぞもぞ手の中で動いてこがさの顔を見たのである。

「椀が猫さんに体当たりして気絶させたから驚いているかもしれないけど、猫さんが寝ている間に到着したわ！」

どこに、であろうか。

ちていのきねんである

ひさびさの地面である！ ……吾輩は頭をすりつけてご挨拶するのだ。

なんとなくうれいのである。吾輩は思わずその場でくるくると歩き回ってしまったのだ。はずかしい。吾輩は我に返って、きよろきよるとあたりを見回したのである。

吾輩が上をむくと、吾輩たちが降りてきた穴が見えるのである。あそこを降りてきたのであるか、とてもすごいことである。まあ、吾輩はとちゅうの記憶がないのであるが。「何をしているんだ、いくぞ」

先に行っているもみじの声がするのだ。吾輩はその後ろにたったか近づいて、後ろからついてくのである。こがさも傘を広げて横を歩いているのだ。吾輩と二人とお散歩であるな、だれかと一緒に歩くだけでうれしいのである。

地底の地面はひんやりしているのだ。吾輩はしやりしやり水気のある地面を搔いてみたり、においをかいでみたりする。

「こら、寄り道するな」

もみじに怒られたのである。吾輩は反省も得意であるから、安心するのだ。吾輩はじしんをもつてもみじに答えたのだ。

「にやあつて。わかつているのかなあ」

わかつているのである。それよりもみじもそろそろ疲れているのであろう、吾輩がだっここでできればいいのであるが、少しおおきいのである、吾輩にはもてぬ。こがさよ、どうにかできないであらうか？

「鬼を驚かせれば地上ではきつと一年中おなががへることはないわ……」

なんだかぶつぶつ言っているのである。おなががへっているのであろうか。むらさきの傘をさしたまま、こがさは吾輩達とは違う方向に行き始めたのである。

「ぶつぶつぶつ……ぶつぶつぶつ」

もみじよ、こがさがどこかに離れていくのである。吾輩は呼び止めたいのであるが、行けばこんどはもみじがまいごになるやもしれぬ。だからもみじに必死に訴えたのである。このままではこがさがどこかにいってしまふのだ！

「どうしたんだ、さつきから鳴いて。それにしても疲れたわ。温泉につかってから、てきとうに写真を撮って帰……」

もみじがおしりやこしをまさぐりだしたのである。なんだか顔が青ざめているのである、大丈夫であらうか。

「か、カメラ忘れた」

なるほど忘れものであるな。とりに……は戻れぬ。わがはいともみじは空を見上げ

て、椀だけ下を向いてためいきをついたのだ。

ちよつと遠出したから難しいのである。まあ、こういうこともあるのだ。吾輩はもみじのあしくびに頭をあててすりすりする、元気出すのである。

「……はあ、こんな時に甘えてくるのか。ほら」

なでなで、もみじが吾輩を撫でるのである。元気づけるつもりがいい具合に……いい。

む、ものがけがから誰か出てきたのである。茶色の妖怪である！ 傘を持っているのだ、なんだ、こがさである。

「こ、こけた。椀も猫さんも私が変な道に行つてたのに言つてくれないんですか……」
うーむ泥だらけでたのしそ……いやいや、かわいそうであるな。吾輩は慰めるのである。ううむ、もみじもこがさも仕方ないのである。吾輩はほごしやとして気が抜けぬ。もみじはこがさを見ているのだ。

「遊んできたのか」

「遊んでいるようにみえる？」

「そうとしか見えないわ。はあ。カメラを忘れて落ち込んでるときに……」

二人してため息をつくではない、いつでも明るくいかねばならぬ。吾輩はその場になやあにやあと鳴いて元気づけるのである。おお、よくわからぬが二人とも吾輩をみて

小さく笑ったのである。

それからこがさが言ったのである。

「カメラがないなら絵に描けばいいじゃないですか」

「そんなご飯がないならパンを食べればいいみたいに」

「ぱん？ 食べたことある？」

「一応あるけど……関係ないだろ！ まあ上司には何か報告はしないといけないから、

絵か……じしんないなあ」

吾輩も絵は描いたことはないのである。いや、一度神社のろうかに吾輩のにくきゅうのてがたを描いたことはある。あの時は巫女が怖かったのである。

それはそうと先に進むのである。む、何か火が見えるのである。おおきなおおきな橋が架かっているのだ。しゅぬりであるな、吾輩はものしりなのである。

橋の向こう側に大きな街が見えるのだ。

「ついた！」

こがさがぴよんと飛んで喜んだので、吾輩も一緒によるこ……

「ぐえっ！」

下駄が引つかかってこがさがこけたのである、ううむ。ここは、あれであるな、吾輩も一緒に地面に転げておくのだ。ごろごろ。これでおあいこであろう。

「小傘。何をあそんでいるんだ」

「あ、遊んでいるように見える……？ 足をくじいた」

「はあ、せわしないやつだな。それよりも早く行こう」

「まった、まった。大切なことを忘れてるわ」

大切なことであるか!? 吾輩は忘れてることを思い出してみるのだ、今朝のごはんはちゃんと思い出せる。大切なことは忘れておらぬ。こがさよ、大切なこととはなんであらうか。

「記念写真を撮らないと、せっかく旅行に來た気がしないわ。カメラはないけど、絵の練習と違って」

うんうん頷きながらこがさが言うのだ。

きねんしやしんであるか、吾輩初めてのなのだ。撮ってみたいのである、絵しかできぬらしいのであるが、それでもいいのである。

吾輩はもみじの袴の裾を軽くかんで引つ張って見たのだ。わかってくれたのであろうか。するとともみじが吾輩をちらりと見たのだ！ わかってくれたのであろうか。

「……いや、ほら。猫も早く行きたいとせかしているから」

ぜんぜんわかっておらぬ。こがさよ何か言ってるのだ。

「ほら、猫さんは私が説得しますから……」

「せつとく……いつから動物と話せるようになったんだ」

もみじとこがさがふもうな会話をしているのだ。吾輩は最初から反対などしておらぬ。

それでもこがさは吾輩を持ち上げて、顔を向き合わせたのだ。ほつぺたの泥が付いているのであるが、目がきらきらしているのである。

「にやあにやあ?」

なあー

「にやあ?」

みやー

「ぐるぐる、みやー」

なー

「ふっふっふ。猫さんも賛成だそうですね」

……うむ! そういうことしておくのだ!!

さあ、もみじよ吾輩とこがさをぞんぶんに絵にするのである。もみじも観念したようである、ため息をついて手近な岩に腰かけたのである。吾輩はこがさと一緒である。

もみじは腰から竹の筒をとりだして、ぱっかり開けてから中の筆をとりだしたのだ。なるほどそうやって持ち運ぶのであるな。それに腰から紙の束をひもでとめたあれを

とりだしたのだ。

「……………」

もみじよ、吾輩をよく描いてくれるようにお願いするのである。こがさも吾輩を抱いたまま身じろぎもせぬ。

もみじがさらさら何かを書いているのだ。あ、紙をぐしゃぐしゃにして捨てたのである。それに悩んだり、頭をふったりせわしないもみじである。まったくもみじは、しゅぎようがたらぬ。

「あの、いつまでこのままにしていればいいですか？」

「……………動くな、もう少し」

こがさが聞いたたら、もみじは吾輩達をにらみつけてくる。しんけんであるな。吾輩はもみじが怒ってはおらぬことちゃんとわかっているのである。吾輩は顔をきりりとさせているのである。

「できた！ あ、こほん。とりあえず完成だ」

もみじが一瞬えがおになってから、すぐにぶすつとした顔に戻ったのである。

「どれどれ〜みせて〜」

にやあにやあ

吾輩とこがさは興味津々である。もみじは鼻を鳴らして、そっぽを向きながら吾輩達

に絵を見せてくれたのである。

紙のなかで吾輩とこがさがにっこり笑っているのである。

吾輩がこがさをみるとこがさもにっこりしているのである。

ふむ、あつぱれ。

いいところをみつけることもいいところなのである

ちていの都はにぎやかである。

おおきなおやしきが立ち並ぶ中を吾輩を先頭にのんびり歩いていくのだ。しかし、人里よりも立派なのである。おそらくがんばり屋さんが建てたのであろう。

大通りにはいろんなお店があるのである。つちぐもだとか鬼だとか、よくわからぬ者がいるんなもの売っているのだ。たまにいい匂いにつられてとことこ吾輩が歩いていくと、こがさかもみじに止められてしまうのである。はずかしいのである。

がやがや、わいわい

吾輩は神社でのお祭りを思い出しているのである。人通り……はないのであるが、妖怪通りが多いので吾輩はしっかりとみじの足元についていくのだ。たぶん踏まれぬ。

「……間欠泉の騒ぎから地底に来る妖怪も増えたって聞いたけど」

もみじがひとりでぶつぶつ言っているのだ。吾輩はにやあと相槌を打っておくのであるそれにしてはもみじの袴がゆらゆらしていて、吾輩はたまにかみついてしまいそうになるのである。いかぬいかぬ。

「とりあえず、着替えたい……」

どろだらけのこがさのいうことはもつともである。とはいっても吾輩は着替えるものがないのである。たまには服を着るのもいいかもしれぬ。

もみじもこがさに言うのである。

「さすがに私は地底にきて鬼の皆さまに挨拶もしないわけにはいかないからな……あーあ。気が重いわ」

「ふぁいとっ？」

「うるさい」

地底から飛び込んでくるだけでこがさともみじは仲良しになったようなのである。けっこうなことであるな。ふともみじが立ち止まっているのだ。

「それじゃあ私は挨拶に行ってくるから、ちよつと別行動をしよう。集合場所は……どうしよう?」

「うーん。目立つものなんてわからないし……」

こがさが傘をばつさと開いて悩んでいるのであるが、吾輩いいことを思い付いたのである。こがさが一番目立つのである。もみじよ、大きななすび、ではない傘を指して帰ってくるのである。まいごになってはならぬ。

あと、もみじが離れるとちよつと寂しいかもしれぬ。

「お前が一番目立つな」

「え？ 猫さんが？」

「……なんだっていいけど、私が戻ってくるまで適当にぶらぶらしていいわよ。傘だけはさしておいてくれ。空を飛んで探せば一発だろうから」

「はい？ よくわからないけど、わかったわ」

そんなこんなで吾輩とこがさはもみじと別れたのである。どこに行くかは吾輩にもとんとわからぬ。だから吾輩とこがさはのんびりとそのへんを歩いていくのである。

「おんせんはいりたいなー、でもどこにいけばいいのかわからないわ。猫さんはわかる？」

「いやー」

わからぬ。

吾輩も初めてきたところはさすがによくわからぬ。だが、きつと大丈夫である。吾輩が付いているのだ。おお、こがさよあそこに湯気が立っているのである、きつと温泉である。

吾輩は幻想郷にひみつの温泉を持っているから知っているのである。そういえばこの前会ったあのおなごはどうしているであろうか、さこつなどと言っていた気がするのである。名前であろうか？

「あー！ 温泉発見。ふふふ、猫さんよりも早く見つけたわ」

いや、吾輩が先に見つけたのである。吾輩は抗議するのだ。こがさはわかってかわからずかわからぬ笑顔である、わからぬことだらけであるがかんたいな吾輩は許してやるのである。

こがさが下駄で走り出したのである。吾輩もついていくのだ。周りの妖怪たちはみんな吾輩達を見ているのである。こがさはやはり目立つのであるな。

「あれ？」

あれは温泉ではないのである。いや、温泉かもしれない。小さな小屋のようところで座り込んでいる少女がいたのである。小屋は屋根しかない、冬は寒そうである。

それでも屋根の下に浅い穴があるのである。そこにお湯が張つてあるではないか。

「なんだ。足湯かー」

こがさが下駄をぼいぼい投げ捨てているのである。はしたないであるかしらして、吾輩は下駄の鼻緒を唾えてしっかりと邪魔にならぬ物陰にもつていくのだ。こがさよ感謝するのである。

こがさはスカートをまくつてあしゆ、とやらの足をつけているのである。なるほど！だから足湯であるか。吾輩はまたひとつ賢くなつてしまったかもしれぬ。それにしてもこがさはずつとはだしのような格好である。

「あああゝ」

びくつ。

吾輩はこがさの呆けた声でびくつくりしたのである。みれば顔をほんのり赤くしてりらつくすしているではないか、変な声は出す必要はない気もするのであるが……。

それでも吾輩には言うことではないのである。さて、吾輩も足をつけるとしよう……うむ？ 吾輩は後ろも前も足である、どうすればいいのであろう。

「妬ましいわ」

びくつ。

最初から足をつけていた少女が言うのである。見れば金髪である、たぶん妖怪であるな。白い脚をお湯につけているのである。吾輩はこがさのそばに寄ってみるのだ。

「ああ、こんにちは。あなたも足湯にきたの？」

こがさの知り合いであるか？

「……猫さんは寝ているときに襲ってきたから知らないかも、えつと名前は……パ、ぱ……るん？」

「パルスィ！ ああ、妬ましいわ」

ぱるすいというのであるが……ううむ。変な名前である。ぱるすいは足湯でちやぶちやぶ足を動かしているのである。こがさも一緒にちやぶちやぶしているのである。

吾輩も負けておられぬ、とおもったらこがさが吾輩を抱いてきたのである。いや、足

湯に入れぬ。膝の上におくではない。

「妬ましいって、何が妬ましいんですか？」

「いつぱいよ、そんな理由なんていくらでもつくれるわ」

「ぱるすいがこがさの髪をつまむのである。」

「この青い髪もつやつやだし、目がぱっちりしているわ。ああ妬ましい。それに猫なんて連れて……可愛らしい顔をしているのも妬ましいわ」

「そ、そんなことないですよ」

「こがさが真つ赤になって驚いているのである。吾輩はその膝の上でごろごろ。」

「そういう謙虚なところも妬ましいわ……ああ」

「ぱるすいはいいところを見つるのがうまいのであるな。吾輩もほめてほしいのである。」

「こがさは頭を掻きながら照れているのである。」

「い、いや。そんなくぱるすいさんの方がこう、びじんですし、髪も綺麗ですね」

「……」

「ぱるすいがほつぺたを膨らまして赤くなっているのである。」

「そんな人をほめるところも妬ましいわ……」

「いやいや、ほんとですよ」

む？　むむむ。こがさとばるすいがお互いのいいところを言い合っているのである。
「あなたは〜」

「パルスイさんこそ〜」

吾輩もほめてほしいのである！

「だからその服もかわいいから妬ましいわ!!」

「パルスイさんの服も個性的でかわいいです!!」

いや、なんで褒めあいながら喧嘩を始めるのであるか、こがさよ。おお、こがさがばるすいの足を軽く蹴っているのである。

「足も白いですしパルスイさんっていいですよね」

「……そ、そんなこと。……妬ましいわ」

「妬ましい」

「妬ましい？　なんであなたが……いうの」

こがさが妙な会話をしているのである。それにしてもお互いいいところを見つけるのが得意で吾輩大満足なのである。そろそろ吾輩をほめても差し支えないのである。

ばるすいが立ち上がったのである、いよいよであるな。

「わ、私もう行くから」

ばるすいよ吾輩、吾輩は？

ほめてくれぬのであろうか。おお、顔を真っ赤にして走り去ってしまってしまったのである。残念であるな……

「いつちやった……」

こがさも吾輩をほめてもいいのである。

「ふあーあ、早く温泉に入りたいなあ」

む、吾輩はこがさのひざの上でごろごろして抗議するのだ。

そのかおはわがはいもすきである

吾輩とこがさは足湯のそばでのんびりしているのである。

吾輩は足湯に入つてはおらぬが、湯気があつたかいのである。その場で丸くなつているところがさが吾輩の下にハンカチを敷いてくれたのである。ありがたいのである。

「ちやつぶ、ちやつぶ、それにしても椀遅いなあ。そろそろ温泉に入りに行こうかしら？」

吾輩はむつくり体を起こしてみるのである。そういえばどれくらい時間がたったのであろう。よくわからぬ。そういえば、何か大切なことを忘れている気がするのである。こがさよ……そばに折りたたんだ傘を置いているのである。

なんであつたか、もみじに何か言われた気がするが……。おお、そういえば傘をさしておくように言っていたのである。めじるしであるな。

吾輩は気が付いたのである。こがさよ今すぐ傘をさすのである。吾輩はなすび色の傘をパンチして訴えるのだ。

「こらこら。私の傘はおもちゃじゃないわ」

いや、このままではもみじがここには来ぬ。こがさよ気が付くのである。吾輩は訴え

るのだ。そんな吾輩をじつと、こが吾輩を見てくるのである。大きな瞳であるな、吾輩はこがさのおめめは好きである。

「そっか」

わかつてくれたようであるな。ぽんと手をたたいているのである。吾輩は安心して胸をなでおろすのだ。

「そういえば私は鬼を驚かせにきていたんだったわ！ 危ない危ない」

ぜんぜんわかつておらぬ。しかし、こがさは自信満々に立ち上がって、傘をばつと開いたのである。なぜかその場でくるりと回って、吾輩に舌を出しながらウインクをしてくるのである。

「それじゃあ猫さん。今から……」

「傘……さしておけといたただろうが!!」

どーん。吾輩は驚いた。

急に何かが落ちてきて土煙が舞ったのである。吾輩はいきおいあまつところころ転がるのである。ペッペッ、口に砂が入ったのである。砂はおいしくはない。

空から落ちてきたのは誰であろう。うむ、もみじである。しりもちをつけて傘にしがみついているこがさの前におうだちをしているのである。

「お前、こんなところでくつろいで……かなり探し回ったんだぞ。なすび色の傘を開い

たからわかったものの」

「ご、ごめんなさい……な、なすび?」

指を顔の前に突き付けてもみじが怒っているのである。怒るではない、吾輩はこがさともみじの間に入って、怒るもみじを見上げたのである。ううむ、見上げたはいいがあとはわからぬ。

「そ、そんな目で私を見るな……はあ、もういい」

なんか吾輩が見ているだけで収まったのである。

「もう、疲れた。ひっく。挨拶に行った鬼の皆さまのところではお酒も飲まされるし」

そういうえぼもみじは少し顔が赤いのである。吾輩はお酒を飲んだことはない。

「早く温泉に入つて、一眠りして帰るぞ」

まだまだ、ぶんぶん怒っているのである。肩をいからせてもみじが歩きだしたのである。どことなくふらふらしている気がするのは気のせいであろうか。吾輩は心配なのである。

吾輩はこがさにやあと声をかけて、もみじの後ろをとことこついていくのである。

「あ、ちよ、ちよつとまってよ。どこにいくかわかるの?」

こがさが立ち上がったて追いかけてきたのである。もみじがゆらりと後ろを向いたのだ。

「勇儀様に聞いた。ひつく、ああ、天狗である私でも酔いそうになる酒を飲むなんて……」

「ゆうぎっ？」

「様、をつけろ。……それよりもああもう、なんだか怒ったらくらくらしてきた」

もみじがその場で座り込んだのである。だ、大丈夫であろうか。

「だ、大丈夫？」

「だいじようぶ、にきまっている、わたひを誰だと思っている」

「……1足す、1は？」

「……いっぱい」

「だめだこりや」

もみじがぐったりしているのである。こがさはふうーと息を吐いて、吾輩をちらりと見たのだ。……なんであろうか、寝ているもみじを見るこがさの表情を吾輩はすきである。

やさしいきがするのである。

もしかしたらもみじも安心して眠ってしまったのかもしれない。

「よしいしょ」

こがさがもみじをおんぶしているのだ。吾輩も手伝うのにはやぶさかではない。し

かし、手伝い方がわからぬのだ。こがさのまわりをぐるぐる歩き回ることになったのである。

「重いなあ」

「ぐるる」

こがさの言葉にもみじが犬のような声を出したのである。おお、首筋にかみつこうとしているのである。

「わ、わ、私は食べてもおいしくないわ。お、重くなんてない、ごめんなさ——」
かみつかれているのである。

★

「あれ、ここはどこだ」

やつともみじが起きたのである。頭を振っているのである。吾輩とこがさはあれから、いろいろと歩き回ってやつと「おんせんやど」を見つけたのである。とおいみちのりであった。

大きなおやしきである。わふうというやつであるな。

吾輩はおおきなおやしきの、おおきな座敷にいるのである、と吾輩はもみじに言うてみるのだ。にやあにやあ。

「お前、私を見ていてくれたのか。よしよし」

頭を撫でてくれているのである。なんか違う気がするのであるが、まあいいのである。吾輩は神社では巫女に怒られるからできぬ畳の上のころころを楽しんでいただけである。

「ここは宿か。小傘はどこに行ったんだ。あつ、頭が痛い。なんだか途中から記憶がない……」

大丈夫であるか、吾輩はもみじの膝にしがみついて心配するのである。もみじは吾輩の鼻を押さえてくるのである。ううむ、なんでであろう。吾輩は押してくる指を舐めて抵抗するのである。

「とんとん」

もみじの肩をたたいている者がいるのである。吾輩からはよく見えぬ。吾輩にはもみじも大きいのである。もみじはため息をついて振り返ったのである。

「まったく、小傘だろう、なにを……きや」

「うらめしやー」

おおお。鬼のお面をかぶったなぞの少女がいるのである！

吾輩はもみじを守るのである。かくごするのである。もみじはその場でのけぞつているのだ。

「ふふふ。さつきかまれたお返しね」

鬼のお面を取ると、中からこがさが現れたのである。ほっぺたを膨らませて鼻を鳴らしているのだ。吾輩はほっとしたのである。

「お、おまえ」

怒るもみじがこがさにとびかかって頭をぐりぐりしているのである。

それは、何であろう。撫でているのであるか。

「いい、いいいいいい」

「しようもないことばかりして、私がお前なんてかむわけないだろ。猫じゃあるまいし」

ぬれぎぬである!!

それでもこがさともみじは仲良しであるな。吾輩は満足である。

畳の上で仲良く遊ぶのである。吾輩も混ざりたいのであるが、混ざれぬ。吾輩も遊んでほし……遊んであげるのである。

「ま。まいった〜」

こがさの上にもみじが乗っているのである。楽しそうである。こがさは白いハンカチを手で振っているのだ。さつき吾輩のべつどになったはんかちであるな。ちゃんとはんかちを持っているこがさは偉いのである。

どこがえらいのかは吾輩もよくわからぬ。けーねが言っていたのである。

「はあ、柄にもなくムキになってしまったわ」

「が、柄にもなく……………?」

もみじがこがさを強い目で見ているのである。こがさは両手を上げて。

「も、もうあたまぐりぐりはこりこりです」

「……………ふん」

もみじがこがさを離して、どいたのである。するとこがさがぱつと正座をしたので、吾輩もその膝に乗ってみるのだ。

「この宿には大浴場があるそうですよ。椀も入りに行きましょう!」

両手を広げてあかるくこがさが言ったのである。

吾輩も両手を広げようとしてころりと膝から落ちてしまった。

おんせんにやってきたのである

石畳を吾輩は歩いていくのである。

前を行くこがさともみじの下駄がかこんかこん、鳴っているのである。吾輩も音が出せぬかと肉球を石畳に何度かつけてみても何も音が出ぬ。吾輩も下駄をはいてみたいのである。

地底は暗いのであるが、温泉への道には灯籠が並んでいるのである。ほんわかした火のついているのである。並んでいる灯籠をみると吾輩はほっとするのである。

かつん、かつん。こがさが傘で地面をつつきながら歩くのである。何か歌っているようであるが、吾輩にはよくわからぬ。

少しだけ歩くと小屋が現れたのである。こがさが吾輩を「おいで」と呼んだのでその後ろを歩いていくのである。小屋はしっかりと作りである。ひのきであるな、吾輩は知っているのだ。

引き戸をこがさがからから開けて、吾輩とこがさは元気よく中に入ってみたのである！

「おー」

吹き抜けであるな。手前にかごが置かれているのである。小屋の向こう側から外は大きな石がいつぱい並んでいるのである。もわもわ、湯気が立ってよく見えぬが温泉であることは間違いないのである。

周りには灯笼が立っているので、結構明るいのである！ 吾輩たち以外にもお客さんがいるのだ。

「わー」

こがさが下駄を捨てるように脱いだのである。

それから籠に服を脱いでいるのである。この籠、こつたつくりであるな。吾輩は籠を作ったことはないのであるが、なかなかいいものと吾輩にはわかるのである。とりあえず中を見してみるのだ。

「ねこさんだめだめ」

吾輩がいくつか並んでいる籠に頭を入れてこがさが吾輩の脇に手を入れて持ち上げたのだ。ううむ、なぜダメなのであろう。吾輩にはとんとわからぬ。

もみじもいつの間にか来ているのである。吾輩がにやあとというと、一度もみじはこがさを見て「に……いやいい」などと言っているのだ。よくわからぬ。

そういえばさつきの籠にはお寺で見たことのある帽子が入っていたのである。白い、ううむ。なんといいばいいのかわからぬ。もしかしたらお寺のものも来ているのかも

しれぬ。

それはそうとそろそろ離すのである。こがさよ。吾輩は腰を動かしてにやあにやあ言うのだ。

「おっと」

しゆたつと地面に降りてみるのである。ひのきの床をととと歩いて、石畳にかつり降り立つ。吾輩は気ままに行くのである。

「ま、まっつてよ〜」

「まっつ〜」

うしろでこがさともみじの声がするのであるが、吾輩は待たぬ。というか、すぐそこにいるのであるから待つも何もないのである。早く来ればいいのである。

どうせこの温泉には吾輩は入れぬ。

吾輩は温泉の縁に足をかけて中を覗き込んでみたのである。吾輩の顔が映っているのである。あつたかい湯気が吾輩の顔にかかるのである。吾輩はこれが好きである。

しかし、しょうしょう深すぎるのである。猫用のふろでもないものであろうか。吾輩はうなうな悩んでいると、脇をつかまれたのである。

「こつちにおいで猫さん」

こがさであるな。今日は脇をつかまれることが多いのであるが、こがさよ。その傘は

お風呂にも持つてくる必要はあるのであろうか。吾輩にはとんとわからぬ。

端つこの方にこがさにもつていかれる吾輩。いがいとらくちんである。

桶が積み木のように並んでいるのである。その前にこがさは吾輩を下ろしたのである。これ崩してはかぬのであろうか……ううむ、よつきゆうが、いかぬいかぬ。

こがさはその桶を一つとつて、お湯を組んだのである。何をするのであろうか。

「おいで」

……

……いやである！ いやなよかんがする。

吾輩は逃げ出そうとすると、脇をかかえられたのである。

「何逃げようとしているんだ」

もみじである。はなすのである。これはふとうたいほであるな。べんごしを呼んでもやぶさかではない。しかし、べんごしも地底には来てくれるのであろうか。

「ばしやー」

うにやあ。お湯が吾輩にかかったのである。はんにんはこがさに間違いないのである。

「小傘、私が離していないのにかけるな」

「え、でも一石二鳥ですし」

「かけ湯くらい自分でする」

「けほこほ、お湯が目と口に入ったのである。」

吾輩はもみじの手から脱出したのである。ぽたぽたとお湯が吾輩の毛並みに吸われて、あれである。からだがおもい。ううむ、地面にみずたまり……お湯たまりができていではないか、なんとなく座ってみるのである。

「おやおや。お姉さんがた、猫を連れてくるなんて良い趣味しているね」

だれか近寄ってきたのである。ぬれた赤い髪をしているのである。

どことなく猫っぽいような気もするのであるが、気のせいであろうか。こがさよ誰か聞いてみるのである

「お前は？」

いや、もみじではない。まあいいのであるが。

「あたいかい？ あたいは……まあお憐つて気安く呼んでおくれよ。そんなことよりも姉さん方、これなんだが知っているかい？」

なんであろうか、おりんが手に何か持っているのだ。もみじもこがさも首をかしげているのである。……とりあえず吾輩もかしげしておくのである。

「最近地上に行くことがあつてね。雑貨屋で買ったしゃんぷーつてやつだよ。なんでも幻想郷の外の世界のものらしいよ」

「しやんぷー?」

こがさともみじは本当に仲良しであるな。別に一緒に言わなくてもいいのである。

「まあ、物は試し。そっちの傘持ったお姉さん、座った座った」

おりんが小さな木製の椅子を持ってきて、こがさを座らせたのである。不安そうにしているのである。

気のせいであろうか。おりんの目が光っているのである。しやんぷーなるものを手で押して中から液体を出しているのだ。

「おっと、その前に目をつぶっていておくれよ」

おりんが桶にお湯をくんできてこがさの頭にかけてたのである。それから両手でこがさをなでなでし始めたのである。なんであろう、妙ななでであるな。

おお、お? おお? 白い泡が出てくるのである。

吾輩は思わずもみじの後ろに隠れてしまったのだ。

こがさも驚いているのだ。

「わ、わ」

「おっと、お姉さん目を開けたら……死にますぜ」

「し、しぬ?」

おりんがごしごしすると泡がこがさを包んでいくのだ。ぽとりと泡の塊がこがさの

肩に落ちて体を伝って落ちていくのである。

「よう」

おりんがお湯をかけて泡を流すのである。……もったいないのである。もしかしたら甘いかもしれぬ。

おお、なんだかこがさの髪が綺麗になつているのである。きらきらしている気がするのだ。

「あ、なんかつやつやしてる気がするわ」

こがさが指で髪をつまんでいるのだ。嬉しそうなのはよいことである。

「ほ、ほう」

なんでもみじはもじもじしているのであろうか。

ちらちらお隣を見ている気がするのである。何か言いたそうであるな。

「お姉さんも試してみるかい」

おりんがもみじに言うのである。もみじが吾輩を見たのでにやあと言っておくのだ。

「……ま、あ。ためしくらいなら」

そわそわ嬉しそうにもみじが椅子に座るのだ。こがさよ何にやにやしているのであらう。

もみじの髪におりんがお湯をかけて、またなでなでし始めると泡が出てきたのであ

る。

「かゆいところはないかい？」

「だ、大丈夫だ」

わしやわしや、白い泡。吾輩はこの時を待っていたのである。

吾輩はもみじのおひぎに足をかけて、体を昇るのである。

「おい、何をしている」

もみじが目を開けて吾輩を捕まえようとしているのである。しかしその前に。肩に手をかけて、泡をパクリ。苦い！ だまされたかもしれぬ。

「め、めがああ」

もみじが何か言っているのである。

おふろでおよいではいかぬ

吾輩は物陰に隠れて体をぶるぶるさせるのだ。

ちやんと吾輩が飛ばした水滴が誰にも当たらぬようにせねばならぬ。吾輩は紳士であるからして、誰にも迷惑をかけてはならぬのである。

どこかで吾輩を呼ぶ声があるのである。声というか、
にやあー？

こがさが吾輩を呼んでいると思わしき鳴き声を発しているのである。吾輩は岩の影からそれをちらつ、ちらつと見るのである。

近くにはお湯の川が流れているのである。それがゆぶねにそそいでいるのであろう、吾輩は前足でちよつとそれに触ってみるのである。うむ、なかなかいいゆかげん。ちやぶちやぶ音を出してお湯が入っていくのである。

何もやることはないのである。

吾輩はその場で座り込んでみる。おお、床があつたかい。吾輩は寝そべって、ごろごろしてみるのだ。これは、なかなかいいではないか。くるしゅうないのである。

吾輩は特に意味もなくその場で寝がえりをうったり、ちよつとあくびをしてみたり

んびり過ごすのである。吾輩はここにはじめてきたのであるが、もう吾輩の庭のようなものであるな。

ちよつとねむたくなってきたのである。

こくりこくり、いやいかぬ。吾輩はあたまをふつて眠気を払うのである。こんなところで寝てしまつては紳士としてはしたないのである。そうであるな、あのひとときわ大きな岩の上で寝そべてみたいものである。

吾輩はそう思つてのそのそと歩いてみるのだ。おゆだまりをふむとぴちやつと音があるので、何度か踏んでしまったのである。

うむ。なんであらうか、これは。

吾輩はぼつんと置かれた桶を見つけたのである。いつぼんのこれは、うむ。ひしやくも入っているのだ。はっぴーせつとかもしれぬ。りんのすけがいい物が一緒になつているとそういうと教えてくれたのである。

周りには誰もおらぬ。誰かが使つたのにそのまま置き去りにしたのかもしれぬ。吾輩はこうきしん、いやいやどこかでなにか手掛かりがあるかもしれぬと思ひ、中に頭を入れてみるのである。

なかなか広いのである。ひしやくもこうなんとなく吾輩持ちたくなってしまふのだ。吾輩がすつぽりとはいつてしまった。おちつく……。

はつ。この桶のみりよくを満喫している場合ではないのである。おお、誰かに持ち上げられたのである。誰であろうか、吾輩は体を起こしてみようと思ったのであるが、引つかかつて動けぬ。

もぞもぞ、もぞもぞ。

やつと顔を出した瞬間に、ばしやんと水に何か飛び込む音がしたのである。一体何が……たいへんなのである。吾輩は温泉に浮いているのである！

桶がゆらゆら吾輩をのせて進んでいくのである。吾輩にはどうすればいいのかわからぬ。焦つてうごいてみれば、あやうくちんぼつしそうになつたのである。

吾輩は意味なくひしやくに縋っているのだ。

吾輩はこがさを探してみるのであるが、おらぬ。もみじは遠くでしやんぷーをしているのが見えるのだ。吾輩のことに気が付くとは思えぬ。

ま、なるようになるのである。

吾輩、ふなたびは初めての経験なのである。そういえば空の上にはいったことがあるのであるが、温泉を桶に乗って旅するのは初めての経験なのである。

空を見ればふよふよと綺麗なひかりが飛び交っているのである。こがさが「おんりよう」といつていたのであるが、おんりようとはなんであろうか。

——ひしやくをおくれ！

びくつ。吾輩は驚いた。

吾輩の頭の中で変な声が出たのである。なにかわからずにまわりを見渡してみるのである。うむ？　なんかお湯の下に沈んでいるのである。ひとであるな。黒髪のしようじよのようなものが吾輩の桶の下に沈んでいるのである。

——ひしやくをおくれ
にやあー。

吾輩はこんどこそ挨拶をできたのである。相手がだれであれ挨拶を欠かしてはならぬ。吾輩は紳士なのである。そう胸を張るのだ。

——ひしやくをください

丁寧になったのである。挨拶の効果であるな。吾輩は満足である。

ひしやくといえよこれのことであるな。ううむ、くれと言われてもうまく持てぬ。吾輩はひしやくの取っ手に力強くかみついて、ふらふらと持ち上げてみたのである。別に吾輩のものでもなし、あげてもいいのである。たぶん下にしずんでいる少女が欲しているであろう。

うんしよ。

いや、今のは違うのである。思わず子供のように思ってしまったのであるが、吾輩は紳士なのである。

吾輩はどうかこうにかひしゃくを啜えたままききっぽをお湯につけてみたのである。お湯をくむところが一番重いのである。

早くとるのである。吾輩は少女の前でゆらゆらひしゃくをひらしてみただの……これは、うわさに聞く釣りかもしれぬ。吾輩これも初めての経験なのである。

おう。ひしゃくのさきっぽのお湯をいれるところが少女のでっぱりに引つかかったのである。うむうむ。ひっぱつてもとれぬ。いや、よく考えてもとる必要はないのである。

取られたのである。ひしゃくがお湯の中にしずんだのだ。吾輩はちよつと寂しいのである。

するとすぐに白い手がひしゃくをもって飛び出してきたではないか！

吾輩は驚いてにやあと叫ぶんでしまったのだ。

脅かすではない……なんであろうか、吾輩の桶にひしゃくがお湯を入れ始めたのである。お湯が吾輩を包んでいくのだ。あつたかい……ではないのである。このままでは沈んでしまうのである。やめるのである。

おゆが、お湯が桶にいっぱいになって、吾輩の肩まで浸かってしまったのだ……

うむむ？　しずまぬ、これはいい湯である。吾輩は満足である。

「ちよつと」

びくつ。

みればお湯から顔の半分だけ出している少女がいるではないか。くせつ毛がお湯にぬれているのである。

「そこはしずまないとだめじゃない」

いや、しらぬ。駄目といわれても吾輩は悪くはないのである。いい湯であるから、いいではないか。

「せつかく桶とひしゃくをつかっておびき寄せたのに、あー。これじゃあ欲求不満だわ」
勝手言っているのである。さつき吾輩を持ち上げたのはおぬしであるか。

「このままじゃあこの村紗船長の名にかかりますし」

せんちようであつたか、吾輩ははくがくたさいであるから知っているのである。たしかあれである、ううむ。そうあれなのだ！ 吾輩ちゃんとわかっているのである。……いや、すまぬ。しつたかぶりはいかぬ……。どわすれしたのだ。

それでも、せんちようは吾輩にっこり笑いかけてきたのである。

「沈めますね」

桶に手をかけようとしてきたのだ。いや、かけて下に引きずり込もうとしているのである。

な、なんでそこまでして吾輩を沈めようとするのであろうか。りふじんである。吾輩

は納得がゆかぬ。

ただではやられないのである。吾輩は桶を蹴つてきやぶてんの頭に着地したのである。

おお、不安定である。せんちようよ、暴れてはいかぬ。捕まえようとしてもいかぬ。

「ごら、おりてください」

ばしゃん、吾輩は落ちたのである。

ごぼぼ、ごぼぼ。吾輩は必死になつてその場で足を動かしてみるのだ。もうしにもぐるいである。吾輩はここで沈むわけにはいかぬ。

ばしゃばしゃ。

意外と泳げるものである。吾輩は前足をぱたぱたさせて風呂の縁へ向かつて泳ぐのである。

「そりやあないですよ……」

せんちようの声が聞こえるのであるが、吾輩にはよくわからぬ。ぱたぱた。

吾輩、温泉で泳いだのは初めてである。しかし、吾輩は知っているのだ。お風呂で泳いではいかぬ……

「わーい」

真横をこがさが泳いで行ったのである。
……。見なかつたことにするのだ。

おふるはしずかにはいらねばならぬ

吾輩はいい感じの岩を見つけて寝そべってみるのである。少し泳いで疲れたのかもしれぬ。体がぬれているのでよく乾かさねばならぬ。このまま帰ったら巫女に怒られてしまうかもしれぬのはいやである。

ふむ、なんとなく吾輩は巫女のところに帰ると思つてしまったのである。まあ、いいのである。どこに行つても吾輩の庭には違ひないのであるからして、これはかりかりくらい小さなことである。

……かりかりは小さいことではないかもしれぬ。あのご飯をたまにしかりんのすけはくれぬ。巫女とかりかりはどちらが大事であろうか……ううむ。巫女であるな。なんもんであつた。

「なんでそんなところで寝そべっているんだ」

おおもみじである。おおもみじといつても、おおきいもみじではないのである。普通の大きさであるな。

なんだか髪がきらきらしているのである。心なしかご機嫌に見える。

全身ぬれているのは吾輩と同じであるな。お揃いである。吾輩はここでゆつくりと

体を乾かすのであるからして、もみじはゆっくりと温泉に浸かっているといいのである。こがさもさつきおよいでいたのを寛大な吾輩は見ぬふりをしたところだ。

「お前、風邪をひくぞ。こつちにこい」

うにやあ。吾輩を持つではない。

吾輩お気に入りの岩が遠ざかっていくのである。もみじは吾輩を持ったまま。温泉に浸かったのである。吾輩は足が届かぬ。両脇を持たれたまま動けぬ。

ちやぶちやぶ。ふむ。あつたかいのである。吾輩は綺麗好きであるから、よく地上でも温泉には入るのである。あそこは吾輩のひみつのすぼつとであるな。吾輩はいんぐりつしゆにもたんのうなのもしれぬ。

「ふう」

もみじもりつくすしているようで吾輩は満足である。むむ、こがさには負けるのであるが、もみじもほつぺたがぶにぶしていそうであるな。吾輩は思わず前足で触ろうとしてしまったのである。

「こら、おとなしくしている。いたずら猫」

しんがいである。吾輩は紳士であるからしていたずらはちよつとしかせぬ。吾輩はこうぎするのである。するともみじは吾輩をじつとみてきたのである。

「なんだかおまえ……私が言っていることがわかるような気がするな」

もみじよ。吾輩にはわかっているのである。もみじはいい子なのである！

「まさかな。ただの猫にわかるわけもないわ」

吾輩はちよつと寂しいのである。だからにやあと言つてみるのだ。

もみじは首をちよつと傾けて、小さく舌を出したのだ。

「おどろけーっ……だったか」

もみじよ何を言っているのか？ 吾輩はきよとんとしてしまつたのである。

するともみじは目を吾輩からそらして恥ずかし気に行っているのである。

「う、う。猫相手でもあいつの真似なんてするもんじゃないな」

おお、こがさのものまねであるな。吾輩も物まねは得意なのである。

にやあ。

こがさが吾輩に言つてくる真似である。

「何鳴いているんだ？」

わかつてもらえなかつたのである……吾輩もまだまだなのかもしれない。うむ？ 何かがお湯の中を泳いでいるのである。もみじよ何かが近づいてくるのである。吾輩を見るよりも下を見てほしいのである。

そんな吾輩の願いとはうらはらにもみじがいうのだ。

「うらめしやー」

何を言っているのであるかもみじよ。吾輩に笑顔で舌ださなくていいのである。それよりも下から何かが、

ばっつしやーん。

いきおいよくお湯の中からこがさが現れたのである。

「お、おどけげほげほ、こほこほ、ちよ、ちよつとた、たいむ」

「わあ！ い、いきなりなんだ！」

けほけほ、吾輩にもお湯がかかったのである。なんであろうか、お湯の下を潜っていたのはこがさであったのである。なんかせき込んでいるのだである。たいむとはなんであろうか。

もみじは本当に驚いているようである。吾輩がみると大きく目を開けているのである。こがさがやつと息を整えているのだ。

「驚いた？」

「お、お、驚くに決まっているだろう！ お風呂くらい静かに入れ」

うむうむ。もみじにどうかんである。

「でもさつき猫さんも泳いでいましたし……」

あれは桶を沈められて仕方なくしていただけなのである。吾輩はまなーは知っているのである。吾輩は恥ずかしいことはしておらぬとむねをはるのだ。

「おまえそんなことをしていたのか……だめだろう」

もみじが吾輩をじっくり見つめてくるのである。誤解としかいいようがないのである。犯人はあのひしやくをつかつて吾輩を沈めようとした船長である。どこに行ったのであろう。

吾輩はこがさを見る。するとこがさはくすりとして肩までお湯につかつたのだ。

温泉に波がたっているのである。なんで温泉はきらきら光っているのか吾輩にはとんとわからぬ。いがいとめだちやがりなのであろうか。

吾輩は不思議に思つて波を前足でパンチしてみるのだ、すると別の波がくるのでパンチをするのだ。これがなかなかやめられぬ。

もみじとこがさはそのまま黙っているのである。

まあ、二人とも気持ちよさそうな顔をしているからいいのである。吾輩はそろそろ熱くなつたから上がりたいたいと思うのであるが、もみじが吾輩を離さぬ。

「ふー」

「ふー」

おお、二人ともなんだか同じことを言っているのである。もみじが嫌そうな顔をしているのはなんであろう。

「そういえば小傘は鬼の皆さまを驚かせに来たんだろう？ どうせないでしょうけど、

勝算はあるの?」

「あ、ありますよ! ほら、物陰からうらめしやーって飛び出てみれば」

「一応言っておくけど、やめておいた方がいい」

「ですよねー……。あーあ。権みたいに驚いてくれたらいいのに」

もみじが片手でお湯をこがさにかけてたのである。ふんと鼻を鳴らしてながらである。

「わ、やったね! そりゃ」

こがさも吾輩にお湯をかけてきたのである。もみじよ吾輩を盾にするのではないのである。にやあ!

「ご、ごめんなさい」

いや、こがさに怒ったのではないのである。顔をお湯につけるくらい落ち込んでほしくないのである。吾輩も悪かったのである。

もみじよなにか言ってるのである。ううむ、ぶあいそうなひょうじょうをしているのであるな。

「そもそもお前は全然怖くないんだ」

「む、そ、それなら権も猫さんに話しかけていたじゃない、天狗らしくないわ」

「え? そ、そんなことはしていない。み、見間違えだろう」

けんかはやめるのである。お互いにお湯をかけあいながら吾輩を盾にするのもやめた方がよい。いや、やめるべきなのである。

おおこがさが吾輩を奪おうとしているのである。強く引つ張るではない。もみじもむだな抵抗をするのをやめるのである。

吾輩を間にしてこがさがもみじのほつべたをひつぱろうとしているのだ。いや、吾輩つぶれそうでこわいのである。喧嘩はよくないのであるが、吾輩をおたがいの体の間に挟むと大変なことになりそうである。普通にこわいのである。

そう思っているともみじが立ち上がったのだ。吾輩をかかえたまま、こがさを見下ろしているのだ。吾輩ちよつと安心したのだ。

「もういい、私は上がる」

「も、もう上がるんですか?」

なんだかこがさが勝ち誇った顔をしているのだ。

もみじよ、何を震えているのであるか。

棍が吾輩を地面に下ろしてから、またお風呂につかったのだ。

こがさともみじは汗を額からたらたら流しているのであるな。あがらぬのであろうか?

「は、早く上がればいいだろう?」

「も、権こそ早く上がったらいじやないですか？」
何をしているのであろうか、吾輩はお風呂の縁でのんびりするのである。

にぎやかなのはやぶさかではない

吾輩はお風呂に前足をつけてみるのである。そのままゆらゆら揺らしてみると、波が立つではないか！ いや、別に意味はないのである。しかし、温泉の縁で遊ぶのはなんとなく楽しいと吾輩は思ってしまうのである。

吾輩以外はどうなのであろう。吾輩は考え込んでしまうのである。

「そ、そろそろ上がったらどうだ。小傘、げ、限界だろう」

もみじがゆでたさわがにのようになっているのである。

真つ赤であるな。そういえば巫女と一緒にさわがにを取りに行ったことがあるのである。山の中の小川はきらきら綺麗であった。吾輩はさわがにをみつけるのは得意なのである。

巫女が足を滑らせて川に頭を突っ込んでいたことは誰にも言わぬ約束である。吾輩は律義であるからしてまだ誰にも言ってはおらぬ。

さわがにとりは楽しい物であった。まあ、吾輩はあんなものは食べぬが。

巫女はゆでぱりぱり食べていたのだ。今考えても硬そうであった。それよりもヤマメを取ってくれとにやあにやあ頼んでも巫女は聞いてはくれなかったのである。

代わりにそのへんの葉っぱをくれたのであるが、あまりのことに吾輩混乱した思い出があるのである。

いかぬいかぬ。思い出にふけてしまったのである。吾輩はだんだんこがさともみじがお風呂の中で何をやっているのかがわかってきたのである。先にながった方が負けなのであるな、そうと知っていれば吾輩も上がらなかつたのである。吾輩も勝負したかつたのである。

「も、もみじこそ真つ赤よ。あ、あがつたら？」

「私はふだんの仕事で疲れているんだ、ちようどいい湯治だ」

赤くなつたもみじはさわがにのように固いのであろうか。

さわがには元から硬いのであるが、もしかしたらもみじも硬いのかもしれぬ。吾輩はお風呂の縁から前足を伸ばしてもみじの肩に触れてみたのである。

なんだ柔らかいのである。しかし、それにしても体があつたかいである。

「何をしているんだ」

もみじが吾輩の足をもって聞いてきたから、吾輩はなごど詳しいせつめいをしたのである。

「遊ぶのは後でしてやるから、おとなしくしている」

別に遊んでほしいわけでもないのであるが……いや、せつかくなのであとで遊ぶので

ある。約束したのである。

吾輩は邪魔にならぬように体を横たえて座る。この目で勝負を見届けるのである。くい、くい。

む、だれかが吾輩のしつぽを引いているのである。

吾輩はびくつとしてそちらを向いてしまったのである。見てみれば桶とひしやくをもった船長がいるではないか、何の用であろう。

「猫さん、今度は桶に重しを入れておきましたからもう一回乗りませんか？」
乗らぬ。重しを入れる意味も分からぬ。

この船長は何を考えているのかわからぬ。吾輩はもみじとこがさの方へ視線を戻したのである。うむむ、この勝負どちらが勝つかわからぬ。こがさもまつかである。

そういうえばこがさは何の妖怪なのであろう。さわがに？ ううむ、謎は深まるばかりである。そういうえば前にもみじがからかさと言っていたのであるが、あれであらうか。

からかさ、とは……むむむ。わからぬ。ごろごろ、吾輩は思案するのだ。
誰かがしつぽを引いているのである。また船長であらうか。

「いんごちは」

なんだくろだにではないか。地底の入り口でもみじとあそんでいたものであるな。

温泉に入りに来たのであろう。肩からタオルをかけているのである。そのタオルを

かけるのは吾輩もちよつとやってみたいのである。

……そういえばまだヤマメをもらってはおらぬ。いつになったらくれるのであろうか。吾輩は立ち上がってくろだににやあと毅然と言ったのである。

「……にやあ？ 駄目だね。私は猫語はわからないよ」

残念である。吾輩も教えてあげたいところであるが、今は忙しいのである。

「なんだ？ さつきの天狗じゃないか」

くろだにが吾輩と同じように前足と後ろ足のひぎを地面につけながらもみじの近くまで歩くのである。首にかけたタオルがゆれるので、吾輩思わずパンチしてしまったのだ。

「土蜘蛛……お前も温泉に入りに来たのか」

「そうだよ、私は綺麗好きでね」

「病を司る妖怪がよく言う」

「態度悪いなあ。そういうあんたこそ、なんでそんなゆでだこみたいになってまで入っているのさ。上がれば？」

こがさがなんとなく笑っているように見えるのであるが、体は真っ赤であるな。

ところでゆで、だことは何のことであろうか？ あ、わかつたのである。空を飛ぶあれであるな。

「あがれば？ 椀」

「小傘こそ先にながれ」

くろだにはその場に胡坐をかいて考えこむようなしぐさをしたのだ。そしてしばらくして、ぽんと両手を打ったのである。

「ああ。我慢比べ。天狗も大変だねえ」

くろだにが笑っているのである。楽しそうであるな。

吾輩は誰かが楽しそうにすることはやぶさかではないのである。くろだには吾輩を振り返ったのである。いや、吾輩を桶にいれようとしている船長を振り返ったのである。吾輩はじたばたするのである。

「ちよいとそこの桶を持ったあんた」

「はい？ なんでしよう」

船長は吾輩を入れながら言うのである。とうにか桶に吾輩をいれるでない。脱出するのである。

「せつかくだからどちらが勝つか賭けない？」

「なるほど。おもしろそうですね」

ふぎやあ、ううむ。吾輩を押しさえつけようとするでない。船長よ。吾輩を怒らせたらあれである、またたびを分けてやらぬ。吾輩は船長の手から逃れるようと動き回るので

ある。

「か、勝手にかけ事するな！」

もみじが怒っているのである。そんなことよりも吾輩は船長から離れてくろだにのひぎ元へ避難したのである。くろだには吾輩を抱き上げて、頭を撫でてきたのである。

「この猫は頭が弱点みたいね……そらそら。それじゃあ私はこの天狗が勝つ方に賭けるわ。あんたは？」

「そうですね。じゃあ私も天狗に賭けます」

「賭けにならないじゃないか」

くろだにが吾輩を撫でながら苦笑しているのである。船長は吾輩を取り返そうと魔の手伸ばそうとするのでパンチで叩き落すのである！ にゃあ、にゃあ。船長の手を何度も撃退するのである。

「じゃあ私はそつちの付喪神に賭けるわ」

「お！ 大穴狙いね。誰？」

だれであるか？ 違い声に吾輩とくろだにが反応したのである。

ぺたぺた足音がするのである。吾輩が見れば、おおぼるすいではないか。吾輩はにゃあと挨拶するのだ。

「妬ましいわ……」

吾輩を見ていったのである。よくわからぬが、ぱるすいの挨拶なのかもしれぬな。それよりも早く吾輩のいいところも見つけてほしいである。いや、顎を撫でてとは言つてはおらぬ、……ごろごろ。

「ふい」

ぱるすいが笑つているのである。それはいいのであるが、くろだにが上から撫でて、ぱるすいが顎を撫でていて、吾輩は挟み撃ちにあつているのかもしれない。これは初めての体験であるな。

船長はひしゃくで桶にお湯を入れているのである。ほつとくのである。

「な。何勝手なことを言っているんだ」

もみじが何か言っているのである。安心するのである。吾輩はもみじもこがさも応援しているのである。

「う〜」

こがさが変な声を出しているのである。

「うー」

もみじが歯を食いしばっているのである。

くろだにが吾輩の前足をもつて、上下させるのである。

「ほらほら、がんばれ、がんばれ」

「おお、なんか吾輩が応援しているみたいで気に入ったのである。こがさもくらくらしながら親指を立てているのである。」

こがさよ。そつちに親指を立てても吾輩はおらぬ。こつちである。

ながゆはいかぬ

吾輩はしんけんに応援しているのである。

こがさももみじも頑張つてほしいのである。お風呂から先に上がつてはいけぬ。うむ、しかし両方が勝つ方法はないのであろうか、そうすればみんな楽しいのかもしれない。

吾輩は両前足を後ろからくろだにつかまれたままである。

くろだには吾輩の肉球を押ししたり、押さなかつたりしているのである。いったい何をしているのであろうか、吾輩にはとんとわからぬ。

ぶに、ぶに

くろだに無言で吾輩の前足を触るのはなんであろうか。くすぐりたいのである。

はつ、これはもしやまつさーじというものなのかもしれない。吾輩本格的なまつさーじは初めてなのである。おお、くろだに吾輩の肉球をさわつてやまぬ。

「柔らかいなあ。こいつ」

そうであるか、吾輩は照れるのである。

「はあ、はあ」

おお、もみじがお風呂の縁に手をかけたのである。上がるのかもしれない。くろだにも吾輩の前足を離してもみじの手を取ったのである。

「てい。天狗なんだかもう少し頑張つて。賭けてんだから」

くろだにがもみじをお風呂の中へ押し戻しているのである。吾輩にはよくわからぬ。とりあえず、にやあと応援するのである。もみじよ頑張るのである。こがさはお風呂の中で口を開けてほうけているのである。

おお、こがさが湯舟にせずんでいくのである、こ、これは由々しき自体かもしれない。吾輩が助けねばならぬかもしれない。体が前に進まぬ。尻尾を誰かがつかんでいるのである。

吾輩が驚いて振り向くと船長がひしゃくをもつて吾輩の尻尾をふにふにしているではないか、何をしているのであろうか。いや、それどころではないのであるからして後にしてほしいのである。

「猫さんも尻尾つて柔らかいですね」

照れるのである。いや照れている場合ではないのである。こがさを助けねばならぬ。吾輩は船長の手から逃れようと身をよじってみるのである。すると船長がひしゃくの先の部分を吾輩の頭にすつぽりかぶせてきたのである。

「……にやにや」

いったい何がしたいのかわからぬ！ 吾輩はひしゃくをかぶっている暇はないのである。目の前が真つ暗である。早く外すように「にやあ！」と吾輩はいげんをこめて訴えたのである。

吾輩が必死になってひしゃくを振り払う。目の前がぱつと明るくなって吾輩は驚いてしまったのである。むむ、いかぬ。お風呂に青い髪が浮かんでいるのである。顔が見えぬ。たぶんあれはこがさである。

今行くのである。吾輩はさつそうと飛び出したのだ。

「危ないっ」

吾輩は空中で捕まえられたのである。見上げるとぼるすいではないか。

「いきなり飛びこんで、溺れたいのかしら？」

吾輩を抱っこしてきたのであるが、吾輩今は忙しいのである。こがさが普通に沈んでいるのである。吾輩がさつそうと助けようとしていたのである。ぼるすいよ手を離すのである。吾輩はぼるすいの目を見て訴えるのだ。

「おおきな瞳をして、妬ましいわ」

おお、やつと吾輩をぼるすいがほめてくれたのである。吾輩は満足である。……ちがう、吾輩満足している暇はないのである。体をよじってぼるすいから離れるのである！

こがさよ今行くのだ。

「よつと」

くろだにが吾輩の前足を捕まえたのである。

「やわらか、やわらか」

ぷにぷに、ぷにぷに。

にやあ！ 吾輩は一喝するのだ！ くろだにが驚いて離れたすきをつけて今こそ――

――頭にひしやくがかぶさつてきたのである。吾輩はその場で地面に倒れたのである。

やつてられぬ。こんなことをするのは船長しかおらぬ。同じことをする暇は吾輩にはないのである。なんとかひしゆくを振り払うと吾輩は即座にぱるすいを警戒したのだ。くろだにと船長の後はきつとぱるすいなのである。

吾輩は同じ手は二度は食わぬ。……くろだに達の分は二度してしまったのであるが。今度こそはちゃんとかわすのである。

さあ、来るのである。ぱるすいよ。

そんな吾輩の前足をくろだにが捕まえてこようとしてきたのである、吾輩は即座に反応したのである。横に飛んでよけるのだ！ ぱるすいは吾輩を見ているだけである。

「おつとつと」

くろだにがよろけているのである。吾輩を簡単に捕まえられると思つては困るのだ。

そこに襲い来るひしやく！

吾輩は読んでいるのである。ころころ転がってかわすのだ。船長が吾輩に向かつて何か言っているのであるが、どうでもいいのである。こやつと会ってから意味が分かったことがないのである。

それよりもなんだか楽しくなってきたのである。吾輩は負けぬ。かかってくるのである。

ぐるぐるー

じりじりと吾輩とくろだに、そして船長は間合いを詰めるのである。吾輩は負けぬ。よくわからぬが遊んでくれているのであるな、吾輩は遊ぶことは大好きなのである。なにか大事なことを忘れていている気がするのであるが、なんであつたかわからぬ。

吾輩は逃げ回るのである。絶対につかまったりはせぬ。ひしやくとくろだにをかわすのである。楽しくて仕方がないのである。そういえばこがさたちも遊んでくれればいいのであるが……思い出したのである。

吾輩はあわてて湯舟をみると、目をくるくる回しているもみじがこがさを引き上げているのである。

こがさも目がくるくるしているのである。体は真っ赤であるな。さすがはもみじである。ちゃんとかがさが沈んでいることを見ていたのであるな。吾輩にはわかっていだから遊んでいた……正直にならねばならぬ……楽しくて忘れていたのである……。

「すきあり」

船長であるな、そうはいかぬ。

吾輩は横に飛んで後ろからのひしやくをよけるのだ。油断しているわけではないのである。船長はよろけて、そのままドボンと湯舟に飛び込んだのである。ばっしやーんと波が吾輩にかかってくるのである。

ふるふる、ふるふる。

吾輩はしぶきを落とすのである。体を震わせていると水はちゃんと落ちることを吾輩は知っているのである。ふるふるして、体を震わせるのだ。

ちゃんとお風呂の中にはこがさともみじと船長が浮かんでいるのである。船長はどこか打ったのかもしれぬ。

……あれはダメな気がするのだ。吾輩は一番吾輩の話聞いてくれそうなばるすいの足元ににじり寄ってにやあにやあと言ってみるのだ。助けてあげてほしいのである。一応船長もなのである

「どうしたの？ ごはん？ 妬ましいわ」

ごはんではないのである。

ええい、仕方がないのである。吾輩は自分の力で助けに向かおうとしたのである。

「やれやれ。これじゃあどっちが勝ったかわからないわ。よつと」

くろだにが三人を引き上げて石畳に並べているのである！

すまぬくろだによ。吾輩は言っても分からねかと思つてしまつたのである。ちゃんと謝らねばならぬ。吾輩は近づいてみるにやあというのだ。

「なに？ おなかすいたの？」

おなかはすいてないのである。

吾輩はそんなにはらぺこに見えるのであろうか。まあ、いいのである。吾輩はこがさたちが無事で一安心である。船長を踏み越えて吾輩はこがさの顔の前に移動したのだ。顔が赤いのである、こがさよ大丈夫であらうか。吾輩はほつぺたをぺろりと軽くなめてみるのである。こがさはうつすら目を開けているのである。

「私は……こはんじゃないわ……」

わかつているのである。吾輩はこがさのほつぺたにかるくパンチをしてしまつたのである。ふう、もみじは大丈夫であらうか。うむ、目をすっかり開けているのである。

「ああ、おなか減つた……そうめんが食べたい……」

吾輩の周りにはこはんのことしか言わぬ。

くろねこのおさそいをうけるのである

吾輩はさっぱりしたのである。

やはりお風呂はいいのである、吾輩は綺麗好きであるからして温泉は大歓迎なのである。吾輩達はお風呂から出て旅館に戻ってきたのだ。

吾輩は知らなかったのである。

お風呂から上がってから畳の上で転がると気持ちいいではないか、ごろごろ、ごろごろ、ううむやぶさかではない。ここでヤマメがあればいいのであるが、くろだにはまだ吾輩にくれぬ。

もみじとこがさは真つ赤な顔で横に寝ているのである。これはあれであるな、ゆかたというものに違いないのである。あわい色をした服を二人だけ着てずるいのである。吾輩はゆかたを着たことはないのである、試してみたいのである。

吾輩はこうぎの意味を込めて寝転んでいるこがさの顔をばんちするのだ。こがさは赤い顔で吾輩を見ているのだ。な、なんであろうか。

「うりゃあ」

こがさが吾輩のほつぺたをつついてきたのである。吾輩は顔を振るのである。

まけられぬ。吾輩はこがさのほつぺたに肉球を押し付けてみるのだ。するとこがさも吾輩を腕でひきよせてなでなでし始めたではないか。いや、違うのである。今はなでなでするときはではない……。

せなかのあたりがいいのである。おお、うむ。うむ。

「なんだか猫さん毛並みがつやつや」

きつとおんせんのおかげであるな。吾輩は照れてしまうのである。

こがさも髪がきらきらしているのである。吾輩がほしようするのである。寝転びながらわがはいとこがさは遊んでいるのである。吾輩は重大なことがわかってしまったようなのである。

おふろ上がりには畳の上でごろごろしながらあそぶと、たのしい。

またひとつしんに近づいてしまったのかもしれない。吾輩は勉強家なのである。けいねもそういつていたから間違いはない。吾輩はそのままそのばでころころと背中を畳につけて寝転んでみる。

するとこがさが吾輩のお腹をなでなでするのである。うむ。うむ。なかなかよいくにしゃんであるな、

「うわ！ 猫」

なんであろうか、もみじが吾輩を呼んでいるのである。するりとこがさの手から逃れ

て、吾輩はとこともみじの方に歩いていくのだ。もみじよ何であろうか。

もみじはこちらに背を向けているのである。吾輩を呼んだのであるからこつちを見てほしいのである。そうしなければ恐ろしい目にあうことになるであろう、遊んでやらぬ。

やつともみじがこちらを見てくれたのである。

遊ばぬとは言いすぎたのかもしれない。泣かないでほしいのである。

「こいつはお前の友達か？」

うむ？ ともだちであるか。こがさはともだちである。

もみじが体を起こしてこつちを向いたのである。するとそのひざ元に一匹の黒猫が乗っかっているではないか。

にやあ。

にやあ。

吾輩達は挨拶をしたのである。なかなか礼儀がわかってるやつであるな。もみじも黒猫をなでなでしているのである。

「あ、こいつ尻尾が二つに分かれている。……化け猫だったのか」

もみじが黒猫の尻尾をつかんでいるのである。黒猫は身をよじつてもみじの膝から降りてきたのである。吾輩と相對するのである。

まあいいのである。吾輩達は干渉せぬ。それよりもこがさと遊ぶのである。

「あ、あれ？ 猫さん同士でお話とかしないんですか？」

不思議な顔で吾輩にこがさが言ってくるのだ。吾輩は首をかしげるのである。猫の集会はそれぞれがふらいペーとを大事にするのである。さつき黒猫とは顔を合わせたのであるからしてこれ以上することはないのである。

まな一を大事にするのが吾輩である。

それよりもこがさよ吾輩と遊ぶのである。さあ、好きにするのである。吾輩はその場に座り込んだのである。

すると横に黒猫がやってきておなかを見せたではないか。そのまま、にやあにやあとこがさにアピールしているのである。

吾輩も負けてはられぬ。こがさよこちらである。吾輩はこがさに近づくのである。すると黒猫はごろごろとしながらこがさに鳴いているのである。

「う、うう。よくわからないけど猫が二匹もなついてくれている。む、むふう」

こがさがなんだかうれしそうなのである。ほつぺたをゆるませて頭を搔いているのである。そんなことよりも吾輩はこがさをじつと見るのである。さあ、吾輩と遊ぶのである。

すると黒猫はさらにこがさに近づいて膝の上に乗ったのである。こやつ、できるので

ある。

「いやあにやあ、と吾輩が鳴けば。

みやあみやあど黒猫が鳴いているのである。

しれつなあらそいである。吾輩はこがさと遊ぶのである。これは譲れぬ。

ちよつと後ろをみるともみじが物欲しそうなめをしていたのであるが、吾輩と目が合うとあわててそっぽを向いたのである。

「……………」吾輩は紳士である。さびしがりやなもみじを放つてはおけぬ。吾輩は立ち上がったてこがさに背を向けたのである。ここは黒猫に任せただのである。もみじよ、もみじよ。ゆかたのすそのあたりを吾輩は甘くかんでみるのである。

「ころ」

もみじに怒られたのである。吾輩はそのまま。あぐらをかいているもみじの膝の上に乗ったのである。なかなかいいのである。吾輩は満足である。

「まったく。なんなんだおまえ」

もみじが何かいいながら、吾輩を撫でてくるのである。いや、くすぐってきているのであるな！ 吾輩は身をよじって膝の上でいてこうするのである。目線のすぐ上でもみじが笑っているのである。

吾輩は満足である。吾輩は誰かを仲間はずれにはせぬ。

見れば黒猫もこがさの膝の上にはいるではないか、うむむ。こがさも遊びたかったのであるが仕方ないのである。もみじはいいやつであるかして、吾輩は好きである。

もみじとこみゆにけーしよんができればいいのであるが……黒猫よそう思わぬであらうか。

黒猫が吾輩をじつとみているのである。吾輩も負けずにじつとみようとすると、もみじがこちよこちよしてくるのできぬ。

「ハハハ」か

そこではないのである。首筋のあたりをもみもみしてくれると助かるのである。

吾輩も黒猫を見たいのであるが、多忙な吾輩は目を合わせることもできぬ。しかし、黒猫はいつの間にかこがさの膝の上から降りているのである。そして吾輩にいったのである。

「なあ、い」

うむ？ こいと言うのであるか。

それだけ言うとは黒猫はたったかどこかに行こうとするではないか、吾輩はあわててそのあとを追うのである。

「あ、ハハハ」

すまぬもみじよ、なんだかよくわからぬがお誘いをされたのである。吾輩はもみじの

膝から飛び降りて、こがさの横を通り過ぎようとしたのである。

「わっ！」

びくっ。いきなりこがさが吾輩に何か言ってきたのである。しまったのである。立ち止まってしまった。こがさは舌を大きく出して笑っているのだ。

「驚かせて、止まらせる作戦成功！」

にやあ。

どこからか声がするのである。あの声は言っているのだ。吾輩に来るように言っているのである。吾輩は捕まえようとしてくるこがさの手を抜けて、旅館の入り口まで走り去っていくのである。

たったか、たったか。

結構走った気がするのであるが、黒猫が見当たらず。ううむ、地底の町並みは初めてで勝手がわからぬ。どうするか考えながら首筋を掻くのである。おお、気持ちいい。

「そこいくねこさん」

うむ？ おお、赤い髪と黒い服をきた者が立っているのである。さつきお風呂であった、たしかおりんであるな。吾輩は道に迷って黒猫を見失ったのである。

「ほうほう、それは大変だねえ。そこのお屋敷ならなにかわかるかもしれないよ」

お屋敷、
であるか？

吾輩ははじめてである。

おちやかいなのである

吾輩はお屋敷にお呼ばれたのである。

おりんの横や後ろを吾輩はとことこついでいくのである。みつあみが揺れているのである、吾輩とても気になるのである。ちよつと後ろ足で立つて、前足を伸ばしてみたのであるが全く届かぬ。

「どうしたんだい?」

おりんが振り向くとみつあみもくるりと揺れているのである。こう、吾輩のこころをくすぐるものがあるのである。こうパンチしてみたのである。いやいや、いかぬいかぬ。吾輩は紳士であるからしてそれをしていかなぬ。

おりんは吾輩を見てこくびをかしげているのである。吾輩もなんとなくそれに合わせて首を動かした。

?

「?」

吾輩達は目を合わせたまま小首をかしげているのである。後ろ足で立っているのは結構疲れるのである。それにしても妖怪も人間も両足でしっかりと立っているのでは

る。これは見ならわねばならぬ。

だから頑張ってみるのである。このまま一歩歩いてみるのだ！ あ、ダメである。前足を地面につけてしまったのである。難しいことであるな。きつとふともいつぱい練習にしたに違いないのである。

しかし、失敗したままではおれぬ、今度練習をいつぱいするのである。

吾輩はきりりとした顔でおりんに決意を「にやあ」と伝えるのである。おりんはにっこり笑って「にやあ」といい返事をしたのである。

「それじゃあいこうか」

おりんはみつあみを揺らしながら言うのである。吾輩それが気になって仕方ないのである。それにしてもいつの間にか吾輩は空を飛んでいるの……な、なんで飛んでいるのであろうか。地面がちよつとだけ下にあるのである。

「猫さん、お久しぶり」

おお、こいしが吾輩の両脇をつかんでいるのである。いつもどこからやってくるかわからぬ。しかし、吾輩は挨拶はかかさぬ。こいしよいきなり現れて吾輩をつかむのはびつくりするから、抱っこする前に一言いうのである。

みゃーみゃー。

「にやあ？」

こいしも小首をかしげているのである。ところで路地裏に連れていくのをやめるのである。おりんが別の道を行っているのである。

「あ、あれ!? ど、どこにいったんだい!」

おりんの声があるのである。吾輩が声を出そうとしたらこいしがわがはいの口をつかんできたのである。これでは声が出せぬ。みればこいしも自分の唇にひとさしゆびをあてて、片目をつぶっているのである。

「うー」

ばちばちこいしは瞬きするのである。瞳が綺麗であるな。

吾輩をだっこしたままこいしはふわりと空を飛んでいくのである。このまえばお空の上でお月様の前でだんすを始めてしたのである。こんどは地底で踊るのであろうか、なかなかおつなものである。

吾輩をだっこしたままこいしが飛んでいくのである、下を見ればがやがやとした地底の街の灯が綺麗なのである。のんびりそれを見学しながら飛んでいくのである。おお、けむりが目の前に。

「とつげきー!」

むむむ、こいしがけむりに突撃したのである。うむ? なんかい匂いがしてからすぐに抜けたのである。

「あははは」

くるくると空を飛びながらこいしが笑っているのである。吾輩はもう空を飛ぶべてらんなのであるからして、楽しくて仕方ないのである。む、なすびのような傘を指したものがいるのである。こがさであるな、目立つのである。

すぐに飛び去ってしまう。にやあと言ってみても間に合わぬ。空を飛ぶのは忙しいのである。鳥もこんな気持ちなのであろうか。

こいしが吾輩をもったまま、くるりくるりと回るのである。めがまわる。さらにこいしは吾輩の抱き寄せて顔をすりすりしてくるのである。

「おひげ」

すまぬのである。しかし、紳士はおひげは大事だとけいねも言っていたのである。こいしはすべすべであるな。

吾輩とこいしは空を見上げてみるのである。暗いのである。くるりと回ってしらを見てみるのである。おれんじ色の光を発するお店がいっぱいあるのである。まるで祭りのときみたいであるな。

ときどきいい匂いがするのである。ぐうとお腹が鳴っているのである。

吾輩のことではないのである！ こいしのお腹である。

「えへへ」

なんか恥ずかしそうにしているのである。頭を搔くのはいいのであるが、吾輩が落ちそうになっているのである。恥ずかしがることはないのである、おながが減るのはいいことである。なぜなら、おながが減ったときの方がごはんがおいしいのである。

「おなが減ったし。それじゃあ帰ろつと」

お、おお。風が吾輩をたたくのである。こいしが加速したのであるな、吾輩が本気で走ったときどつちが速いであろうか。いい勝負かもしれぬ。

遠くに大きなお屋敷が見えてくるのである。ぐんぐん近づいてくるとさらに大きくなってくるのである。もしや、あれがおりんの言っていたお屋敷なのかもしれぬ。ということは、きつとおりんもあそこにいるはずである。

お屋敷はせいよーふうというやつであな。吾輩はちゃんと知っているのである。

こいしは扉をらくらくと飛んで超えていくのである。吾輩はちよつとうらやましいのであるが……いやいや、違うのである。ちゃんと玄関から入らねばならぬ。吾輩はこいしににやあと言ってみるのである。

「にやあにやあ」

ううむ。話を通じぬ。

こいしが吾輩を抱いたまま、大きなお屋敷の大きなお庭に下り立ったのである。きれ

いな花壇の真ん中に降りたものであるから、こいしの周りに花びらが舞うのである。

ひらひら、ひらひら。赤、むらさき、黄色、桃色の花びらが舞うのである。こいしは吾輩を抱いて、その場で軽く踊ってみるのである。吾輩はお花と踊るのは初めてである。

お花の花びらが吾輩の目を奪うのである。それにしてもなぜこいしはこんなにも楽しげなのであろうか、いつも突然やつてきて突然吾輩をどこかに連れて行ってくれているのである。

そういえば地底に来るように言ってくれたのもこいしであったのである。吾輩は楽しい思いをしたのもこいしのおかげかもしれぬ。

「こいし。なにをしているのかしら」

「あ、おねえちゃん。ただいま!」

うむ。こいしが止まったのである。見ればお屋敷の方から誰かが歩いてくるではないか、こいしと同じような目玉の飾りをつけているのである。しかし、髪は桃色である。そういえば桃を吾輩はほとんど食べたことがないのである。

「おかえりなさいこいし。なんで猫をだいているのかしら?」

「おなか減ったなあ。クッキーを食べに帰ってきたの」

「……………猫は?」

「クッキー。クッキー」

こいしは吾輩を抱いたままステップしながらお屋敷に行こうとするのである。するとその後ろ首を「おねえちゃん」が捕まえたのである。

「お、おお」

こいしが驚いているのである。大きく上げた前足が前に進まぬ。

「はあ、ちょうどお茶にしようと思っていたから」

おねえちゃんが吾輩達に言うのである。見ればお庭に丸い小さなテーブルとイスがあるではないか。テーブルの上にあのお茶を入れる、あのあれが置いてあるのである。

「ティーポット」

おお、おねえちゃんが教えてくれたのである。うむ？　なんか変な感じがするのである。

「お菓子をもつて来るから座っていなさい」

こいしは「はい」と言いながらそれに走り寄って、どすんと椅子に座ったのである。吾輩を抱いたまま、足をぶらぶらさせているのである。

「猫さんいい匂いがする。温泉に入ったの？」

照れるのである。吾輩は綺麗好きである。

こいしとおねえちゃんも入れればいいのである。吾輩がしゃんぷーを教えてあげるの

である。

ひぎのうえでくつろぐのである

ティーポットという言葉が吾輩はちゃんと覚えているのである。吾輩は椅子に座ったこいしの膝の上に座っているのである。なんであろうか、椅子が何重にもなっているみたいで豪華かもしれぬ。

こいしの前におかれたカップに紅茶が注がれているのを吾輩はじつと見はっているのである。こう、こぼれてはいかぬ。ちゃんと見はっておらねばならぬ。

こぼこぼ。

いい匂いがするのだ。吾輩はお茶を飲んだことはないのであるが、このにおいは嫌いではないのである。

「さとりおねえちゃん。お砂糖どれくらい入れてもいいの?」

「ほどほどにしておきなさいこいし」

紅茶を入れてくれているのはこいしのお姉ちゃんなのである。名前はさとりというのであるな、姉妹そろっていい名前である。こいしにちゃんとやってやらねばならぬ。

「ありがとう」

なんでさとりが吾輩にお礼を言うのであろう。ううむ、わからぬ。吾輩はまだ何も

言っておらぬ。こいしが吾輩を見ているのであるが、どうしたのであろう。

「猫さんお姉ちゃんが砂糖はほどほどにしておきなさいって、猫さんはどれくらい食べるの?」

「はい……猫に砂糖をあげてはいけないわ」

吾輩は砂糖を食べたことはないのであるが、ダメであるか。残念である。とても残念なのである。

しかし、ちよつとくれぬであろうか、巫女にお土産でもっていけば喜ぶかもしれぬ。セミの抜け殻は巫女にあげても喜ばぬのである。ぜいたくものであるな。巫女は。

「えーでもお隣は食べるけど。ま、いっか。クッキー。クッキー」

こいしがテーブル上のクッキーを手にとってぼりぼり食べ始めたのである。巫女はこの前たくわんをぼりぼりしていたのである。クッキーもたくわんも吾輩は食べたことはないのであるが、きつとどっちもおいしいのであろう。

さとりは紅茶を入れて自分で飲んでいるようであるな。紅茶は、熱そうで吾輩は敵しいやもしれぬ。しかし何事も挑戦をせねばならぬのだ。

吾輩は身を乗り出してクッキーに前足を伸ばしてみるのである。

「はい、め」

さとりは怒られたのである。

ううむ、わからぬ。それにしてもこいしよ、吾輩の頭に食べているクッキーの粉が落ちてくるのである。吾輩は気になって仕方ないのである。さとりよ、なんとか言ってるのである。

「こいし、もつとお行儀よく食べないとだめよ」

「はい」

おお、なんとか言ってくれたのである。吾輩は感動したのである。こいしもぼりぼりごくりとしてから吾輩を抱っこしてくれているのだ。

「そういえば猫さんは温泉に入ったのなら、今度はどこに行くのかしら？」

「その猫はこいしがつれてきたんじゃないの？」

「ちがうよお姉ちゃん。あのへんな傘を持ったのと天狗が連れてきたの」

変な傘とは失礼である！ なすびみたいな傘である。というか、吾輩はこがさとみじと一緒に来たのである。二人ともいいやつなのである。吾輩が保証するのだ。

「ふーん。そう」

さとりはおいしそうに紅茶を飲みながらそう言ったのである。

それに吾輩はとも大切なことを探しにこの地底に来たのである。なんでも、心の読める妖怪がいるというではないか、吾輩はぜひとも会って話したいのである。

さとりが吾輩をじつと見てくるのである。

吾輩は照れるのである。いきなりどうしたのであるか。

「いぢよいぢよ」

こいしよ、吾輩をくすぐるのはやめるのである。

そう、顎の下なら構わぬのだ。吾輩そこは大好きである。うなうな、吾輩はこいしの膝の上で体をひねってみるのである。

「猫さんふかふかだね」

おなかを撫でながら言うのである。吾輩はちゃんと毛並みのケアをしているのである。吾輩は紳士であるからして、みだしなみにはうるさいのである。

「ふふ、ふふ。紳士って……ふふ。そうね。紳士はみだしなみに気を付けないといけないわ」

うむ？ さとりが笑っているのである。吾輩はよく聞こえなかつたのであるが、何か言っているように聞こえたのである。なーお。こいしよ、なぜさとりは笑っているのだろうか。

「あはは」

いや、こいしもなぜ笑っているのだろうか、吾輩にはとんとわからぬ。愉快なことがあるのなら吾輩にも教えてほしいのである。ずるいのである。

「ふふふふ」

さとりも笑っているのである。そもそもさとりはなぜ笑っているのかわからぬ。さとりは手に持ったコップを置いて、組んだ両手の上に顎を載せたのである。吾輩もあの格好を試してみたいのであるが、できぬ。

「こいし。あなたは相手とのコミュニケーションで大切なことは何だと思うかしら？」
「お姉ちゃん。砂糖取って」

「……はい」

さとりは優しいのである。砂糖の入った箱をちゃんと取っているのだ。吾輩はそういういいところを見逃さぬのである。

「そうね。いいところを見逃さないことね」

さとりも同じ考えなのであろうか、吾輩と同じことを言ったのである。ううむ？ わからぬ、吾輩はなんとなく不思議に思うのである。まるで吾輩の思っていることがわかっていくかのようであるな。

「はい、(一)名答」

ゴメイトウとはなんであろうか。お米の仲間やもしれぬ。さとりよおなかが減ったのであろうか？

なんだかさとりがかつくり肩を落としているのである。そこまでおなかが減っているとは吾輩にはわからなかったのである……。

いや、なにか悪いことでもあったのであろうか、吾輩に話をしてみるのである。吾輩は悩み事を聞くのは得意なのである。何時間でも聴いているのである。

「……」

にやー。

さとりよ遠慮することはないのである。吾輩の心は神社よりも広いのである。吾輩は困った人を放つてはおけぬのである。

「紳士、ね」

おお、そうである。吾輩は紳士なのである。

吾輩はこいしの膝の上できりりと顎を上げて、胸を張ったのである。なんとなくこうしていると誇らしいような気がするのである。……いや、薄々わかっているのだから。さとりはきつと吾輩の思っていることがちゃんとわかっているに違いないのである。

こう、いざ話ができると思うと吾輩は照れてしまったのである。前足で頭を掻いて見るのだ。

「猫さんこいがかゆいの？」

こいしが頭をかいてくれるのである。いや、別にかゆいわけではないのであるが、それでもこうそのあたりがいいのである。なでなでされるのも吾輩は好きなのである。

「お姉ちゃんも撫でてあげたら？　ほらほら」

「こいし、猫を持ち上げて私の顔につけようとするのは、やめ、やめ、やめなさ、むぐ。
ん、ん、ん」

こいしが吾輩を持ち上げてさとりに押し付けるのである。吾輩はなされるがままなのである。下手に前足を上げたらさとりの眼にあたってしまうかもしれぬ。

「おお？」

さとりがこいしから吾輩を取りあげたのである。今度はさとりの膝の上である。なかなか落ち着く場所である。おお？ こいしもさとりの膝の上に顎を載せているのである。何をやっているのかわからぬ。

「こいし……まあ、いいわ。そうね。なんで私に会いたかったのかしら、紳士さん？」

吾輩が顔を上げるとさとりが見ているのである。

そうであるな、吾輩は巫女ともっと仲良くなりたいたのである、

「そう。巫女ってあの紅白のことね」

こーはくであるか、そうであるな。赤かったり白かったりするのである。

「にやーにやー」

「こいし……なにをしているの？」

「猫さんだけずるい」

「……………」

さとりが吾輩とこいしの頭をなでなでするのである。

「……仕方ない子たちね。話が進まないわ」

吾輩とこいしは膝の上で満足げにしてしまうのである。

てーぶるのうえでおしやべりなのである

吾輩は負けぬのである。さとりがなでなでしてくれているのであるが、吾輩の横でこいしもなでなでされているのである。

「んー」

こいしはとても気持ちよさそうであるな。そうである、吾輩も負けてはおれぬのである。こう、なでなでされるのは吾輩がベテランなのである。さあ、さとりよもつと撫でるのである。

「……あなたたち何をしているのかしら？」

「お姉ちゃん。なんだかねむたくなってきちゃった」

「……こいし。眠るならベッドに行きなさい」

「ぐう」

「ハハハハ」

吾輩も眠たくなってきてしまったのである。これはりらつくしているからに違いないのである。いやまだ眠ってはおれぬ。せつかく心の読めるさとりと知り合うことができたのである、こみゆにけーしよんを巫女と取るにはどうすればいいのであろうか。

「まったく。この子は。でもちよūdよいかもしれないわ」

さとりが吾輩を抱き上げてテーブルの上に乗せたのである。吾輩は今テーブルに腰かけているのである。まるで人のようであるな。なんだかうれしいのである。

さとりが吾輩を両手で持ったまま、じいとみてるのである。そんなに見つめられても吾輩はやぶさかではないのである。いや、もしかしたらこれはにらめっこやもしれぬ。吾輩も負けずにさとりを見返したのである。じい。

「くす」

おお、笑ったのである。にらめっこは吾輩の勝ちであるな。

「いつからにらめっこになったのかしら？」

そういえばそうである。吾輩ははやとちりしてしまったのかもしれぬ。恥ずかしいのである。

「なんで巫女なんかとコミュニケーションなんて取りたいのかしら？」

うむ。それは説明すると深いわけがあるのである。話せば長くなってしまいかもしれぬのだ。……うむ、まずどこから話せばいいのであろうか、そうである！ 吾輩は巫女と仲良くなりたいたのである。

おお、説明が終わってしまった。

「なるほど」

さとりはこいしの頭を両ひぎの上のせてなでなでしているのである。吾輩はテールの上でそれを見ながらうらやましいなどとおもって……はおらぬ。吾輩は紳士であるからして、お膝の上はこいしに譲るのである。

にやあー

でもまあ、あとでもう一度お膝の上のせてくれても吾輩は一向にかまわぬ。ちらり、ちらり。さとりは知らんぷりしているのである。いや、口元が笑っているのを吾輩は見逃してはおらぬ！

「ふふ、めんなさい」

いいのである。吾輩は寛大に許すのである。吾輩のこころは山よりも海よりも大きいのである。……頭の中で山よりも大きなこころが暴れているのである。おそろしいのである。

吾輩は海は見たことないのである。

さとりは吾輩を見てきたのである。こいしは「おねえちゃんだいすき」と言っているのである、寝言であろうか。吾輩も寝言を言っているのかもしれない、しかし吾輩は吾輩の寝言を聞いたことはないのである。

さとりは自分の寝言を聞いたことはあるのだろうか？

「ないわ」

ふむ。吾輩もないのである。

「あなたはここで暮らす気はないかしら？」

吾輩にとってはお天道様のしたはみんな吾輩のお庭なのである。

「そう、それでも地上に戻っても巫女とおしゃべりは難しいと思うけれど。ここならいっぱい仲間もいるわ。こいしもあなたが気に入っているようだし」

ううむ。やはり巫女とおしゃべりは難しいのであるか、吾輩はとても残念なのである。それでも吾輩は上に帰るのである。巫女が心配するやもしれぬ……。

「ずいぶんと巫女のことを好きなのね」

吾輩は誰でも好きなのである。

ふとこがさもみじもようむもこいしも、多すぎて全部は言えぬ。吾輩はみんな好きなのである。おお、さとりのこともちゃんとききであるからして安心するのである。

さとりが目をぱちぱちさせているのである。なにかあったのであろうか、

「そう、それはどうも」

さとりはこいしを撫でる手を止めて紅茶のかつぷを口元にもっていったのである。吾輩は紅茶を飲んでいるさとりを驚かせたらどうなるであらうかと、体がうずうずしているのである。

さとりがせき込んでいるのである。大丈夫であらうか。

「げほ、げほ、や、やめなさい」

まだ何もしておらぬのである。いや、しようとしたわけではないのであるが。なんとなく考えてしまったのである。

吾輩はテーブルの上にしやがんでみるのである。なかなかいい場所であるな。いつもは神社の屋根に上つてのんびりしていることもあるがこのくらいの高さもいいかもしれぬ。

神社に一つ置いてくれぬであろうか。

「あの巫女はそうはしないでしょうね」

さとりは巫女と知り合いなのであろうか、吾輩は気になるのである。

「知り合いというほどではないわ。通り魔みたいなものね」

とおりまーであるな。おいしいあれであるな。すまぬ。本当はよく知らぬ。まあ、詳しくは知らぬがきつと巫女のいいところであらう。さとりよどういう意味か教えてほしいのである。吾輩はにやあと真摯にお願いしたのである。

「……………」

さとりも知らぬのであろうか。なかなか口を開かぬ。

「と、とおりまーというのは、そうね。えっと。その」

さとりよ頑張るのである。吾輩はすっかりときいているのである。巫女のいいとこ

ろを教えてほしいのである。吾輩は真剣に耳をびくびくさせるのである。

「道行く人たちにコミュニケーションを仕掛ける人のことよ……」

なるほど、吾輩はまたひとつ賢くなったのである。確かに巫女と一緒にいるといろんな人に会うことがある気がするのである。もしかしたらみんな巫女のが好きなのやもしれぬ。

こみゆにけーしよんは大切なのである。吾輩も道行く人に挨拶を欠かさぬのである。

「……ぐめんなさい」

なんでさとりが謝るのであろうか。吾輩は不思議で首をかしげてしまったのである。吾輩はいいことを教えてくれたさとりに感謝しているのである。今はセミの抜け殻を持つてはおらぬが今度持つてくるのである。

さとりよどこを向いているのであろうか。

吾輩はさとりの見ている方向と一緒に見たのだ。何もないのである。吾輩はさとりが何を見ているかわからずに、にやあと聞いてみたのであるが、さとりはこちらを振り向いてはくれぬ。

まあいいのである。

そういえばこがさたちはどうしているのであろうか、そろそろ吾輩も戻らないと心配しているやもしれぬ。そう思って、吾輩はテーブルからとっと、ジャンプしたのである。

着地はこう肉球をうまく使わねばならぬ。これにはコツがいるのだ。

しゆた。吾輩は胸を張った。

吾輩はさとりを振り向いたのである。こいしはまだ寝ているのであるな、今度また一緒に遊ぶのである。

「もういくの?」

楽しかったのである。また来るのである。

「また? また来られるつもりなのかしら?」

大丈夫である。吾輩はちゃんとさとりのことを覚えていたのである。地底も吾輩の庭のようなものであるから、ちゃんと会いに来るのである。

一度会ったらともだちなのである。今度はおいかけてこをしてもいいかもしれない。それでも吾輩が一度神社に帰らないと巫女が心配するのである。一言にやあと云っておくのである。

「あの暴力巫女のどこがいいのかわからないわ」

さとりが手に大きな目玉のようなものを持ったのである。さとりの服の飾りなのであろうか。お洋服に目玉をつけるとは吾輩はさとりとこいししか見たことがないのである。

「これは個人的な興味でしかないわ」

目玉がぴかっと光ったのである！
「少しでも読ませてもらうわ」

さわがにとあめとにじのつめあわせなのである

さとの眼がぴかつとなると吾輩は昔のことを唐突に思い出してしまったのである。忘れていたわけではないのであるが、まあ大したことでもないのである。巫女と初めて会った日のことであるな。

吾輩は暑かったたので水浴びに出かけたのである。

山の中に入ってすこし歩いてみると、吾輩の知っている川があるのである。その川には名前があるのかはわからぬ。吾輩が見かけたときからずっと流れているのである。

お天道様が元気な日だったのである。おおきなにゆうどうぐもの下をあるいて吾輩はその川にやってきたのである。セミがみんな鳴いているので、どこにいるのかを探してみたのであるがあまりに多すぎて取るのをやめておいたのである。

吾輩は川の流れが好きである。特にお昼に近くの岩で寝そべりながら流れを見るのが好きなのである。きらきら光りながら流れていく水はもしかしたらたからものが入っているやもしれぬ。

そうおもって吾輩は前足を水につけてみてもきらきらはとれぬ。なんどすくってみてもとれぬ。ううむ、そう悩んでいた日のときである。

吾輩のそばでこけて川に飛び込んだ巫女を見たのである。

さとりよ、何を笑っているのであろう。吾輩はその時すごく心配したのである。吾輩は驚きすぎてびくと体がはねてしまったのである。

吾輩がずぶぬれになった巫女を心配してにやあにやあと試みてみたのである。

「あ？　なによあんた」

一言目がそれであった。巫女は足が滑つて恥ずかしがっていたのやもしれぬ。吾輩にはちやんとわかっているのである。

巫女はいつもの服と手に桶を持っていたのである。

「沢蟹を取りにきてとんだ災難ね。へっくち」

巫女は鼻を押さえながら言っているのである。なるほど沢蟹を取りに来たのであるな。吾輩も手伝うのであると思つたのだ。沢蟹はいかぬ、ハサミもいかぬが硬いから食べられぬ。

巫女はじゃぶじゃぶ足を川に入れて石をどけていたのである。吾輩もちやぶちやぶ川に入って水の流れを見ていたのである。吾輩が水に入ると胸のあたりまで浸かってしまうのであるこればかりはどうしようもないのである。

「あ、いたー！」

巫女が沢蟹を捕まえてから近くに桶に入れているのである。あんなに捕まえてどう

するのであろうか、その時の吾輩にはわからなかったのであるが、どことなく巫女はうれしそうだったので吾輩もうれしくなってしまうたのである。

「今日は沢蟹をいっぱい食べれるわ」

ニコニコしながら巫女が言っているのである。

そこで吾輩は思ったのである。巫女は顎が強いのであるな。沢蟹は食べようとしたことはないのである。あの桶に入っているものたちはきつと巫女がそのまま食べるのであるな。

もしかしたら吾輩も食べられるかもしれない。恐ろしいのである。さとりが涙をながしているのである。おなか痛いのであろうか。

おお、あそこにもいるのである、にやあにやあ、巫女よあそこである。

「あ。沢蟹。あんた見つけてくれたの? ……そんなわけないか。猫だもんね」

しんがいである。吾輩はお手伝いがしたかったのである。

そんなこんなで吾輩と巫女は楽しく沢蟹をとったのである。いっぱいとれて満足であつたのであるが、いつの間にか空が真つ暗になつていたのである。

おおきなゆうどうぐもが吾輩達の上に来ていたのである。ぽつぽつと雨が降り始めて、ばばと大雨になつてしまったのである。

「い、いきなりなんなのよー」

巫女が頭のりぼんを押さえながら走り出したので、吾輩もつられて走ったのである。帰りに道は泥がいつぱいで吾輩と巫女は泥だらけになりながら一緒に帰ったのである。

よく考えたらあの時に吾輩が巫女と一緒にいる理由はなかったのであるが、なんとなくついていったのである。

巫女についていくといつの間にか見知らぬながい石段を登っていたのである。今思えば神社に行く道である。いまはもう吾輩の庭である。

石段をとてとて滑らないように歩いたのは覚えているのである。雨の日は滑りやすいのであるからして、気をつけねばならぬ。

登り切ったときに吾輩大きな鳥居と雨に濡れている神社をみたのである。おおきなたてものだったのである。巫女はそのそばのお家に入っけいこうとしたのであるから、吾輩もおじやましようとしたのである。

「あ、あんた、ついてきていたの？」

ついてきていたのである。おじやまするのである。

「だ、だめだめ」

吾輩は脇をつかまれてもちあげられたのである。このころから巫女は吾輩を家には入れてはくれなかつたのである。吾輩は持ち上げられて巫女と顔を合わせたのである。

あめのおとがざあざあとなっていたのである。

あめの日はどことなくくらいなのであるが、巫女は困ったような顔をしていたのである。

「はあ、玄関までよ」

吾輩を玄関において巫女はひとりで上がっていったのである、一度振り向いて「玄関までだからね!!」と叫んでいたのである。吾輩はしかたなくその場に体を落ちつけたのである。

よくふっているのである。吾輩は玄関からそとを見ていたのである。なんとなく寒いのである。

そう思っていると上から何かに包まれたのである。見れば手ぬぐいであるな。

「ごしごし、ごしごし」

体が拭かれるのである、気持ちいいのである。

「かぜひくんじやないわよ」

顔は見えないのであるが、巫女が拭いてくれているのはわかったのである。ざあざあ雨のおとをききながら拭いてくれるのは気持ちがいいのである。吾輩はすっかりと拭かれて、手ぬぐいから顔を出してみると、

顔に泥をつけた巫女がいたのである。

……巫女は口が悪いのであるが、吾輩を先に拭いてくれたのをちゃんと覚えているの

である。なんとかお礼を伝えたいと思つてにやあにやあとやつてみるのである。

「なによ。どこかかゆいの?」

ちがうのである。お礼を言いたいのである。

（ごしごし）

ううむ、巫女よ、自分の心配をするのである。おお背中が気持ちいのである。いやちがうのである。吾輩は巫女の手のうちから飛び出してみれば、巫女はげんな顔をしているのである。

びしよぬれであるな。

吾輩はちゃんと着替えてくるように言つてみるのであるが通じぬ。むしろ吾輩を拭こうとするのである。

そうであるな。吾輩はこのころから巫女が口は悪くてもやさしいことをちゃんと知つていたのである。

そうであるな。吾輩はあの時のお礼をちゃんと言つていないのである。いつのまにかこみゆにけーしよんのことばかりを考えてしまったのである。いかぬいかぬ。ちゃんと思ひ出すことができたのである。

さとりが吾輩を見ているのである。さとりの顔は優しい気がするのであるな。

「そうですか。ちゃんと思ひ出すことができましたか?」

大丈夫である！ もう忘れてはせぬ。それと沢蟹は巫女がちゃんとお食べ方を教えてくれたのである。まあ、一匹もくれなかったのであるが。けちんぼなのである。

でもそれもあの雨の後にお庭で作っていたのである。虹が見える雨上がりは気持ちよかつたのである。

「私もたんなる興味だったのだけど、あの巫女にもそういうところがあるのね……」

さとりよこんど巫女と追いかけて遊んでみるのである。遊んでみるといいところがよくわかるのである。

「私が巫女とおいかけっこ？ ふふ。考えておきましょう。それと」

さとりが吾輩に向かって言ったのである。

「ふふ、紳士な貴方に必要なものをひとつあげましょう。それまで地底を楽しんできなさい」

さとりはぱちり片目を閉じたのである。

だれとでもなかよくできるのである

吾輩はそろそろおいとまをするのである。別れるときにはちやんと挨拶をせねばならぬ。吾輩はれいぎをちやんとわきまえていると評判なのかもしれぬ。まあ、誰にも聞いたことはないのであるが。

「くー、くー」

こいしよ、こいしよ。にやあにやあ。

いつの間にかこいしはお花畑の中で眠っていたのである。なんでこんなところにいるのかはわからぬ。さつきさとりと話をしてるときに移動したに違いないのである。

「ほら、こいし。風邪をひくからベッドにいきなさい」

さとりがゆすつてもおきぬ。吾輩は前足で顔をぼんぼんとしてみるのである……！

「がぶっ」

かまれるところであつた。

それはもう見切つているのである。前にちえんに噛まれて以来、吾輩はよける練習をちやんとしていたのである。吾輩はちよつと得意になつてしまうのである。

まあ、起こすことはできなかったのであるが……。それにしてもお花畑で眠るこいし

はなんだか似合うのである。さとりも頷いているのであるな。うむ？ 吾輩がぶりむくとなぜかそっぽを向いてしまったのである。

「思わず頷いただけです」

そうであるか。……いやさとりよそっぽを向かれるのも寂しいのであるが、じつと見られても照れるのである。

☆

吾輩はとてとてお屋敷の門をくぐったのである。なかなか楽しい時間であったのであるな。心の読めるさとりに出会えて吾輩はともうれいのである。

「はあ、どこにいったんだろ。地底中探してもいないわ」

おお、おりんである。吾輩はにやあと挨拶をして通り過ぎるのである。いきなりいなくなつて申し訳ないのであるが、吾輩もこいしに連れられて驚いたのである。

「ああ、こんにちはつ。あれ？ え？ なんであつちからくるんだつ！？ ええ？ え？ ええ？」

おりんが何か言っているのである。すまぬ、そろそろこがさのもとに戻らないと心配しているかもしれぬ。吾輩はひとことによあと振り返つて鳴いてみるのである。なんだか疲れているみたいであるな、

元氣出すのである。さとりがさつき甘いおかしを持っていたのである。おりんも

行つて食べさせてもらうのである。そう吾輩が言つと、おりんはにっこり笑つてゐるのである。ちよつと通じたのかもしれぬ。こみゆにけーしよんとは気持ちなのであるな！

吾輩はそれだけ言つと、たつたか駆けだしたのである。

「あ、おーい。さとり様と会つたのかい」

後ろから声があるのであるが、吾輩は振り返れぬ。さとりはいいやつであつた。

吾輩はしつぷうのようにかけるのである。けいねが言つていたのであるがしつぷうはとても足が速いらしいのである。吾輩も負けているわけにはいかぬ。こんどしつぷうと出会つたときはおいかけついで勝たねばならぬ。

すばやくこがさたちを見つけて、遊ぶのである。

ううむおらぬ。おらぬな。意外と通りには人通り、ううむこの場合妖怪通りが多いのである。

ふと、そこで吾輩は思つたのである。

きつとこの妖怪たちも毎日いろんなところでこみゆにけーしよんをしているのである。誰かに挨拶をして、きつと吾輩と巫女のように仲良くなつてゐるに違いないのである。そう考えると仲良しさんがいっぱいこの世にはいるのであるは、吾輩は安心したのである。

なぜ、安心したかは吾輩にもよくわからぬ。考えるのは後である。

地底はほんのり暗いのであるが、道に燈籠がちゃんと並んでいてぼんやりと明るいのである。吾輩はこのくらいが好みやもしれぬ。とととて、歩くとなんだかい匂いのお店もあるのである。

いかぬいかぬ、吾輩はこがさともみじを探さないといけないのである。

にやあにやあ、そこを歩く者よ。ちよつと聞きたいのである。ナスのような傘を持った吾輩のともだちを見なかつたであらうか。

吾輩が声をかけたものは、お酒をのみながら歩いているのである。

前に回つてにやあにやあ聞いてみると、ぱちくりと目を動かしているのである。サンダルであるな、それに頭から角が生えているのである。ううむ、これが噂に聞く鬼であらうか。

「なんだ、おまえ。迷子か」

前もこんなことがあったのであるが、吾輩は迷子ではないのである。そうしつかりと胸をはつてにやあと訴えるのである。この女子は白い服を着ているのである。

「地底に普通の猫とは珍しい。屋敷の方からきたのかな」

屋敷からやってきたのであるが、吾輩はちゃんと地上に帰るところがあるのである。それでこがさともみじを探しているのである。二人とも泣いてなければいいのである。

そういえばこんなことも前にあったのである、あの時はこころは部屋で寝ていたのである。

「おーい」

おお？ 吾輩は聞きなれた声に耳をぴくぴくさせるのである。この声はもみじであるな。なんであろうか、こう安心するのである。今日はよく安心できる日であるな。

吾輩は後ろ足で立ったのである。前足が浮くとばらんすをとるのは難しいのであるが、遠くまで見渡せるのである。えへん。

「おお、立った」

おなごも感心しているのである。

うむ！ あちらから手を振っているもみじが近づいてくるのである。綺麗な浴衣を着て走ってくるのである。下駄を鳴らす音は吾輩も結構好きなのである。

「はあ、やっと見つけた。まったくどこに行っていたんだ。小傘とさがして……」

もみじが止まったのである。おお、なんであろうか、吾輩持ち上げられたのである。

「き、貴様。こんなところに」

もみじよ何を言っているのであろうか、吾輩が後ろを向くと角の生えたあのおなごが吾輩を抱き上げているのである。口元が笑っているようであるな。それによく見えると黒髪に白いものが混じっているのである。

「これは、これは。天狗様じゃないですか。こんなところで会うとは奇遇ですね」

「天邪鬼……地底に潜んでいたのか」

もつとこう、こういう風にかけてもらうと気持ちいいのである。吾輩は身をよじる。

「は、地上ではいろんなやつらに追い回されたけど、結局誰にもつかまりませ、おいうごくな、わわ。おい。……つ、捕まりませんでした。強者を気取っている天狗にも」

「……そんなことはどうでもいい、今はお前とやりあう気はない。その猫を返せ、鬼人正邪」

せいじゃというのであるか、かわいい名前であるな。吾輩は気に入ったのである。それを伝えるためにはどうすればいいのであるが、おおそうである、よいこよいこすればいいのである。

「は、やなこつた」

にやあにやあ。

「いいなりにはなら……こら、なんだ。ほら。おとなしくしろ」

吾輩かつちりと抱かれてしまったのである、身動きが取れぬ。もみじはなぜか呆れた顔である。

「……その猫は一筋縄ではいかないから、返した方がいいと思うけど」

「や、やなこつた」

「すでに気付いた口調が崩れてかけているし……」

「う、うるさいな。わ、わ。お前も動くなって言っているだろ！」

怒られたのである。吾輩はせいじやを撫でようとしただけなのである。

もみじよ、せいじやとも仲良くしてやるのである、にやあにやあと言ってみるのである。

「待っている今助けてやる」

いや、別に助けてほしいわけではないのである。

それでもがんばりやさんのもみじは吾輩を指さして言うのである。

「もう一度言うが私は争う気はない。その猫を返せ。天邪鬼」

「そうはいくものか。私は生まれ持ったアマノジャクだ」

おお前足が動くのである。なんとなくせいじやのほつぺたを触ってみるのである。

「はいそれでふかとかへふ……ぐ、ぬぬ」

柔らかいほつぺたであるな。気に入ったのである！

せいじやはいいこなのである

おお、おお。吾輩はせいじやのほつべたが気に入ったのである。

肉球で押し見ればこう、いいではないか。せいじやよ流石なのである。吾輩はほめるところはちゃんとほめることができるのである。

「やめろ、やめ」

うむ？ せいじやがやめろといいながら顔を振っているのである。

！ もしかすると吾輩のするどい爪があたってしまったのやもしれぬ。ちゃんと当たらぬようにこう引つ込めていたつもりだったのであるが、すまぬ。吾輩は申し訳ないきもちでいっぱいである。

にやお

「い、い、い。何を登ってきているんだ」

吾輩は体をくねらせてせいじやの腕から抜けると、その肩に前足をかけたのである。ううむ。せいじやの顔が目の前にあるのである。しかし、どこも赤くはなってはおらぬ。きつとだいたいしないのである。

しかし、痛かったのであるな。吾輩は反省しているのである。

「……！ おまえ、なめるな」
 ぺろぺろ。

こうすると痛みが取れることは吾輩のいがくてきちしきで知っているのである。けいねも軽いけがならば唾をつけていれば治ると言っていたのである。ちゃんと毎日ベんきようしているのが役に立つのであるな。今度はふとに教えてやらねばならぬ。

ふとはいつも遊んでばかりである。

「……いいかげんに。あは……いいかげんしろ！」

せいじやよ強がるのはよすのである。

吾輩を離そうとしてもダメなのであるちりようは最後までせねばならぬ。

それに痛いときははいたいといわねばならぬのである。吾輩も痛いときにはちゃんと言うのである。

「おこ」

吾輩はもみじが呼んでいるので振り向いたのである。もみじはあとため息をついているのである。疲れたのであろうか。もう一度おふろに入るのもやぶさかではないのである。吾輩もあそこはなかなか気に入ったのである。

「天邪鬼。今、あはっていわなかつたか」

「言っていない」

「……まあいいけど。その猫は自由気ままに動き回ることはわかっただろう？ さつさと離せ。何度も言うが今お前とやりあう気はない」

せいじやが吾輩をまだ抱っこしたのである。なかなかいいではないか。この抱っこの仕方には吾輩もまたたびをあげてもいいのである。それにしてもせいじやからなんだかい匂いがするのである。おおこれは温泉であるな、きつとさつき入ったのである。

くんくん、正邪はちゃんと綺麗にしているのである。吾輩もけなみのめんでなんすにはうるさいのであるが、感心なのである。

「はっ！ こちらも何度もいわせる。私は生粋のあまのひやあ」

いかぬ。思わず舐めてしまったのである。

せいじやよ話の邪魔をしてわるかったのである。吾輩をきにせずもみじとお話をするのである。しかし、仲良くしなければ吾輩にも考えがあるのである。

またたびを分けてはやらぬ。考えるだけでおそろしいことである。

うむ？ せいじやが吾輩をにらんでいるのである。吾輩は何か悪いことをしたのであろうか、わからぬ。もみじよ、教えてほしいのである。おお、もみじはくすくす笑っているのである。

「格好がつかないな。天邪鬼」

「……」

次の瞬間吾輩は空を飛んだのである。

せいじやに抱かれたまま、近くの建物の屋根に飛び乗ったのだ。なかなかやるのである。かつんとせいじやのサンダルが瓦を鳴らしているのである。

「返してほしかつたら力づくで取り返すんだな」

屋根の上を走り出したのである。楽しいのである。せいじやも屋根を伝って奔るのであるな吾輩も人里でよくやるのであるが、木の屋根はいかぬ。たまに落ちそうになるのである。

「天狗を舐めるな」

真横にもみじがいるのである。速いのである。もみじの眼の光がこう線になって見えるのだ。

やはりもみじはおいかけっこが得意なのであるな。吾輩はにやあとなんとなく鳴いてみるのである。もみじはそんな吾輩に手をのばしてきたのである。

おお、おおお。屋根をころがる。せいじやに抱かれたままである。屋根のとちゆうでとまってせいじやが立ち上がったのである。

「そう簡単に返すわけないだろ」

「……ちっ」

もみじは着崩れた浴衣をなおしているのである。腰のひもをきゅつと締めながら吾輩を見ているのである。吾輩も一度は浴衣を着てみたいのである。そういえばせいじゃは着ないのであろうか。

おお、そんなことを想っていると吾輩は両脇を持たれてつきだされたのである。

「おっと、こつちには人質……猫がいることを忘れてもらったら困る」

「卑怯だぞ……」

くすぐつたいのである。もう少し下を持ってほしいのである。

吾輩はにやあにやあとせいじゃに訴えるのである。

「はは、どんな手を『にやあにやあ』つても『なむなむ』ばいい。つてうるさい！」

怒られたのである。

「まったく。なんなんだお前は」

せいじゃが吾輩の顔を覗き込んできたのである。こういう時はしつかりと相手の目を見なければならぬ。きりりと吾輩は表情を引き締めたのである。

「なんだかとぼけた顔しているな。……あー。あいつに見せたら気に入らなうだな」

失礼であるな。吾輩はちゃんとしているのである。どちらかというときせいじゃのほうがあつたがぶにぶになのである。……よく考えたら関係はないやもしれぬ。

そういうえば、視界の端でもみじがこつそりと近づいてきているのである。吾輩は気が

付いていない振りがうまいのである。前に巫女としたことがあるのである。だるまさんがころんだであるな！

よくわからぬが、吾輩に向かつて巫女がいきなりだるまさんがころんだと何度も言っていたのである。動いたら負けということはあとでわかつたのである。

「はっー！」

もみじが吾輩をつかんだのである。せいじやが驚いているのである。

「おまえ。離せ！」

「そちらこそ離せ、天邪鬼ー！」

なんだかこの頃取り合いになつてばかりであるな。吾輩は取り合うよりもなかよく握手をするといいらしいのである。

せいじやももみじも吾輩を抱きかかえるようにしているのであるが、吾輩はなされるがままである。二人ともがんばるのである。吾輩はどちらかを応援することはできぬ、きつと二人ともがんばりやさんなのである。

空から何か降りてくるのである。ひらひらとしている浴衣の前を手で押さえて傘を指しているのは……なんだこがさであるな。屋根に降りるとかつんと下駄が鳴つたのである。

「やつとみつけたわ。もみじ、猫さんー！」

「小傘！ こいつはお尋ね者の天邪鬼だ！ 猫を誘拐しようとしてる！」

「な、なんだってー」

こがさが両手を広げて驚いているのである。それからきらきら目を光らせて、くるりと傘を回した。よくみれば髪もふたつむすびであるな。きつとおしゃれなのである。

「くう、なんてこった」

せいじやが言っているのである。

ぴんちななのやもしれぬ。しかし、もみじとこがさも吾輩のともだちなのである。悩みどころである。どうすればいいのであろうか。

その時吾輩の耳を驚かせる大声で誰かが叫んだのである。

「その勝負待った!!!」

おおおお。吾輩は風に飛ばされそうになったのである。勢い余ってもみじのむねの中に飛び込んでしまったのである。もみじもおどろいているのであるな。

こがさはどこに行つたのかわからぬ。せいじやも転がっているのである。

見れば頭に大きな角を生やした女子が屋根に立っているのである。周りには瓦がなくなっているのだ。

「せつかくの勝負に1対2とはいけない。この勝負この星熊男儀が預かつた!!」

むむ、もみじが震えている気がしたのである。吾輩はなんとなく顔を舐めてあげたの

である。

おまつりのようである！

「あつはつは。悪い悪い。いきなり驚かせてしまったね。許せ、許せ天狗」

吾輩の前にゆうぎが立っているのである。いや吾輩は座り込んだままのもみじに抱かれているのであるから、もみじの前にゆうぎが立っているのであるか。これは難題である。

もみじはどう思うであろうか、しかしそれにしてももみじの腕の中は安心できるのである。きつともみじががんばりやさんだと吾輩が知っているからであろう。

「……………」

もみじが口を開けてゆうぎを見上げているのである。おめめを開けると綺麗であるな。

それにしてももみじの歯はとがっているのである。まるでいぬのようなところであるな。いやいや、これは失礼であろうか、まるで吾輩のようなのである。

なんとなく……開けている口に前足をいれてみたくなってしまう、おお、危ないのである。もみじが口を閉じるのに巻き込まれるところであった。

「ほ、星熊勇儀様」

「硬いなあ」

ゆうぎがしゃがんで顔を近づけてきたのである。片手には盃を持っているのだ。ちやぷちやぷ音がしているのである。

「勇儀……あー。一応序列はつけないといけないのか。じゃあ、勇儀様でいいよ」

「あ、はい……?」

「せっかく天狗が地底に来たんだ。あいつらどうせ地上ではまたお前ら白狼天狗をこき使っているのかい?」

「あ、はい……」

「そりやあまた、変わらないねえ。で?」

「あ、はい?」

もみじが同じことばかり言っているのである。しつかりするのである。

「ほしくま……勇儀様! わ、私は決して地底を争うなどと思つたのではなく、あの天邪鬼がこの猫を誘拐したので取り返そうとしただけです。決して、そのあの」

なんか焦っているのである。もみじよおちつくのである。吾輩も同じことを思ってしまったのである。

「わかつた。わかつた。勝負で白黒はつきりつけるんだね」

「へ、へええ?」

勇儀がにっこり笑っているのである。笑顔はいいことなのである。もみじも笑っているのであるがなんだかひきつっているのである。吾輩がやあと行って励ますのである。もみじは笑っていた方がいいのである。

それにしてもせいじやとこがさはどこに行つたのであろうか、おお、せいじや屋根の上で眠っているのである。なんだか全く動かぬ。

「あいつ、頭打つたのか……」

もみじの言葉に吾輩ははつとしたのである。急いで駆け寄りたのであるが、その前にゆうぎが顔を寄せてきたのである。角が近いのである。なんだかうれしそうであるな。

「いや、退屈しててねえ。どうせ勝負するならばあつとやらないとな。あつはっはっは」
にやあにやあ、吾輩もばああとやるのは好きである。

「おお、おまえもそう思うか」

ゆうぎが吾輩の前足をつかんだのだ！ あくしゆであるな！ 吾輩は満足である。

「い、いえ。そんな、もう猫はここにいますし。それに天邪鬼も気絶していますし。……
小傘はどこに行つたんだ……？」

「ああ、あの青髪のことか？ すまないけど、さっきので屋根から落ちていったよ。まあ、あれも妖怪の端くれなら大丈夫だろう」

「い、いつもながら不憫な奴……あ。いえそれよりも勇儀様。勝負と言つても天邪鬼も気絶しておりますし」

「ああ、いいよ、どうせ準備にはちよつとかかるからね」

「じゅ、じゅんび?」

「ああ」

にやりとしているのである。吾輩はゆうぎが楽しそうなのである。

からんからんと勇儀は下駄を鳴らしながら屋根の上を歩くのである。どこに行くのであろうか、このおやしきの前は大通りであるな。もみじが吾輩を抱いたままたちがあとよく見えるのである。

ゆうぎが息を吸っているのである。それから、叫んだのだ。

「野郎どもお!!この星熊勇儀のもとに酒をもつて集まれえ!!!」

おお、体が後ろにいくのである。もみじが吾輩のみみをふさいでくれているのであるが、なんだか顔につよい風が当たってくるのである。ゆうぎは声が大きいのであるな。

うむ? なんだかいろんなところから大きな鬼やら、妖怪やらが集まつてきたのである。

——なんだなんだ!

——酒が飲めるのか!

——勇儀姐さんのもとへ集まれ!

どつどつど。どたどたどた。

地面が揺れているのである。地震である。久しぶりであるな。地震にも吾輩はにやあと挨拶するのである。久々にあつたらするのである。

「な、なんだ!?! 何が起こっているんだ」

もみじがきよろきよろしているのだ。おお、町中から煙が上がっているのである。

「あ、あれは土煙だ。ま、まさか」

「ほーい」

しゆたつと近くに誰かが降りてきたのである。なんだくろだにであるな。

「土蜘蛛、なんでここに」

「え? なんかあるんでしょ? ただ酒が飲めると聞いて」

「す、すでに尾ひれがついてる。とうにかまさか地底中の妖怪が」

「くるんじやないの? みんな暇だし」

「……あ、ああ」

もみじよ落ちるのである。しっかり抱いてほしいのである。……なんか青い顔をしているのである。元気出すのである。にくきゆうを触つてもやぶさかではない。

おお、どんどん妖怪が増えていくのである。

笛の音が聞こえるのだ。よく見れば屋敷の下にはでみせもできていくのである。がやがや、わいわい。

いつの間にかゆうぎは屋根に腰かけてにこにこしているのである。お酒をくいつつのんで言うのだ。

「ぶはあ。こんなもんでどう？」

「え、え？ ああ」

もみじよ元気だすのである。吾輩は応援しているのである。まあ、なんで元気がないのかわからぬが。勇儀は不思議そうな顔をしているのだ。

「あ？ まだ足りないのかい」

こくびをかしげているのである。キョトンとした顔であるな。吾輩も同じようにこくびをかしげると、ゆうぎはにっこりして立ち上がったのである。

わしやわしやと吾輩を撫でてくれるのである。

「こいつ私の真似をするとは」

わしやわしやわしやわしや。

荒っぽいのであるな。しかしこれはこれでいいのである。

わいわい、わいわい。

いい匂いがあるのである。それに下では提灯がつけられているのである。楽し気で

あるな、行きたいのである。前足をばたつかせてみるのである。

「おお、よく見ればこがさも屋根の上に登ってきたのである。」

「うう、ひどいめにあつた、それにしても今から何かあるの?」

吾輩はにやあと挨拶するのだ。なんだか久しぶりな気もするのである。

「にやあにやあー」

にっこりこがさも挨拶をしてくれたのである。もみじも何か言うのである。

「こがさ……笑つていられるのも今のうちだからな」

「え? ど、どういうことですか」

こがさは傘をたたんで。浴衣の着崩れを直しているのである。髪をふたつむすびにしているのであるが、なかなか似合っているのである。そんなこがさの背中をばしばしとゆうぎがたたいたいたのである。

「おお、気が付いたかなにかの妖怪!」

「え? あなた誰」

「私は力の星熊勇儀。いい勝負を期待するよ」

もみじがこがさをひっぱつたのである。吾輩は片手もちであるな

「こ、こら小傘! こちらは鬼の中でも山の四天王と恐れられる方だ」

「……鬼……、ふ、ふつつつ。ここであつたが百年目ですね!」

きらきら、目を光らせてこがさ飛びあがったのである。もみじが驚いているのである。吾輩もちよつとだけ驚いたのは秘密である。

「地底に鬼を驚かせに来たんだから！ えつと勇儀さん。勝負よ！」

「ほう。私に勝負を挑むとは腕に覚えありか！ いいよ、その喧嘩買った!!」
もみじが今にも泣きそうな顔をしているのである。

どこか痛いのであるか。吾輩心配である。ちゃんと痛いときは言うのである。

わがはいにまかせるのである！

「この星熊勇儀に喧嘩を売るとはいい度胸だ。気に入った！」

ゆうぎが楽しそうににこにこしているのである。しかしけんかはいかぬ、ちゃんと仲良くせねばならぬ

吾輩はそう思つてにやあにやあと鳴いてみると、ゆうぎも吾輩をみて笑つているのである。それを見ていると吾輩はとても楽しくなつてしまつたのである。きつとけんかはせぬようにわかつてくれたのであるな！

吾輩はそのまま振り向いてみると、こがさが固まつているのである。なんだか困つたような顔であるな、どうしたのであろう。心配事があれば吾輩にちゃんとやつてほしいところなのである。吾輩にも何かできるやもしれぬ。

「あ、あのくその」

こがさが口を開いたのである！ 吾輩は悩んでいるこがさを見捨てたりはせぬ。ちゃんと耳をそばだてて聞くのである。ちゃんと人の話を聞くときはしせいを正しくして聞くのだとけいねも言つていたのである。

ぴんと胸を張つて聞くのが紳士であるな。吾輩はその点はちゃんとしているのだあ

る。

「ん？ なんだ？」

ゆうぎも胸を張って聞いているのである。吾輩も負けてはおれぬ、さらに背筋を伸ばすのである。……うむ。思わず立ち上がってしまったのである。うむむ。後ろ足だけで立つのは難しいのである、うむ、むむむ。

ころころ。

いかぬ、ばらんすを崩してしまったのである。恥ずかしいのである。吾輩は思わずにやあお、と言いつつ訳をってしまったのである。もみじよ、助け起こしてほしいのである。

「……………ゆ、勇儀様」

「？」

もみじはゆうぎとお話中であるな。ではこがさは……なんだか青ざめているのである。おなかが痛いのだろうか、

「い、勢いで言ってしまった……」

いきおいは大切なのである、それはそうと吾輩を助けて起こしてくれぬものがおらぬ。前足をばたつかせてころりと回転するのだ。ちゃんと一人で起きられたのである。

近くでくろだにがばちばちと拍手をしているのであるが、それなら起こしてくれてもよかつたのである。まあ、吾輩の心は海のように広いからして、そんなことで怒ったり

はせぬ。

それにしてももみじが一生懸命にゆうぎに何か説明しているのである。もみじはがんばりやさんであるな、吾輩は話をよく聞いていなかったのである。恥ずかしいのである。

くろだにはちゃんと聞いていたのであろうか。吾輩はみゃーおと聞いてみるのである。

「なあなあ。お手つてできる？」

やらぬ。これはダメである。くろだには頼りにならぬ。ヤマメもくれぬ。

もみじの話をしつかりと聞くために足元に近寄つて見上げてみるのである。

「で、ですから。この唐傘は地上で迷惑にもいきなり人を驚かせて来る妖怪でして……。たぶん勇儀様を驚かせることができたらなんて思いあがった上に口が滑つて勝負などと言っているのです」

なんだかもみじがとてもがんばっているのである。あせを流しながらがんばっている。吾輩は応援するのである。

「……おどろかせに？　なるほど大道芸人というやつか。しかし、勝負と一度口にしたからには筋を通してもらわないとな」

ゆうぎが何かを考え込んでいるのであるな、きつともみじのがんばりが通じたのであ

る。吾輩はともうれいのである。ゆうぎは急に吾輩の前にしやがみ込んで言うのである。

「お前はどうか思うう？」

ううむ。よくわからぬが、きつとみんな仲良くするのがいいかもしれぬ。そう思つてゆうぎに吾輩は伝えてみたのである。

みやーみやー

「ふむ……そうだ！　こうしよう」

ゆうぎが突然立ち上がつてこがさともみじを振り返つたのである。屋根の上を下駄を鳴らしながら歩いていくのである。屋根の下はもうおまつりみたいになつていのである。吾輩はそこに行つてみたいのである。そう思つて屋根から下を覗いてみると、もみじにだっこされたのである。

「こら、あぶないだろ」

あぶないのであるか？　吾輩にはよくわからぬが、心配してくれたので助かつたのである。やはりもみじはいいやつであるな。吾輩はすきである。

「あつはつは。その猫も下のどんちゃん騒ぎに混ざりたいんだらうねえ」

ゆうぎの笑い声は大きいのである。

吾輩も真似してみたいのである。ゆうぎを見ればなんだか髪がきらきらさせながら

ほほえんでいるのである。おお、下で集まっているようかいたちが提灯を出したりして明るくなってからして、ゆうぎが綺麗に見えるのである。

「まがりなりにも一度勝負を口に出したからには最後まで付き合ってもらおうか。下の奴らも喧嘩を見に集まったんだから、このままじゃあ収まりがつかない。天邪鬼もまだ寝ているしな」

がやがや、わいわい、どんちゃん。

下からたのしげな音がきこえてくるのである。ううむ、そういえばさつきからせいじやが動かぬ。みればくうくう寝ているのであるな、なかなかかわいいのである。頭にごぶがあるのはしんぱいである。

「なーにどうせ私を驚かせに来たくらいなんだ、ここにいろやつらを驚かせるくらい訳はないだろう? あのだ真ん中で私たちを驚かせて見せることができればあんたの勝ちでいいよ」

ゆうぎが片手をあげてそれから、ゆつくりと周りを見回したのである。なんとなくこがさを見てみると両手で傘を持って、ふるえているのである。なんだか目も泳いでいるきもするのであるが、こがさは言ったのである。

「も、ももちろん。や、やってやるわ! こ、これくらいら、らくしよーですよ!!」

もみじが「お、おい。それお前の驚かせることとは違うだろ」と言っているのである。

それよりも先にゆうぎが「よしっ!」といったから吾輩はとても驚いたのである。こがさよなにかよくわからぬが頑張るのである。

「そうときまつたら早速やつてもらおう」

ゆうぎがこがさをひよいと持ち上げたのである! 吾輩と同じような格好であるな。

「ちよ、ちよつとまつて」

ゆうぎは笑顔のままなんだか楽し気である!

「野郎ども!! 今からこの地上から来たやつが驚かせてくれるそうだつ!!!」

わー!!

おお、なんだか盛り上がっているのである。吾輩もにやあにやあ言ってみるのである。こがさよ……がんばる……うむ。ちらりとこがさが吾輩を見たのである。なんだか不安げであるな……もしやこれはびんちではないのであろうか?

もみじよ離すのである。体をひねるのである。

「お、おいなんだお前まで」

いや、離すのであるそんなに頑張つて抱つこしなくてもいいのである。

「うなぎみたい」

くろだにが何か言っているのであるが付き合っているひまはないのである。

吾輩はもみじの手から離れるためにひねりひねりするのである。やっと地面に降り

られたのである。吾輩は走り出したのである。

ゆうぎもこがさを降ろして、屋根の上に腰を下ろしているのである。

屋根の下の広場はおおぜいのようかいでいっぱいである。

吾輩の耳には大きな声が聞こえてくるのであるが、それよりも吾輩はなんだかしよんぼり立っているこがさの足元に行つたのである。

にやあ。

こがさが振り向いたのである。何も言わぬな。こがさよ吾輩が来たからにはもう安心である。安心しておおぶねに乗つた気持ちである。まあ吾輩はおおぶねを知らぬ。

こがさはぐつと顔を引き締めてきりりとした顔を吾輩に向けたのである。

「手伝つてくれるの?」

もちろんである。こがさは吾輩を抱き上げていつかいおなかに顔をうずめたのである。

それからおおぜいの、とてもおおぜいのかんきやくがいる広場を吾輩と一緒に見たのである! きらきら綺麗である!

にじのなかをとぶのである！

吾輩が下を覗き込むと大きなかんせいが聞こえてくるのである。みんな楽しそうであるな、よくわからぬがこがさは人気ものなのである。にやあと声をかけるとこがさもにやあとにつこり笑ってくれたのである。

「おいで、猫さん」

しやがみ込んだこがさが手を吾輩に差し伸べてきたのである。おおあくしゆであるな。吾輩はこがさの手の上に前足を載せてみるのである。

「おてっ？」

お手ではないのである！ 吾輩はそこには嚴重な抗議をせねばならぬ！ ふととい、こがさといいくろだにとい、吾輩がお手をするとなぜ思うのであろうか、それは犬にでも頼めばいいのである。

こがさはくるくると傘の取っ手を回しているのである。また吾輩と遊んでくれるのであろうか、こがさはにこにこして答えぬ。それにしても首がかゆいのである。

「おい。小傘」

もみじである。こがさと吾輩はにやあと答えたのである。もみじは手に何かつつみ

をもっているのである。

「あ」

こがさが両手を口にかけて恥ずかし気にしているのである。

「おもわずいつちやった」

「……………いや、いいけど」

なんだかもみじも恥ずかしそうにしているのであるが、なぜそうなのかわからぬ。ちやんとにやあと反応するのはれいぎである！ なにも恥ずかしいことはないのである。

そう思っているともみじがしやがんで吾輩を撫でてくれたのである。ううむ、やはりなかなかやるのである。吾輩は気持ちがいいのである。

「……………ふふ……………」

もみじが笑ったのである。いやそれよりももう少し首のあたりがいいのである。

「あー！ いや。小傘。……………まあ、どうなつても多少は……………あの……………かばつてやる！ せいぜい頑張るんだな。それとこれは勇儀様からどうせなら着飾るようにとの配慮だ」

おお、もみじの手が離れていくのである。吾輩は前足を延ばしてそれをつかもうとするのであるが届かぬ。

もみじは手に持っていた包みを解いてばさつと広げたのである。

おお、お星さまである！ 綺麗な羽織りであるな。黒い布にきらきらお星さまが輝いているのである。うむ、ううむお月様がおらぬな、これはかくれておるのかもしれない。でてきてもいいのである。

「おおー」

こがさが羽織を着てクルクル回るのである、吾輩も回ってみるのだ。めがまわる。

「動くな」

もみじが前のひもを締めてあげているのである。やはりもみじは優しいのである。こがさがちよつと動くと、ひらひらとお星様が泳いでいるのである！

もみじは「ふん」と鼻を鳴らしてから、そのまま背中を見せてかつかつとゆうぎの方に行ってしまったのである。こつちをちらちらとみてるので吾輩はちゃんとにやあにやあと反応するのである。

「うーん。椀つて実は優しいのかな？ 猫さんはどう思う？」

ふむふむ。こがさはよくわかつているのである。吾輩はもうわかつていのである。「ま、いいや……それじゃあいこつか？」

こがさが手を伸ばしてきたのである。吾輩はとてとてその手に足をかけて腕を登って行くのである。下を見ればわあわあときらきら光っているのである。こがさは胸元から何かをとりだしているのである。何枚かのかーどであるな。

それから吾輩の耳元でこそそそと話をするのである。

「あの人里でのことこっさり練習してたけど、みんなには内緒ね」

くすぐったいのである。人里でみんなを驚かせたのは吾輩も楽しかったのである。

「はい。猫さん」

こがさよ、なんで吾輩を持つのであろうか、まるで投げようとしているみたいである。

「それじゃあうらめしや〜!!」

おおお！ 吾輩は空を飛んでいるのである。

くるくるくるくる、なんだか下には大勢のようかいたちがやんやとしているのであるが、なかなか高いのである。

「ねこさん。こっちこっち！」

こがさも吾輩の隣を飛んでいるのである。こっちと言われたからには吾輩も足をばたつかせて頑張ってみるのである。ううむ、どうにもできぬ。

「おいでー。虹符『にゃんブレラサイクロン』！」

こがさが傘を振ると、虹が空にきつとうかんだのである！ きらきら七色に光る虹が綺麗であるな。吾輩はこがさの傘の裏側できやつちされて、そのままくるくるされるのである。

わーわー

「よいしょつと」

こがさが強く傘を振ると、吾輩は真上に飛んだのである。

今度は大丈夫である。こがさのにつきり顔見えたのだ。

とん、とこがさの構えた傘の上に乗って、くるくるとそこを走るのである！

そのままゆつくりとこがさが地面に降りていくと、吾輩にもようかい達の顔が見えてきたのである。みんな笑っているのであるな。おおあれはせんちようであるな、楽しそうにぼるすいとお酒を飲んでいるのである。

わいわい！ わーわー！ がやがや！

わがはいとこがさは踊るのである。傘の上からは眺めもいいのである。高すぎると笑っている顔が見えぬ。

「ふふーん！ 化鉄『置き猫特急ナイトカーニバル』！」

周りに傘がいっぱい現れたのである！ 光りながらくるくる吾輩達の周りを傘も踊っているのだ。吾輩は思わず飛び乗ってみるのだ。

「おっ！ やったー」

なんだかこがさも喜んでいるのである。吾輩はそのまま傘をとびのりとびのり、張り切るのである！ この傘ほのかに光っているのである。

「ふふふ、猫さんがんばれー」

こがさが両手を広げるのが見えるのである。すると傘たちが上に向かいながら速く動いているのである。まるで傘の階段であるっ！

この程度、吾輩にはなんてことないのである。吾輩はとんとんと飛び移っていくのである。

周りのおまつりさわぎが楽しそうで、吾輩も楽しいのである。

「大輪』にヤーフォゴットンワールド』！ ねこさんのステージを作ってあげるわ。おどろけー！」

こがさがクルクルと傘を回しながら踊っているのである。手にもったカードがびっかり光ってぱあと、虹が広がっていくのである。

とんとん、とんとん。

虹の中で傘を飛び移っていくのは初めてなのである。

わーわー！

猫ーがんばれー。

いつの間にかくろだにも下に降りてきているのである。

おお、空から花びらが降ってきたのである。見ればこいしがぱらぱら何かを空から撒いているのである。

とんとん。

傘を飛び移るのである。吾輩はだんだんと昇っていくのだ。

おお？ 先がないのである。もう傘がないのである！ どうすればいいのであろうか!?

「そのまま飛べっ!」

もみじの声が聞こえてくるのである。わかつたのである。吾輩はもみじをしんらいしているのである。できるだけ勢いをつけて吾輩は空を飛んだのである。

結構高いのである。

下を見る、

みんなが吾輩を見ているのである。虹の残りが周りでまだ光っているのだ。

「おいでませ〜」

こがさが手を広げているのである。虹のように笑っているのである。……自分で言ったのであるが、虹のようにはどういふことであろうか、まあいいのである。

おいでと言われても空中ではどうしようもないのである。吾輩はそのまま落ちるしかないのである!

「おっ、おお、おっお」

こがさよわたわたされると困るのである。吾輩はまっすぐにこがさのもとへ行くのである。

「わっ」

ばすんと吾輩は飛び込んだのである。こがさは「わっ」と言っておしりをついたのである。

それでもちやんとつかんでくれてあんしんしたのである。

吾輩はにやあとこがさにお礼を言おうと、こがさにもやあと言ってくれたのである。今ならこみゆにけーしよんがこがさともできるやもしれぬと、吾輩はさらに声をかけようとすると、

わあああああああ！

周りの声にかきけされてしまったのである。

たのしくおさけをのむのである

周りから大きな拍手が続いているのである。

吾輩はこがさに抱かれたままであるから身動きが取れぬ。もぞもぞと動いてからこがさを見るとほっぺたを赤くしてちよつと目も赤いのである……おお、目が赤いのは今までもそうなのであるがこう、いつも白いところが赤いのである……、むむむ「ことば」で表すのは難しいのであるな。

吾輩はこがさの手から離れて地面に降りてみるのだ。地底の地面にはひんやりしているのである。吾輩はなんとなくその場で体を長くして転がってみるのである。

みんな見ているのである……照れるのである。吾輩はちよつと困ったのでこがさを見たのであるが、

「つっふーん」

こがさが嬉しそうで吾輩は何よりである。それでもまあ、吾輩は困っているからしてどうかしてほしいのである。

でもまあ、よくわからぬが、ぱちぱちとみんなが拍手をしてくれたから吾輩もとても満足である。

こがさは両手を腰につけて胸を張っているのだ。吾輩も同じような格好をしてみたいものなのであるが、ううむ？ 吾輩の腰はどこであろうか、吾輩はその場でぐるぐると回ってみて体を眺めてみたのであるがまるで見当がつかぬ。

もしかしたら吾輩には「こし」がないのかもしれない……。しんこくな悩みを吾輩は持つてしまったのやもしれぬ。

そんなことを想っていると、空から何かが降ってきたのである。

大きな盃を持った……なんだゆうぎであるな。地面に降りるときにどこんつと音かして吾輩はびっくりしたのである。

おお、そのあとにゆっくりともみじもおりてきたのである。吾輩はもみじになんとなく近寄ってみると、もみじもしゃがんで両手を広げたのである。

「ほら、おいで」

お呼ばれたのである。これはいかねばならぬ。

吾輩はしようたいされたのでもみじのそばに行くとなでなでされたのである。おお、気持ちいのである。

「がんばったね」

???????
なんだかもみじも口調がやわらかいのである。吾輩はどちらでも好きである。

もみじが吾輩の首の後ろを「ごりごり」と力強くなでるのである……ううむ、ううむ、これは、これは気持ちいいのである。吾輩はその場で座り込んでみたのである。もつとしてほしいのである。

「いや、お見事お見事。さすがは大道芸人というだけはあるね」

ゆうぎがなんだかこがさをほめているのである。こがさはなんでかほつぺたを膨らませているのはなぜであろうか。

「わ、私はだ、大道芸人ではないんですけど……」

「そうなのかい？ まあ細かいことはいいじゃないか！ あつはつは。私を驚かせることができたんだ、なーに人間くらい簡単に驚かせることはできるさ」

「ほんと!? ……う、ううでもこれで驚いてもらっても、私のあいでんていは……」

「あ、あいで……小難しい言葉を使うわね。まあ、この勝負はあなたの勝ちだ」

ばんばんとこがさの背中をゆうぎがたたいているのである。すると吾輩を撫でるもみじの手が止まっているのである。吾輩はおもわず体でもみじの手に当ててみるのだ。

撫でてくれぬ、吾輩は辛抱たまらぬ。おもわずにやーと言ってしまったのである。するともみじはちらりと吾輩をみて、

「(ハハ)か」

「ごりごり」。

そこである、おお、おお……。いいのである。

もみじにも吾輩はお返しをしたいのであるが、どうにもできぬ。肉球を後でほつぺたにつけてみようと思うのであるが、気持ちはいいのであろうか。

ふと、ゆうぎを見てみるのである。

ゆうぎは吾輩を見てにっこりと笑っているのである。それから周りに向かって叫んだのだ。

「野郎ども!! この地上からの客をもてなしてやりな! ……飲むぞお!!」

わあああああああ!!!

吾輩はあまりの大きな声に思わずもみじへ抱き着いてしまったのである!

☆

「あはは」

こがさは遠くでお酒を飲んでいるようであるな。笑い声が聞こえてくるのである。

地底のみ人などの飲み会はたのしそうであるが、吾輩はどこに行っても撫でられるので疲れてしまったのである。街中でお酒を飲んでいるのである。

くろだには妙な動きをしたり、きやぶてんは吾輩のしつぽをつかんでくるのである。

仕方なく吾輩はぱるすいのおひぎで休んでいるのである。ここなら安心であるな。

「それにしても天狗とは久しぶりに会った」

ばるすいの前でゆうぎが座っているのである。その前にはふらふらと頭を揺らしているもみじがいるのである。

「え？　そそうですね。上司のしゃ、しゃめーまるが私にひつく」

「天狗のくせにだらしがない。ほら飲め飲め」

もみじが手に持った盃にゆうぎがとくとくとお酒を注いでいるのである。もみじも「いただきます」と言ってくいと飲んでるのである。吾輩も飲んでみたいのであるが、お酒に近づくとばるすいが「めっ」と言ってくるのである。

「そ、そういへば、ゆうぎさま、あ、あまのじやくは」

「ああ。あれか。小傘の芸の間に気付で酒を飲ませたんだが、目がとろんとしてね、あげくあへえだのほええだの変なことを言い出したのから寝かせてある」

「……鬼のお酒をどれほど飲ませたのですか？　勇儀様」

「……そんなに飲ませてなんていない！　あくまで気付だ、まあ、量でいえば……10杯も飲ませてないわ」

「……………あまのじやく……………」

そういばせいじゃはどうしたのであろうか、吾輩は心配なのである。そう思つてばるすいに聞いてみても「にゃー」としか返つてこぬ。吾輩は仕方なく、その場で自分で首を掻くくらいしかできないのである。

ゆうぎは吾輩を見ているのである。

「この猫もなかなか肝が据わっているわ」

きもがすわっている……きもとは誰であろうか？ どこに座っているのかわからぬ。吾輩はあたりをきよろきよろしてみたのであるが、もみじとばるすいとこいししかおらぬ。

ゆうぎよ、きももちゃんと仲間に入れてあげるのである。

みやあ、みやあ吾輩は真剣に訴えるのである。仲間外れはいかぬ。

「この猫何か私に言いたいことでもあるのか」

「勇儀様。まさか、猫ですよ……」

ゆうぎともみじとこがさがじいとみてくるのである。恥ずかしいのである、吾輩は思わずそっぽを向いてあくびをしてみましたのである。断じてテレカクシではないのである。これはふかこーりよくという、思うのである。

「あつはつは！」

「ふふふ」

「あははは！」

ゆうぎともみじとこいしがそれぞれ笑っているのである。

そういえばいつの間にかこいしは来ていたのであるか……、まあいいのである。

「……」

ゆうぎが立ち上がったのである。ゆっくりとまわりを見回しているのである。それからもみじに聞いたのである。

「天……いや権。お前たちはいつごろ帰るつもりだった？」

「えっ？　そ、そうですね。私も小傘も目的はもうありませんので落ち着いてからすぐ帰ろうかと思えます」

「そうかい。ゆっくりしていけばいいのにねえ。温泉にも入ったのか？」

「は、はい」

「そうか、それじゃあ地上に帰るまでに汗をかいたらもつたいないわ。よし、私が地上まで送ってやろう」

「！　そ、そんな。恐れ多い。勇儀様地上へは私どもだけで」

「遠慮するんじゃない。権もあの小傘も猫もちさんと送り届けてあげるわ」

ゆうぎはいいやつであるな。でももみじも言うのである。

「こ、このようなことで勇儀様を地上までご足労願うわけには……」

「何を言っているんだ？」

ゆうぎがキョトンとしているのである。

「私は地上に行く気なんてないわよ？」

もみじが吾輩を見て小首をかしげたから、思わずまねてしまったのである

かえりみちもにぎやかである

ちやきちやき

くるくる

にやあにやあ

吾輩はもみじとこさがをしつかりと連れて地底の街を歩いているのである。もみじの腰につけた剣がちやきちやき鳴っているのである。それに歩きながらこさがが傘をくるくる回しているのである、何をしているかはわからぬ。

「あー。なんだかあつという間だったねー。あれだけ騒いだのに、お祭りの後つてさびしいかも」

こさがが言うのである。吾輩もそう思うのである、だから後ろをちらつと見て目でこさがに訴えてみたのであるが、こがさはあくびをしているのである。

「まあ、温泉にも入れたし。お前も曲りなりには目的を達成できてよかつたじゃないか。……私は逆に疲れがたまつた気がするけど」

はあ、ともみじがため息をついているのである。吾輩は心配である。そう思つて足元に近づいてみるのであるが、下駄は危ないのである。吾輩の尻尾を踏みかねぬ。

もみじもこがさも着替えているのである。こがさの泥だらけの服もちやんと綺麗に
してもらったらしいのである。泥遊びは大変であるが、楽しいのである。

ちやきちやき

「おーい」

吾輩達が声をする方向をみるとくろだにが手を振っていたのである。こがさが手を
振っているのであるが、吾輩は不満である。

くろだにはヤマメをくれなかつたのである！ 吾輩はげんじゆうなこうぎの意味で
そつぽを向いたのである。見ればもみじもそつぽを向いているのである。もみじも
きつとヤマメが食べたかつたに違いないのである。

「またきなよー」

くろだにの

こえがとおく

なつていくのである。

吾輩は思はず後ろを振り向いてにやあと返してみたのである。もみじも見れば後ろ
を見ているのである。

くるくる。

少し歩くとおまんじゆうを食べながら歩いているせんちようとすれ違ったのである。

「おや、お帰りですか？　小傘さんに猫さん。また命蓮寺に遊びに来てくださいね」

みょうれんじであるか。うむむ。もしかしたらせんちようもひじりともだちなのかもしれぬ。こがさも知り合いだったのであろうか？

「ふっふっふ。私は鬼も驚かせたんですから。これから人間たちをきよーふのどんぞりにおとしてやるわ」

「それはそれは。お寺の境内で見世物をしてくださるなら暇つぶしになりますね」

「……み、見世物じゃないわ」

「ふふ、冗談ですわー。それじゃあ、また」

せんちようも歩みを止めぬ。振り返ったまま、後ろむきで吾輩達と逆方向に歩いていくのである。お風呂で沈めようとしたりわけのわからぬせんちようであったが、にっこりわらっていたのである。

「あ、天狗の人もおまけで遊びにきてくださいねー」

「だ、誰がおまけだ……」

もみじが怒っているのである。

とことい。

さらにしばらく歩いていると街かどでちらちらしているぼるすいがいたのである。何か手に抱えているようあるな。何かの植物であろうか？　吾輩はどこどこ近寄って、

みやあと挨拶をしてみたのである。

「……」

すつと植物をばるすいが差しだしてきたのである。

！ これはねこじやらしであるな。吾輩はもうこんなもので遊ぶほど子供のではないのである！ ちよつとしか付き合わぬ！

ふりふり

この、ねこじやらしの動きがいかぬ。吾輩の前足で追いかけるのである。この先つばのふわふわしたところが捕まえられた時が嬉しいのである。

「妬ましいわあ。またね」

ねたましいのであるか。

ばるすいも元気でいるのである。ひとしきり遊んでから吾輩はもみじとこさがの方にもどつていったのである。こさががちよつと考えた顔で、自分の傘を閉じてふりふりしてきたのであるが、わけがわからぬ。

思えば楽しかったのかもしれぬ、そういうえば地底に落ちていくときにみような夢で出会ったものもいたのである。元気であろうか。吾輩を撫でてくれたずつと黙っていた半分羽の生えたものもどうしたのであろうか。

吾輩はそうふかい考えに陥りながらとことこ歩いてみると、

「あら、猫。こつちだ」

もみじに叱られたのである。吾輩は恥ずかしいのである。急いで戻ろうとしたとき、ふと真横に黒い猫がいることに気が付いたのである。

にやー

にやー

挨拶をして別れるのである。しつぽが二つになっていて痛そうなのでちゃんと治すのである。そういえばおりんとも会っておらぬ。

うむ？　くろねこが吾輩の前に立ちふさがっているのである。なんであろうか、うむ??　なんだか誰かに抱きかかえられた気がするのである。これは、後ろを向かぬでもわかるこいしであるな。

「もしもし。今あなたのうしろにいるのー」

言わなくても分かるのである。

？

何かを首につけられたのである。

「蝶ネクタイをお姉ちゃんからお土産だつて」

吾輩はネクタイをしたのは初めてである。似合っているであろうか。ありがたいのである！　さとりとお話したこととも忘れないのである。

「それじゃあね、またねー」

吾輩は突然地面に下ろされたのである！ あわてて後ろを振り向いてみると、誰もいなかったのである。

なんだか寂しい気もするのであるが、仕方ないのである。またこいしとは会える気もするのである。いつのまにかくろねこもおらぬが、あつちはまあいいのである。

吾輩はとこともみじ達のもとにもどっていったのである。

「あ、猫さんネクタイしてる」

「誰からもらったんだ？」

二人ともしやがんでみてくるのである。そういえばどういふねくたいなのであろうか、吾輩は首をこう曲げてみようとしてもうまくいかぬ。むむ。難しいのである。見えぬ。

「似合ってるよ」

こがさがにつこり言うので吾輩はそれでいいと思ったのである。

ちやきちやき

くるくる

とここと

大きな広場についていたのである。見ればゆうぎが立っているのだ、周りにはなんだか鬼

がいつぱいいるのである。

「おお、来たか」

もみじがいつぽ前に出ていったのである。吾輩も前に出ると、こがさもあわてて前に出てきたのもみじがさらに一步前にでて、吾輩も一步前に

「うらー!!」

もみじに怒られたのである。吾輩はおもわずこがさの足元に行くと、こがさが抱き上げてくれたのである。

「こほん。勇儀様このたびは」

「あーかたつ苦しいのはいらぬから」

ゆうぎは歯を見せて笑ったのである。

「地底は楽しめたかい？」

「……」

もみじがちらちらと吾輩達を見てきたのである。それからそっぽを向いたり変な方向を見てから言うのである。

「……はこ」

「そうか、それはよかった。また来るといい」

ゆうぎが近寄ってきたのである。そのままもみじを抱き上げたのだ。

「ゆ、勇儀様。な、なにを」

「地上まで送つてやろうといつただろう」

「そ、そんなこんな、お、お姫様だっこ……い、いえ」

「おひめさま、あはは。そんないいもんじやないさ。よいしよ」

ゆうぎがもみじをもつて振りかぶつたのである。

「え？ え？ ちよ——」

「おおりやあ!!」

ゆうぎが真上にもみじを投げたのである!!

「ああああああ……!!!」

おお、お星さまである。もみじが空に飛んで行つたのである！ 楽しそうである！

「さてと」

「ひ、ひい。わ、私はじ、自分でか、帰れます、お、おかまいなく」

こがさが吾輩を抱いたまま後ろにさがろうとしているのである。するとゆうぎが抱き着いてきたのである。

「遠慮するな、こつちのほうが速い」

「ひ、ひえ」

ぎゅつとこがさが吾輩を抱いてくるのである。ぐらりと体が揺れるのである。ゆう

ぎがふりかぶったのであるな、

「いつでも地底において」

その言葉を吾輩はちやんと聞き取ったのである。

それからすぐに、空に向かって投げ飛ばされたのである!!

おほしさまにもみせるのである

「おおおお

吾輩の耳に風を切る音がするのである。

「わあああー！」

こがさの叫び声がうるさいのである。吾輩はこがさに抱かれたままぐいぐいと空を上って行くのである。したをみれば地底の街のひかりがどんどん遠くなっていくのである。なんだか寂しい気もするのであるな。吾輩はしみじみと思うのである。

これはきょうしゆうーというやつかもしれない。

「わあああわああー！」

ちよつとうるさいのである。こがさも地底とのお別れをするのである。遠ざかっていく地底の街に吾輩はちゃんどあいさつをしたのである。またねを、しないといけないのである。楽しいことにはまた会いにいかなければならぬのだ。

もうみえなくなったのである。

吾輩はくしくしと頭をかいてみるのであるが「ね、猫さんう、うごかないで、と、とまらない」とこがさに言われたのである。そうはいつでも痒いのであるが……しかし吾

輩は紳士であるから、ちゃんと言うことは聞くのである。

そういうば先に空のおほしさまになったもみじはどうしたのであろうか、ちゃんと地上についていたらいいのであるが、吾輩はしばしちんしんしこうをしてみるののである。それにしてもヤマメをたべられなかつたことは残念である。

おお、いかぬ。もみじのことを考えていたらヤマメを思いうかべてしまったのである。はずかしいのである。

「あー、空」

うむ？ 吾輩はこがさの声におもわず空を見ようとしたのであるが、こがさのあごが邪魔で見えぬ。手でどいてくれるようにアピールするのであるが、「わ、わ」と驚くだけでこがさはどいてくれぬ。

ごとおお。

むむ、あれは出口であるな。こんなに早く帰ってこられるとは思わなかつたのである。もう少しのんびりしてもよかつたのやもしれぬ。吾輩とこがさはそのまま空にぼつかりとあいていた「でぐち」に飛び込んだのだ。

きらっ

なんだかまぶしいのである。吾輩は思わず目を閉じてしまったのである。こがさの服に顔をすりすりしてから首を振ってみるのだ、するとぼつと何かを開く音がしたので

ある。

「猫さん猫さん」

こがさよ、なんであるか。と目を開けてみると吾輩はぱちぱちと瞬きすることになったのである。

空にいつぱいのお星さまのお出迎えである！

きつと地底から帰ってくる吾輩を歓迎してくれたに違いないのであるな。それにぽつかりとお月様も顔をだしているではないか、吾輩とお月様は知り合いであるからして、ちゃんとわかつていたのである。

わがはいとこがさはゆらゆらと降りていくのである。

さつき開いた音はこがさが傘をばつとひらいていたのであるな。片手で空に突き上げていたのである。

「あ、流れ星」

どこであるか？ ないではないか！

「流れ星つてはやいですよねー」

きつと忙しいのである。家に帰っているのかもしれない。

遠くにはぽつぽつと明かりも見えるのである、きつと人里であるな。それにしても夜風も気持ちいいのである。おお、あそこで木の枝に引つかかっているのはもみじである

な。

「く、く、ふいふい」

こがさが笑いをこらえているのである。もみじをちゃんと心配しないとだめなのである。そう思つてこがさのほつぺたを肉球触ろうとすると突然こがさが動いたのである。

「ふげっ」

おお、またばんちみたになつてしまつたのである。動くからである。もうしわけないのである。こがさは吾輩をむーと見てきたのである。なあなあとこがさが抗議をしてきたから、吾輩もにやあにやあ返してみたのだ。いみはわからぬ。

ゆつくりと地面に降りていくのである。

吾輩とこがさはこみゆにけーしよんをしているのかもしれない。

言葉はわからぬが、言いたいことはなんとなくわかるのである。

「わかつた!?!」

こがさが言うのである。もちろんである。今度から肉球で触るときは聞いてから触るのである。

「よし、私が言った通りにうらめしやーつて言つたら怖がるように」

そういつたのであるか……、まあいいのである。かんだいなこころで受け入れなくて

はならぬ。吾輩とこがさはそんな形でもみじの成る木のそばに降りたのである。

「大丈夫？ 椀」

「ひどい目にあつた……はあ、こんな休日なんていやだ」

もみじも地面に降りてきたのである。

「ふふ、もみじ」

「なんだその顔は」

もみじにこがさが近寄るのである。

「取材活動できませんでしたね」

「……あ！ 忘れてた。はあ、まあいいや。鬼の皆さまに怒られたことにしよう」

そういえばしゃめいまるのおしごとをもみじはしていたのである。吾輩はあの時に絵はいいと思うのである。

『そうは問屋が卸しませんよ、椀』

「なつ、その声ははらぐろて、射命丸様！ ど、どこに、って私の服の中から声が聞こえる」

もみじがごそごそ服を探ると袖の中から綺麗な「玉」が出てきたのである。そこから何か声が聞こえるのであるな。

『さつき本音が聞こえてきましたね……まあそれはいいです。一部始終はちゃんと聞いて』

ておりましたからご心配なく。あなたがカメラを忘れたことも。含めてわかっておりますよー。かわいい楯の失敗です、寛大な心で許しましょう」

しやめいまるが玉になってしまったのであるな……かわいいそうであるな。吾輩よりも小さいのである。

「……いつのまにこんなものを、申し訳ありません」

もみじがしやめいまるをもって肩を落としているのである。元気を出すのである。

『いえいえ。楽しい旅を満喫できたようですしね、楽しかったでしょう。猫さんと小傘さんと旅ができて、ね？ も、み、じ』

「……………」

なんだかもみじが赤いのである。こがさもくすくす笑っているのである。吾輩も楽しかったのである。

『まあ、絵も一枚ありますからそれで我慢してあげます。それは提出するように、破いたりしたら尋問裁判沙汰にしますね？ それじゃあまた明日に』

「射命丸様……切れた……それにしても絵？」

あれのことであるな。吾輩はちゃんと覚えているのである。

「天狗の新聞に楯がでびゅーですね!!」

こがさが言うのである。

おおでびゅーであるな、でびゅーとはあれである……なんであろうか？

「なっ!? そ、そんな。……今すぐ破……さ、裁判!? あれが山の天狗……あるいは人里に広がる……あ、ああ」

へたつともみじが座つたので、吾輩もこがさに下ろしてもらつたのである。元気出すのである、でびゅーもたぶん悪い意味ではないのである。にやあ、と吾輩は言つてみるのである。

「あの絵はかわいいから大丈夫ですよ。ほらもう一回出して」

こがさもその場に座つたのである。そうである、こがさよもつと、元気づけるのである。

「いやだー!」

「えーいい思ひ出じやないですか! 猫さんもお願ひして」

吾輩もお願ひするのである。

「猫、お前は私の味方だろう?」

うむ、吾輩はもみじの味方なのである。

「猫さんは私の味方だよねっ。椀から絵をとりだして」

うむうむ。吾輩はこがさの味方なのである。

……? どうすればいいのであろうか、吾輩はわからぬ。わからぬから、こがさとも

みじの両方を応援するのである。すもうであるな。

「このく往生際が悪い天狗く！」

「離れる……この付喪神」

吾輩はその場に座り込んでけなみのメンテナンスをするのである。これは毎日しておかねばならぬ。ペロペロ、こうやり始めるとなかなか楽しくて終わらぬ。

「とつたー！」

おおこがさが絵をとりだしているのである。もみじも取りそうとしているのである。な。

こがさが取られまいと手をたかだか上げているのである。

あれなら、もみじの絵を星様に見てもらえるのである。

けなみのめんてなんすなのである

……む？ うむむ。

吾輩はむつくりおきてあくびをしてみたのである。ここはどこであつたかなんだかよく思い出せぬ。外でちゅんちゅん鳥の音がするのである。

そうである！ 昨日はこがさともみじと別れてから神社に來たのである。

巫女はさすがに寝ている様子であつたから、吾輩も眠ることにしたのである。樂しかった後にはすぐに眠ることができるのである。

天井が目の前にあるのである。たぶん、のきしたを借りたのであるな、吾輩は昨日の記憶はあいまいである。

のそのそ、

吾輩は外に出るために動くのである。なんだかおなかも減つたのである。

お天道様である！ なんだか久しぶりと思うのであるが、吾輩はちゃんと挨拶をしてから、体をその場で伸ばしてみるのである。こういう時にのコツとしては前足をそろえてから、後ろ足を伸ばすと背筋がぐーと伸びるのである。

ぼかぼかあつたかいのであるな。

そうである！ 巫女にあつてこみゆにけしよんをとらねばならぬ。そう思つて吾輩はあたりをきよろきよろしてみるのである。

誰もおらぬ。

にまにま両手を後ろで隠してちかよつてくるふとしかおらぬ。

……誰もおらぬことにするのである。吾輩はなんだか近寄つてきているふとに背を向けて歩き出したのである。

「ちよ、ちよつと待つのだ。猫よ！ 我を無視するでないつ」
後ろから声がするのである。

吾輩は忙しいのである！ たつたか走り出すのである。

とつとつと

神社の周りを走つてみたのであるが、巫女がおらぬ。

「はあはあはあはあ。わ、われをむしするな」

ふとはずつとついてくるのである。吾輩は仕方なく後ろを振り向いて挨拶をしたのである。するとふとは疲れた顔をあげて、ふーんと鼻を鳴らしてあごを上げたのである。なにか企んでいるような気がしてならぬ……。

それでも吾輩とふとの仲である。まあ、仲といつても何かあつたわけでもないのであるが……。

「ふつ、やっと観念したようじゃな。ほれほれ」

ふとが吾輩の前で手のひらをひらひらさせているのである。おてをさせようとしているのであるな、ううむ？

それにしてもまだ片手を後ろに隠しているのが怪しいのである。

「ほれほれ」

……ううむ。どうするべきであろうか。吾輩はおてはあまりしたいわけではないのであるが……しかし、ここまで期待されたかおをしているふとをみると、こうかわいそうな気もするのである。

吾輩は紳士である、ここは吾輩がおとなになるのである。

吾輩は前足を上げて、ふとの手に置いたのである。すると、ふとはきらきらした目で吾輩を見てくるのである。なんだか口をももぞさせているのである。なんとというか、あれであるな。

うれしそうな顔をしているのである。

急にふとがたちがつたのである！ 両手をきゅつと構えて……吾輩は知っているのである。これはがつつぽーずであるな。というか吾輩がびっくりするのである。

？ 手に何か持っているのであるな、それは何であろうか。

「ふ、ふつふふ。この猫もようやく私の教導の成果でおてができるようになった！ つ

いに私の努力が実ったのだ！」

そこまで喜ばれると照れるのである。

「そあ、褒美を授けよう！ ……ほら、こっちおいで」

なんかふとも急に優しい口調になったのである。その場で座って自分の膝をばんばんたたいているのである。吾輩はまあ仕方なくそちらにその膝の上に乗ってみたのである。

「人里はずれた雑貨屋？ でな外の世界でぶらっしんぐなるものをする器具が売ってたから買ってきたやつたぞ、我がこのぶらっしんぐをぶらっしんぐをしてやるっ！」

「ぶっかやとは何のことかわからぬが、ふとは吾輩を膝に寝かせるとその手に持った「ぶらっし」を吾輩の首においてずずずと体に沿わして動かしたのである。」

「……吾輩はその場でみぶるいしたのである。な、何をするのであるか。吾輩は、吾輩は、とても気持ちいのである。」

ぞりぞり。

ううむ、ぶるぶる。くすぐったいようなちよつと痛いようなきもするこれが、おおう。

これはいいではないか。

「ふーふーん。そうであろう、そうであろう！ それにてもおぬしリボンなどつけてめかしこんでいるのう」

ふとはなになが「そうであろう」かわからぬが、何か言っているのである。そんなことよりももつとしてほしいのである。

「それはともかくかくこするが……い、い……？」

手が止まっているのである。ふとよ、にやあにやあ。いかぬいかぬ、あまりのきもちよさに我を失っていたのである。しかし途中で止められると困るのである。なんで止まっているのであろうか。

吾輩も止まったのである。

なんかふとの真横で少女が寝ているのである。緑の髪をした赤い服の少女であるな。頭に角が生えているからして人間ではないのである。

「あっ!? 私もやつてもらってもやぶさかではないですよ」
期待した目をしながらなにか言っているのである。

「な、なんだおぬしは！ いきなり現れてっ！」

「挨拶まだでしたね。こんにちは」

「あ、これはご丁寧にこんにちは……て、そんなことじゃな——い！」

おおふとよそれはのりつつこみというやつであるな！

「いやだなあ。いつも会ってるじゃないですか。高麗野ですよ」

「お、おお久しぶり……いや、我は知らぬ！ あつたことないぞ！」

「ひどーい。まあ、それよりも最近守つてばかりでぶらっしんぐなんて、ちら。興味深い。ちら。ことを聞いて、ちら、思わず」

「すごいちらちらしているのである。吾輩もこのこまのことは知らぬはずであるが、なんでであろうかよく知っている気もするのである。ううむ？」

「さあさあ、遠慮なく」

「おお、こまのがふとににじり寄っているのである。」

「ふとよ吾輩をぶらっしんぐするのである！ ふとはきよろきよろと吾輩達を見比べているのである。」

「わ、我は……この……ぶらっしんぐを……思ったのじゃ……」

汗を流しながらここえで何かふと言っているのであるが、よく聞こえぬ。こまのはさらにふとに近寄ってくるのである。吾輩も負けてはおれぬ。吾輩はふとのひぎ元でたちあがり、ふとに目で訴えるのである。

すると、こまのも立ち上がって強い目でふとを見ているのである。

「う、うう」

ふとの眼がおよいでいるのである。

吾輩をブラッシングするのである、……いまなんか、うまく言えたかもしれない！ ぶら、ぶらっしん、ぶらっしんぐダメである……。

「仕方ないなあ。じゃあこうしましょう。その猫さんが先客でしたから、先にしてもらって。その間は私がしっかり守っておきます」

「ま、守……まもる？ な、なにいつておるのじゃ？」

「さあ、さあ。後は任せて早く。あ！ 終わったらお願いしますね」

「う、うむ」

よくわからぬが吾輩をぶらっしんぐしてくれるのであるな！ 大歓迎なのである。吾輩はにやあとと言ってから、ふとの膝の上で長くなって寝転んだのである。

ごりごりごり

おお……おお、なんだかこまのがちらちら見てくるのであるが気にしてはおれぬ。お

おお、気持ちいいのである。

「……まあ、いいか」

ふとが何か言いながら吾輩にぶらしを当てるのであるが、気持ちよくて聞き取れぬ。しつぽが勝手に動くのである。

「おお、猫よ気持ちいいのであろう、そうであらう」

ふともうれしそうで吾輩もうれしいのである。

「最近皿を割りすぎてへったおこづかいをはたいて買ったのじゃ。喜ぶがいい！」
すっすっ。

吾輩はともうれいのである。うずうずとこまのが吾輩に言うのである。

「あつ！ 代わってもらってもいいですよ？」

まだいやである！

どうしてもおこしたいのである

今日はお散歩日和である。

吾輩はここちよい風の吹く道を歩いていくのである。

今日は吾輩の毛並みがさらさらとしているのである。これもふとのおかげであるな、たまにはいいことをするのである。

吾輩はいつも思うのである。なんで空は青いのであろうか？ ううむわからぬ。何度考えても分からぬのである、吾輩はその場に立ち止まってくしくしと後ろ足で首をかいてみるのである。何かいい考えが浮かぶかもしれぬ。

いや、浮かばないのである。空に聞いてみたいのであるが、空の耳がどこにあるのか吾輩にはわからぬ。それに遠すぎるのである、今度もみじに空のところまで連れて行ってもらえぬであらうか？

お空の散歩は前もしたのであるが、結構楽しいのである。

しかし、なぜ空は青いのであろうか、ううむ。

吾輩が深くそんなことを考えていると、吾輩の前で刀を持った誰かが止まったのである。もしかしたらもみじかもしれぬ。吾輩はそちらに目を向けたのである。

「あ」

おお、ようむではないか。手に持っている袋は何であろうか。

「おまえ、どこにでもいるわね。幽々子様のお饅頭のお使いの帰りに会うなんて、奇遇と
いかなんというか」

お使いの帰りであるか、吾輩もそのおまんじゅうをひとつほしいのである！

吾輩はようむにそういつてみると、ようむはいつたのである。

「ねこはいいなあ。気楽そうで……何考えていつも生きているのかな？」

今は空がなんで青いかを考えていたのである！ ようむは何か知っているの
うか。

「……どうせ、今日のごはんのことも考えてたのかも」

いや、別に考えておらぬ。しかしそういわれるとちよつとおなかが減つたのである。

ようむよおまんじゅう……。いや、なでなではいいのである。おなか減つたのである。

「はあ、幽々子様もそろそろおなか減らしているだろうなあ、帰らないと」

ようむはそういうと吾輩にかかるくおじぎしてから「何猫におじぎなんてしたんだろ
う」と独り言を言つてどこかに行つてしまったのである。ついていこうか悩んだのであ
るが、吾輩はやめておいたのである。

ついていっただらきつとゆゆこと遊んでしまつたのしくて帰れなくなる気がするの

である。吾輩はその場でふるふると体を揺らしてみるのである。それにしてもおなか
が減ったのである。

草むらには何もないのである。

人里に行ってみるのもいいかもしれぬが。

……たんぽぽである。なんか目に入ったのである。

まつきいろなその花のまわりを吾輩はなんとなく回ってみるのだ。はっ、なんでこん
なことをしたのであろうか。わからぬ、風に揺られているたんぽぽに吾輩は聞いてみた
のであるが、なにも答えてはくれぬ。

「……おーい」

びくっ。

吾輩が驚いて振り向くとそこいたのは赤いリボンの少女である。巫女ではないので
ある。白い髪をしたもおおであるな。前に一度会ったことがあるのである。だから吾
輩は背筋を伸ばして挨拶をしたのである。

「……おなか減ったなあ」

吾輩でもあるが、ちゃんと挨拶をするのである。

それにしてももおおはなんで吾輩に話しかけたのであろうか、髪が風に揺れているの
である。もおおは草むらに座り込んで吾輩を眺めてきたのである。照れるのである。

「たんぼぼかあ。一応食べられるんだよなあ。さすがに今はいらないけど」

そうなのであるか？ 吾輩はたんぼぼを食べようとしたことはないのであるが、もこおは食べたことがあるのであろうか。いがいとものしりである。

そう思っているともこおはごろんとその場に寝転んだのである。お昼寝であろうか吾輩もお昼寝したいのである。なんとなくもこおの真似をして仰向けでごろんと寝転んだのである。

もこおは両手をひろげた枕を頭に空を見ているのである。

「ねえ、あの雲」

雲はいっぱいあるのである。もこおがどれを言っているのかよくわからぬ。吾輩はねころんだままもこおを見るのである。

「……なんでもない……ふあーあ。ねむたいなあ」

……気になるのである。どこの雲がなんなのであろうか、吾輩はとても気になるのである。もこおよ。教えてほしいのである。なにがくもがどうしたのであろうか？ 眠っていないで答えてほしいのである。

吾輩は体を起こして、ねむっているもこおの顔を舐めてみるのである。

「ううん……」

手でどけられたのである。

吾輩は負けぬ。起きてほしいのである。もこおの胸の上に乗つかつてみるのである。

「おもこ……」

起きてほしいのである。

おきぬ……どうすればいいのであろうか、吾輩は悩むのである。ほつぺたを肉球で押しても、顔を舐めても起きてはくれぬ。とうかそのたびに手でどけられてしまうのである。しかし、吾輩はあきらめぬ！

くものがなんとなく気になるのもあるのであるが、もこおを起こし始めたのを最後までやりたいのである。なぜかはわからぬ。

「ああ、もう……。眠いから、静かにしてえ……」

くものことを聞いたら静かにするのである。吾輩とあそんで……いやいや、お話を最後までしてほしいのである。吾輩はもこおの周りをまわってみて、なんとか起きてくれぬかと思うのである。

足を組んで寝ているのであるな。足にすり寄ってみてもおきぬ。吾輩はごうをにやしているのである。しかしごうとはなんであらうか？ ごうがにやにやしているとうきつと笑っているのかもしれない。笑うのはいいことである。

吾輩はまたもこおの顔のそばに来たのである。「起こすなよ……」と聞こえてきたのであるが、気のせいであらうか？ いいのである。吾輩はどうしても起こしたくなつて

しまうのつである、この気持ちは吾輩にもよくわからぬ。

吾輩が一步前にすすむともこおが「ぐるる」とのを鳴らしているのである。なんか怖いのである。ううむ。どうすればいいのであろうか、胸の上に乗ったらすぐに降ろされてしまうのである。安定して乗りやすいのであるが……仕方ないのである。

なんとなく耳を舐めてみるのである。

「!! ひゃ」

もこおがはね起きたのである！

吾輩もびっくりしてはねたのである。もこおが赤い顔で吾輩をにらんでいるのである。

「いたずら猫……」

もこおも悪いのである。とても気になることを言っていきなり寝るのはいかぬ。ちゃんと答えて寝てくれねば吾輩も安心してお昼寝できないのである！ これはせいどうな理由があるのである。

しばらく吾輩と見つめあつてからもこおはかっこり肩を落としたのである。

「猫と何を対抗しているんだ私は……まーいいか。よいしょ」

もこおがその場で立ち上がつておしりをばんばんとはたいているのである。ちよつと耳たぶをつまんでもみもみしているもいるのである。痛かったのであろうか。もし

そうなら悪かったのである。

そういえば、吾輩もおしりをはたいた方がいいのであろうか、しかし吾輩はおしりのはたき方がわからぬ。その場でクルクル回ってみても吾輩の尻尾しか見えぬ。

「なにやっているの？ ……今から慧音のところにも行こうかな、おなか減ったし」

吾輩も行くのである！ 吾輩はぴったりクルクル回るのをやめてもこおのそばに近寄ったのである。もこおは両手をほけつとにいれて、空を見上げながら歩いていくのである。

吾輩も一緒に行くのである。お散歩は大勢の方が楽しいのである。

もこおはたまに吾輩に話しかけてくるのでちゃんと吾輩はにやあと答えておくのである。

遠くに人里が見えるのである。

あれは白い煙が立ち上っていくのはごはんを作っているからだと言われれば知っているのだ。

ごはんをいっしよにたべるのである

吾輩はてらこやの門をくぐったのである。

そういえばこがさと一緒に遊んでもここであつた。なんだか懐かしいのである。こがさはよく遊びたがるから吾輩がちゃんとあそんでやらねばならぬ。おとなのつらいところであるな。

てらこやのなかは静かである。今日は誰もおらぬのかもしれない。

と、思っていると玄関から頭巾をかぶつたけいねがひよっこりと顔を出したのである。吾輩はすぐに見つけてみやあみやあと挨拶をするのである。

「ああ、来たのか」

けいねはゆつくりと笑つて、吾輩を手招きした。吾輩はその後ろをついていこうとして気づいたのである。たてものの中に入るときは足を拭かねばならぬ。

吾輩は紳士であるから、そのあたりはうるさいのである。

というよりも昔怒られたのである。

でも自分で足は拭けぬ……けいねよ助けてほしいのである。吾輩は声を上げて助けを求めたのである。

「わるい、わるい」

くすくす笑いながらけいねが戻ってきて、ちゃんと足を拭いてくれたのである。ありがたうなのである。それにしても足を拭かれているとなんだか、気持ちいいのである。

「ほんと、その猫は慧音になついているのね」

「妹紅？」

けいねはまたくすくす笑いながら玄関の外に立っているもこおを見たのである。

「なんだか最近この子と妹紅は一緒にくるね。仲良くなつたのか？」

吾輩はもこおとはともだちなのである。ヤマメをくれたことを吾輩はちゃんと覚えているのである。もこおは頭をかきながら、「んー」と何か考えているのである。

「まあ、そんなところかな」

なんだかなげやりなのである。吾輩は綺麗になった足でしつかりと立って、首を振るのである。吾輩ともこおはとても仲良しなのである。一緒にやまめを食べたことは忘れてはならぬ。

「それより」

それよりといいながら、もこおがおなかをさすつているのである。

「あー、えつと」

口を小さく開けてぱくぱくしているのである。なんであろうか。

もこおがそつぽを向いているのである。吾輩にはよくわからぬ。うむむ、何が言いたいのであろうか、吾輩はけいねにご飯をもらいに来たのである。けいねよどういうことであらうか、そう思つて吾輩がけいねを見上げると、けいねも首をかしげているのである。

うむ？ けいねがぽんと手をたたいて笑つたのである。

「ちようどいいところに来た。私は今からお昼にしようかと思つていたんだ。どうだろ
う妹紅、私ひとりじゃ味気ないし、食べていってくれないかな？」

「……………さすが寺子屋の先生ね。ごちそうになるわ」

もこおが両手を上げているのである。吾輩は知つているのであるそれはこうさんの
ぼーずであるな。吾輩はよくわからぬが勝つてしまったのである。けいねよ吾輩もご
ちそうになりたいのである。

そう思つてけいねの足元でしばらく鳴いてみると、けいねは「わかつているから」と
につこり笑つているのである。なんだか今日はよく笑う日であるな。そういう日はい
い日なのである。

「ふふふ」

しかし今日のけいねは不気味である。こう、なにかを企んでいるような顔をしてい
るのである。

「お前が来るかもと思って、今日はすごいものを手に入れてるんだ」
「すごいものであるか？」

「外の世界の猫のごはんか、かりかりだったかな？」

☆

「いただきます」

もこおとけいねがまーるいテーブルに向かい合って座っているのである。その上にご飯とみそしるがほかほか湯気を立てているのである。あとは漬物であろう。吾輩はごはん以外は食べたことはないのである。

「ほら」

畳で寝そべっていると、けいねが吾輩にもお茶碗をくれたのである。中には「かりかり」が入っているのである。吾輩はこれを食べたことがあるのである。りんのすけがたまにくれのである！

……かり……かり。うむうむ。おいしいのである!!

「いっばいたべろ……。いいこいいこ」

けいねはそう言って吾輩をなでなでしてくれたのである。これをいたれりつくせりというのであろう、吾輩はわかっているのである。もこおよ、ちゃんと食べているので

あろうか。

もぐもぐ。もこおもご飯を食べているのである。ちらりと吾輩を見ているのである。なんとなく寂しげな顔をしているような気もするのはどうしてであろうか。

「猫つてたまにうらやましい気もするわ」

おお、もこおがぼるすいと同じようなことを言っているのである。

それを聞いたけいねは膝でもこおに近づいて行って、その頭にぽんと手を載せてなでなでし始めたのである。

「いいいいいい」

「いや、そういう意味じゃないけど……。わかってやってるからたちが悪いなあ」

「なんだ、猫がうらやましいってそういう意味かと思ったよ。かりかりでも食べる？」

「おいしいの？ 一つもらっても」

「いや、冗談！ 本気にしないでくれ」

「……わかってて言った」

くすつともこおが微笑んでからけいねもくすくす笑い出したのである。

吾輩も笑いたいところであるがこれを食べるのに忙しいのである。

かりかり……かりかり……かりかり……？

このお茶碗は端っこが欠けているのであるな。いや、別にどうということもないので

あるが、かりかり。もこおよりも早く食べる勝負である！ 吾輩はおいしく食べて勝つのである。

「ごちそうさま」

もこおが言ったのである。吾輩はびっくりしてそちらをみると、お茶をすすっているもこおがいるのである。負けたのである。ううむ。別に悔しくはないようなきもするけど、くやしいのである。

けいねはまだ食べているのである。さつきちよつと台所に行っていたのである。

「ねえ、慧音。ごちそうさまって……猫は言うのかしら？」

「……いきなりね。私に聞くよりも猫に聞いてみた方が速いんじゃない？」

「そうかな。おい。猫。ごちそうさまって猫語でなんていうのかしら？」

吾輩に言っているのであるな。ごちそうさまがごちそうさまである、吾輩はしっかりと説明をするのである。

「いやあー、いやー。」

「なるほど」

わかつてくれたようであるな、吾輩はコミュニケーションのてんさいになってしまったかもしれぬ。これもさとりのおかげである。そういえば巫女とはまだあつておらぬ。後で会いに行くのである。

ぱんっ！

驚いたのである。見ればもこおが両手を合わしているではないか、なんであろう。

「にやあー、にやー……やってみただけど恥ずかしいわね」

「いや、かわいいよ」

いきなりなんであろうか？ わけがわからぬ。吾輩は食事中におおきなおとをたてぬようにげんじゆうなこうぎをもこおにしたのである。

「ん？ まだご飯食べてないじゃない。あとで遊んであげるわ」

！
近寄ってみるとそういわれたのである。すべてを食べると遊んでくれるのであるな

「慧音。隣の部屋を貸してくれないかしら？」

「ああ、どうぞ。お布団敷こうか？」

「座布団一枚貸してくれたらいいわ」

そういつてもこおがあくびをしながら隣の部屋に行ったのである。話が違うのである！ 吾輩と遊んでくれる約束をいたしましたのである！！ ううむ、ううむ。さびしい。

「おや？ おまえ。お茶碗」

けいねが吾輩のお茶碗をひよいと持ち上げたのである。まだ、食べ終わってはおらぬ。

「欠けているね。これを使うと危ないなあ。代わりのお茶碗なんてないし……」

けいねがお茶碗を置いて吾輩を抱っこしてきたのである。顔をずいと近づけてくるのである。なんだか甘いにおいがあるのであるな。けいねはお菓子と友達かもしれぬ。

「私とお茶碗を買いに、でーとしようか?」

よくわからぬがお散歩は大歓迎なのである!

わがはいはかおがひろいのである

とてとてとて、ちら。とてとてとて、ちら。

吾輩は歩いては後ろを振り向くのである。ちゃんとけいねが付いてきているかを吾輩はとても気になるのである。けいねはにこにこしながら吾輩の後ろをついてくるのである。手に包みをもっているのはお財布だといっていたのである。

「もしかして、待っていてくれるのかな？」

そうである！ 吾輩は置いて行ったりはせぬのである。そう思ってちからづよくけいねを見ると、けいねも腰をまげて吾輩を見下ろしてきたのである。

「ちゃんとエスコートしてくれるのか？ んー？」

任せるのである！ えすこーとは得意なのである。それに吾輩はちゃんとお散歩できるのである。さあ、こつちである。

「いーいー、そつちは逆方向だから」

ううむ、間違ってしまったのであるな。けいねが呼ぶのでにやあと行って近づいていくのである。そつちであるか、とてとて。けいねについていくのである。

人里のことは吾輩は大好きである。吾輩は顔が広いからしていろんなものを知って

いるのである。あの曲がり角の先でよく遊んでいる子どもは吾輩と追いかっこが好きなのである。

あの家のろうじんはいつもしようぎをしているのである。吾輩は一度だけろうじんに抱っこされてしようぎをしたことがあるのである。こう、駒をばらばらにして、倒さないように外にもつていくと勝ちなのである！ 吾輩はたいへん褒められたのである。おお、あそこの家の前で水を撒いているのはよく吾輩にご飯をくれるおなごである。今日はけいねとお散歩であるから、今度寄るのである。

「なんだかきよろきよろしているな」

けいねが立ち止まって、吾輩の前にしゃがんだのである。それからつんつんと吾輩の鼻をつつくではないか、くすぐったいのである。ぶるぶる。

「お前はいつもどこで何をしているのかしら？ いつもいつもひよっこりと現れてはどこかにいくけど」

吾輩はいろんなところが好きだから、いろんなところに行くだけである。そういうことを、にやあと伝えてみてもけいねはくすりとして立ち上がっただけである。なかなか寂しいのである。

「実は、結構人里でもお前のことを知っている人がいるんじゃない？」

吾輩は知り合いは多いのである。しかし、こみゆにけーしよんは難しいのである。そ

このところが悩みであるな。

吾輩はくしくしと首元をかいてみるのである。思案することは多くあるのであるが、かゆいときは痒いのである。けいねがふつと笑って「いこつか」と言ったから、吾輩もそのあとをついていくのである。

「そうそう、この前な。人里の貸本屋で売られている新聞に猫の話があつたよ」

ふむ？ しんぶんであるか。吾輩はよく読んだことはないのである。いつかは読みたいものであるな。

「なんだかつたないけどかわいい絵で……傘を持った女の子と猫。そんな天狗の絵が掲載されていたなあ。なんでも地底旅行だつてね。……くく、天狗があんなかわいい絵を描いたと思うと」

それはもしかして、もみじの絵ではないでないであろうか！ 吾輩はなんとなくうれしいのである。けいねに褒めてもらえているのである。

「最近貸本屋で新聞を買う人も多いらしいから、みんな見ているのかもなあ」

独り言のようにけいねがいうのを、吾輩はうむうむと聞くのである。できるだけ大勢にみてほしいのである。たぶん吾輩とこさかの絵である。もみじにも絵のさいのうがあるのやもしれぬ。

「それでね」

そうやって、けいねは歩きながら吾輩に語り掛けてくるのである。

吾輩はそれがたのしくて、ついつい足元をあくるものであるから、たまに足が当たりそうになってしまうのである。それでも吾輩はこういうお散歩は吾輩は大好きなのである。

「おっと、いけないな。お茶碗をかうんだったわ」

気が付いたようにけいねは立ち止まったのである。吾輩も立ち止まるのである。

胸をぴんと張つて、上を見るとけいねの帽子の先がゆらゆらして、吾輩も帽子がほしい気がするのである。

「ちよいとちよいと、そこのお姉さん」

けいねを呼ぶ声があるのである。振り返つてみると大きな木の籠を背負ったおなごがいるのである。声でわかるのである。背は小さいのであるが、吾輩よりは大きい。

編み笠を深くかぶっているので吾輩にも顔がわからぬ。下から見ると髪が青いのである。

「私ですか？」

「そうそう、あんた以外誰がいるのさ」

「なんだ、行商人か」

なんだか怪しいのである。吾輩は騙されないのである。もしかしたら、あれである。

なんであろう？ よくわからぬが、とりあえず足を舐めてみるのである。

「にやつ！ な、なんだこの猫」

「ああ、悪い悪い。こら、めつ」

めつ。と言われてしまったのである。しかし、なんとなく妖怪のような気がするのである。吾輩の勘の鋭さは自信があるのである。まあ、だいたい髪の色が人里で目立つようなら、妖怪である。

「なんだよ、もう。あんたの猫か？ 最近は猫を連れてどこかに行くのが流行っているらしいね。捨ててある新聞を拾ったけど、天狗が地底に猫連れて行ったんだって？」

「ああ、私もさつきその話をしていたところよ、なんでも鬼とお酒の飲み比べをしてべろんべろんになった天狗だとき」

「はっ、地底の鬼なんて会いに行くなんて物好きだなあ」

「そうだろうな、河童にとっては昔の上司だったか？」

編み笠をかぶった女子が一步下がったのである。編み笠を指でつまんであげると、片目をぎらりとさせてけいねを睨んでいるのである。吾輩も負けずに間に入るのである。けいねをいじめるのは許さないのである。

「私が河童だって？」

「いや、すまない。言葉の綾よ。河童はよくイベントをするから、貴方に似た河童もいた

気がただけだから。その河童は人里で大暴れもしていた気がするけどなあ」

「……あはは。迷惑だなあ、間違えてもらつちや困るよ。妖怪が人里をうろうろしているなんてあるわけじゃないか。河童はおとなしくて、お淑やかなんだぜ」

あはは

なんだか二人して笑っているのである。吾輩は安心したのである。ということはこの青い髪のおなごも妖怪ではないのである。本人がそう言っているからして、信じてあげるのである。

「まあ、何でもいいけどさ。ほらこれあげよ」

編み笠がぱらつと紙をけいねに渡してきたのである。けいねはそれをまじまじと見つめているのである。

「へえ、明日陶器市をするのか。……郊外ね。『妖怪が出てもおかしくないような』場所なんでまた……きゆうりは3本まで……なんだこれ」

「疑い深いね。何の変哲のない陶器市だよ？ 格安でいいお茶碗も手に入れることができるさ。ぜひ来てくれよ」

そういうと編み笠は笠をちらつと上げて、にやつと笑ったのである。けいねもくすくすしているのである。

「そうだなあ。この猫のお茶碗がほしいのだけど、どうする？」

けいねが聞いてきたのである。吾輩は耳をぴくぴくさせてみるのである。

吾輩はどこにでも行くのである。そして、すぐにみやあ、みやあと答えたのである。力強い返事に。編み笠もよしつと「来るつてさ」と言つてくれたのである。おお、編み笠には吾輩の言葉が通じているのかもしれない。

けいねともお話できればいいのであるが。吾輩悩ましいところである。

「それじゃあ、ちゃんと来てね」

編み笠はそれだけ言うところかに行つてしまったのである。

取り残されたけいねは吾輩に言うのである。

「今日はお茶碗がないね……ヤママでも買つて帰ろうか？」

!!!!
うむうむ。

あたらしいあさなのである

吾輩は満足である！

人里からの帰りにけいねはなんとやまめを2匹も買ってくれたのである。吾輩は今日はおなか膨れて何も考えることができぬ。

だからこうしてけいねの家でごろごろしているのである。明日はよくわからぬが陶器市に行くというので吾輩楽しみである。なんといつでも吾輩は知らないことをする時には楽しいことがあるというのをちゃんと知っているのである。

ごろごろごろ。吾輩は昼が好きなのである。外を見ればもう真つ暗であるな。ほうほうほう、と鳥の鳴き声が聞こえてくるのである。……それよりも、ろうそくのある部屋から外を見るといつもより暗く見えるのはなんでであろうか。ふしぎである。

「あれはフクロウかな？」

けいねよ、あの鳴き声はフクロウではないのである！ むむむ、これは吾輩がせんせいになれるちゃんすであるな。吾輩が教えてあげるのである。

そう思つて丸いテーブルによりかかつてお茶を飲んでいるけいねに近づくのである。吾輩になんでも聞くのである。

「どうしたの？ もう眠たい？」

背中を撫でられると吾輩は、うむ。ぶるぶる。眠たくなってしまふのであるが、そうじゃないのである。

「妹紅も泊っていけばよかつたのにね？」

きつと忙しいのである。今度会つたらもう一度おさんぽしたいものであるな。

けいねはさつき吾輩とお風呂に入ったから手があつたかいのである。そこ、そこであるな。いいのである。そういえばさつき吾輩はけいねに何を言いに来たのであつたか……まあ、いいのである。

「うん、もうおまえも乾いたな、明日は朝から出かけるからもうお休みしようか？」

けいねはそう言つて吾輩を抱くと、ろうそくの燭台を片手にもつて寝るところにぺたぺたと廊下を歩いて移動したのである。吾輩はどこでも眠れるのであるが……。

そういえばけいねは白い寝間着になつていたのである。巫女も寝るときは着替えるのであるが、吾輩も寝間着を用意した方がいいのであろうか……ううむ。

吾輩がそう思つて深い考えに耽つているとけいねの部屋についたのである。お布団が敷いてあるのである。けいねはお布団の傍らに吾輩をおろすと、ろうそくをふつと消したのである。

それ吾輩もやりたいのである!! そのふつとするの、吾輩もやりたいのである。なん

だか楽しそうである、

「こちらこちら何も見えないのににやあにやあ言っても分からないよ」

？ 見えるのである。暗い方が吾輩いい時もあるのである。もしかしたらけいねは目が悪いのかもしれない……心配である。

けいねは布団の上に座り込んでから手探りで中に入ったのである。髪をまとめているのがねこじやらしみたいであるな。

「おいで」

けいねがふとんを上げたので吾輩はするりと入り込むのである。うむ、なかなかのいごこちであるな、吾輩は布団の中で目を閉じたのである。

「おやすみ。ゆたんぼ代わりにちようどいいよ」

なーお。あつたかいのである。

☆

やまめ、やまめ……ううむ。うむ？ 夢であるか……。こがさとふとにやまめを取られそうになった……怖い夢である。

目の前が真っ暗である。

ここはどこであつたか、なんだかい匂いもするのである。吾輩はもそもそとそこから移動してやっとわかつた。前の前ですうすう寝息を立てているのはけいねである、吾

輩はほつぺたをぶにぶにしようとして、やめておくのである。

吾輩は紳士であるから寝ているけいねを起すことはせぬ。もこおは、まああれである。遊んでほしかったのである。

吾輩はそろりそろりとけいねを起こさぬように、脱出するのである。

「う、うーん」

ビクッ

……寝返りをしただけであるか、吾輩びつくりしたのである。まあ、いいのである、もう完全に目が覚めてしまったのであるからして、外に行きたいのである。吾輩は布団をふみふみしてから抜け出すのである。

さて、どうやって出ようか、と吾輩が考えていると綺麗に張られた障子が目に入ったのである。白いぱりつと割れるあれである……。頭をいれて破るといい音がするのである。

うずうず

にじりにじり

うずうず

はっ！ いかぬいかぬ。吾輩はやらぬ。ちらり。うむむむ。誘惑には断じて負けぬのである。怒られてしまうのである。

吾輩はそのあたりをうろろろしているとふすまの間が空いているのである。そこに前足をいれて体をいれると、おお開くのである。そこから廊下に出たのである。

寒いのである。廊下の床も吾輩は冷たいと思うのである。吾輩はふるふる体を震わせたのである。ちよつとお布団にもどりたい気もするのであるが……。

それでも吾輩は渡り廊下に来て庭に降りたのである。ここは出るのも入るのも簡単であるが、けいねはちゃんと入ってきなさいというのである。今日は出るだけであるからいいのである。

空が青いのである。うむむ、なんといいのかわからぬ。なんだかお山のあつちの方が明るいのである。それにしても静かであるな。

くしくし。落ち着いて毛並みのめんでなんすができるのである。こう、一日でも怠つてはならぬのである。

? 屋根の上に誰か座っているのである。危ないのである。吾輩もよく屋根の上にはあがるのであるが、素人が昇つてはならぬ。

吾輩はにやあにやあと読んでみると人影がこつちを見たのである。朝の風に赤いリボンがゆれて、につと齒を見せて笑っている少女である。短い金髪がうっすら朝日に輝いているのであるが、ふわふわとこちらに降りてきたのである。両手を伸ばしているのである。

なんだ妖怪であるか。けいねの家に妖怪も来ているのであろうか。

「のんびりしてたら、夜が終わっちゃった」

そうであるか。何か言いながら少女は吾輩の前にすんと降りてきたのである。ぱつと黒いスカートが揺れたので思わず吾輩がパンチしてしまったのである。

「ちよつ、ちよつと破ける」

すまぬ……わざとではないのである。この少女意外とおしゃれに気を付けているのかもしれぬ。スカートを指でつまんで破れてないか見ているのである。吾輩がにやあというとき、少女は赤い目で吾輩を睨みながら両手を上げたのである。

おお、見上げたついでに空にいい雲が飛んでいるのである。

「たべちやうぞ」

……吾輩雲は好きである。今日もいい日になりそうであるな。

うむ？ 少女よ大きな口を開けて何をしているのであろうか、すまないのである何も聞いていなかったのである。

なかなか歯並びがいいのである……。いや、どうでもいいやもしれぬ。なんだか少女は固まっているのである。もしかしておなかが減っているのであろうか？ なんだかかわいいそうである、

そうである！ 吾輩はたったか走り出したのである。少女も「ど、どうしたの」とつ

いてくるのである。

吾輩は外からけいねの部屋に雨戸をかりかりするのである。ごはんがほしいのである。

「……うーん。朝早くからどうしたんだ。おなかが減ったのか？」

けいねがからから雨戸をあけて顔を出したのである。

「うわつ、なんだルーミア……だったか？　なんでここに」

「しーらない。朝になりそうだから休んでただけなもの」

ふーん。と言いながら少女……るーみあがそっぽを向いたのである。吾輩はその足元でごろごろ鳴いてみるのである。おなかが減ったまま我慢してはならぬのである。

吾輩がみると、けいねはふつと笑ったのである。

「ご飯をお茶漬けにして食べていけないか？　ルーミア」

るーみあは振り向かずにどこかにむけて「そーなのかー」と言ったのである。吾輩からはちよつと笑っているのが見えるのである。

あたらしいともだちなのである

「ずーと音を立ててるーみあがお茶をすすっているのである。

吾輩達は起きてきたけいねにご飯を作ってもらって満足しているのである。ううむ、
こういう場合はでりしやすというのである。るーみあはおちやづけなるものを食べて
いたのである。るーみあの前には空になったお椀が重ねているのであるな

るーみあが湯飲みをおろして、ふうと息を吐いたのである。吾輩もにやあと声を出し
てみたのであるが、特に意味はないのである。

お茶をみていると白い湯気ももやもやしてて飽きぬ。吾輩は好きである。

煙もいろんな形があることを吾輩はちゃんと知っているのである。しかし、お茶を飲ん
だことはないのである。吾輩はたまには飲んでいいかもしれぬ。けいねよ吾輩にもほ
しいのである。

「にやあにやあ、何を言っているの?」

るーみあは一人だけお茶を飲み終わると、ペろりと口周りを舐めながら言うのであ
る。吾輩もお茶を飲んでみたいのである。そうるーみあに説明すると、赤い目をぱちぱ
ちさせながら吾輩の尻尾をふにふにし始めたのである。

「猫ってたべられるのかー?」

食べられないのである! 吾輩は食べ物ではないのである。そういうことを言うのであるなら吾輩も考えがあるのである! 吾輩はるーみあにちかよって、服をかみかみしてみたのである。まいったかつ。

「んー」

るーみあが吾輩のお腹をなでなでしてきたのである。うむ、このくらいにで勘弁しておいてやるのである。ううむ、そこであるな。吾輩は仰向けになってみるのである。

ふとるーみあの手が止まったのである。

吾輩はちらつとるーみあを見るのである。するとすぐになでなでが始まったのである。しかし、すぐに止まってしまうのである。だから吾輩はもう一度ちらつとみるとるーみあはなでなでしてくれるのである。

「きもちいいのかー?」

うむ、気持ちいいのである。それにしてもけいねはどこに行ったのであろうか、吾輩にもお茶がほしいのである。

「なんだ遊んでいたのか」

噂をすればけいねが部屋に入ってきたのである。吾輩はるーみあと遊んでやっていたのである。こういうことをちゃんとするのが紳士であるからして、怠ったことはない

のである。……ふとのことはたまに無視してしまうのであるが反省するのである。

けいねはるーみあの近くに座って、吾輩を抱っこしたのである。

「今日はこのこと一緒に陶器市に行く予定なんだ」

「とうきいち？ そうなんだーいつてらっしやーい」

るーみあよ、なんだかどうでもよさげであるな。

吾輩はみやあとけいねに聞いてみたのである。るーみあはなんでそっけないのであろうか。けいねを見るとくすりとしているのである。

「お前もよかつたら来るか？ 人里から離れた場所でもやるから紛れ込んでも大丈夫と思うけど」

「興味ないわ」

「……そうか、なあ。ルーミアは興味がないようだ。どう思う？」

吾輩にけいねが聞いてきたのである。ううむ、これは難しい問題であるな。吾輩はみんなで行くにはやぶさかではないのである。るーみあよきつと楽しいのであるからして、ついてくるのである。なに心配はいらぬ。吾輩が付いているのである。

にやあにやあ

「……と、この子もこう言っているんだがどうする？ ルーミア」

「いや……私は猫の言葉なんてわからないんだけど。そもそもなんで私を連れていき

いの?」

「そうだな、これも何かの縁かなと思って誘って見たんだけどな。なあ?」

なあ、と吾輩に語り掛けてこられたのである。

けいねは吾輩をじつと見てきたのである。吾輩もけいねの眼をしっかりと見つめるのである。にらめっこなら負けぬ。……うむ、勝ったのである! けいねが笑ったのであるな、吾輩はにらめっこなら負けぬ。こころにもいつか吾輩が勝つのである!

けいねは顔を上げてゆつくりと話をし始めたのである。吾輩はけいねがはなすところは好きである。

「この子はなんだかどこかで友達を作ってくるんだ。つい最近も私の知り合いと連れ立って遊びに来てたりね」

「そうなのか、って何か関係があるの?」

「いや、朝にちよつと目を離したただけですぐにお前と知り合いになっていたのことが、そのおかしくて」

くすくす、けいねが笑うのである。

「さっきの答えを補足するけど、どうせならこの子と遊んでやってくれないか」

「……私は猫と友達になった覚えはないんだけど」

むむむ、吾輩はしょつくである。もうるーみあととはともだちとして考えていたのであ

る。これは悲しいことであるな。吾輩はじつとるーみあを見るのである。

「……」

じい。

「うっ……」

るーみあがそっぽを向くと、けいねが吾輩を抱いたままその前にもつていくのである。らくちんであるな。るーみあの前に行く、吾輩はなんとなくなるーみあをみるのである。

「……」

なんか汗をかいているのであるな。吾輩は別に何もしておらぬのであるが、これはかてるやもしれぬ……。何に勝つのかは吾輩にもわからぬ。なんとなく尻尾を振つてみたりするのである。

「ほら、ルーミアと友達になりたいから尻尾を振っているわ」

けいねよ、そういうわけではないのであるが、るーみあと友達になるのはきつといいことであるな。吾輩の心は広いのである。お月様くらいの大きさはあるやもしれぬ。だから吾輩はるーみあとも仲良くしていきたいのである。

「わかった。ついていってあげてもいいけど、なんかちようだいっ」

「わかったわかった。ちゃんと私がルーミアのお茶碗を買ってあげるさ。よかったな、

ルーミアが友達になってくれるって」

よかったのである！ にゃあおと吾輩は声を出すのである。このごろ知り合いが増えていくのである。にぎやかでいいことであるな。

「……猫と友達になるとは言っていないんだけど」

「まあまあ、そういうえば昨日もらった草餅があるんだが、行く前のでぎーとに食べるか」「うんっ！」

いきなりーみあが元気なつて吾輩はびっくりしたのである。思わずびくつと体を震わせてるーみあを見てしまったのである。それにしてもくさもち、とは何であろうか吾輩はちゃんと餅はわかつているのである、のどに詰まらせるから絶対に食べてはいかぬ、とけいねに止められているものであるな。

ううむ、くさもち……くさもち。わかったのである！ 草を丸めたやつであるな。おいしいのであろうか？ 吾輩にはとんとわからぬが、るーみあが好きなら今度作つてあげるのである。

草ならその辺にいっぱいあるのである。吾輩はいらぬ。どうせならふともやるのである。喜ぶであらうか？ ふとが喜んだらこがきにもつくつてあげるのである。

「それじゃあ、草餅取つてくるから、ちよつと待ってて」

けいねがくさもちを取りに行くのである。草をむしつてくるのであろうか。吾輩も

お手伝いするのである。その足元についていくのである。

だまされたのである！

るーみあが両手に緑色の「くさもち」をもつておいしそうに食べているのである！
なにやら甘いあんこも入つてるといふのである。吾輩もほしいのである。

るーみあのを吾輩はまわつて、にやあにやあ鳴いてみるのであるが、どうしても
くれぬ。

「おいしごと」

るーみあがくさもちを啜えてみよーんと伸ばしているのである。楽しそうである。
吾輩もやりたいのである。けいねよ、吾輩もほしいのである。

そう思つてけいねを見てみると、けいねはにっこりとわらいながら吾輩に言つたので
ある。

「のどに詰まらせるからダメ」

りふじんである！

「後でヤママメあげるから」

じゃあ、いいのである！

おでかけがたのしみである

お出かけである！

吾輩はりきつて玄関を飛び出しのである。なにやら「とうきいち」というところにいくとのことであるが、吾輩にはよくわからぬ。しかし、吾輩はけいねとお出かけするにはやぶさかではない。

「ごらごら、まっけてくれ」

玄関で靴を履きながらけいねが言うのであるな……吾輩は紳士なので待つのである。

……けいねよ早く靴を履くのである。なんならはだしでもいいのである。吾輩はいつもはだしである！ これもなかなかおつなものである。

ふりふり、ふりふり。

おつといかぬ。吾輩としたことが尻尾がかるやかになつてしまったのである。これは恥ずかしいのである。吾輩は思わず自分の尻尾を舐めてごまかしてしまったのである。

「……めんどくさいい」

るーみあがくさもちを食べながら奥から出てきたのである。のそのそと靴を履いて

はいかぬ！ はやくしてほしいのであるが、ここは吾輩はも背筋を伸ばして待つのである。こういう時に焦ってはいかぬのである。それがたしなみというやつなのである。

「もぐもぐもぐもぐ」

るーみあよ早くするのである。けいねもこういう時に「めっ」てするのである。吾輩はたまりかねてるーみあの足元に歩いて行つたのである。るーみあは指についたお餅を舐めながら吾輩を見ているのであるな。

早くするのである！ 吾輩はるーみあににやあと力強く言つたのである。

「ほら。ルーミア。この子も早く行きたいようだから、行こう」

「えー」

けいねと吾輩の力強い言葉にルーミアは靴を履き始めたのである。早く行きたいのである。外を散歩すると気持ちがいいのである。

ルーミアが靴を履いて、けんけんと地面をさきつぽでたたいてるのであるな、何をしているのだろうか、よくわからぬが吾輩はそれを見て玄関に飛び出して——おおけいねに抱き上げられたのである。

「ほら、人里なんだから車（大八車など）がきたら危ないだろう？ ちゃんと私の……ルーミアのそばにいなさい」

「えっ？ なんで私？」

みやあ。心配性であるな。しかし、けいねのいうことももつともであるな……吾輩は急ぎすぎてしまったのである。わかったのである。

るーみあがくるまにひかれてはかわいそうである！ ちゃんと吾輩が子守をするのである。るーみあよ吾輩がちゃんと守ってあげるからして、安心するのである。そんな吾輩をるーみあもじつと見てきたのである。

「んー、なんかこの猫私を見ているんだけど……。まるで言葉がわかっているみたい？」
吾輩はるーみあが見ていたから見たのであるが……。

しかし、るーみあよ吾輩はちゃんとわかっているのである。しかし、ことばよりもこう、伝えようとすることが大事であるときとりも言っていた気がするのである。こみゆにけーしよんはだいいじであるな。地底で勉強してきたのだ。

「なんだいまさら、この子はちよつとわかっているよ」

けいねが吾輩をおろしてから言うのである！ むむむ、うれしいのである。吾輩をよくわかつているのであるな、さすがはけいねである。吾輩はともうれいのである。

「ちゃんとごはんつていえば来るし。ヤマメつていえば、すつ飛んでくる。……とても正直な子だから」

……まるで吾輩が食いしん坊のようであるな……。吾輩はそこまで食い意地は張っていないのである。るーみあもなにか言つてやるのである。吾輩はるーみあだけが

さもちを食べていても文句を言わない紳士だったのである。

「やまめー」

ぴくっ！ にやあ。

どこであるか！ ……るーみあよないではないか。

「あは」

るーみあがなぜか笑っているのである。まあいいのである。吾輩は誰かが笑っているところは好きであるから、ちゃんと許すのである。吾輩の心はお空のように大きいのである。

「くすくす。それじゃいこうか」

けいねが言ったのである。吾輩はにやあと答えると、るーみあも「はい」と気の抜けた声で言ったのである。お出かけである。楽しみである。

☆

今日のことにはちゃんと吾輩はわかっているのである。吾輩のお茶碗を新しくしてくれるのであるな、楽しみである。吾輩はとてとてと歩きながらふと気が付いたのである。

朝から楽しみなことばかりであるな。今日はきつといい日なのである。それは間違いないのである。

人里を離れてのんびりとけいねとるーみあと吾輩は歩くのである。吾輩はちやんとるーみあのそばを離れぬ。こういう田んぼの道の道でもどこから敵がやってくるかわからぬ。

けいねは行きかう知り合いに「こんにちは」と挨拶をするので、吾輩もにやあとというのである。すると「えらいね」と言ってくれることが多いのである。吾輩は満足である。「おお、おぬしは猫ではないか」

なんだか知った声があるのである。るーみあよ気を付けるのである。たいていろくなことはせぬ。顔をあげてみればやはり、えぼしをがぶった少女である。ふとである。なんでこうよく会うのであろうか。

「ああ、こんにちは」

「うむ。……あ、失礼。こんにちは」

!!! ふとが普通にけいねへ挨拶をしているのである。吾輩は驚いたのである。ふともあいさつを普通に挨拶をすることができるようになったのである……吾輩は感動したのである

「あ、皿割るやつだ」

るーみあよまず挨拶をするのである。……さわるる？

「い、いきなりなんだおぬしは！ 我は考えなしに皿を割っているわけではない、よ、よ

ける方が悪い……わ、我は一生懸命しているのだ」

ふと皿をわるなんて悪い子である。めつとするのである。吾輩はふとの足を肉球でぼんぼんとたたくのである。するとふとはにんまり笑ってきたのである。

「この猫は我を慕っているらしくてな。よく遊んでやっているのじゃ」

「……そうか、やはり顔が広いなあ。私の知らないようなところで大冒険しているんじゃないのか？」

けいねよ感心しておるところ悪いのであるが、吾輩は別に慕ってはおらぬ。しかしだいたいぼうけんであるかしたのである。ううむ。このまえは地底にいったくらいしかしておらぬ。

そんなものおもいにくける吾輩を無視してふとはしゃがみ込んでから手を出してきただのである。むむ、お手をしてほしいのであるな。

むしすると泣きそうになるから吾輩はちゃんと手を載せてあげるのである。

「……（うれしそうな顔）」

な、なにか言うのである。

「ふふふ、おぬしもちゃんと私の言うことを聞くようになってきたな」
「やっぱりだまっておくのである。」

「ん」

るーみあよなんで吾輩に手を出しているのであろうか、お手をするようにということであるか？

「ふっ。金髪リボンよ。我もこやつを手なづけるのに苦労したのだ。そうそう、簡単にはできぬ」

吾輩はるーみあ手に前足を載せるのである。

「おお」

「うああああー！」

びくっ。ふとよいきなりわめかれるとびっくりするのである。ふとは吾輩を指さしてきたのである。

「ま、祭りの時にはあれだけ遊んであげたのにい」

おお、どこに行くのであるかふとよ。

なんかだか悪いことをしたような気がするのである。

「騒がしくて楽しいお友達だなあ……気取った口調なのにお前といると変わっている気がするよ」

けいねよ、ふともお友達になるのであろうか、いやお友達であるな。吾輩はふとのことを嫌いではないのである。けいねはそんな吾輩をなでなでしてくるのである。

「お前はいつも外にいるから、あんな風などもだちがいつぱいいるんだろうな。私もお

前と散歩していると楽しいよ」

吾輩も楽しいのである。ふとも今度はいっぱい遊んであげるのである。

ろぼである！

吾輩がえすこーとするのである。けいねにるーみあよしつかりと吾輩についてくるのである。うむ、いいお花が生えているのである。これはなんのお花であろうか、こんにちはと言ってみてもいつも答えはくれぬ。

「こら、置いていくぞ」

おお、危ないのである。吾輩はけいねに置いていかれるところであった。不覚である。お花も後で会いに来るのであるから、そこで待っているといいのである。吾輩はげんそうきようじゆうにお花の知り合いがいるのである。丘の上のたんぼぼは仲良しであるな

まあ、お話をしたことはないのであるが。寂しいのである。
にやあ。

ちやんとお別れの挨拶もするのが紳士である。吾輩はお花を見ながら前に歩いたのである。っ！。吾輩はなにかにぶつかってしまったのである。見れば立ち止まったけいねの足ではないか、吾輩は急に立ち止まることに抗議したのである。吾輩が頭をぶつけてしまったのである。

「な、なんだあれ」

ううむ、聞いておらぬな。るーみあもなにか言つてやるのである……うむ？ るーみあよそんなにお口を開けて何を見ているのであるか、心なしか目もきらきらしている気がするのである、全く何を見ているのであ……

おお、おお！ なんであろうか！ あれはなんであるか！

人の形をしたおおきな何かが浮かんでいるのである。それに「いらつしやいませ。守矢陶器市！」と書いているのである。吾輩にはなんと書いているかは読めぬがすごく奇異なるのである！

「ろぼだつ。ロボだ！」

るーみあが何か言っているのである。あれはろぼというのであるか。空をふわふわ飛ぶとはなかなか見どころのあるやつである。それにしてもるーみあが目がきらきらしているのであるな、吾輩はろぼと同じように気になるのである。

「あれは大きな風船だろうな……なんか前に見たこともある気がするけど。守矢か、あれもなんだか聞いたことがあるけどな」

けいねは何でも知っているのであるな。ろぼとも知り合いかもしれぬ。けいねよ、吾輩はとてもほめているのである。吾輩も負けてはおれぬ。吾輩もろぼと友達になるのである。

「それにしてもルーミアも子供っぽいところがあるんだな」

「……っ、べ、べつにー」

ふんつとるーみあがそっぽを向いてしまったのである。なぜであろうか。ちよつとほつぺたが膨れているのであるな。……だつこしてほしいのである、ほつぺたをさわらせてほしいのである。

いかぬいかぬ。吾輩はああいう顔をされるとなんでかそうしたくなってしまうのである。こがさにはなんどもばんちをしてしまったのを反省せねばならぬ。

うむ？

るーみあが吾輩を抱っこしてくれたのである。こみゆいけーしよんが通じたのやもしれぬ！ おお、けいねの顔がよく見えるのであるが、背中になるーみあが顔を押し付けてくるのである。

「そ、そんなじゃないわ」

うむ、よくわからぬがそんなことではないのである。けいねよ。

吾輩はよくわかっておらぬがるーみあの味方であるな。吾輩ので顔を隠しているのはきつと、あれであるな。いないないばあというやつである。たまに人里のこどもがやってくるから吾輩にはわかるのである。

けいねも困った顔をしているのである。今である！ ばあつとするのである。るー

みあよっ！

「わるいわるい。私が間違つてた。さ、行こう。どうせならルーミアのお茶碗もいやつを買つてあげるから」

「……」

おお、急になるーみあが離れたから吾輩は地面に着地したのである。ばあが下手であるな。こうもつと元気になるのである。けいねもるーみあも待つのである。

「おいで」

るーみあがちよつと振り返つていったのである。ほんのり笑っている気がするのがある。

☆

人がいっぱいいるのであるな。

大きな広場に出店がいっぱいあるのである。なにやら、おちやわんをいっぱい売っているようであるな。

わいわいがやがや。

なんだか楽しみである。遊びに行こうと吾輩は駆けだすと、るーみあにまた抱っこされたのである。

「だめ」

むう。難しいのであるな。なぜダメなのかわからぬ……。しかし、るーみあにだっこされたまま吾輩は動き出したのである。これはたくしーであるな。前にはもみじたくしーであつたがるーみあもなかなかいいのである。けいしゃもないのである

「あつ来たんだ」

とてとてやってきたのは青い髪をしたしようじよである。どこかで会つたことがある気がするのである。

「河城にとりつ」

けいねが言ったのである。

にとりというのであるか。吾輩はにやあと挨拶をしたのである。にとりは頭に緑色の帽子をかぶっているのである。吾輩も帽子がほしいのである。

「どうだい結構来ているだろう？ 今日はいっぱい買つて行つてくれよー」

両手をこしにおいてふふんととりはむねを張るのである。るーみあも負けずに張るのである。るーみあよどこを向いているのであるか？ おおろぼであるな。大きいのである。

「どこで河城さん あれは何なの？」

けいねよ、ふふふ。あれはろぼというのである。吾輩がちゃんと教えてあげるのである。にとりよ言つてやるのである。

「あれかい？ あれは我々河童イベントのスポンサー様ごよーぼーで作ったアドバルーンの非想天則Ⅱさ。遠くからでもよく見えただろ？ いい宣伝になるよ」

ひ、そう？ 吾輩は耳をうたがってぴくぴくするのである。るーみあよ、どう思うのであるか、小声で「かつこいい」と言っているのである。ううむ、そうではないのである。名前のことを聞いているのである。

ぴくぴく。

吾輩はだっこされたまま耳を動かしてアピールしてみるのであるがこちらを見てくれぬ。ちよつと手を舐めてみるのである。

「っ」

びくつとしているのであるな。

やつと吾輩を見てくれたのである。するとるーみあはほっぺたを大きく膨らませた後に、吾輩に向かって大きく口を開けたのである。

負けてはおれぬ！ 吾輩もそうするのである。るーみあは吾輩に強く抱き着くと耳を軽くかまれたのである。くすぐつたいのである。

「ぺっぺっ。毛が口に入った」

じゃあやらなければいいのである。吾輩も負けずにどこか痛くなさそうな場所を噛むのである。シャツをこう、はむはむ。まずいのである。

「なにじゃれあつてんのさ、あんたら」

にとりが聞いてきたから吾輩も考えたのであるが、うむむ。よくわからぬ。とりあえず吾輩はるーみあのシャツを離したのである。

「わつ、ちよつと首元が……」

るーみあは吾輩を片手で持つて、シャツを締めなおしているのである。吾輩は意外と重いやもしれぬが大丈夫であろうか？

「まあ、どうでもいいけどさ。それよりもあんたらもその先生がお茶碗を買つてくれるんだろう？ 河童印のいいお茶碗を紹介するよ。できるだけ、安くしておくよ」

につ、とにとりが笑つてたのである。なんだか怪しいのである。けいねもなんだか胡散臭げに見ているのである。

「な、なんだよ。全員そろつてさつ。我々河童は宗教家とはちが……おつと今回はセンサーだから言わないけど、適正なしじよー価格で取引しているんだぜ？」

このにとりはなんだかあやしいのである。吾輩は騙されぬぞ。

「あ、そうだ。ほらにぼし」

にとりはいいやつである！ おててに煮干しを載せて吾輩の口元に持つてきてくれたのである。はむはむ、うむうむ。なかなかでりしやすというやつであるな。

「どうせこいつも来るだろうと思つて一応用意してたんだ」

にとりは準備がちゃんとできるのであるな。

「それじゃ、私があんないしてあげるよ。楽しんでいってね！」

はげしいしとう

「それじゃあ、このにとり様がじきじきに案内してやるからさつ。ちゃんについてきなよ」

にとりが片手を腰にあてて、顎をあげているのである。どことなく得意気であるな。任せるのである！ 吾輩はちゃんについていくのである！ けいねもるーみあもわかったのであろうか？

吾輩は心配してけいねをみるのである。

にこっ

けいねが吾輩に笑いかけてくれたのである。どうやらちゃんとわかっているようであるな。吾輩はほっとしたのである。

「それじゃあ、あつちの店から行こうか。我々河童の技術を使って焼いたお茶碗とかはなかなかいいよ」

にとりが歩き出したのである。その後ろにけいねが付いていくので吾輩もちゃんについていく……うむ？ るーみあがおらぬ。ど、どこに行ったのであろうか。こんなに

早く迷子になるとはこがさよりもあわてんぼさんなのやもしれぬ。

吾輩はあたりを見回してみる。うむ、ううむ。見つからぬ。こういう時には人に聞くのが早いやもしれぬ。吾輩はちょうど来た歩いていた二人の少女にやあにやあと話しかけてみるのである。

「なにこの猫？」

一人は髪の毛がくるくるしてて目が回るのである。頭の上に大きな黒い眼鏡を置いているのであるな、吾輩はあのめがねというものがよくわからぬ。のぞき込むと目が回るのである。

「ひもじいの？ ……何もないけど」

もう一人は服に何かべたべた貼っているのである……。吾輩には読めぬ。いや、そんなことよりもーみあを知らぬであろうか？ 吾輩は必死にやあにやあと聞いてみると。

なでなで

なでなでされたのである！ 服にべたべた貼っている少女はいいやつであるな。吾輩にはわかるのである。しばらく、撫でると2人ともどこかに行ってしまったのである。

吾輩はとても気持ちよかったのである……。何か忘れていたような気もするのである。

が……うーむ。そ、そうである。るーみあのことをすっかりと忘れてしまったのである。

けいねよ！ 大変である。

？ けいねもおらぬ。た、たいへんである。けいねも迷子であろうか。吾輩はあたりを探しまつたのであるが、にとりもすらも見つからぬ。

さつきよりも人が多くなってきたような気がするのである。

たくさん人がいるのになんとなく寂しいのはなんでであろうか。吾輩はふとそう思ったのである。るーみあも寂しい思いをしているのやもしれぬな。吾輩は頑張つて探すのである！

こういうのをしんしのつとめというのであるな、ふふん。吾輩はちゃんとわかつているのである。けいねのいったことはよく覚えているのである。

とことことこ

いろんなところでおちやんわんが並んでいるのであるな。こう「ごぎ」を敷いて並べていたり、木の柵に並べてあったりするのである。……いかぬ。木の柵を揺らしたらきつとお茶碗が落ちてしまうのである。吾輩はそんなことはせぬ。うず。

そう思いながら歩いてみると、突然吾輩に影が差したのである。誰かが前に立っているのであるがどうにも足しか見えぬ。仕方なく吾輩は立ち止まって顔をあげてみたの

である。

「げっ」

そこには嫌な顔を少女が立っていたのである。片手にはお餅をもつて、ほっぺたがちよつと膨らんでいるのである。頭には「ねずみのような」耳がはえているのである！
にやああ!! ならずりんであるなっ！

「な、なんだ。おまえ、いきなり喧嘩腰だなっ」

なんとなく唸ってしまったのである。別にならずりに恨みがあるわけではないのであるが、ほんとになんとなくである。ならずりんよそう警戒しなくても吾輩はもう何もせぬ。

「はあ、全く。ご主人様がお茶碗を割ったとか泣きついてきたから仕方なく来ただけなのに、猫なんかに出会うとはね。まったく厄日だよ」

はあ、とナズーリンはため息をついているのである。悪かったのである。そう落ち込まなくてもいいのである。吾輩はもう怒ってはおらぬ。そう思つてならずりんの足元に近寄つて足首を舐めてみるのである。

「あーあ。ご主人様ももうすひいああ」

おつきな声にび、びつくりしたのである。ならずりんよびつくりさせるではない。周りの者たちも見ているのである！ ひそひそと話している声に吾輩は耳をびくびくさ

せるのである。なずーりんはなぜか肩を震わせて顔を真っ赤にしているのである。

「ち、ちがう。今の声は！ 違うんだ。この猫がいきなり私を舐めたんだっ！」

なんかなずーりんが周りに必死に言い訳しているのである。吾輩はただ仲直りをしただけである。ぬれぎぬである。そう思つて毅然としたこうぎを吾輩はしたのである。にやあ！

「わっ!?! いきなり叫ぶな。……こ、こいつ。この前はご主人様や聖がいたから何もしなかつたが……ネズミを甘くみると死ぬよ」

なずーりんは甘くはないのである？ しかし、やはりおぬしはネズミの友達か何かであるな。吾輩は最初から感じていたのである！ まあ、わかつてても特に何もないのであるが。

なずーりんは吾輩を睨みながら見下ろしているのである。吾輩も負けてはおれぬ。ちやんとすくつと立ち上がつて見上げるのである。後ろ足だけで立つのは結構難しいのであるが、吾輩ならできるのである。

「……ふっ」

しばらくくらみ合っているとなずーりんが突然笑つたのである。

「悪かつたよ。私も大人げなかつた。猫なんかには本気で怒るなんてことをするわけないだろ。ほら、これをやるよ」

なずーりんは吾輩の前でかがんで握った手を吾輩の鼻のあたりに持つてきたのである。

「にぼしだよ。仲直りの印」

にんまり笑うなずーりに吾輩もにやあと返したのである。にぼしが嬉しいのではないのである！ なかなおりはいつでもうれしいのである！！ けっして煮干しが嬉しいのではないのである。

「お前が煮干し好きだつてことは寺の中では有名だからな。ほら。遠慮しないでいいよ」

なずーりんは笑いながらおててを開いたのである。吾輩は頭をそこに突っ込んだのである！ 掌の中ににぼしを探すのである、うむ？ ううむ？ ないのである。どこにあるのであろうか。

にやあにやあ。

吾輩が見上げるとなずーりんは口を開けて声もなくえがおである。にぼしはどこにあるのであろうか。もしかしたらなくしてしまったのであろうか？

「……………うそだよ」

？

？

!!!!

吾輩は怒ったのである！ ぼつとなずーりんのむなもとに飛びついたのである。

「わっ。こ、この」

なずーりんがしりもちをついたのであるが吾輩はようしやせぬ。

道端で転げまわりながら吾輩を引きはがそうとするのであるな。そうはいかぬ。うそはいかぬ。嘘はあれである、何かの始まりと聞いたことがあるのである。吾輩はなずーりんがもうそんなわるいことをしないようにお仕置きをせねばならぬ。

にやー

はなれろー

しやー

このねこー

なかなかやるではないか。さすがは吾輩のらいばるであるな。もう嘘をつかぬといえば吾輩は寛大にゆるすのである。

「はあ、はあ」

なずーりんの顔が目の前にあるのである。ほつぺたが赤くなっておるな。吾輩も疲れたのである。これをしとうというのであろう。吾輩はなずーりんの顔を舐めてみるのである。これでけんかはおしまいにするのである。

「げっ、ペっペっ」

なんかひどいのである。なずーりんはやはり吾輩のらいばるであるな。いずれ決着をつけねばならぬやもしれぬ。吾輩はなずーりんのむねをふんでから地面に降りようとしたのである。

ぐいつと引つ張られたのである。わ、吾輩はそらを飛べるようになったかもしれぬ。

「こら。だめだろう?」

けいねである、吾輩は怒られた。

さっきのときはいまからおともである！

「こら、いたずらしたらだめだろう？」

けいねが顔を近づけて吾輩にいうのである。こわいのである。

吾輩はちからなく「なお」として言えぬ。確かにやりすぎであったやもしれぬ。吾輩は弱いものいじめは絶対にせぬである。吾輩は恥ずかしさのあまりくしくしと顔をかいてしまったのである。

そうしていると、なずーりんがすおしりをぱたぱたはたきながら近寄ってきたのである。

「まったく。困った猫だな。君が飼い主かい？」

なずーりんが嘘をついたのもよくないのである。にぼしを手を持っているふりをしたのはいかぬ。うそつきはハリセンボンを飲まされるといのである。痛そうであるな……吾輩はなずーりんになこじやらしを飲ますくらいで許すのである。

うむ？

けいねが頭をなでながら抱っこしてくれたのである。

吾輩は首を振るのである。こうすると手に頭がまんべんなく当たって気持ちいいのである。

「ああ、貴方は寺で見たことがあるな。いや、この子は私の飼う猫というわけではないけど、いたずら好きでね。迷惑をかけてすまなかつた」

「まったく……その猫はよく寺にもやってくるんだ。ご主人様も『今日はこないかな』なんて言っているのは情けない……。おつと、これはこちらのことだね。まあ、飼い主でなくても関係があるならしつかりと躰けをしておいてほしいものだね」

「ほらおまえも、わかつたか？」

けいねが吾輩の両脇をもつてなずーりんの前に出したのである。

「わっ」

なずーりんは吾輩に恐れをいदैているのか両手をちよつぷするよう構えているのである。吾輩もちよつと真似を試みるのである！　こう、前足を動かすのは結構難しいのである。

「意外と仲がよさそうだな」

「だ、誰が猫なんかと」

なずーりんがむきになつているのである。吾輩はなずーりんと仲良くするのもやぶさかではないのである。そう思つて一声かけてみるのである。

にやあ

「ちっ」

ううむ。ごうじようであるな。けいねよ、こういうときは言つてやるのである。仲良くせねばならぬ。けいねと吾輩は目が合つたのである。けいねはキョトンとした顔で吾輩を見て、うつすらと笑つたのである。

耳元に口を寄せてけいねが言うのである。くすぐつたいのである!

「……仲良くなりたいのか?」

にやあお。吾輩はちゃんと返事をするのである。顔を動かすとけいねのほつぺたに当たつたのである。すりすりするとなかなか気持ちいいのである。

「あは、くすぐつたいよ」

そういいながらけいねはちらりとなずーりんをみているのである。

いつの間になずーりんはお餅をもぐもぐ食べているのである! 吾輩もちよつとほしいのである。

「前にお寺の住職と話す機会があつただけど、買い食いが多くて困っているそうだ」「むぐつ。……(ほ)ほ。い、いきなりなんだい?」

なずーりんよ「かいぐい」はいかぬ。よく吾輩もわからぬがよくないことはよくないのである。けいねが吾輩を抱いたままにやつと笑っているのである。なんか怖いので

ある。

「いや、前にそんな話をしたことを、ふと思い出したただだよ。またお寺に行く機会があれば話をするかもしれないけど」

「……へえ、そう。それは好きにすればいいけど。そんなことをわざわざ言うってことはさ、何か言いたいことがあるんだらう？」

「そんなことは一言も言っていないさ。ただ、この子と友達になつてくれるならうれしいなとは思っているよ」

ともだちであるか。吾輩はともだちが増えることはいいことである。なずーりんは鼻を「ふん」と鳴らしてそっぽを向いているのである。

「はっ。寺子屋で人間の子供相手にしているとは聞いていたけど、まるで子供に接しているような口調だな。そんな仲良しごっこに付き合つてあげる義理はないね！」

そおつとけいねが吾輩をもつてなずーりに近づいていくのである。

なずーりんはそっぽを向いているのである。細い首が近づいてくるのであるな。うむ、ここはペろりと挨拶をするのである。

「そもそも私がどこの馬の骨……？ いやまあ、どこの猫かもわからないあひやああ！」

！ なずーりんが飛び上がったのである。それから首筋を押さえてへたり込んだ。どうしたのであろうか？ 吾輩は悪いことはしてはおらぬ。

「お、おまえ」

首を押さえながらなずーりんが涙目で見てくるのである。いや、そこがじやくてんとは知らなかったのである。許してほしいのである。けいねも悪いのである。そう思っ
てけいねにやあと聞いてみるのである。

けいねも目をぱちくりさせて驚いているのである。

「い、意外と大きな声を出したから驚いたよ。すまなかった。……でもこれも乗り掛
かった舟だし、私とこの子の買物に付き合ってくれないか？」

「な、なんで？」

「河童とかが出している屋台でおいしいものを買ってあげるから」

「……こんなことをし、しておいて。……そ、それくらいで……」

吾輩もおいしいものが食べたいのである！ ヤマメがいいのである！ ヤマメであ
る！ けいねよ吾輩も。

「いら」

しゅんとしてしまったのである……吾輩としたことが。にやむにやむ。

なずーりんも何か考えているようであるな。吾輩と一緒に遊んでくれるなら歓迎す
るのである。

けいねはへたり込んでいるなずーりに片手を差し伸べたのである。吾輩は片手に

しがみついているのである。

「それじゃあ決まりだな。ルーミアもどこに行つたか分からないから探さないといけな
いし。この子を頼むよ」

「ふん……」ここまで強引にされたらす、少しくらいは付き合つてあげてもいい。わつ」

うむ！ 気が付いたらなずーりんの腕の中いたのである。うむ腕が細いのであ
る……こう捕まるのがたいへんであるな。肩につかまろうとするとなずーりに抱き
しめられたのである。

「こ、ら。暴れるな。な、なんでこいつを私が持たないといけないんだー」

なずーりんよおとなになるのである。わがままを言つては大きくはなれぬ……
うむ？ ちよつと違つたかもしれぬ。吾輩は恥ずかしいのである。

にやあにやあ。

吾輩は抱っこされながらなずーりんの顔をじつと見て、そういつたのである。おお、
すごく嫌そうな顔をしているのである。にやあにやあとさらに抗議するのである。

「にやあにやあうるさいいにやあ……う、うるさいな！」

「くす」

けいねが笑つたのである。なずーりんは顔を真っ赤にして何か言っているのである
が、うるさいのである。うるさいので、なずーりんの胸元に耳を押し付けてみるのであ

る。かべのようでいいのであるが、片方の耳しか隠せぬ。

「おーい」

うむ? どこかで聞いた声がするのである。おお、にとりであるな。

なんだか怒った顔でこちらにやってきたのである。

「なんで、私の後ろをついてくるだけなのにはぐれるんだよ。慧音もなかなか帰ってこないし。あ、なんだ、新しいカモ……お客さんがいるのか、じゃあいいや」

「おい。君。今なんていった」

なずーりんはカモであるか、なら飛べるのであろう。聞いた話によればカモはネギを背負って飛んでくるそうである。なずーりんよ、ネギはどこに持っているのであろうか?

「なんで私のことをじつと見つめてくるんだ……この猫」

いや、ネギをもってはおらぬな。今日はお休みであらうか?

「まあ、いいじゃないか」

おおう、けいねがなでなでしてきたのである。考え事をしている途中にされると気持ちいいのである。

「どうせ、お茶碗を買いに来たんだからそつちを先にしよう。にとり」

「はいはい。今度はついてきてね」

はじめてのじゃんけんである

ひまであるな。

吾輩はなずーりんを抱きかかえられたままでやることはないのである。いい天気であるから、あくびがでてしまうのである。ううむ、いかぬこういう時にもちゃんとしなければならぬのである。

ゆらゆら、ゆらゆら。

……にやむにやむ……はっ！ いかぬいかぬ。眠ってしまったところであつた。なずーりんが歩くたびに心地よく揺れるのであるから、吾輩もふかくにもゆだんをしてしまったのである。

なずーりんを見ればちよつとだけ目があつたのである。

「……………ふん」

なずーりんが吾輩を見てそっぽを向いたのである。ちゃんと前を向いて歩かねば危ないのである。吾輩はそれをちゃんと注意したのである。そういえば、吾輩はいつも前を向いて歩くことではちやんとしているのである。

「(っ)だよ、(っ)っ」

にとりの声に吾輩はむくつと体を起き上がらせようとしてできなかつたのである。抱きかかえられたままでは難しいのである。そう思つてもぞもぞしていると、なずーりんが吾輩の両脇から手を回して抱きなおしたのである。

そうではない。そうではないが、うむこれでもいいのである。

ちやんと前が見える。今日はちやんとしていることが多いのである。いいことであるな。

みれば多くのお茶碗が並んだお店であるな。さつきいろんなところで見たお店よりもいっぱいある気がするのである。

ごぎの上に多くのお茶碗が並んでいるのである。みせばんはにとりと同じような格好をしたおかつぱの少女であるな。吾輩がもぞもぞしていると、なずーりんは地面に下ろしてくれたのである。

「ああ、重かつた」

ありがとうなのである。吾輩はお礼も欠かさぬ。けいねよほめるのである。

けいねはしやがみ込んでお茶碗を眺めているのである。

「にとり。随分といろいろとあるんだな。河童が焼き物をするとは初めて聞いた気がするけど」

「ちつちつち、なめてもらつちや困るね。我々は日々いろんな研鑽を積んでいるのさ。」

この前作ってみた焼き物を焼く機械で人間たちよりも多く作れるようになったんだよ
きかいはがんばりやさんなのであるな。いつか会ってみたいものである。

けいねの足元にいくとけいねは吾輩を撫でながら「どれがいい？」と聞いてくるので
ある。

吾輩が見るところ、ううむ……悩むのである。前足でちゃんと触ってみたいするとお
かつぱの少女が「ああ、だめだめ」と言ってくるのである。げせぬ。

けいねはひよいと一つのお茶碗を取り上げてみたのである。おお、色が桜のようであ
るな。吾輩は大好きである。

ひよいとけいねのひざもとに上ってみるのである。

「わっ」

そのままお茶碗をじっと見つめていると、慧音が言うのである。

「これがお気に入りかな？ ……にとり、これちよつと形がゆがんでいるみたいね」

「……ああ、そういうのをおりべとかいうとか、外の世界ではね」

「もしかしてあんまりうまく作れなかったけどいっぱい作ったから売りに出したとか」

「……ごそーぞーにお任せするよ、でもあくどいことはしてないぜ」

にとりもそつぽを向いたのである。

うむ、うむむ、おかつぱが吾輩を撫でてくるのである。なかなかうまいのである。そ

こである、その首のあたり。おかつぱも「うふふ」とか言っているのであるな。

「そういえばこれは一つおいくらなのかしら？ にとり」

「これくらいだよ」

にとりがけいねへ指を立てて見せているのである。何が面白いのであるうか、吾輩にはわからぬ。それよりもおかつぱよ。肉球を触るのはあれであるな。まあいいのであるが……やさしくするのである。

「それは高すぎるね」

けいねが何かが高いと言っているのである、そうである高いのである。よくわからぬが。

「いやーお客さん。これ以上は難しいよ。我々だつてただで作っているわけじゃないからね」

にとりも言っているのである。そうであるぞ、むずかしいのである。けいねにとりは何かを言い合っているのであるが、吾輩にはとんとわからぬ。なずーりんよわかるのであるうか？ なずーりんはしやがんでお茶碗を手にもつては戻しているようである。

「ご主人様のことだから底が深い方がいいかな……。意外と柄とかにもうるさいんだよな……おい、君」

にとりに話しかけているのである。にとりは「なに？」と答えるのである。

「その桜色のお茶碗をその先生が買えないなら私が貰う、お代はちゃんと払うからいいだろう?」

「まいどー」

にっこりにとり笑っているのである。

「ま、まっつけてくれ」

けいねが慌てて止めているのである。吾輩はついに仰向けになつておなかをなでなでしてもらっているのである。ごくらくとはこのことであろう。

「この子もお茶碗を気に入っているようだ。ここはちゃんと決めよう」

そうである、けいねの言う通りちゃんとすることは大切である。よくわからぬが吾輩もすくつと立ち上がってみるのである。吾輩はけいねにとりとなずーりんを見回して、にやあ? とところで何の話をしているのか聞いてみたのである。

「ふふ、やはりこの子もお茶碗がほしいんだ」

けいねよ。何の話であろうか。

「いや、お金を私が出すと言っているんだから他をあたつてくれよ」

なずーりんよ当たつたら痛いであろう。何を言っているのであるか?

「金さえくれれば別にどつちでもいいよ。じゃんけんでもして決めれば」

けいねとなずーりんがにとりを見て「この河童は……」と一緒に言ったのである。仲

がいいことはよいことである。吾輩はうれしい……おお、けいねに抱きかかえられたのである。そして前足を持たれたのだ。

「わかったナズーリン。じゃんけんをしよう」

「はあ？　なんでそんな子供のようなことをいやに決まって」

「買い食いのことをばらすよ」

「ろ、露骨じゃないか！　くそ、わかったよ」

「おおおお！　これはもしかして吾輩はじゃんけんをできるのであろうか！　うれしいのである。吾輩はじゃんけんは初めてのことである。慧音が吾輩の両前足を持ってゆらゆらさせているのである。」

「なずーりんははあ、とため息をついてから首をこきこきならしているのである。」

「なんだこの勝っても大してうれしくない勝負はさっさと終わらせよう。さいしょはぐー」

「うむうむ。なずーりんはやる気がなさそうな声を出しているのである。吾輩の前足をけいねがフリフリしてくれるのである。」

「じゃーんけんぼん」

「なずーりんは手をかにさんのようにしているのである。吾輩は自信をもつて前足をぶらぶらさせているのである。」

「これはこの子の勝ちだな」

おお、けいねよ吾輩は勝ったのであるか？

うれしいのである。よくわからぬが、勝ったのである。

「ま、待つてくれ。そいつはどう見ても手のひらをそのままにしているからパーをだしているじゃないか！」

「いや、ちよつと肉球を丸めている。これはグーだよ」

「お、横暴だ！ 解釈の違いじゃないか」

あきらめるのである。なずーりんのかにさんも頑張ったのであろうが、吾輩には及ばぬ。吾輩はみやあとなずーりに声をかけてみたのである。するとなずーりんは「な、なんだそその目は。ば、ばかにしているのか」と言ってきたのである。いや、別にしておらぬ。

「それじゃあ、にとり。これをもらうよ」

「まいど」

けいねがにとりにお金を渡しているのである。それからにとりはとて吾輩のところへやつてきたのである。おお、またまだ抱きかかえられたのである。にとりは目を光らせていいかおをしているのである。

「まいどー」

白い歯を見せてにとりが笑ったのである。

ろぼのうえにいきたいのである

ころんころん。吾輩は転がるのである。

地面に転がっては後で砂を落とさねばならぬ。吾輩はそんなことにはならぬように
さいしんの注意を払うのである。だから、ちゃんとごぎの敷かれたうえで転がるのであ
る。

「はむはむ」

横では胡坐をかいてなずーりんがおまんじゆうを食べているのである。お膝に竹の
葉っぱにのせた白のおまんじゆうが並んでいるのであるが、吾輩にはくれぬ。

さつきけいねがなずーりんにだけくれたのである。ううむ、吾輩にもほしいのであ
る。吾輩はむつくりと起き上がってなずーりんのひざ元に近寄るのである。

「……………」

そうするとなずーりんはおしりを使ってくるつと後ろを向いたのである！ 吾輩は
仕方なく前に回り込もうとして、またなずーりんは回ったのである。

「饅頭はやらないからな」

なずーりんよ。吾輩はそんなことは言ってはおらぬ……まあ、ほしいといえばほしい

のであるが。それにしてもなずーりんは食いしん坊さんであるな。よく食べることはよいことである。感心するのである。

「なんだ、その目は」

じつとりと吾輩をなずーりんが見てくるのである。なんだといわれても吾輩は特に何もないのである。遊んでげるのはやぶさかではないのである。そう思つてコロんと寝転がつてみるのである。

ごろごろごろ。ううむ頭がかゆいのである。吾輩は後ろ足で搔くのである。ごしごし、おお、きもちいい……。ふるふる。ぐごろごろ。

「ひまそうだなあ」

吾輩は忙しいのである。抗議をする意味を込めてなずーりんを見るのである。じいとみているとなずーりんはもぐもぐとほつぺたを動かしているのである。なんだかおもしろいのである。吾輩はにやあと声をかけてみるのである。

「……にあ……」

なずーりんは何か言いかけて首を振っているのである。頭を掻きながら「ああ、ペーすが狂う」と言っているのである。ペーすとはなんであろうか、わからぬ。吾輩は知つたかぶりはないのである。だからなずーりんの眼を見ながら首をかしげてみるのである。

こうしているとたまに教えてくれたりするのである。

「……………」

おお、なずーりんも同じように首をかしげたのである。いや、教えてほしいのである。一緒に動きをして貰いたいわけではないのである。ううむ、らちが明かぬ。けいねはどこに言ったのであろうか、るーみあを探すと言って言ったのであるが……。

吾輩はたちあつてきよきよと周りを見渡してみたのである。さつきまでいた人が結構いるのであるな。吾輩となずーりんはちよつと離れてりらくすしているのである。

！　そうである。けいねのお手伝いをするのはどうであろうか、るーみあをちやんと見ておかなかつたのも吾輩にせきにながあるのである。そう思つて、なずーりんへ振り向いたのである。ちよつと出かけてくるのである！

……？　振り向くとなずーりんが吾輩に手を伸ばしたまま固まっているのである……？　　なんであろうか。

「……………あ、ああ」

なんで顔を赤くしているのであるか？　……おお！　わかつたのである。吾輩を撫でてくれるのであるな。それはやぶさかではないのである！　吾輩はちよつとなずーりに近づいてみるのである。

「だ、誰が撫でたりするか！」

それは残念である……吾輩はあきらめきれずにお膝に乗ってみるのである。

「う、うあ」

顔を赤くして逃げようとしてもあれである。別に何もないのであるが、観念するのである。この首のあたりとかが吾輩はいいのである。

なずーりんは固まったまま動かぬ……吾輩は仕方なくお膝から降りてみるのである。まあ、いいのである。ここでちゃんと留守番をしているのである。吾輩はけいねを探しに行くのである！

たったか、吾輩は走り出したのである。吾輩を止めるものは誰もおらぬ！

☆

「こら、ちゃんと待っているように言っただろう？」

なでなで。

すまぬのである。しかし。吾輩はけいねのお助けがしたかっただけである。なでなでされながら吾輩は毅然としたたいどをとるのである。ううむ、ううむ。そこである。

「いつも目を離すとどこかに行こうするんだから……ほら、おいで」

けいねははあとため息をついてから吾輩の顎を指でちよいちよいとしたのである。

ちゃんとしていかねばならぬ。吾輩は紳士なのである。

「それにしてもルーミアはどこに行つたんだろうか。お茶碗を買つてあげようとおもつたけど……」

けいねは紫の包みを大切そうに抱えているのである。あれは吾輩のおちやわんだつたはずである。なずーりんととの激しい戦いに勝つて手に入れたのである……。じゃんけんは初めてであつたが勝てるとは吾輩も未恐ろしいかもしれぬ。

空を見るとあの大きなろぼが浮かんでいるのである。

「あれはたしか非想天則……だつたかな。前に聞いたことがあるんだけど、それにしても妙な形をしているな……くす」

うむ？　けいねよ。なあなあ、にやあ！

「なんだ」

あのろぼの上に立っているのはろーみあではないであろうか。

空に浮かんだろぼの一番高いところで両手を組んで立っているのである。にやあにやあ、吾輩はけいねに訴えてみたのであるが、

「おなか減つたのか？」

いや、違うのである。

「ヤマメ食べにいこうか？」

うむ。

おお、ちがう。るーみあがそこにいるのである。それにしても気持ちよさそうであるな。すかーとがはたはたと動いているのである。かぜさんも来ているのであろう。吾輩はだつと駆けだしてみるのである。

「おーい」

のんびりとしたけいねの声があるのであるが、吾輩は振り返らぬ。

るーみあだけずるいのである！

吾輩もあそこの行きたいのである。しかし、吾輩は飛んでいくことはまだ練習しておらぬからできぬ。

まりさやこがさはおらぬであろうか？ 吾輩はあたりを見回したのである。

！ あれはみこである。吾輩はにやあにやあ言いながら近寄つたのである。吾輩をお空の上まで連れて行ってほしいのである。

うむ？ なんであろう、いつもと格好が違うのである。かみのけが葉っぱと同じ色なのである。それにちよつともじやもじやしておる気がするのである。

「ん？」

振り向いたそのみこは、吾輩に気が付いたのである。大きな瞳がお星さまが飛び出したようにきらつと光つたのである。

吾輩は驚いたのである。吾輩の知っている巫女ではないのである。格好が似ていたから間違えてしまったのである。なんとなく目を合わせたまま、止まってしまったのである。

これではいかぬ。吾輩は紳士である。ちゃんと挨拶をするのである。

みゃー。

うまく言えたのである。

緑の巫女は吾輩を覗き込みながら、

「にゃあ?」

と聞いてきたのである。吾輩はすかさずにやあと返したから、相手も「にゃあにゃあ」といいながら両手を組んで頷いているのである。どうやらちゃんと通じたようである。よくわからぬが。

緑の巫女は自分でしゃべりだしたのである。

「今回のお祭りは成功したようねー。こんな猫さんまでやつてくるなんて……。どうせなら霊夢さんとかも来ればよかったのに」

れいむ? 聞いたことがあるのである……。おお、たしか巫女の名前であるな。吾輩は

いつもみことしか言っておらぬ。

というか忘れていたのである。るーみあのところに行きたいのである。吾輩は上を向いてにやあにやあと鳴いてみるのである。

緑の巫女も不思議そうな顔で上を向いてくれたのである。

「あ、あんなどころに上ってる人がいる。注意した方がいいかしら？ よーし」
ふわっと巫女が浮いたのである。吾輩も連れてってほしいのである！

あおぞらのおえかきするのである

「猫さんも行きたいのですか？　じゃあ、ほら、こっちに来てください」

緑の巫女がそう言つて吾輩を抱えてくれたのである！　わがはいはにやあとお礼を言つておくのである。紳士はお礼をかかさぬ。

きらきらした瞳で吾輩をみてから、にばあと緑の巫女が笑つたのである。うむうむ、笑うことはいいことである。吾輩もうれしいのである。

「そういうえば猫さんはお名前はあるんですか？」

首をかしげて聞いてきたので吾輩も思わず一緒に首を傾げたのである。……名前であるか？　わがはいはわがはいである。

「私は早苗つていいですよ。以後お見知りおきを。よしよし」

さなえであるか！　いい名前であるな、吾輩はとても気に入つたのである。うなうな、吾輩はさなえの腕の中でもぞもぞ動いてみるのである。最近分かつたのであるが、こみゆにけーしょんとは言葉だけではななのである、うれしい時はこう動いて……。

「めっ」

怒られたのである……。ううむ、こみゆにけーしよんは難しいのであるな。

「さーてとそれじゃあ勝手に非想天則の上に乗った不届きな子を退治するとしましよ。猫さんもサポートお願いしますね」

さぼーとであるな！ 得意である。わがはいはちゃんとわかっているのである。さぼーとはあれである……。うむ……。たすけることであろう！

そう思っているとまた、ふわりと空に浮いたのである。もう何度も空を飛んだことはあるから吾輩は驚かぬ。どっしりとかまえているのである。さなえもゆつくりと空に上がっていくのである。

それにしてもロボは大きいのである。空を浮かんでいるのはロボも同じであるが、疲れぬのであろうか。たまには休むのである。

どんどん昇って行って、吾輩とさなえはロボの上で寝転がっている。さなえはそのさなえの近くに降りましたのである。ちょうどぼの頭の上である。さなえはそのさなえの近くに降りましたのである。今回は短い空の上であったのである。

「……」

寝ているのである。

さなえは腕を枕にしてお昼寝である。さつきまで起きていたのに疲れていたのであろう。さなえもさなえのさなえの寝顔を見ているのである。

「なんか、幸せそうに寝ていますね。起こすのはかわいそうな気がしますけど、まあ」
さなえが後ろを振り返ったのである。

おお、風が吾輩をなでなでしてくれるのである。遠くまで見えるのである。お天道様が今日は元氣であるな。なんだか幻想郷がきらきらしているのである。

「確かにお昼寝日和かもしませんねー。よいしょっと」

さなえはるーみあの横に寝転んだのである。ずるいのである。吾輩もそれをするのである。こてんと吾輩も仰向けに寝てみるのである。両足がつかぬ、ぱたぱた動かしてみるのであるがどうにもならぬ。

「くす。これが川の字つてやつですわねー。神奈子様と諏訪子様ともたまにやりますけど、ああ…猫さん。空つて広いですわねー」

そうであるな。吾輩の前には空しかないである。いや、雲がいるのである。どこに行くのであろう。買い物であろうか？ 急いでいるようであるな。

ごろごろ、なかなかいいではないか。横をみたらるーみあがすやすや眠っているのである。吾輩もちよつと眠たくなくなってしまふのである。さなえよ、吾輩が眠たくなつたのである。

にやあ、と伝えたのであるが返事がないのである。

起き上がってみるとさなえが眠っているのである。なんだか幸せそうな顔であるな。

吾輩はなんだか寂しいのである。仕方なくなるーみあの上の中にもぞもぞと入りこんでみるのである。うむ、ここもなかなかよいのである。

「あ……………」

るーみあがなにか言っているのである。

「……………けいね……………ありがと……………」

うむうむ。るーみあもちゃんとお礼が言えるのである。ということはあるーみあも紳士であろうか？ ううむ、難しい問題である。さなえよどう思うであろうか。吾輩はるーみあを踏み越えてさなえに聞いてみたのである。よだれを垂らしているのである。これはダメであるな。それにもこうと違つて乗りにくそうである。

吾輩はさなえのほつぺたをばんちしてみるのである。おきぬ。

ねぼすけさんであるな。吾輩はもう一度ばんちしてみるのである。おきぬ。

ううむ。なんだか楽しくなってきたのである。ぶにぶにとほつぺたを触つてみるのである。するときさなえがゆっくりと目を開けて、むーと吾輩を見てきたのである。

「猫さん？何をしていますか？」

……………吾輩は何もしておらぬ。

「なんでそつぽを向いているんですか？ さつきまで私のほつぺたを触つてたりしてませんでしたか」

……。

「はい」

おお、あごを撫でながらのじんもんは卑怯である。おお、そこである。吾輩はそのばでごろごろさせられてしまったのである。

「ふふふ。ハハハ、ハハハカ」

なかなかいいのである。吾輩は気持ちいいのである。高いところでもつさーじはおつなものであるな。吾輩はさなえの膝の上にのせられてごろごろするのである。うむ？ 突然さなえの手が止まったのである。

「ふふふ」

さなえが吾輩を見ながら笑っているのである。もう少しマツサージしていいのである。吾輩はにやあとと言ってみるのであるが、さなえは動かぬ。

「ちゃんと白状したらもう少ししてあげますよ？ どうしますか」

にやあにやあ。

ううむ。悪かったのである。この通りであるな。吾輩はおわびのしるしとしておなかを見せてごろごろしてみるのである。

「甘えたって駄目です。ちゃんと反省するまでなでなでしてあげますから、ほらほら」

これは反省をせねばならぬ……おお、おお。吾輩はその場でくねくねと体を動か

してみるのである。さなえは吾輩の毛並みに沿つてなでなでしてくれるのである。

「ふぁーあ」

おお、るーみあも起きたのであるか。おはようである。るーみはあ目をごしごししながら、吾輩達におはようの挨拶を……

「なんでいるの？」

ちゃんと挨拶をせねばならぬ！ 吾輩はきりりとした目で抗議したのであるが、るーみあは頭を掻いているのである。さなえよ何か言つてあげるのである。

「おはようございませす！ でもだめですよ、勝手に上つてきちゃ」

「……」

るーみあがさなえをじとりとした目で見ているのである。

「そーなのかー」

それだけ言つてぷいとそっぽを向いているのである。さなえを見上げて、吾輩は相談するためになあお、と言つてみたのである。さなえはうんうんと頷いてくれたのである。よくわからぬが通じたのであろうか。

「まあ、いいですね」

さなえよさつきまで何をうんうん頷いていたのであるか。

「ああ、きもちいー」

さなえはまたコロンと寝転がって、大きく伸びをしているのである。手を空に向けて、指を立てて動かしているのである。

「大空をキャンパスにしてスケッチするっておしゃれですね？ 猫さん」

きやんぱす……すけつち……難しいのであるな。しかしおしゃれと聞けばいいことであろう。

「ほらほら、ねこさんねこさん」

さなえが指を動かしているのである。るーみあと吾輩はその指に合わせて顔を動かすのである。楽しいのである。

「何を書いたの？」

るーみあがきいているのである。吾輩もとても気になるのである。るーみあよ、もう少し詳しく聞くのである。さなえはふふつと吾輩達に笑いかけてこういったのである。

「一緒にお絵かきすればわかるかもしれないよー」

「……」

るーみあはその場にこてんと寝て手を伸ばしたのである。

吾輩も負けてはおれぬ！ 前足を伸ばしてみたのである。

並んで青空に何かを書いてみたのであるが、難しかったのである。

あれはだれであろう！

さなえとるーみあが空に向かって何かを描いているのである。吾輩はそれを目で追うのであるが、何を描いているのであろうか、ううむ。難しいのである。

「あー。なるほど」

るーみあが何か言っているのである。なにが分かったのであろう。しかし、るーみあは吾輩をちらりと見て、にやりと笑っただけである。

気になるではないか！ 吾輩も負けてはおれぬ。二人を真似して寝転がって前足をこう、フリフリして見るのである。むむつ、何か分かった気がするのである。空が綺麗である。

おお、いい天気であくびをしてしまったのである。吾輩は頭を搔いてごまかすのである。ついでに前足を舐めて毛並みのメンテナンスをしておくのである。吾輩はこうりつ良くやるのである。

はむはむ。

ごろごろ。吾輩はなかなかここが気に入ったやもしれぬ。さなえよ。

「……」

横を見るとさなえが吾輩をにこにこしながら見ているのである。なんであろうか、吾輩は気になってむくりと起き上がったのである。

「あれ？ どうしたんですか？」

それはこちらのセリフである。吾輩を見ていたので気になるのである。吾輩はさなえに近づいてにやあと聞いてみたのである。するとさなえは頭をなでなでしてくれたのである。

うむ。まあ、いいのである。

「よしよし。でもそろそろ降りないといけませんね。あなたもですよ」

「はい」

るーみあも起き上がって体を伸ばしてあくびをしているのである。まったく、迷子になったるーみあをみんなで心配していた気がするのである。これはいかぬ。悪いことをしたら反省をするのである。吾輩はるーみあのを舐めてみるのである。

「……!!」

おお、るーみあがのけぞっているのである。まいったか。いや……そんなに睨まれても困るのである。吾輩はただ反省してほしただけである。

さなえも何か言っただけである。うむ？ どうしたのであろうか。手で掲げて空をみているのである。お天道様に手を振っているのであろうか。吾輩は足元に行っ

て聞いてみるのである。

吾輩のなきごえにさなえは振り返ったのである。

「いや、お天道様を掴めるかと思うくらい近くて」

お天道様を掴むのであるか！ それはすごいのである。吾輩もまだやったことはいないのである。いや、でも捕まえるのはかわいそうである。そつとしておいてほうがいいやもしれぬ。

なんといつてもお天道様は吾輩よりもちいさいのに頑張っているのである。屋根の下に入ったらすぐに見えなくなるのであるし、雲よりも小さいのである。それでもがんばりやさんであるな。

吾輩はとても感心しているところである。

それにしても吾輩も光ることができるのであろうか。練習が必要であるな。ちよつと丸くなってみるのである。こうしつぽも体にまきつけるようにすると真ん丸になれるのである。

「ここから、もう下に降りるんですから。寝転がったらだめですよ」

さなえに怒られたのである。

☆

ロボから降りてさなえと別れるとるーみあと一緒になったのである。

目を離すとすぐに迷子になるから吾輩も気が抜けぬ。ちゃんといってくるのである。
「あーおなか減ったわ」

吾輩もちよつとおなか減った気がするのである。むむ、何かいい匂いがするのである。いや、るーみあよ。吾輩よりも先に行くのをやめるのである。吾輩もいい匂いのする方に行くのである。

吾輩達はいいい匂いのする方へ歩いていくのである。周りはお皿など売っているお店が並んでいるのである。吾輩達は並んで歩くのである。

「はふはふ。ん？　なんだ、いたのか」

向こうに居るのはなずーりんであるな。

手に持つてるのは串に刺して焼いたヤマメである！　しやー！

「わっなんだ、いきなり」

いかぬいかぬ。

吾輩としたことが、かりのほんのうを出すところで会った。なずーりんよそれを少し分けてほしいのである。頼むのである。吾輩はさつきお昼寝をしておなががへつているのである。

「はむはむ」

吾輩をちらちら見ながら、おいしそうに食べているのである……むむむ。るーみあよ

何か言つてやるのである。

「それどこでもらつたの?」

「いきなり人聞きが悪いな、買ったんだよ。ほしければ自分で買えばいいだろ」

「それ欲しい」

「いや、買ったらしいだろ」

「お金ないもん」

「もんつて言われても……」

なずーりんはじりじり後ろに下がっているのである。なんであろうか、逃げるえも……なずーりんを追いかけていきたい気がするのである。それにしてもなずーりんはいつも何か食べているのである。

るーみあもじりじりとなずーりに近づいているのである。

「な、なんだ君たち。す、少なくともこれは私が自分のお金で買った正当なものだ。君たちにあげるようなつもりもないから、両手を広げて近づいてくるのをやめてくれ」

るーみあは両手を広げて、じりじりと近づいているのである。後ろは吾輩に任せるのである。吾輩はなずーりんの真後ろに回つたのである。

「なつ、き、君たち。これはカツアゲじゃないか!」

かつあげ? かつあげとは何であろうか。食べたことはないのであるが、けいねがた

まに作る揚げ物の一種であろうか。ヤマメを焼くとカツアゲというのやもしれぬ。

「そーなの？」

るーみあは首をかしげてキョトンとしているのである。吾輩も同じように首をかしげてみるのである。なずーりんははあとため息をついているようであるな。

「それはそうだろう。少なくとも人のものを取るようなことをしていいわけがないだ。さあ、そこをどいてくれ。私はもう帰るつもりなんだ」

「ふーん」

うむ？　なんだかなずーりんとるーみあの周りがまっくらになっていくのである。

「わわっ。な、何をするんだ。こら、やめろ。こんなところで力を使うなっ」

まっくらなところからなずーりんの声が聞こえるのである。

「やめろお、これはちよろまかせたお小遣い……いや、お金で買ったものだ。お前なんかに渡すものか」

「そーなのかー」

おお、何も見えぬ。真っ黒な中で何かが起こっているようであるな。

ふたりとも頑張るのである。吾輩はどっちも応援するのであるぞ。しかし、不思議である。突然るーみあの周りだけ真っ暗になることもあるのであるな。

「ふん、相変わらず地上の者は妙なことをしているな」

うむ？ いつのまにかとなり誰か立っているのである。むむ、なんとなく甘いにおいがするのである。上を見上げると両手を組んで青い髪の少女がいるのである。おお、帽子に桃が生えているのである。

吾輩もほしいのである！ いや、しかし、ここではまずは挨拶をせねばならぬ。吾輩は礼儀ただしくにやあとと言ってみるのである。するとその少女は吾輩をちらりとだけ見て、どこかへ歩いていくのである。

「せつかく霊夢のところへ土産でも持って行ってあげようとおもったのに。どうするか」

何を言ってるのかわからぬが、なんだったのであろうか。

はっ、それよりも、るーみあととなくずーりんとヤマメが心配である。吾輩は黒い周りになやあにやあとと言いなながらぐるぐる回ってみるのである。

すると黒い霧が晴れてきたではないか、中から現れたのは……

「はあはあ、もうこ、こんな人の大勢いるところで暴れるなんて」

けいねである！ おお、両脇になずーりんとるーみあを抱えているのである。重そうであるな。

「あわてて飛び込んだけど。さ、さすがに二人の妖怪相手のするのは疲れたよ。帰ろうか……」

けいねが吾輩に言ってきたのである。吾輩もそろそろ帰って眠るのである。そうであるな、神社で今日は寝るのである。

そらのちかくへきようそうである

「ああ、重いなあ」

けいねよ頑張るのである！ 吾輩はなずーりんをおんぶして歩くけいねを応援しているのである。まわりをぐるぐる回つてにやあにやあと声援を送ればきつと元気が出るのである。

「ふう、ふう。しまったなあ、さすがに頭突きはやりすぎてしまったかもしれないよ」
けいねは汗をかいているのである。なずーりんはずーっと動かぬ。

白目をむいていてこわいのである。ついさつきるーみあと真っ暗なところからけいねが引つ張り出したときにはそうなっていたのである。頭にたんこぶがついておる。ううむ、吾輩がなでなでしてあげたいところであるが。とどかぬ。

吾輩は後ろ足で立って、前足をこう、動かしてみるのであるが、けいねに負ぶさっているなずーりんはちよつとだけ遠いのである。ここは工夫が必要かもしれぬ。

吾輩はじつとけいねを見ながら考えてみるのである。

「ん？ どうしたの？」

けいねに聞かれたのである。吾輩は今考えている途中なのである。とりあえずそう答えておくのである。

「みやあお、と言われてもなあ。くす。もしかしてこの子が心配なの?」

うむうむそうである。吾輩は「いたいのいたいのをしてあげるのである。前にけいねがやっているのを見たのである。……うむ?……いたいのいたい……何かが目りぬやもしれぬ。

そんな深いことを考えている吾輩の後ろをばたばたと通り過ぎたものがあるのである。吾輩はびくつととしてしまったのである。みればるーみあではないか、両手を広げて、頭の上におちやんわんを置いているのである。

「こら、ルーミア。せっかく買ってあげたんだから大切にしろさい」

「はい、はーい」

くるりとるーみあは回りながら、頭の上のお茶碗を両手で持ったのである。スカートが揺れて髪も揺れているのである。吾輩もちよつとやってみてもよいかもしれぬ。こう寝そべってくるりと回ってみるのである。

「なにぐるぐるしているの?」

るーみあよ、吾輩はぐるぐるしていいのではない。おぬしの真似をしたのである!しかし、まあうまくいかぬのである。もうすこしぐるぐるして見るのである。

るーみあが吾輩のお腹をなでなでしてきたのである。ううむ、吾輩はごろごろできぬのである。抗議せねばならぬ。るーみあの指を前足で挟んで、なめてみるのである。

「……」

るーみあよ、にぱーと笑つてもいいのであるが吾輩はごろごろ……いやクルリとしたのである。

「おーい、置いていくぞ」

けいねも呼んでいるのである。るーみあと吾輩は起き上がろうとしたのである。

「えい」

るーみあにおされて吾輩はまたころんとしてしまったのである。にやあ、吾輩は抗議するのである。……吾輩はこんどこそ起き上がろうとするのである。

「えい」

ころん。

むむむ、起き上がれぬ。起き上がろうとするるーみあが吾輩のおなかを「えい」としてくるのである。これは難しいのである。起き上がるにも工夫がいるやもしれぬ。ううむ、吾輩は口元をとりあえず舐めて考えてみるのである。

るーみあよ、そう両手を構えるではない。どうすればいいのであろうか、吾輩はとも考えるのである。そういえば、昔こんな話をけいねから聞いたことがあるのである。

きたかぜとお天道様が旅人の服を脱がせた……いやいや、それは違うのである。その話ではないのである。なんであつたであらうか……。

「おーい」

「はーい」

待つのである、るーみあよ。

吾輩はちゃんと思ひ出すのである。それなのに行かれると寂しいのである。吾輩はあわてて立ち上がつて、るーみあの後を追いかけるのである。たったか走つて、るーみあと一緒にけいねのところへ来たのである。

さつきよりもけいねが疲れた顔をしているのである。吾輩は心配してにやあと聞いてみるのである。

「なに?」

るーみあに話しかけてはいないのである。吾輩はうな言つてみるのである。

「なにか文句があるの?」

文句はないのである。しかし、吾輩はけいねが心配なのである。なずーりんは重たいやもしれぬ。少しだいえつとした方がいいのである。吾輩はちゃんとわかつているのである。なずーりんは食いしん坊さんである。

前にけいねも言つていたのである。あんまり食べるといけないのである。吾輩は

ちゃんとかわかつているのである。

「そうだルーミア、神社に行こう。ここから近いから休ませてもらうか」

びくつ。いきなりであるな。吾輩は驚いたのである。しかし賛成である。吾輩も巫女には会いたいのである。

☆

「あ、ああ。わ、忘れてた」

さあ、けいねよこの石段を登り切れれば神社である。吾輩についてくるのである。

るーみあもなんでもにやにやしているのであろうか。よくわからぬがけいねよ頑張るのである。

ひよいひよいと吾輩は昇るのである。後ろを振り向くと、だんだんと高くなっていく階段が吾輩は好きである。ちよつとずつ空が近くなっていくのである。

けいねはなずーりんをおぶって頑張っているのである。吾輩は心から応援するのである！ なにか手伝うことがあれば言ってほしいのである。

「ま、待ってくれ」

うむ。待つのである。吾輩は待つことには定評があるのである。石段に寝そべるとなかなかひんやりしてて気持ちがいいのである。たまにあつあつなときがあるから気を付けねばならぬ。

「ひいひい」

けいねよ頑張るのである。神社はすぐそこである。きつとおいしいものを用意して巫女がまつて……くれぬであろうな。るーみあよ、ちよつと手伝つてあげるのである。吾輩も手伝つてあげたいのであるが、手が届かぬ。

「飛べばいいのに」

「こ、こんなところで飛ぶわけにはいかないだろう……？」

「どうせ巫女くらいしかいないわよ」

「いや、たまにだけど参拝客もいるんだ……。人里で寺子屋をやっているからには下手なことはしたくない」

何を話しているかわからぬが、吾輩はちゃんと覚えたのである。わからないことはあとでよく考えたらわかることもあるのである。またたびの良くなる場所もよく考えたらわかったこともあるのである。

「も、もう少しだから」

石段を頑張つてけいねが昇るのである。うむ？ 今ちらりと背中のみならずーりんが目があったのである。もしや、なずーりんは起きているのではないであろうか？

吾輩は前に回つてみるのである。なずーりんは目をつぶっているのである！ さつきまで白目をむいていたのである！ 吾輩の眼はごまかせぬ。

にやあにやあ！ そやつ起きているのである！

「にやあにやあ」

いや、るーみあよ吾輩の真似をしなくてもいいのである。それよりもたぶんなずーりんは起きているのである。そこに気が付いてほしいのである。るーみあは吾輩をじーと見てから、ニヤツとしたのである。

「競争ね」

たつたつとるーみあが石段を上がっていくではないか！ 競争である！ 吾輩は負けぬのである。吾輩も負けずに石段を上るのである。

よじよじ。よじよじ。たまに背の高い石段があるのである。るーみあは両手にお茶碗のつつみを持っていてから追いつけるやもしれぬ。吾輩は頑張ってるーみあに追いついたのである。

「おお」

るーみあが驚いているのである。負けないのである。

おおつ。るーみあが石段を二段飛ばしで上がって行くのである、卑怯である！ あ、足を引っかけたこけそうになっているのである。吾輩はその横をすいすい抜けていくのである！

るーみあも追いかけてくるのである。最後の段である！

「とうちやく！」

到着である。

「帰れ」

……箒を構えた巫女が迎えてくれたのである。

しょうじのまえのもんばんである

久しぶりであるな巫女よ。吾輩は会えてうれしいのである。

「ああ？ 何か言いたいことでもあるの？」

巫女が腰をまげて顔を近づけてきたのである。なんだか不機嫌であるな。いかぬのである。怒っているのはダメなのである。

吾輩はそう思って巫女に「やあにやあ」と言ってみるのである。吾輩は地底にいつてこみゆにけーしよんを学んだのであるから、きっと巫女にも通じるのである。

「ご飯ならないわよ」

そうであるか……いや、そうではないのである。吾輩は食べ物をおねだつたのではない。

「あーあついで」

るーみあが首元を緩めて手でぱたぱたしているのである。巫女はるーみあをにらみつけているのである。

「なんであんたはいるのよ」

「さあ？」

「さあ？つてここは妖怪の来るところじゃないわよ」

「いまやらー」

るーみあは両手を広げて、くるくると回つてみているのである。なんだか楽しそうであるな。吾輩もその場でクルクルして見るのである。るーみあが巫女の周りをくるくる走っているのである。吾輩もやってみるのである。

「……い」

巫女も肩を震わせているのである。吾輩達のいきのあつたくくるくるに感動しているのかもしれない。るーみあも吾輩をみてにやっとしているのである。

「い、いい加減にしなさい!!」

ビックリしたのである。吾輩はその場ですってんころりん、としてから丸くなったのである。巫女を見ると顔が赤くなっているのである。

「今日は妙な奴もくるし……あんたたちにかかわっている時間はないのよ」

「ぜーえぜー」

おお。けいねである。死にそうなかおである……吾輩は心配である。

「や、やつと着いた……。あ、あれ。霊夢、な、なにかあつたの？」

「いや、むしろそれはこつちのセリフなんだけど……あんたはなんで死にそんな顔をして昇ってきたのよ。……なんでそいつ担いでるの？」

「え？ ああ、うん」

足がふるふるしているのである。なんだかおもしろいのである。……いや心配である。そういえばさつき吾輩はなずーりんのことで伝えたいことがあったような気がするのであるが、るーみあとのかけっこで忘れてしまったのである。不覚である。

「どっいしょ」

おお、そんなことを想っているとするーみあが吾輩の両脇をもって抱き上げてくれたのである。なにか用であろうか。

「よしよし」

るーみあによしよしされたのである！ いや、別に驚くほどのことではないかもしれぬが、うれしいのである。耳のところを撫でると喜ぶかもしれぬ、吾輩が。

「そ、それで何しに来たのよ」

巫女とけいねが話をしているのである。

「実は近くで陶器市があつてこの子を」

けいねがなずーりんをゆさゆさしているのである。

「頭突きで気絶させてしまったんだ」

「なんで？……お茶碗を取り合いでもした？」

「いや、ヤマメを取り合いしてた」

「なんで陶器市で魚めぐって頭突きするのよ……?」

「いや、これには深いわけがあつてだな。それよりも霊夢。少し休ませてくれないか」

「……はあ、少しだけだからね」

巫女がはああと大きなため息をついているのである。

*

「ごろごろー」

「ごろごろー」

「ごろごろー」

るーみあと吾輩は畳の上でゴロゴロを満喫しているのである。吾輩はまけぬ。吾輩はくつろぐことにかけては幻想郷一番やもしれぬ。いつかはみんなで畳の上でごろごろ勝負をしてもよいやもしれぬ。

うーむ。こがさやふとも強敵やもしれぬが、意外ともみじも強いやもしれぬ。

「すーすー」

なずーりんも寝ているのである。ほつぺたがもちもちであるな。吾輩はちよつと肉球で触つてみようとしたら、るーみあが吾輩を引っ張つたのである。

「わしゃわしゃ」

おなかを触るのは卑怯であろう。おおお、おお。るーみあはすぐに吾輩を離して、四

つん這いでるーみあがなずーりんの寝顔をうかがっているのである。

「っー」

楽しそうな顔で吾輩をふりむいて、口の前で人差し指を立てているのである。吾輩は知っているのである。静かにするということであるな。るーみあはなずーりんの耳を引つ張っているのである。

「っら、君」

なずーりんが起きたのである。むっくりと起き上がって、吾輩達をじつと見ているのである。るーみあは気にせず耳をフニフニしているのである。

「や、やめないか、起き上がったら普通やめるだろうー」

なずーりんがていこーしているのであるが、るーみあはにやにやしなから耳を動かしているのである。

「く、くすぐりたい、やめ、やめるんだ」

おお、るーみあになずーりんが反撃しているのである。なかなか見ごたえのある戦いであるな。だきついて、ごろごろしているのである。楽しそうであるな。

にやあにやあ

吾輩も混ぜるのである。ふたりだけで楽しむのはダメなのである。なずーりんもるーみあほつぱたを引つ張っていないでこつちを見るのである。

ふりふりとなずーりんの尻尾が動いているのである。パンチしてみるのである。なかなか楽しいのである。はむ、噛んでみるのである。

「はう」

びくっ

なずーりんが妙な声をあげて転げまわっているのである。尻尾を抱いて、吾輩を睨んでいるのである。

「し、尻尾を噛むんじゃない！」

も、申し訳ないのである。そこまで反応されるとは思わなかったのである。

うむ？ どたどたと音が聞こえるのである。誰か近づいてきたのである。吾輩はるーみあの足元に隠れてみるのである。座敷の障子に影が映ったのである。頭には角があるのである！ ……なんか見たことがあるのである。

ばあーんとふすまが開いたのである。

「こんにちはー。つめたーい麦茶が入りましたよー」

こまの である！

手にお盆を持っているのであるな。いくつかの茶碗に麦茶が入っているのである。

「誰だ君は」

「誰？」

「やだなあー。高麗野あうんですよー。霊夢さんを手伝っているんです。それよりさあさあ、麦茶をどうぞで」

吾輩も、吾輩も。

「ふっふっふ。ちゃんと猫さんの分も用意してますよ。水で割った麦茶ですよー」

吾輩の前にお茶碗が置かれたのである。吾輩は、ぴちやぴちや舌でそれを飲むのである。るーみあとなずーりんも何か言いながら飲んでるのである。

おいしいのである。麦茶を飲んだのは初めてである。こまのは吾輩の前に座って「おいしいですかー」と言っているのである。吾輩は、みやあと言っておくのである。

「猫さんとは毛づくろい友達ですからねー」

毛づくろい友達であるか、ふともそうなのかもしれない。吾輩も毛並みのめんでなんすをかかさぬからこんどこまのものもしてあげるのである。

そういえばけいねと巫女はどこに行ったのであろうか。吾輩は起き上がってこまの開けたふすまからとことこ歩いていこうとしたのである。

「ダメですよー」

こまのが吾輩の前に立ちふさがったのである。

「今日はほかにお客がきているんです。しばらくの間皆さんをここから出しません。霊夢さん曰く『あつたらめんどくさいことになる』だそうですー！」

とことこことこ、こまのの脇を通って吾輩は外に出ようとしたのである。
「あーだめですって」

おお、捕まったのである。るーみあとなずーりんよ気を付けるのである。こまのまなかなかやるのである。

「ふっふっ。このねこさんが大切なら、おとなしくしててください」

すまぬ人質になってしまったのである。

なずーりんがばんばんとお尻を叩きながら立ち上がったのである。

「猫質というやつか、私はもう帰るだけでいいんだ。そこをどいてもらおうか」

なずーりんがキリつとした顔で言った後、後ろからるーみあが膝カックンしたのだ。

みんなでけづくろいである!

「な、なんでこのタイミングでこんなことをするんだ! まったく君たちの思考回路は全くわからないよ!!」

お膝をカツクンされてなずーりんが怒っているのである。るーみあはそっぽを向いているのである。なずーりんよ怒ってはいかぬ。吾輩を見るのである。こまのもそう思うであろう。

にここにこ

なんだかわからぬがこまのはにここにこしているのである。吾輩はどうすればいいのかわからぬ。とりあえず、毛並みを舐めてみるのである。紳士には毛並みのけあが一番大事なのである。

「おつ、毛づくろいですねー」

そうである。こまのは吾輩を畳の上に下ろしてくれたのである。これで集中して毛並みをめんでなんすできるのである。ペろペろ、ううむ。今日は調子が良いやもしれぬ。

「ほうほう、やりますねー」

照れるのである。みればまた、るーみあとなずーりんがつかみ合いになっているのである。たまには仲良くすればいいのである。こまのもそう思うのである。こまのはあぐらをかいて、両手を組んでむっとしているのである。

「すとおーつぷ」

!! ビックリしたのである。吾輩はいきなり叫んだこまのを見たのである。

るーみあとなずーりんも一緒のようであるな。こまのはぶんぶんほっぺたを大きく膨らませて言うのである。

「喧嘩をするのはいいですけど。ほこりがたっちゃいます。それにお客様にもきこえちゃったらだめなので、静かにしましょう」

そうである、静かにするのである。吾輩は紳士であるからちゃんとわかっているのである。

「この猫さんみたいに毛づくろいするくらい余裕を持ってください。そうですっ。じゃあみんなで毛づくろい……いやいや、へあーぶらっしんぐをしましょう!」

なずーりんが一步前に出たのである。

「君は何を言っているんだ? とにかく私はもう狸寝入りにも疲れたし、買った茶碗をもつて帰るだけなんだ」

「まあーまあ。そんなこと言わずに、すわってください」

「わつ、君。何をするんだ」

こまのが無理やりなずーりんを座らせているのである。それからこまのはどたどたどこかに走り去って、すぐに戻ってきたのである。右手に袋。左わきに座布団を何枚か挟んでいるのである。

「さあさあ、皆さん座ってください」

おお、吾輩にも座布団が出たのである。るーみあもスカートを押さえながら、正座したのである。なんであろうか、るーみあが何か興味を持っているように見えるのである。なずーりんはあれであるな、不機嫌そうであるな。

「このまえ猫さんがあの、布都さんにブラッシングされているところを見てから、私も買ってみたんですよ」

袋の中からこまのがババーンと天井に向けてとりだしたのである。

「ぶらっしんぐぶらっしー」

「おおー」

るーみあが拍手しているのである。吾輩も何かした方がいいのであろうか、とりあえず尻尾を振ってみるのだ。

「ふふん。それじゃあ、やりましょうね。ナズーリンさん」

「な、なんで君が私の名前を知っているんだ」

「そりゃあ、いつも見てましたから」

「み、見ていた？ 君は、いったい……？ あっ」

なずーりんの髪にそうようにこまのがブラシを動かすのである。するとなずーりんが黙ったのである。

さっさっさっ。

「ん……」

なずーりんが何か言っているのである。こまのはにこにこことブラシを動かしているのである。

「練習しましたからねー。最近では霊夢さんも期待した目で見てくれますよ」

「……ふん」

「つやつやですねー。おなか一杯いつもたべていませんか？ 一輪さんもそうですけど、最近買い食いが多くなりますよ」

「……な、君がなんでそんなことを」

「見てましたから！」

「……すーかーってやつかい？」

「ひ、ひどこ」

さっさつ、話をしながらこまのものなずーりんの髪をとかしているのである。吾輩もやってほしいのであるがここは我慢である。吾輩はとりあえず自分の毛並みを舐めてメンテナンスするのである。

うむ？　るーみあが自分の前髪をつまんでちらちらとこまのを見ているのであるな。こまののブラシが動くたびになずーりんの髪がさらーと動くのである。なんだか見ていと楽しいやもしれぬ。

「はい！　おしまいです。じゃあ次は」

「はーい」

るーみあが手をあげているのである。こまのはうーんと言いながら「ねこさんとどっちがいいですかね」と言っているのである。

るーみあよ吾輩を睨むのをやめるのである。吾輩は心が広いのであるからして、ここは譲ってあげるのである。

「じゃあ、とりあえずルーミアさんをブラッシングするので、ナズーリンさんは猫さんかなでなでしてあげてください」

「なっ、なんで私が」

「おねがいしますよー。今度、お寺に行った時にもぶらっしんぐしますからー」

「……はあ。そんなのが交渉材料になるわけないだろ。まったく、仕方ないな」

なずーりんが吾輩見たので、吾輩はなずーりんのひげ元につて丸くなったのである。

「これは、仕方なくやっているんだからな。わかつているな」

何か言っているのである。

なでなで

なずーりんもなかなかいいのである。るーみあもこまのにぶらっしんぐをさせているのである。

「このリボン外していいですかー」

「はずれないわよ」

「ほんとだ、これどうなっているんですか？」

「しらなーい」

「知らないって、ふふ」

吾輩しているのである、こういうのをがーるすとーくというのである。吾輩はものシリオなのである。なずーりんよ吾輩と何かしゃべるのである。なでなでもうまいのであるが、おしゃべりもやぶさかではない。

「……全くなんで私がこんなことを」

うつすら笑いながら何か言っているのであるが、吾輩にはよくわからぬ。まあいいの

である。吾輩はなかなかお膝の上でも居心地がいいのである。吾輩の背中をなずーりんの手がすーりとなでると、気持ちがいいのである。

みんなが集まって毛づくろいするのもいいものであるな。吾輩は気に行ったのである。るーみあもニコニコしているのである。

「ちよつと待つてください」

いくらでも待つのである。なんであろうか、こまのをほうをみたのである。

「私もぶらっしんぐしてほしいです! 誰かお願いします!」

吾輩が立ち上がった。やぶさかではないのである。

「え、えつと。大声を出して驚いちゃいましたか?」

何を驚いているのであろうか、こまのよ吾輩がぶらっしんぐをしてあげるのである。

そのブラシを吾輩に渡してみるのである。

「い、いやあ、猫さんでは厳しいと思うのですが。むしろ私がしてあげますよ。あれ?」

もしかして猫さん言葉がわか……」

おお、こみゆにけーしよんができるやもしれぬそうぞうで

「あああああ!!! あのと二人がいつの間にかいなくなってる」

ほんとである、るーみあもなずーりんもいつのまにかいないのである。

「ぐぬぬ。私がちよつと目を離れたすきに部屋から出て行ったんですね。ううー。霊夢

さんから怒られるかもしれないわ……勝手に出ていくなんて。ごくあくひどー」

こまのよ気にするではない。あの二人も大人であるからして、迷子に……：そういうえばさつきなつていたのであるな。まあ大丈夫である。

それはそうと吾輩も巫女とけいねに会いに行くのである。そう思つて開かれたふすまから廊下に出たのである。

『猫さんはここにいて、あれ？　ねこきーん。え、えー』

部屋の中から何か聞こえてくるのである。

吾輩はたつたかと廊下を走るのである。神社を自由に走るのは初めてである。

「つ、捕まえますから」

おお、後ろからこまのが追つてきたのである！　おいかけっこであるな！

じんじやでおいかけっこである！

とつとつと。

廊下を走ると音が鳴って吾輩は好きなのである。

きゅー。

おお、止まろうとするとすべるすべる。しかし、吾輩はそこはちゃんとしているのである。こう体重をかけると止まることができるのである。

「まってー」

こまのが追いかけてきたのである！ 吾輩は捕まるわけにはいかないのである。捕まったら追いかけてっこが終わってしまうのではないか。ということとで吾輩は縁側からジャンプするのである。ふさあと雑草を踏んで着地するのである。

「あつ、外に」

こまのが靴を履いているのである。吾輩はちゃんと待つのである。吾輩は紳士であるからして、焦ったりはしないのである。おお。履き終わったのであるな。逃げるのである。

うむ？ 追いかけてこないのである。後ろを振り返ると、両手を組んでこまのが仁王

立ちをしているのではないか、吾輩は遠くから何をしているか観察してみるのである。

こまのは吾輩の方をむいてポケットから何かをとりだしたのである。手のひらに何か載せて吾輩に見せているのである。

「猫さん。ほーらおいしい煮干しですよ」

あやしい……。

あやしいのである。吾輩はこのしゅほーに一度引つかかったことがあるのである。なずーりんと同じことをせぬとも限らぬ。吾輩は一度されるとちゃんと覚えているのである。

「ほらほらー。私がたべちゃいますよー」

こまのが膝を曲げて手のひらを地面に近づけてきたのである。吾輩は一步前に出たのである。……！　なんで一步前に出たのであろうか、煮干しをおもうとうむ、よだれがでるのである。舌で口元を拭いてみるのである。

うろろうろ。

近づこうかどうか迷うのである。こまのが嘘をつくとは思えぬが……裏でなずーりんがいるかもしれぬ、ううむ。なずーりんは悪い子である。今度「めっ」としてあげねばならぬ。

吾輩とこまのはそういう風ににらみ合いがつづいたのである。しかし、吾輩はもう迷

わぬ。しゆたつと駆け寄つたのである。

「やった。さあ、おいしいですよー」

吾輩は素早くこまのの掌に載つた煮干しをハムハムするのである。偽物やもしれぬがおいしいのである。

「それ、あれっ」

こまのが吾輩を掴もうとしたのですぐに逃げるのである。はむはむ。偽物にしてはおいしいのである。こまのの股の下を通つて後ろに行くのだ。さらに軒下に潜り込むのである!

ふう、一安心であるな。吾輩は満足である。

「こ、こころーまてえ」

おお、こまのがよつんばいで軒下に潜り込んできたのである。しかし四本足で走るのは吾輩の方が上ある!

「あいたあ」

うむ? こまのが頭……いやとがった角を天井にあてて痛がつているのである。

「いた〜」

さすりさすりしているのであるな、吾輩はいてもたつてもおれぬ。こまのに近づいてにやあ、と聞いてみたのである。

「あ、心配してくれている？ いい子だなあ。……それ」

捕まりそうになったので吾輩はすばやく動いたのである。ごちん、とまたこまのは頭を打ちついているのである。

「~~~~~！」

スキをついて吾輩を捕まえる気であつたな……吾輩はまだ捕まるわけにはいかないのである。楽しい……いや、これは捕まつたら負けな気がするのである。こまのは涙を浮かべながら吾輩を追いかけてきたのである。

吾輩はたつたか逃げるのである。

しばらく軒下であそ……逃げ回ってからしゆたつと外に出たのである。おお、お天道様も綺麗であるな。暗いところからでてくるとまぶしいのはなんでであろうか、吾輩は後ろ足でくしくしと首元をかきながら考えたのである。

「……はあ、はあ」

軒下からこまのの出てきたのである。なんだからお洋服が汚れているのである。

「ううー。いい加減に捕まってください」

迷うところであるな。

しかし、吾輩は走り出したのである。こまのも後ろから走ってきているようである。いつの間にかはだしであるな。床下に隠してきたのであろうか？ 吾輩もきらきらす

るものがあれば大切に隠すことはよくあるのである。

「おお、お賽銭箱である。吾輩はひよいと飛び乗ってみるのである。ここにいと巫女から怒られるのであるが、なぜか上りたくなってしまうのである。」

「はあ、はあ。追い詰めましたよ。ほら、怖くありませんから、こつちに来てください」息を切らしながらこまの賽銭箱の前にきたのであるな。

こまのが両手を広げて吾輩をまねているのである。吾輩はなんとなくあくびをしてみ、ゆつくりと考えてみるのである。じいーとこまのを見てみるのである。

「う、そんなつづらな瞳で見られても困ります」

照れるのである。しかし、こまのはそーつと吾輩に手を伸ばしてきたのである。手のひらには煮干しが載っているのである。くんくん。これは本物である。吾輩にはわかるのである。さつき食べたものも本物やもしれぬ。

「おとなしくしてー」

はむはむ。ペロペロ。

「あ。あは。手がくすぐったいですよ」

あうんの手は煮干し味であるな、ペロペロ。

「はう」

なんだか今日はいっぱいおいしいものが食べられた気がするのである。あうんよ？

うむ？ 「こまの」より「あうん」の方が言いやすいやもしれぬ。吾輩はにやあと呼んでみるのである。

「にやーおっ？」

小首をかしげながらそれでもにっこりとあうんが笑ったのである。気に入ったのである。それはそうと吾輩はあうんの手に「乗って」見るのである。

「わ、わわわ」

そのまま手を駆けのぼって、肩を通るのである。

「え、えええ？」

もみじとやったことがあるのである。またうまくできたのである、吾輩は後ろ足で肩を蹴って地面に降りたのである。むむ……うまくできてうれしいのである。

吾輩は絶対につかまらぬ。

振り向くとほつぺたを膨らませたあうんがいたのである。

「も、もうーゆるさないわっ」

足を鳴らして両手をあげたあうんが叫んだのである。まだ、遊ぶのである！ 吾輩は立ったか走り出したのである。おお、あうんがさつきよりもかなり早いスピードで追ってくるのである。吾輩も負けてはおれぬ。

とりあえず神社の裏手に回るのである。このあたりの塀をよじよじのぼると、神社の

屋根の上に行けるのである。吾輩はものしりである。あうんもよじよじ昇っているのであるな。

吾輩は瓦をとてとて歩くのである。ううむ、……これは。

あうんも瓦に裸足で登ってきたのである。吾輩とあうんは屋根の上で対峙したのである。

「ふ、ふふふ……あつっーい！」

あうんがあんよをふーふーしているのである。瓦はお天道様があつたためているからダメである。吾輩も降参である、おしりをつけてあんよをふーふーしているあうんの懐に飛び込んだのである。

あうんが目をぱちくりさせているのである。そこで吾輩は事情を説明してみたのである。

にやあにやあ

あうんに吾輩の言葉は通じたのかわからぬが、

「……やつとつかまえましたー」

ぎゅーと抱きしめられたのである。悪くはない気がするのである。しかし、ちよつと息苦しいのである。ごろごろ喉を鳴らして抗議してみたのであるが、あうんは吾輩を離さぬ。すりすりと吾輩の背中に顔押し付けいるのである。

「こらあああー！」

びくっ！

「れ、霊夢さん！」

吾輩とあうんは一緒にびくりしたのである。下を見ると巫女が両手を組んでぶんぶんしているのである。その横に帽子をかぶった青い髪の少女がいるのである、はて見たことがある気がするのである。

「あんたら、神聖な社殿の屋根で何をしているの？ 早く降りなさい！」

「は、はいいー」

あうんは吾輩をもったまま。飛び降りたのである。

だっこされるのもむずかしいものである

吾輩とあうんは並んで座ったのである。あうんは下を向いて正座しているのである。背筋がぴんとしてなかなか姿勢がいいのである。吾輩はちよつと疲れたのでくつろぐのである。

ドンっ

吾輩達の目の前で巫女が足を踏み鳴らしたのである。吾輩はちよつとびくつとしてしまったのである。あうんもびくつとしていたのである。おそろいやもしれぬ。

「あんたたちはいったい何をしているのよ」

巫女が怒っているのである。うむ？ 巫女の後ろで青い髪の少女がそつぽを向いているのである。

吾輩とあうんは巫女に座るように言われたからここにしているのである。何を怒っているのだろうか、あまりあうんを責めるのではないのである。あうんも反省しているのである。

「ううー。でも猫さんが逃げるのを一生懸命おいかけたんですよ、霊夢さん」
とても楽しかったのである。

吾輩はまたやりたいのである。あうんに近寄つて頭をすりすりとかすりつけてみるのである。

吾輩は思つたのであるが、こみゆにけーしよんは言葉以外でも意外といけるやもしれぬ。

「はあ、なんかあんたなつかれてるわね。まあ、こいつは誰にでもなつくけどね」

巫女よ、吾輩はなついたりはせぬ。ただ、ちよつと遊んであげるにもやぶさかではないのである。巫女にそう抗議しようと近づいていったのである。

「あれ、リボン」

おお、そうである。吾輩は地底にいったときにさとりからリボンをもらつてつけているのである。どうであろうか、吾輩は胸を張つてみたのである。

おお、おお。巫女が吾輩をなでなでしてくれたのである。なんだか珍しいのである。うおううおう。なんだかうれしいのである。そこである、おお、巫女がなでなでしてくれることはたまにしかないので吾輩はうれしいのである。二度もうれいと言つてしまったではないか。

「あ、思わず。……こいつ」

「そんなことよりも」

後ろにいた青い髪の少女がしゃべつたのである！ 長い髪がきらきらしていて、か

ぶっている帽子に果物がついているのであるな。すごいのである、すかーとが七色に光っているのである。すかーともがんばり屋さんなのであるな。

「天子……」

てんしであるな覚えたのである。しかしである……

「そんな猫なんてほおっておいて、さっきの話の続きをするわよ」

ふふんとてんしは両手を組んで鼻を鳴らしているのである。巫女がてんしをみているのである。吾輩はこう、思うところがあるのである。

「地上の奴らの度肝を抜くくらいの宴会を開いてやるわ。霊夢もちろん呼んであげる」

「はあ、そう……ん？」

吾輩は負けぬ、巫女の手を舐めてこつちを向いてもらうのである。おお、巫女よこつちをみるのである。てんしよ、珍しい巫女のかなでなでを邪魔されては困るのである。

ころん。にやあにやあ。

おお、おなかをさすつてくれるのである。てくにしゃんであるな。あうんがそおと頭を下げているのである。わかるのである。なでなでしてほしいのであな。しかし、吾輩はここは譲らぬ。あまりないのである。

「霊夢？ 聞いてるの？」

にやあにやあ！ 巫女よ、吾輩と遊ぶのである。てんしにはまけぬ。吾輩は巫女の指を前足でつかんで舐めるのである。

「くすぐりたい……、てん」

巫女が天子に話しかけようとしたときあうんがじりじりと近づいて巫女の前でころんと寝転がったのである。

「あ、霊夢さん。私もなでなでしてもらってやぶさかではないですよ。いえ、むしろ、いいですよ」

「いいって何がよ」

「霊夢！ 宴会のこと」

にやあにやあ

「霊夢さん！ はやくはやく」

てんしと吾輩とあうんが同時に巫女に言うのである。巫女は立ち上がったのである。

「う、うるさい！ 何なのよあんたたち！」

怒られたのである。いや、吾輩はただなでなでが嬉しかっただけである。

「だって、霊夢さんが猫さんだけ撫でて……」

「あーもうほら」

巫女があうんをなでなでしているのである。あうんは「うん、うん」と言いながら頷

いているのである。吾輩ももう少しなでなでしても構わないのである。巫女よ開いた右手を使っても構わぬ。

みゃー。と鳴いてみると巫女は吾輩をちらりと見たのである。

「はあ、なんなのよ」

！ 顎の下をこちよこちよであるか、吾輩は……吾輩は……好きである……。うらむ。吾輩とあうんは一緒にこちよこちよとなでなでをされて満足である。

「……………っ」

はっ、てんしが吾輩を睨んでいるのである。こちよこちよしてほしいのである……巫女よてんしもこちよこちよしてあげるのである。またはなでなでもいいのである。てんしもきつと巫女のこと好きなのであるな。吾輩にはよくわかつているのである。

「ふんっ」

てんしが踵を返してどこかに行こうとしているのである。吾輩は巫女の手を振り払って、てんしの前に出たのである。

「なによ」

両手を組んでてんしは吾輩を見下ろしているのである。なかなか迫力があると思うのである。しかし、吾輩も負けてはおれぬ。後ろ足で立ち上がってみるのである。

いかぬのである、巫女もいやつなのであるから、ちゃんとおねだりせねばいかぬ。正直になでなでしてほしいといつても恥ずかしいことはないのである。

「? おまえ」

うむ! なんであろうか。

「もしかして私を……慕っているのか」

……ふどのようなことを言い出したのである。しかし、吾輩はもうなれっこである。はんろんはせぬ。

「きつとだっこしてほしいんですよ」

ぬつとあうんが顔を出してきたのである。てんしは「あんたは誰だっけ」と言っているのである。あうんは、

「やだなあ、高麗野あうんですよ。比那名居天子さん」

「……どこかであつたかしら」

「ずつとみてましたから! それに今日は霊夢さんのお話を邪魔されないように頑張ったんですよ……まあ、ちよつと失敗しちゃいましたけど」

にこにことあうんが笑っているのである。巫女はなんだか呆れている顔である。それにしても吾輩はそろそろこの姿勢がきつくなってきたのである。どうにかしてほしいのである。

「ほら、だっこだっこ」

あうんがてんしの後ろをいたり来たりしているのである。てんしは「はあ？」と
いつているのであるが、吾輩はきついのである。巫女よなんとか言言ってやるのである。

「天子、とりあえず抱っこしてあげれば」

「……し、しかたないな、ん」

てんしが吾輩に手を差し伸べてきたのである。片手だけである。

……どうすればいいのであろうか。吾輩は片手だけ差し出されてもどうしようもないのである。上るには前足が届かぬ。

「天子……。たぶんそれじゃ無理じゃない？」

「そうですよ。比那名居さん、こうっ両手で」

あうんも巫女もちゃんと言ってやるのである。てんしよそんなやり方では吾輩は抱っこできぬ！ ううむ、そんな気合を入れて言うことでもなかったやもしれぬ。

「……………」

てんしが吾輩の前足を持ったのである。これはだんすようであるな、しかし、天子がしゃがんだのである。吾輩はシュツと足をおろして、てんしの膝を土台に胸元まで上つたのである。

「おっおお……」

顔が近いのである。吾輩はてんしの肩に前足をのせてにやあと鳴いてみたのである。するとてんしふんぞり返ったのである。

「動物に慕われてしまうとは、これも天人としての徳かな」

ほつぺたがなんだか赤いのであるが、なんであろうか、吾輩はちよつといたずらをしたくなつたのである。しっぽをてんしのまえでふりふりしてみるのである。

「……へっくち」

てんしがくしやみをしたのである。

おはなしにみみをかたむけるのである

吾輩は縁側の下に潜り込むがすきなのである。

日陰になっていいるからちようど涼しい。そういえば前に雨の降ったとき「ふと」と会ったのも軒下であった。今元気にしているのであろうか……いやいやたぶん元気である。見なくても分かるのである。

「それで霊夢。今度の宴会には協力をさせてあげるわ」

てんしと巫女が座って話をしているのである。吾輩は軒下から聞いているから、ぶらぶらと動くてんしの足しかわからぬ。うむむ、ちよつとばんちしてみたくなってしまうのである。さつきまで履いていた靴は脱いでいるのであるな……あまり見ないながーい靴である。

「……別に宴会をするのは構わないけど、いつやるきなの。酒が飲めるとすればどうせすぐあつまるだろうけど……へんなのだからさないかぎり……」

声が聞こえてくるのである。しかし、最後の方はよく聞こえなかつたのである。

「明後日くらいね」

「はやっ！ あ、でもそれは無理よ。たしか紅魔館でばーていーをやるってレミリアが

言っていたわ」

「レミリア？ 誰？ そんなのどうでもいいわ。紅魔館つてあれね、あの湖のほとりにあるあばら家の」

「あ、あばら家？ そ、それならわたしの神社……ごほん。とにかくよ、天子。先に招待状ももらっちゃったし。たぶんあいつのことだからたつぷり酒も用意しているはずよ」
とてとて足音が聞こえるのである。

「霊夢さん！ お茶を用意しました。あれ？ よだれがでてますよー。はいふきふきしますね」

「……………つ。あうん。や、やめなさい！」

「さっきまで幸せそうな顔をしてましたし、たぶんおいしいもののこととか考えていたんじゃないですか？」

「……………そ、そんなわけじゃないじゃない！ そんな顔してないもん！」

おいしいものであるか！ 吾輩は立ち上がった。しかし、吾輩の目の前で縁側からぶらぶら動いていた、天子の足が地面を踏みしめてたちがあつたのである。

「霊夢！ そんなのどうでもいいじゃない。私が地上の奴らにはとーてー味わえない珍味を食べさせてあげるわ。鬼にも手伝わせてな！」

「鬼？ 天子、あんた鬼の知り合いがいるの？ ……あ、萃香のことか、でもあいつが手

伝うかしら」

「……萃香……？ まあいい。天界の宴の一端に触れることができれば地上の奴らもさぞ喜ぶだろう！ あひいい」

おお、なんとなく足を舐めてしまった。特に意味はないのである。こう吾輩は新しいところにくるとにおいをかいでおくことがあるのであるが……たまにこうしてしまうこともあるのである。

「な、なにをするんだ。この猫！」

にやあ。吾輩は軒下のさらに奥に逃げるのである。

「く……私を慕うのはいいがあのけだものめ……」

てんしの声が遠くに聞こえるのである。吾輩はくるつと回って元の場所にもどるのである。あまり奥に行くと、寒い。それにちよつと舐めただけでああなるところ、いたずらを……いやいや。何でもないのである。

「比那名居さんのことが好きなんですよ。はいお茶です」

「ふん。当然。……これは地上のお茶だな。えつとあんたは」

「も、もう忘れたんですか。私は高麗野あうんですよ」

「ふーん……。まずい。お茶か泥かわかったものじゃない」

「ひ、ひどい」

ううむ、吾輩の上では何が起こっているのでしょうか。吾輩には座ったてんしの足しか見えぬ。ふと巫女の声が聞こえてきたのである。

「とりあえず、あなたの宴会はまた今度ね。紅魔館の連中は大勢を招待するつて噂だし。この床にいる猫も招待されているのよ、一緒にいたから」

そういえば前にれみりあにはあったことがあるのである。……ぶるぶる。さくやのことを思い出してしまったのである。いまだにあのなぞはとけぬ。降りたはずなのに降りてなかったのである。

てんしの足が勢いよくぶらぶらしているのである。

「いいだろう。そこまでいうなら勝手にするがいい。私はほかに協力させてやるやつを探すとする」

よくわからぬが。えんかいとはあれであるな、おいしいものを食べることであろう。しかしてんしは来ぬのであろうか……それはちよつと寂しいのである。

「……はあ……天子。一緒にいかない？ レミリアんとこ」

「……………」

「比那名居さん！ 霊夢さんは比那名居さんとどーしても一緒に行きたいんですよ！」

「なっ」

おお、巫女とてんしの声がはもったのである。あうんがばたばた動いている音がする

のである。

「霊夢さんも寂しくてきつと誘っているんですよ……。比那名居さん」

「ほう……。ふふん。そこまで懇願されては行つてやらなければならない。私としては全く興味はなかったが、これも地上のやつらのことを知つてやるためには少しくらい参加してもいいかもしれないわね」

てんしの嬉しそうな声が聞こえてくるのである。吾輩もうれしいのである。ぱちぱちと拍手が聞こえてくるのである。一体だれが拍手しているのであろうか……。きつとあうんであるな。吾輩はわかるのである。

「あ、あんたねえ。あうん。ちよつと」

巫女の声があるのである。

「まーまー霊夢さん。ここは押さえて押さえて。天子さんはきつとあのままだったらダメだったじゃないですか。あ、私も連れてつてくれないですか？　ね。霊夢さん」

「ああ、もう。まあいいけどさ。レミリアのことだからそううるさくは言わないだろうしね。天子、とりあえず明後日の夕方前には神社に来なさい」

「いいでしょう。たのしみしておきま……。楽しみにしておきなさい」

「言葉遣いおかしいでしょ、天子」

吾輩も夕方には神社に来なければならぬ。こーまかんというあばら家で宴会である

か。意外とれみりあもびんぼーなのやもしれぬ。またたびを持っていったら喜ぶであろうか。明日は取りに行くのもいいのであるな。

「それはそうとあうん。あんた、あのネズミとルーミアはどうしたの」

巫女が聞いているのである。吾輩も気になるのである。

「あ、いつの間にかいなくなっちゃったんですけど。ネズミさんの持っていたお茶碗はちゃんと隠しているのですそのうちやってくると思います」

「いや、別にそのまま帰してもよかったですんですけど。じゃあ、あいつが来たら適当に相手しておいて。慧音も疲れたからって休ませてたけど、そろそろ」

とことこまた足音がするのである。

「ああ、すっかり休ませてもらったよ。ありがとう」

けいねであるな。吾輩は聞き間違えたりはしないのである。

「しかし、今日はあわただしい日だった。迷子になる子が多いし、喧嘩もあつたし……。ほんとに助かったよ霊夢」

「はいはい、どういたしまして。これは貸よ」

「ははは。今度何かお返しするよ、そういえばルーミアたちは？」

「帰つたみたいよ。薄情な奴らね」

「そんなものだよ。むしろ、らしいって安心する。あ、猫は？」

「その下」

吾輩のことであるな。

軒下をひよっこりと覗いてきた慧音と目があつたのである。長い髪が地面につかないように手で押さえているのであるな。吾輩を見つけて、にこつとしているのである。

「ああ、いたいた。それじゃあかえつてご飯にしようか？」

みやあみやあ。ごはん！

「そいつあんたの飼猫なの？」

みこよ吾輩は飼猫ではないのである！

「えっ、いや違うよ」

けいねの言うとおりであるな。けいねは吾輩に手を伸ばしてきたのである。

「ほらおいで」

吾輩はのっそり起き上がって近づいていくのである。ここで、てんしの足元を通るときに尻尾でふんわりさすってみたのである。

「いいいい」

……てんしが足を押さえているのである。いたずら成功であるな！ 満足である！

もこおはいないのである

神社の石段をとてんととてんと降りていくのであろう。吾輩は後ろから来るけいねをちらちらと見ながら、降りていくのである。

吾輩は石段を上ったり降りたりすることのべてらんである。神社にはもう何度言つたかわからぬ。そうして階段を降りきつたのである。

「待つてくれていたんだな。ありがとう」

どういたしましたのである。吾輩は紳士であるからけいねがヤマメをくれるときに「まて」という時もちやーんと待てるのである。

「それにしてもすつかりと遅くなつてしまつたな」

空を見れば、お天道様が山の向こうに帰るところである。こう、オレンジ色の空はなかなか好きである。お空もみんなに喜んでほしいのであろうな！ 毎日綺麗に色を付けているのである。

「帰ろうか」

けいねがそう言ったのである。

☆

だんだんと暗くなっていくのである。しかし、吾輩は暗いところでもちゃんと歩くことができるのである。けいねは「提灯でも持つてくればよかつたな」と言っているのであるが、安心するのである。吾輩がえすこーとするのである。

足元に転がっていたこいしに躓いたのである……いや、これは油断しただけである。けいねよ、ちゃんとわかっていると思うのであるが……吾輩は後ろをう振り向いてみたのである。けいねはキョトンとした顔で吾輩を見ているのである。どうやらばれ……。ちゃんとわかっているようであるな。

「やつとついたな」

おお、いつの間にかてらこやについていたのである。吾輩は一番乗りで門をくぐったのである。

「おわつ。びっくりした」

びっくりしたのである！ 吾輩の前に黒髪の少女が立っているのである……ううむ、背中から赤と青の……羽？ であろうか、生えているのである。吾輩はとりあえずれいぎただしく「にやあ」と挨拶をしたのである。ううむ？ どこかで会った気がするのがある。

「にやあ」

その少女はにっこり笑って吾輩に返したのである。どうやら悪いものではないよう

であるな。吾輩は安心したのである。

「ああ、こんにちは、おじいさん」

けいねがやってきて言うのである。おじいさん……？ どこにいるのであろうか、挨拶をせねばならぬ。まなーである。おらぬのはないか？

「こんにちは」

羽の生えた少女が言っているのである。おじいさんなのであろうか、ううむそうは見えぬ。けいねよ、この少女はたぶんおじいさんではないのである。そう思っていると、門をくぐって少女はどこかに行ってしまったのである。

「こんな遅くに何をしていたんだろうか……。保護者のおじいさんが夜道に独りは心配だが、まあ大丈夫か」

けいねよ、どうみてもおじいさんには見えなかったのである。ううむ、わからぬ。教えてほしいのである。さっきの少女はおじいさんだったのであろうか？ にやあにやあ、とけいねのおひぎにすりよってみるのである。

「くすつ。なんだ、そんなにおながが減ったのか？ ご飯にしようか？」

うむ！

☆

てらこやの中に入ったのである。もちろん足はちゃんとふきふきしたのである。

吾輩の前に桜色のお茶碗が置かれたのである。中にはご飯が入っているようである。これはさつきけいねがにとりからもらったお茶碗である。吾輩は前足をお茶碗にかけて、顔を突っ込んだのである。

むしやむしや。

「ふふ、おいしいか？」

うむうむ。吾輩は口元を舐めながら答えるのである。けいねは吾輩を見ながらにっこりしているのである。それを見ると吾輩もうれしくなるのである。けいねもご飯を食べるのである。

「おまえ……結構汚れたな。そういえば今日はいろんなところでごろごろしてたかなあ」

……恥ずかしいのである。吾輩は綺麗好きであるからして、お山のお風呂に行くのであるが、今日はまだ行っておらぬ。

「よし。お風呂を沸かすか、一人でやると結構大変だが、私も今日は疲れたよ。ちよつと待っててくれ。こういう時に妹紅がいてくれたらなあ。炎でさつと温めてくれそうなものに……薪代も結構馬鹿にならない出費なんだ」

よくわからぬが吾輩もお手伝いするのである。

もぐもぐ、これをちゃんと食べ終わってからである。もぐもぐ。おいしいのである。

吾輩はとても幸せであるな。そういえばさつきはあうんにほしももらったし……お
お、そういうはずりんからヤマメをもらえなかったのである……思い出したのであ
る……。

うむ？ けいねがおらぬ。お風呂を沸かしに行ったのであろうか？

こんこん。

物音がして吾輩はそちらを見てみたのである。おお、よく見ればさつきの少女である
な。にやにやしなから吾輩を見ているのである。ぴんと指を吾輩に突き付けて言うの
だ。

「おまえ。もしかして見えているんじゃないか？」

なんのことかわからぬ。吾輩はうしろを振り向いてみたのである。

「いや、違う違う、猫。猫」

吾輩のことであるか！ 見えているというところとちゃんと見えているのである。吾輩は
じつと少女を見返したのである。

「困るのよねえ。このぬえは正体不明でなきや。こうやつて人里を練り歩いていろいろ
とくふうーしているのに、でもまあ猫くらいならいいのか？ ああん」

どことなく楽しそうに言うのであるな。ぬえというのであろう。ぬえ……鶴かもし
れぬ。吾輩はものしりなのである。

「おや？ 妹紅。来てたのか」

けいねが帰ってきたのである。もこおであるか。どこにいたのであろう。吾輩はあたりをきよるきよると見まわしてみたのであるがぬえしかおらぬ。けいねよもこおはおらぬぞ。

「ちようどよかった。妹紅。お風呂に水を張つたんだ。いつものようにしてくれないか」

「……わかつたわ」

ぬえがにやあと笑いながら立ち上がったのである。もこおはおらぬが、ぬえがやるのであるうか。吾輩にはよくわからぬ。けいねよ。にやあにやあと吾輩が聞いても「めつ。ごはんをあんまり食べ過ぎると太るぞ」と言われたのである。

ううむ、太るのはあまりいやである。

ぬえのあとをとことこ歩いていくのである。お風呂場は吾輩も知っているのである。「くつくつく。このぬえの正体に気が付かずにお風呂まで用意してくれているとはな。ちようどくつろぎたい気分だったのよ……」

ぬえは頭の後ろに両手で組んで歩いているのである。

「お寺では行水なんてしているみたいだけどあんなの冷たくて絶対やりたくないわ。お、ここか。月明かりの入ってくるいい風呂場じゃないか、村紗でも連れてくればよろ

「こびそうだな」

むらさき……きやぶてんであるな！ 吾輩は知っているのである。

ぬえはお風呂場に入っていくのである。暗いままであるが大丈夫であろうか。ごそごそと服を脱いでいるのだ。ここのお風呂は「ひのき」を使っていると聞いたのである。よくわからぬがよいことなのであろう。

「やごと」

ぬえがはだしになってぱたぱたと湯舟に歩いていくのである。お水が張っているようには見えるのであるが、高くて良く見えぬ。

吾輩は物陰からじつと見ているのである。ぬえは湯舟に手をかけているのであるな。

「おい、お前も一緒に入るか……なんてね」

いや、いいのである。

ぬえは吾輩をみて、ちらつと舌を出しているのである。右目をウインクしているのである。吾輩はだんだんとわかってきたのである。じつと、じつと見るのである。

ぬえがざばあつとお風呂に入ったのである!!

「……ひゃあああ!!」

水風呂から這い上がってきたぬえは四つん這いで吾輩を睨んできたのである。

「ち、違うからな!!」

わかっているのである。わかっているのである。おつこちよいさんであるな。

おふろとばんしやくである

どたどた音がするのである。きつとけいねがやってきたのであろうな。

「な、なんだ今の声はー」

慌てたけいねがお風呂場に入ってきたのである。ぬえはあわてて「な、なんでもない」と言っているのであるが、ううむ。けいねよ、ぬえが体を抱きかかえるようにして寒そうである。何とかしてほしいのである。

けいねははあとため息をついているのである。

「また、行水をしようとしているのか？　まだ寒くはないからつて自分を痛めつけるよ。うなことには関心出来ることじゃないな。妹紅。ほら、とりあえずこれで体を拭いて待つてくれ。今私が外でお風呂を沸かすよ」

けいねは白い布をぬえに渡したのである。

「まあ、私も甘えたのが悪かったしなあ。悪かったよ」

☆

「あぁー」

ざばーとぬえが肩までお湯につかったのである。吾輩はあふれ出したお湯に前足を

つけてみるのだ、おお、いい湯加減である。

「まさか、水風呂だったとは思わなかった。妹紅ってやつは風呂焚きをさせられているんだなあ。ああ、寒かった」

お疲れ様である。ぬえは気持ちよさそうに両手をあげて右手で左手の肘をもったまま、体を伸ばしているのである。吾輩も少し真似してみようと思ったのであるか、なかなかむずかしいのである。

吾輩は湯舟にとんと飛び乗ったのである。目の前にぬえの顔があるのである。まっげが長いのであるな。こう、きらきらして綺麗である。

「おー、お前も入るのか?」

ううむ。少し深いのである。ぬえよ吾輩を抱っこしてほしいのである。妹紅も川でやってくれたのであるが、あれは寒かったのである。……そう考えると吾輩はぬえの気持ちがよくわかるのである。冷たいのはいやであるな。

「ほらほら」

ぬえが手ぬぐいをお風呂につけて、ぷくうつと膨らませたのである。おお、なんだろうか! とても気になるのである。吾輩は前足を伸ばしてばんちしてみるのである。柔らかいのである。

「お前、砂がついているな。よつと」

ぬえが吾輩を持ち上げて湯舟から上がったのである。それから木の椅子に座って吾輩にお湯をかけたのである！ ビックリしたのである！

にやあにやあ。

「風呂に入る前にちゃんと綺麗にしておかないとな」

「ごしごし、ごしごし。手ぬぐいでこすってもらった後にお湯をざばーとかけられるのである。なかなか気持ちいかもしれぬ。慣れてきたのである。」

吾輩もぬえにやってあげてもいいやもしれぬ。しかし、なかなか難しいのである。どうすればいいのであろうか。

「よし、綺麗になつたな」

きれいになつたのである！ しかし、吾輩の毛並みがびしょびしょである。こう、濡れていると体が重くていやであるな。ぬえは湯舟にざばーんと入ってしまったのである。吾輩はなんとかよじ登つたのである。ううむ、重い。

ぬえの顔がまた近くにあるのである。吾輩はお風呂の中を覗き込んでみたのであるが、やはり深いのである。泳げぬことはないのであるが、こうくつろげぬ。

む？ いいところがあるではないか。

ぬえが膝をあわせて座っているのであるからして、その上にびよんどのつてみるのである。

「うわっぶ」

膝にのると吾輩はちようど首くらいまで出るのであるが、乗るときにお湯を飛ばしてしまつたのである。申し訳ないのである。

「……まつたく」

ぬえは怒つたようであるが、膝は貸してくれているようである。ぬえは両手を頭の後ろで組んで体を反らしているのである。こう、吾輩はとても気になるのであるが、前の「いく」もそうなのであるが首のつけねのあたりが突き出ているのはなんでであろうか……いくはさこつと言つていた気がするのである。

ばんち。

「あ?」

ぬえに睨まれたのである。いかぬいかぬ。いたかつたのかもしれぬ。悪かつたのである。吾輩は叩いたところを舐めていたわつたのである。

「いこ」

おおお、ぬえが動いて、吾輩はお湯の中に沈んだのである。

☆

もぐもぐ。

これは吾輩ではないのである。けいねと向かい合つてぬえがご飯を食べているので

ある。丸い机の上に吾輩が載ろうとするとけいねが「めっ」としてくるのである。

しかし、おいしそうなご飯が並んでいるのである。吾輩は机に前足をかけて、けいねをじつと見つめてみるのである。

「こら、物欲しそうにしてたらダメだぞ」

難しいのである……。けいねはお箸をつかつてご飯をパクパク食べているのである。

吾輩も箸を使うべきであろうか。

「そういえば、妹紅。そのねまきは大丈夫か、私のだから少し大きいかもしれないが」

「ああ、うん」

ぬえはご飯を食べながら答えているのである。そうである。ぬえならば吾輩に何かくれるやもしれぬ。吾輩はそのそ近づいていったのである。

ぬえはちらつと吾輩をみて、べーと舌を出したのである。

吾輩も負けてはおれぬ、同じように舌を出してみるのである！

「ああ、この子をお風呂に入れてくれてありがとう。お酒でも温めてこようか！」

「……うん！」

ぬえが笑ったのである。けいねよ吾輩もお助けするのである。

立ち上がったけいねにととてついていくと、台所の前でけいねが言ったのである。

「それにしてもびっくりしたよ。さつきまで妹紅に見えていたんだけどなあ……できる

だけ強い酒をのませてみようかな」

うむ？

けいねよ何か言つたであろうか？

「……ん？ お前にお酒をあげるわけにはいかないからな。そうだな、麦茶をあげよう」
うむうむ。

☆

「あー」

ぬえよ、寝転んでおなかをかくでない。

それにしてもよく飲んだのである。お酒を吾輩は飲んだことはないのであるが、みんな気持ちよさそうになっているのである……吾輩も少し飲んでみたいのである。

吾輩はそう思つて、ぬえの使つていたおちよこを舐めようとしたのである。

「いら」

けいねに怒られたのである……今日はよく怒られる気がするのである。けいねは食器を片付けているのである。吾輩も手伝おうとしたのであるが、尻尾を掴まれたのだ。

「ううー」

ぬえよ、離すのである。寝ぼけているようであるな。吾輩はぬえのほつぺたをパンチしてみるのである。それにしてもだらしなく口が開いているのである。それにねまき

もちやんと着ておらぬ。

ぷに、ぷに。

ほつぺが柔らかい。吾輩はなんだかパンチしてみるのである。しかし、吾輩は前に噛まれたことがあるのであるからして、ちやんと気を付けてこうパンチするのである。離すのである。

「うう」

おお、逆にだっこされたのだる。

「ゆたんぼ」

ゆたんぼではない。吾輩はわがはいである。しかし、もぞもぞ動いてもぬけだせぬ、吾輩は仕方なく、ぬえと一緒に寝ることにしたのである。

「あ、ほんとに寝ちやったのか。やっぱり強いお酒を飲ませすぎたかな」

けいねであるな。吾輩はそつちを見てみたのである。手に掛布団をもっているようである。それをぬえにそつとかけてあげているのである。吾輩はぬえと布団の間のどーくつのようなになっているところから、にやあと言ってみるのだ。

「ああ、おやすみ」

！ けいねに吾輩の言葉が通じたやもしれぬ。うれしいのである。

これで安心して眠ることができるのである……。今日はいろいろあつて楽しかった。

☆

「おひさしぶりですね。猫さん」

みやああ……。ここはどこであろうか、吾輩はすぐつと立ち上がってみれば神社の真ん中にいるのだ！ 吾輩はなんでここにいたのであるうか？

「困惑しているようですね。しかし、安心してください」

頭に帽子をかぶった……。ドレミーがそう言っているのである。久しぶりである。

「ここは夢の世界ですから」

きょうもいいことありそうである

吾輩はどこにいるのであろうか。さつきまでぬえと一緒に寝ていたと思ったのであるが……。そもそもぬえもおらぬ、代わりにおるのが

「おや、どうしましたか？」

ながーい帽子をかぶったどれみーであるな。うむ……。吾輩はどれみーのことを知っていると思うのであるが、なんだかあまり思い出せぬ。前にあったことはあると思うのである。

どれみーはふよふよと浮かぶ桃色のぼーるのようなものに乗って、ぱらぱらと本を読んでいるのである。吾輩も読んでみたいものである。どれみーは吾輩をじとつとみて、言うのである。

「それなりに長く生きてはいますけど、私も猫さんの夢に何度も入るなんてそうはなかつたわ」

ばたんと本を閉じたのである。

「……」

どれみーは片手を上にあげると、手のひらに小さな桃色の玉を出したのである。それ

からにやつと吾輩に笑いかけて、ぽいっと吾輩に玉を投げてきたのである。

吾輩は子供ではないのである。このようなボール遊びはもうやらぬ。こう、ばんちして、のつてみて、ごろごろして、ううむ。たのしい。

意外と弾力があるのである。吾輩はコロコロ転がして遊んでみるのである。おお、どこに行くのか！ 吾輩は転がっているボールを追いかけていくのである。

「……くすくす、それにしても猫さん。なんだか不思議な気……のようなものがまとわりついていますね」

今忙しいのである。ごろごろ。

「不幸でも呼びびそうなものが体についてますよ。もしかして、最近貧乏神にでもなでされました？」

うむ？ びんぼうがみとはなんであろうか。びんぼうとはあれであるな、巫女のことであると誰かが言っていたのである。意味はわからぬ。がみとはなんであろうか……。

「ふふ、これも何かの縁。まあ、私にはどうすることもできませんが、ここ数日は気を付けていた方がいいかもしれないわ……」

どれみーが本を開いたのである。ぱらぱらと風もふいていないのにページがめくられていくのである。

「漱石の猫にも最後には悪いことはありましたけど、貴方は……そうですね。信頼する

ような相手と一緒にいればきつと大丈夫でしょう」

「ごころごころ、やつと」「こつ」を掴んできたのである。ボール遊びもなかなか侮れぬ。

「……あの、聞いていますか？」

……も、もちろんである。ちゃんと聞いていたのである。吾輩はじつとドレミーを見ているのである。ふよふよと浮かんでいるのは不思議であるな。

どれみーは吾輩とじつと見つめあつてから、うつすらと笑つたのである。

それからウインクしたのである！

☆

「んんう」

いたいっ。吾輩はころころと飛ばされたのである。な、何が起こつたのであろうか？
よく見るとぬえがすごい寝相で寝ているのである。暑かつたのであろうが、吾輩もいたかつたのである。

吾輩はぬえに近寄つてなにやあーと威嚇して見るのであるが。「えへへ」とぬえは笑つたのである。……なんだか幸せそうであるな、まあいいのである。

それにしてもさつきまで誰かとあつていた気がするのである。なんだか悪いことが起こることがあるから気を付けるように言われた気がするのであるが……誰であつたか。それにしても悪いこととはこわいのである。

「うん」

「ごろりとぬえが寝返りを打っているのである。とても幸せそうであるな。おお、二度も幸せそうになるとはぬえは幸せ者である。」

吾輩は昨日と同じように朝に起きてしまったようであるな。外から明るい光が入ってきているのである。吾輩はその場で大きく伸びをしてから、毛並みのめんてなんすをするのである。ペロペロ。くしくし。

今日はなにをするべきであろうか、そう思っているときけいねがやってきたのである。目をぱつちり開けているのである。流星である、それに比べてぬえはだらしがらないのである。

「あ、起きていたのか。まあそちらさんはまだおねむのようだけど」

けいねは吾輩の顎の下をこしょこしょしてくれただ後に縁側の障子をからりと開けたのである。うむ、まぶしい。今日もいい天気であるな。しかし、まだ涼しいのである。

吾輩はとてとてあるいて縁側から外に出たのである。

「お、おい、もう行くのか?」

うむ。世話になったのである。まあ、また来るのである。今度はけいねにセミの抜け殻でも持つてきてもいいかもしれぬ。吾輩はけいねにやあとお礼を言ったのである。紳士としてわすれるわけにはいかぬ。

「まったく。せつかちな奴だな。また、いつでもおいで。せつかくお前のお茶碗も買ったんだから」

また来るのである。吾輩はとてとて歩いて、門をくぐったのである。

☆

今日は何をしようかと思ひながら歩くのは結構楽しいのである。朝は涼しいから、吾輩は散歩も好きである。最近は何も忙しかった気もするのである。そういえば地底から戻ってきて、吾輩だけになったことはほとんどなかった気がするのである。

吾輩は人里からちよつと離れた場所で丸くなってみるのだ。たまには木陰でのんびりするのもいいかもしれぬ。

そうである。吾輩はまたたびを取りに行くつもりだったのである。思い出したのである。すぐにすつと立ち上がって、きりりと山の方を向いたのである。

それからのんびり歩きだすのである。急ぐことはないのである。いずれつく、と吾輩は知っているのである。

お天道様が吾輩の真上にのぼるまで競争である。吾輩は負けたことはないのである。休まずに歩いているとちゃんつくのである。

とてとて、としばらく行くと向こうから誰かやってくるのである。髪をまとめた着物の少女であるな。あと後ろにいるのは……おお！

吾輩はだつと駆け寄つたのである。にやあと挨拶をすると、椀も驚いたような顔をしているのである。

「わつ、びつくりした。お前か……」

なんだか今日はもみじもおしゃれであるな。すっかりした着物を着ているのである。

「なに？ 椀。その猫は知り合いなの」

「え、ええ。ちよつと」

「あ、もしかして文の奴が言つた猫つてこの子ことなの？ へー」

もう一人の少女も吾輩をなでなでしてくるのである。ううむ、いいのである。ニコニコしているのであるな。手に板のようなものを持っているのである。それを吾輩に向けて。

「ぱしゃっ！」

！ びつくりしたのである。吾輩はもみじの後ろに隠れたのである。

「お、おい。毛が付くだろう」

「なんだかひどいのである。」

「あはは。とりあえずこれが一枚目ね。この調子で文の奴をぎゃふんといわせられる写真をとつてやるわ」

「はたてさん……なんで私まで人間の里なんていかないといけないのでしょうか？」

「はたて、でいいわよ椀。いいじゃない、私だって人里なんて一人で行くのはこわ……つまらないし。これも仕事よ」

はたては両手を組んでうんうんと頷いているのである。

「はあ、普段引きこもっているから……」

もみじが何か言っているのであるが、吾輩には聞き取れぬ。

はたてはむすつとして言うのである。

「だって、文の奴がまーた私の新聞を念写に頼るだけのありきたりな新聞っていうのよ！ 敵情視察もかねて、取材に行くのよ」

「だ、だからなんで私まで、この前の休みは地底で消えましたし」

「……な、なによ。甘味くらい奢ってあげるわよ」

「……………」

もみじがちよつとうつむいたのであるが、吾輩が下から見ると嬉しそうである。もみじははつと吾輩を見たのである。

「ち、違うからなっ!!」

「何で猫に言い訳しているのよ、あんた」

そうである。吾輩なら言い訳はせぬ。

はたてはもみじの背中を押しながら行くのである。

わがはいはのどにつまらせたりせぬ

とてとてとてとて

もみじが振り向く！ びたっ

………もみじが歩き出したのである。

くるっ。その手には乗らぬ！ もみじが振り向いたらちやんと止まるのである。

「おい、いつまで付いてくるつもりなんだ？ 今日遊びに行くんじゃないんだぞ」

吾輩は動かぬ。吾輩もついていくのである。

もみじは白い頭をかきかきして、はあとため息をついているのである。

「まったく。このままじゃその辺の茂みから小傘も出てきそうだな」

こがさであるか？ 吾輩はあたりを見回してみたのである。おらぬ。

おお、動いてしまったのである！ なかなかこーみよーな手を使うのである。もみじよ、おぬしのできるのであるな。吾輩は負けた時はちやんと認めるのである。ころん、と転がっておなかを見せるのである。

「……」

もみじがなでなでしてくるのである。うむうむ。

「ちよつと。椀。猫と遊んでないで早く行くわよ」

はたても来てなでなでしてくるのである。ちよつと怒っているのやもしれぬ。怒ってはいかぬ。吾輩はにゃーと言ってみるのである。

「はたてさ……はたても撫でているじゃないですか」

「いや……だつてずるいし」

「ずるい？ 何がですか。私はあの手この手でやつと取れた休みを使っているんですよ」

「そうじゃなくて猫のこと……つて、わかつたわよ。そんなに怒らないでいいから」

なでなでしながら話されると吾輩、立ち上がれぬ。ごろんと転がって、するりと抜けてみるのである。こういうのは得意である。さくやと今度会つても逃げきつて見せるのである。

☆

吾輩ともみじとはたては人里にやつてきたのである。吾輩からすればもどつてきたのであるが、お山のまたたびは逃げぬ。ゆっくりと行くのである。

道を歩いているとはたてが「あつ」と声を出したのである。吾輩は思わずそちらを見たのである。茶屋であるな。吾輩はよく知つていたのである。お茶と団子を食べるところであろう。

吾輩は食べたことがないのである。のどに詰まるといわれてもらったことはないのである。吾輩はそこまでおつちよこちよいなのではないから、残念である。

「椀、あそこ幟（のぼり）見て」

はたてが「甘味処」と書かれた幟を見ているのである。

「甘味処」

なんと読むのであろうか。吾輩は首を動かして考えてみるのである。ううむ、ううむ。わからぬ。はたてが喜んでいるからきつといいことが書いていのである。いいことであるか、ううむ。「またたび」やもしれぬ、いやなかなかいい線いつているのではないであらうか！

もみじよきつとあれは

「あまみどころか、はたて……あそこに寄るんですか」

「ごころごころ、……間違えたのである。」

「その中途半端な敬語もやめていいわよ。奢るって約束したし、あそこでちよつと休憩をしていきましよう。ほら、椀」

「えっ？ 何ですか」

「いや、席を取ってきて」

「私が？ まあいいですけど」

もみじがつかつかと歩いていくのである。吾輩もその後ろをついていくのである。するとはたても吾輩の後ろをついてくるのである。なんだか仲良しであるな。

茶屋の横に大きな赤い傘が立っているのである。その下に長い椅子が置かれているのである。吾輩はちゃんと知っているのである。あそこでのんびりするものである。

もみじがお店のものと話をしている間にはたてがそこに座ったのである。吾輩もぴよんと飛び乗って丸くなつたのである。日陰になつていてなかなかいいところである。

しばらくするともみじがやってきて吾輩の隣に座つたのである。

もみじはふうと息を吐いて、吾輩の頭をなでなでするのである。うむうむ、くるしゅうないのである。

さらにしばらくすると店の者がお茶とあんこのたつぷり乗つたお団子を持ってきたのである。それと吾輩にはお椀にお水であるな。なんだかずるいのである。にやあにやあ。

「わつ、お前にこれはやれない。のどに詰まらせたらどうする」
もみじも同じことを言っているのである。

はたてが「あははは」と笑っているのである。

「ほんとう、よくなついているわね椀。あんたは性格いいから動物にも好かれるのかもね。あつ。このお団子おいしい。それに餡子が程よい甘さ……」

なんだか幸せそうにはたてが食べているのである。吾輩は紳士であるから我慢せざるを得ぬ。尻尾をふりふりしてみるのだ。決して怒つてなどおらぬ。

「うっ」

急にはたてが青い顔をしているのである。胸をどんとたたいて、急にお茶を飲んだのである！

「あちゅっ」

妙な声を出してお店の中に入つていったのである。吾輩よりもはたての方が喉に詰まらせているのである！ 気を付けて食べなければならぬ。

「お水でも取りに行つたのか……。急いで食べるから……はあ」
にやあ

全くその通りである。はたてはおつちよこちよいなのである。その点、吾輩はそんなことをせぬ。ちよつとくれてもいいのである。

「だーめー」

ううむ。ケチなのである。吾輩がもみじににやあにやあと催促してもくれぬ。吾輩は仕方なくお水を飲むのである。うむうむ。水である。舌でちよつとずつ飲むので

ある。

ふと吾輩はもみじを見たのである。

もぐもぐとほつぺたを動かしながら、だんだんにやけているのである。「ん」と言いながら手をほつぺたにつけているのである。

幸せそうであるな。吾輩はなんとなくうれしくなってしまうのである。もみじがうれいのであるなら吾輩はそれでいいのである。我慢してお水を飲むのである。

ぴちやぴちや、舌を出したり入れたりして飲むのである。

「うっ」

吾輩が振り向くともみじが青い顔をしているのである。それから胸をたたいているのである。お茶を手にとってそれから飲むと、

「んぐっ」

熱そうにその場でうつむいたのである。おおお団子を落としたのである。吾輩は地面に落ちる前に串のところをキャッチしたのである！ちよつと甘いのである。

「あんた何をやってるの？」

はたても戻ってきたのである。

「い、いや。喉に……。それにお茶が熱くて」

「なんなの、今日の私たち……。こんなの文にばれたら一日中ネタにされてからかわれる

わ

二人ともおつちよこちよいであるな。吾輩が一番なのやもしれぬ。

もみじが吾輩が串を啜えていることに気が付いたのである。

「お前、相変わらず曲芸みたいなのができるんだな……小傘と一緒になら一財産築けるんじゃないのか」

もみじよ吾輩はしゃべれぬ。そう思つてじつと見てみるのである。

「うっ、いや……ありがとう」

もみじが吾輩からお団子の串を取つたのである。吾輩は食べるのをちゃんと我慢したのであるし、お団子には触っていないのである！ ほめてもいいのである。

「この子ほんとお利口ね。椀が飼つてみれば」

「なんでそんな話になるの？ こいつはついてくると思つたらいきなりいなくなつたりしますから大変ですよ。こいつと小傘が一緒にいた時はほんとにたいへん……」

急にもみじが黙つたのである。……汗をかいているようにも見えるのであるな。

吾輩が振り向くと、のしのしと大きな傘を持った少女が近づいてきているのである。あのなすびのような傘は吾輩も見覚えがあるのである。

「は、はたて、ここを離れましょう。早く」

「えっ？なんでよ、まだお団子食べ終わってないわよ」

吾輩はだつと駆けていくのである。

「あつこら」

椀の音が後ろから聞こえるのである。

吾輩は大きな傘の下に潜り込んだのである。見上げると大きな瞳がぱちくりしているのである。

「やあ。」

吾輩がそういうと、こがさがにっこり笑ったのである。

「こうようである！」

吾輩はこがさの顔をちゃんと覚えているのである。なすびのような傘を持っていたらこがさであるな、間違いないのである。

「猫さんだ」

猫さんである！ いや……わがはいはわがはいである。吾輩は後ろ足で立って前足をこう、伸ばしてみるのである。するとこがさは吾輩の前にしゃがんで、両手を前に出したのである。

「たーっち」

おおお、こてん。

吾輩は倒れてしまったのである。「たっち」とは何であろうか、吾輩にはわからぬ。しかし、こがさよ危ないのである。吾輩はにやーと抗議したのであ。

「あつあつ。ご、ごめん」

なでなで。

うむ。許すのである。

「それにしてもなんでこんなところに猫さんがいるのかしら？」

こがさが小首をかしげたので吾輩もやってみるのである。こがさの大きなおめめに吾輩の姿が映っているのである。なかなかかなりりしいのである。

「あつ。あれ？ あそこにいるのは椀？」

こがさが指を指したのである。吾輩はそうであると答える前にこがさはとてとてお団子屋さんの前に歩いてつたのである。吾輩もついていくのである。

戻ってみるとはたてがお茶を飲みながらわがはいに「おかえり」と言ってくれたのである。

わがはいもちゃーんと「ただいま」と答えたのである。

「まるで言葉がわかつているみたいね」

「ずずずとはたてはお茶を飲んでいたのである。吾輩はもみじを見るとこがさがその周りをぐるぐるしているのである。何をしているのであろうか。」

「椀？ 今日はずごいおめかししているじゃない。どうしたの？」

「うるさいな……唐傘風情には関係ない。私は忙しいんだ」

「……お団子食べるのに忙しい？ くす」

「……!! う、うるさい！ そもそもなんで妖怪のお前が普通に人里にいるんだ」

「え？ 人里でよく子供たちと遊んでいるから……」

「な、何を言っているんだは？ ああ、もうとにかく帰れ」

おお。もみじがこがさを押しながら「かえれ」と言っているのである。こがさも負けずに胸を張っているのである。ううむ、どっちも負けたくないでほしいのである。

「こがさ……小傘。ああ、あの記事で椀と一緒に地底に行つたとかいう！」

急にはたてが立ち上がったのである。手に持った湯飲みからお茶がこぼれたのを吾輩はかれーに回避したのである。

「椀、このえつと小傘にインタビューをしてよ」

もみじにはたてが言うのである。

「えつ、なんで私が、こんなところでいつもの人見知りになつてもらつても困るんですけど……自分でやってください」

「ひ、人見知りで言っているんじゃないわ。ほら、文の記事ではあいつの第三者視点ばかりだったからあんたとこの子のインタビュー記事は行けるわ」

はたてはひとみしりさんであるか。大丈夫である。おなかをこう見せれば誰でも仲良くなれるのである。吾輩はよく知っているのである。

「えつ、インタビューって」

こがさもキョトンとして聞いているのである。はたては椀のちよつと後ろから言うのである。

「いや、貴方は鬼を倒した唐傘としてちよつと有名になっているのよ。まあ、倒したつて

いうかあれだけど。独占インタビューって記事ならきつと受けると思うわ」

「……鬼を倒した……有名……えへへ」

こがさが頭を掻きながら幸せそうであるな。いいことである。それにしてもインタビューとはなんであろうか。吾輩も食べたいのである。いや、食べ物かはわからぬが。そう思つて、吾輩ははたての足元をすりすりして見るのである。

「ん？」

はたては吾輩をひよいと持ち上げたのである。

「インタビューしてくれないとこの子がどうなつていいの？」

はたてが吾輩を撫でながら言うのである。するとこがさも笑顔で言うのだ。

「ななんだとーひれつなー」

はたてはひれつなのであるか。吾輩はそうは思わぬ。もみじもきつとそう思うのである。

吾輩はもみじに聞いてみるのである。

「お前も茶番に付き合わされて大変だな……」

ちやばんとはなんであろうか？ お茶は飲んでみたいのである。

★

「そこでちぎつてはなげ、ちぎつてはなげと活躍したのよ」

もぐもぐとこがさがお団子を食べながら言うのである。うむうむ。吾輩もあの時は楽しかったのである。

吾輩ははたてのひぎ元で丸くなって聞いているのである。はたては「うんうん」いいながら手元の紙に何かを描いているのである。吾輩がちらつと見てみるのである。

『多々良小傘はお調子者である。話を盛るところがある』

なんと書いているのかは読めぬ。きつといいことが書いてあるのである。おお、そうである文字はわからぬが、じつと見ているとなんだかわかるような気がするのである。

うむむ、うむむ。きつとこう書いてあるのである。

こがさともみじはなかよしである。吾輩も仲良しである。はたてもなかよしである。

うむうむ。

はたてもなかなか良いことを書くのである。そうお思つてにやあとほめてみるのである。はたては吾輩を見下ろして白い歯を見せて笑つたのである。

「それにしてもはたて。これから貸本屋に偵察に行くんだらう。そろそろ行かないでいいのですか？」

「なーんか権。敬語と混ぜつてへんなしやべり方しているわね」

「そりゃあ、まあ」

「ずずずともみじがお茶をすすっているのである。それから言つたのである。」

「小傘もお茶、熱いから気をつけろ」

「はい。ありがと。でもまあ、お茶でやけどするような妖怪なんていないだろうけど」
はたてともみじが黙ったのである。吾輩は尻尾をふりふりしてこがさに合図をしてみるのである。

「おいしい」

こがさは幸せそうである。これでいいのである。

「あつ」

むっ？ はたての声で吾輩は気が付いたのである。吾輩の頭の上にお客さんであるな。イチヨウの葉っぱである。吾輩はよく遊んでやっているのである。いっぱい落ちているところで寝るといい音がするのである。

まだ紅くはないのであるな。はたてが指でつまんでくるくるとしているのである。

「そういえば今年はいつかもみじも紅葉するかしらね」

「誰が紅葉なんてするか!!」

「え？」

「え？」

はたてともみじが顔を見合わせているのである。少し遅れてこがさも「え？」と首をかしげているのである。

はたてはにやりと笑って、手元のイチヨウをもみじに見せているのである。すると、もみじが口を開けて何も言わずに下を向いて、

見る見るうちに、かぁーっと赤くなつたのである!

「おお。紅葉した!」

こがさが何か言っているのである。はたてもにこにこしているのである。

おう、もみじが吾輩を引き寄せて抱っこしたのである。吾輩で顔を隠すのは構わないのであるがくすぐつたいのである。

「……文さんには秘密ですよ」

はたては「わかつているわよ」と言つて、こがさは「秘密秘密」と軽く言っているのである。もちろん吾輩もしやべったりはせぬ!

★

お団子屋さんを後にして吾輩達はどここ歩くのである。

なぜかこがさもついてきたのであるが吾輩はうれしいのである。

「小傘、なんでお前まで付いてくるんだ」

「なんとなく」

「なんとなくで付いてこられても困るんだ」

「猫さんはいいの?」

「猫は……」

ちらつともみじが吾輩を見たのである。

「猫はいい。お前はダメだ」

「かささべつー」

吾輩はゆるされたのである。

「あんたたち、とりあえずあそこが目的の場所ね。なんだか思ったよりも時間がかかったわ」

先頭を歩くはたてが言うのである。吾輩がとてとてその前に行ってみると、ちよつと向こうにほんのり大きな建物が見えるのである。表には「鈴奈庵」と架けてあるのであるが吾輩は、よめぬ。

かしほんやである

大きな木の陰から「鈴奈庵」を覗くのである。

上からはたて、もみじ、こがさと吾輩の顔が並んでいるのであるな。こんな経験は初めてである。

「いや、はたて。さっさと中に入りましょうよ」

もみじの声がするのであるが吾輩が見上げるとこがさが笑っているのである。うむ。笑うことはいいことである。しかし、もみじの顔がみえぬ。ちよつとどいてほしいのである。

にやー

吾輩はそう厳然と抗議したのである。こがさとはなかよしさんではあるが、親しき中にもまたたびがあるのである……。なにか違う気がするのであるが、またたびは大事である。

「にや〜」

こがさと吾輩はそうやって鳴きあつたのである。しかし、こがさはどかぬ。吾輩はもう一度鳴いてみるのであるが、こがさは「ふふふ」と言った後に「ごろにやーん」と言っ

てきたのである。

いや、どいてほしいのである。

吾輩は悩んでしまったのである。はむはむ。おお。間違えて自分の尻尾をはむはむしてしまったのである。悩んでいると何をするか自分でもよくわからぬ。もしかしたらこがさも悩んだ時は傘をはむはむするのであろうか？ きつとなすびの味がするのである。吾輩は食べたことはないのである。

「私も早いところ帰りたいですし、さつきと用事は済ませましょう」

もみじが木を回り込んで吾輩達の前に出たのである。くるりと吾輩達を振り返った後ろでカエデの葉っぱがひらひらとゆっくり降り降っているのである。吾輩達が寄り掛かっていた木はカエデであつたやもしれぬ。

「あつちよつと待ちなさいよ」

あわててはたてが前にでたので、こがさも吾輩も前に出たのである。どうせなら一番前に行くのである。吾輩はもみじの前にでるところ、堂々と歩き始めたのである。

「ほら、はたて。猫の方が堂々としていますよ」

「猫と私を比較するんじゃないわよ……。わかつたわよ。こうなつたらままよ」

まま？ はたてのお母さんがどこかにいるのであろうか？ 吾輩はあたりをきよろきよろ見回してみたのである。誰もおらぬ。

「なんでいきなり止まってんの?」

はたてが聞いてきたのであるが、いや。はたてが気になることを言ったのが悪いのである。吾輩はしかし、気にせぬ。紳士は細かいことは気にしないものなのである。ちゃんと胸を張って歩き出すのである。

とことこ

ちらつ

後ろを見たら胸を張って歩くこがさともみじとはたてが付いてきているのである。吾輩は先頭であるな。誇らしいのである。まあ、特に意味はないことはわかっているのであるが、みんながちやんとついてきているのは吾輩のおかげやもしれぬ。

吾輩達はそのまま貸本屋の暖簾の下をくぐったのである。

うむ……急に暗くなったのである。吾輩はお散歩から帰ってきてきて神社の軒下に潜るときもこんな感じで苦手である。……吾輩は別に神社に住んでいるわけではないのであるが、なんとなく帰るところと思ってしまうたのである。なんでであろうか。

本のおいがるのである。

吾輩はこのにおいが嫌いではないのである。たまにけいねの本の上でお昼寝をしたりますのである。けいねが本を読んでいるときに間に座って寝ることもあるのである。だいたい「めつ」されるのであるが……なんで怒られるのかはわからぬ。

「いらつしやーい」

鈴の音がして吾輩はそちらを見たのである。

すると頭に鈴をつけた少女がこちらを見たのである。こすずであるな。吾輩はちゃんと知っているのである。

吾輩はちゃんと挨拶をするのである。するとこすずも小さく手を振ってくれたのである。笑顔で手のひらを上下させているのである。うむうむ。あまり見たことのない挨拶であるな。吾輩も後ろ足で立って真似してみるのである。

するとこすずは困ったような顔で額を手で押さえたのである。ううむ、吾輩の真似があまりうまくなかったのかもしれない。

「こーらー。駄目じゃないこんなところにきちや」

こすずがなぜか吾輩に言ってきたのであるが……貸本屋とはそんなに危険なところなのであろうか？ そうするところが危ないのである！吾輩はしゅっばつと後ろを向いてこがさを探したのである。

本を手にとって表紙をふーふー息を吹きかけているこがさがいたのである！なにをしているのであろうか、本が熱いのやもしれぬ。吾輩が助けるのである。

「べっべっ。埃っぽいなあ。おっ!？」

吾輩はこがさの足元ですりすりして見るのである。熱いならすぐに離すのである！

こがさは吾輩をみて、目をぱちくりしているのである。おお、目が充血しているのである……いや昔からそうであった。

こがさは本を置いたのである。よかったのである。

それからこがさはしゃがんで吾輩を抱きかかえて。ぎゅーつとしたのである。苦しいのである。

「あ、猫さんの頭にほこりついてるわ」

ふーふーと吾輩に息を吹きかけてくるこがさである。吾輩は熱くないから必要ないのである。

「ちよつとちよつと。飼い主さんですか？」

こすずよ吾輩に飼い主などおらぬ。

「え？　そうです」

こがさよ、嘘をつくでない。吾輩は抗議するのである。

「ダメですよ。猫さんを連れてきてもらったらきつと本をかじかじしちやいます」

「大丈夫よ。この猫さんに限ってそんなことはないわー」

「そ、そんなお母さんみたいなこと言われてもこまるんですけど」

そうであるこがさの言う通り吾輩はかじかじなどせぬし、こすずの言う通りこがさもお母さんでもないのである。……大変である！　両方ともいいことを言っているの

ある。

吾輩はとりあえずこがさの手から逃れて下に降りたのである。こういう時はもみじに聞いてみるのである。もみじは頭がいいからわかるのである。

「あつちよつと」

こすずよ吾輩を追いかけまわすのをやめるのである。吾輩はちゃんとわかっているのである。本をかじかじなどせぬ。もうけいねに怒られたからわかっているのである。

「ありましたよ。はたて」

もみじはすぐに見つかつたのである。手に新聞を持つているのである。吾輩はちゃんと知つているのである。もみじも吾輩を見つけてちらりと吾輩を見たのである。それからすぐに新聞を読み始めたのである。

なんとなく悔しいのである。吾輩はおなかを見せてごろごろして見るのである。するともみじはちらつとみてまた新聞を見始めたのである。……こうなつたら奥の手である。あまり使いたくはなかつたのであるが……。

みやーみやーみやーみやー

気が付くまで鳴いてみるのである。もみじは頭を掻きながら吾輩に言つたのである。

「あーもー、にやおにやお。うるさい。どうしたんだい！」

やはり奥の手である。だいたい怒られるのである。それよりももみじよ、こがさとこ

すずのどつちを褒めたらいいであろうか。どつちもいいことを言ったのである。吾輩はもみじに縋りつこうとして、宙に浮いたのである。

「もみじ。なんで叫んでんのよ。静かにしなさい」

「え？ は、はたて。それは猫が」

「いや。何猫と張り合っているのよ」

はたてが吾輩を抱っこしているのである。後ろからとは卑怯であるな。まあ、許すのである。もみじも静かにするのである。

もみじのほっぺたがほんのりと大きくなった気がするが、気のせいであろうか。

「ま、まあいいです。ほらはたてさん。お目当ての新聞は見つかりましたよ。それなりに売れているみたいですねっ」

もみじが吾輩達の前に新聞を広げたのである。「文々。新聞」と書いていたのであるが、やはり読めぬ。

「へ、へー」

はたてよ力を入れるではない苦しいのである。

だつこにもやりかたがあるのである

「へ、へえ、店員さん。この新聞売れているの？」

はたてが吾輩を抱つこたまこすずに聞いたのである。新聞であるか、吾輩は前に見たことがあるのでけいねが障子の間をこう、掃除するのに便利と言つていたのである。新聞がほしいということとはみんな綺麗好きなのであろうか。

「え、あ、そうですね。結構売れます。最近は定期購読を望んでいる人もいてですね」
こすずよそこにいたのであるか、てーきこーどくとはよくわからぬが、きつとおいしいものであろう。おお、う。
ぎゆううう。

はたてよ吾輩をそんなに抱きしめたら痛いのである。うにやあ、うにやあ。吾輩はくねくねして見るのであるが、はたては吾輩に気がつかぬ。

「ふ、ふーん。定期購読……あ、貴方も面白いと思う？」

「んーそうねー」

こすずは指をたてて顎の下につけたのである。それからちよつと上を向いて考えているのであるな。吾輩もちよつと真似を試みるのである。しかし、吾輩は今考えるこ

とがないのである。どうするべきであろうか……そう思っているともみじと目が合ったのである。

もみじの好きなものを考えるのである。ううむ、ううむ。こがさではないであろうか。

「なんだろうか、この猫にいつも不本意なことを想われている気がする」

もみじが吾輩をじとつと見て言うのである。はたてはがそれを聞いて言うのである。

「いや、猫と交信しないですよ」

「してませんよっ」

そうである。吾輩はもみじがこがさのことを大好きなことをちやーんとわかっているのである。こがさもそう思うであろう、いや、こがさはどこに行つたのであろうか。端つこの方で頭に本を載せてバランスをとっているのである。

見なかったことにするのである。何をしているのかわからぬ。

そう思っていると今度はこすずが話を始めたのである。吾輩はこすずを見たり、もみじを見たり、こがさを見たりして忙しいのである。

「時々わからないこととかもありますけど、この文々丸新聞を読んできると新しい発見とかもあつて面白いですよ」

ぎゆううう。

むむむ。はたてよ吾輩をだっこするには強すぎるのである。うにやあ、うにやあ。もみじもなんとか言つてやるのである。

「はたて」

「な、なによ」

「これくらいでいいんじゃないか。だいたい知りたいことは知れたと思うけど」

「そ、そうね」

はたてともみじはそう言つてくるりと踵を返したのである。その肩をぐいとひっぱらたのである。はたてが振り向くと吾輩も振り向くのである。

ぷくつとほつぺたを膨らませたこがさが立っているのである。

「だめだめ！ 猫さんが苦しがつているじゃないですかー！」

びしつとこがさがはたてを指さして言ったのである。うむ。だっこにもやり方があるのである。

「ほら。貸してください」

「え、ええ」

吾輩ははたての腕からこがさの腕の中にお引越しである。こがさは甘いにおいがするのであるな、もしかしたらこがさの一部はおさとうかもしれぬ。こがさは吾輩を両手で優しく抱き上げてくれたのである。

「こういう風に、だっこしないといけないですよ。」

うむうむ。吾輩ははたてに怒っているわけではないのである。こう、もう少し優しくもってくれたらいいのである。はたても抱っこされたらわかるやもしれぬ。

吾輩はにやあにやあとこがさにはたてを抱っこするようにお願いしたのである。

「すりすりー」

するとこがさは吾輩のほっぺたに顔をすりすりさせてきたのである。くすぐつたいのである。こがさはすぐにきりりとした顔つきにもどつて、はたてに言ったのである。

「ほら。こうですよ、こう、やさしく！ 古い傘をこう開くみたいに」

「た、たとえがわかりにくいんだけど。ま、まあいいわ。ほらおいで」

また、こがさの腕からはたての腕にお引越してある。ただいまである。移動するとき
はこがさが吾輩の脇をもつてはたてに手渡したのである。

「……………、(こう)」

「……………うーむ」

こがさが唸りながらじろじろと吾輩とはたてを見るのである。じとーと吾輩をこがさが見てくるのである。吾輩も見返すのである。はたては今度は吾輩を優しくもつて
くれているのである。

にやー。

「にゃー」

にこつと笑つてこがさが返してくれたのである。

「うむごーかくですネ」

「は、はあ。ありがと」

「しょーじんしてくださいね」

「はいはい」

はたては言いながら吾輩をなでなでしてくれるのである。うむうむ。

「あ、あのー」

こすずが片手を小さく上げながら間に入ってきたのである。

「そ、そんなことよりも。本を借りたりされないうんだったら、その……あの、帰つてくだ

さい」

「この子、結構はつきりと言うのね。でもまあ、そうねお邪魔したわ。椀、小傘出るわよ」

はたて、吾輩。吾輩も出るのである。呼んでほしいのである。

にゃあ、みゃあ、なお。

「ど、どうしたのよ。まだ帰りたくないの？」

そうではないのである。それよりもみじとこがさを呼んだから吾輩も呼んでほしいのである。こがさが吾輩をじつと見ているのである。何か考えているのである。

こがさならわかるやもしれぬ！ 吾輩はみゃーおと鳴いてみたのである。

「んー。もしかして、私たちは抱っこしたのに椀だけ抱っこのテストをしてないのがダメなのかしら」

全然通じておらぬ。それにもみじの抱っこはなかなかである。

「な、なんでそこで私が出るんだ！」

「まあ、まあ、椀。ほら減るもんじゃないし」

「はたて……いや抱っこするだけですけど、たぶんこいつ小傘の言ったようなことを想っていない気がするんですけど」

はたてが吾輩の脇をもつてもみじに渡したのである。今日のお引越しは多いのであるな。もみじは吾輩をじーと見るのである。

「おまえ、ほんとに小傘の言ったようなことを想っているのか？」

別に思ってはおらぬ。にゃーと答えるのである。もみじはあと返したのである。

「ほら」

おお、優しくもちつつ、ゆらゆらと吾輩の体が揺れるのである。てくにしゃんではないであろうか。吾輩はゆっくりするのである。

「おぉー」

はたてが何か感心しながら板みたいなものを吾輩達に向けて。ぱしゅと光ったの

である。もみじがむすつとした声で聞いたのである。

「な、なんで私を携帯で撮るんですか？」

「いや、思い付いたのよ」

「は？ 何を？」

「私の新聞つて地味……手堅いつて評判じゃない？ だからこう猫の写真特集なんかし

たら受けるんじゃないかなって」

「……そ、それは私をはたての新聞に載せるつてことですか!!? いやですよ」

「目元に黒線入れるから」

「な、なんか嫌だ、というかお山の世間なんて狭いんだからすぐにはれるに決まっているじゃないか！」

ううむ、静かにするのである。こがさがなんだかほつぺが膨らませているのである。それにこすずは「おやま？」と首をひねっているのである。

「まーまー。とにかく権。ここはひとつ頼むわ。今度お酒をおごるから」

「だーかーらー……。な、なら私より小傘の方がいいでしょう。ほら小傘」

「ふーん」

「な、なんで突然すねているんだ」

「抱っこはうまいようですけど。権より私の方が猫さんと仲良しですからねっ」

「誰も競ってないだろっ！」

ここがさともみじがううううとにらみ合うのである。

そこでばんとはたてが手をたたいたのである。

「わかった。それじゃあ、二人ともこの猫を抱っこしたりして遊んでるところを撮るところにしたわ、二人にお酒をおごるそれで文句ないでしょう？」

もみじが「文句しかない……」と呟いたのである。吾輩は遊ぶのは大歓迎である。

しやしんをとるのである！

「それじゃ、椀と猫を写真で撮りまくるか」

はたてがそうだったのである。その後ろでこがさが「おー」と手をあげているのである。吾輩もそうしようかと前足をこう動かしてみるのである。うまくいかぬな。もみじもやるのである。

「はあ〜」

なんでため息をついているのであろうか？ 疲れているのなら吾輩に言うのである。そういう時はおひるねするのが一番である。おひるねをすると元気が出てくるのである。考えたただけであくびがでるのである。

「それにしても『椀と猫』って言い方はなんとなくっこいいわね。どことなく風流で小傘もそうおもう？」

「ねーでも傘と猫もけっこういいと思いませんか？」

「あー、なんとなく場面が思い浮かぶわ」

はたてとこがさがきやいきやいしているのである。吾輩も仲間に入れてほしくてとことこと歩くと、またため息が聞こえたのである。見上げるとこすずが肩を落としてい

るのである。

「いや、あのー、外でやってくれませんか？」

こすずも疲れているのならおひるねがいいのである。吾輩は今日はアトバイスが絶好調かもしれない。はたてよ、吾輩の話を聞いてほしいのである。吾輩ははたての足もとに引っ付いてアピールするのである。

「あ、あはは。くすぐりたい……。あんた毛がつやつやね」

つやつやであるか。吾輩は紳士であるからして毛並みのめんてなんすを毎日しているのである。はたてはにいつと笑って腰を落としたのである。

「それじゃ、まずはこう知的にやってみようか」

★

お店の中にあつた椅子をこがさが持ってきたのである。せいよーフウであるな。せいよーとは言ったことはないのであるが、すごく遠くらしいのである。

その椅子にもみじが座つたのである。着物のお尻の部分を押さえながら、ゆつくり座つたのである。吾輩、こう少し、着物の端をはみはみしていたずらしたくなるのであるが……。我慢である。

「いいわよー。じゃあ猫を膝に置いて」

「はたて……。ほんとにやるのですか？」

「やるわよ。あいつの新聞に負けてらんないもん。あくせんとつ、てやつをつけないとね」

「最近は何んだか文さんに似てきましたね……」

「……がつ!?!」

はたてが頭を抱えているのである。詳しくは聞き取れぬがぶつぶつと「ちがう」といつている気がするのである。

それはそうと吾輩はもみじの膝の上に乗るのである。吾輩はなかなか好きである。もみじはむすつとした顔でなでなでしてくれるのである。

「あー、取り合えず気を取り直して、一枚目撮るわよ。ほらこつち見て」

「みてー」

はたての後ろでこがさもにつこり笑っているのである。もみじと吾輩ははたての構えた板を見るのである。いやいや、けーたいであったな。さらに後ろでこすずが「かえつて」と低い声を出しているのである。

「ちよつと権、笑つてよ」

はたてが言うのである。

「笑つてつて言われても……」

もみじが両手をほつぺたにつけて目を泳がせているのであるな。吾輩も笑つた方が

いいと思うのである!

「椛。おてほんおてほん」

こがさが呼んだのである。そつちを見ると。

につこり、こがさが笑っているのである。両手の人差し指を伸ばしてほつぺたに着けているのである。うむうむ。なかなかであるな。はなまるである。

けいねもいいことがあると「はなまる」と子供に言うことがあるのである。はなまるとは何のことかはわからぬ。

「あ、いい。ほら椛もねこもこつち向いて」

はたてが言うのである。後ろではちゃんともみじが笑えているのであろうか。吾輩はとても心配である。そう思って後ろを向こうとしたのであるが、すぐにはたてが「ねこ、ねこ!こつちみてこつち」と言ったので振り向けなかつたのである。

吾輩が前を向くと、こがさとこすずが並んで目をぱちくりさせているのである。はたてが言うのである。

「ほら、椛。首をちよつとかしげる感じで、笑ってみて。そうそう」

そうはたてが言った後にこすずとこがさが向き合つて両手の指をあわせたのである。

「かわいー」

なんだかわからぬがこがさたちも仲良くなったようであるな。きやいきやいしてい

るのである。

吾輩はともうれいのである。うむ？　なんだかもみじの手に力が入っているのである。ぎゆうつと着物をつまんではいかぬ。しわになるのである。

ばしや。

吾輩が注意をしようとしたときにそう音が鳴ったのである。

「はい、おつけー。まずは一枚目ね」

おつけーと言われたのである、よくわからぬが。はなまるであつたやもしれぬ。吾輩はもみじのにやあ、と話しかけてみたのである。むむ、もみじよなんだか顔が赤いのである。それにちよつと震えているのであるな。

もみじは吾輩に気が付くと、ふいとそつぽを向いたのである。

「ふ、ふん。くだらない」

なんで怒っているのだろうか？

吾輩にはわからぬ。しかし、ううむ、吾輩の気のせいであろうか。そつぽを向いたもみじはちよつとだけ笑っているような気がするのである。

★

「それじゃあ、次は外ね」

はたてに続いて、もみじとこがさと吾輩とこすずがついていくのである。

うむ? こずすも遊ぶのであろうか、吾輩は大歓迎である。

「あの、なんかお店の人がついてきています、はたて?」

「別にいいんじゃない。椀。それにしても今日はいい天気ねえ」

はたてともみじが前を歩いているのである。こがさとこずすが何かを話しながら歩いているのである。吾輩は誰と遊べばいいのであうか、おおタンポポである。元気であろうか。

吾輩が前足でちよつと挨拶をすると、タンポポはゆらゆら挨拶を返ししてくれたのである。うむ。

「ほら、いくよー」

こがさが呼んでいるのである。吾輩はどこそこ後ろからついていくのである。

しばらく歩くと大きな木の下に來たのである。見上げるとなかなか高いのである。よい木陰であるな。吾輩は気に言ったのである。今度おひるねをしにこようと思うのである。

「それじゃあ次はここからしら」

はたてがあたりをきよるきよる見回しているのである。吾輩は眠たくなってきたのであるな。

「椀」。あんた。あそこのあたりまで歩いてから、こう見返り美人して」

「……見返りび……なんとかをするってどういふことですか？」

「普通に歩いて、普通に見かえればいいのよ。あんたかわいいから」

「……ぐるぐる」

「な、なんで威嚇するのよ。とりあえず着物姿の椀が歩いて行つて。その後ろをぼてぼて歩く猫つて感じの絵が撮りたいのよ。あーそうだ、できればお洒落な番傘でもあればいいんだけど……あつ……やば……」

おお、眠っていたのである。吾輩は体をふりふりして起きたのである。

……なんでもがさははたての真後ろで手をあげているのであろうか。

はたてもみじもがさには気が付いていないようであるな。

吾輩の出番である。とてとてはたての前に行つてにやあおと呼んだのである。こがさが後ろにいるのである。気が付いてあげるのである。

「いい？ 椀、振り返るんじゃないわよ？」

「わかつてる。なすびをさして歩く趣味はない」

こがさが後ろから近付いているのであるが……目がきらきらしているのである。手を綺麗に空に向けてあげているのであるな。吾輩も真似を試みるのである。こう、後ろ足でたつて、おお、難しいのである。

「あ、アー、そんなことをしたらアブナイゾー」

もみじが妙なしやべり方で言っつて、吾輩を抱っこしてから歩き出したのである。

「あ、もみ、椀！ あんたにげるなっ ぎやつ!?!」

はたての肩をこがさがつかんだのである。

かさのとんねるである

「傘のことなら私に聞いてくれたらいいじゃないですか」

ふふーんとこがさが胸をたたいたのである。吾輩はもみじの腕の中から抜け出て、地面に降りながらそれを見たのである。首元がかゆいのである。後ろ足で掻くのである。おほ。気持ちいいのである。

「あ、また今度ね」

はたてはこがさから目をそらしているのであるな。

「えっ!?! な、何ですか? 傘のことは傘に聞いた方がいいに決まっているじゃないですか?」

「それはそうかもしれないけど……でも、そのあれよ。ほら言うじゃない。河童の川流れてさ、ここは玄人の小傘もいいけど素人の私たちが考えるのもいいと思うのよ、うんうん」

はたてがうんうんと首を振っているのである。もみじは何故か腰を落として吾輩の後ろにのいるのである。吾輩の後ろに隠れても、少し大きすぎるやもしれぬ。隠し切れないのである。

吾輩はとりあえず毛並みのめんてなんすをするのである。はむはむ。こうちゃんと吾輩は身だしなみを整えるのである。

「で。でも私にいい考えがあるわっ」

こがさがいい考えがあるらしいのである。きつといい考えであろう。吾輩は応援しているのである。はむはむ。おお、ちようちようである。どこに行くのであるか？ 答えてはくれぬ。むしともこみゆにけーしよんがとれぬのは寂しいのであるな。

「なんだ、おまえ。蝶を食べるのか？」

もみじよ、吾輩は食べぬ。たまに妙なものを食べさせてくる人間もいるのであるが、ちやんと吾輩は選んで食べるのである。それに吾輩はちやんとお礼もするのである。

「でも、小傘はあれよねー。いい天気よねー」

はたてが空を見上げているのである。もみじがぼそりと「混乱しているな……」と言っているのである。

「私が、いい天気……?。ど、どういうことなの？」

「あ、あれよ。太陽みたいな笑顔で明るいなって」

「えっ? い、いきなりほめられても。え……えへへ」

はたてが一度こちらを振り向いたのである。すごい目が泳いでいるのである。吾輩に助けを求めているのやもしれぬ。任せるのである！

吾輩は駆けだしたのである。するりとこがさの真下に来たのである。にやあーにやー。

「んー。猫さんどうしたの?」

吾輩はこがさを応援しているのである。さっきの「いい考え」ではたてに言うのである。はたては今困っているのであるからして、きつと助かるのである。なんではたてが困っているのかはわからぬが。

「猫さんもおしゃれな傘屋にいきたいですよねー」

うむ。行きたいのである! かさやとはなんであるかわからぬが、きつと楽しいのである。

聞く前にこがさが吾輩の顎を指でこちよこちよしてきたのである。ううむ、吾輩はやられてばかりではいかぬ。前足で挟み込んでなむなむ、なめるのである。

「あはは、くすぐつたいわ」

こがさも今度もみじの指を舐めてあげるといいのである。

「えっ? いい考えってそれなの。小傘が自分の傘を使ってくれっていうかと思つたわ」

「あつ! それでもいいわ! ふふー、私の傘は雨傘だからこんない日に写真を撮るにはほんのちよつとだけ向かないかなー、なんて思つてたから」

ちらちらとかがさがはたてを見るのである。はたては両手組んでまた困ったような顔をするのである。

「あー、あー私も番傘見たいなー。新しいのほしいなー」

はたても行きたいらしいのである。かがさは「むう」と言ってから吾輩をなでなでしてくれたのである。そういえばこすずはどうしたのであるうか、見れば木陰で眠っているのである。気持ちよさそうであるな。

★

こがさと吾輩を先頭に人里の中のお店にやってきたのである。

暖簾がかかったそこをくぐると、

「わー。すーいですねー」

こすずが声をあげたのである。

吾輩もみるとお店の中は畳が敷いてあって、その上にいっぱい開かれた傘が置いてあるのである。吾輩はとんと畳に乗って冒険して見るのである。畳に置かれた傘はなかなか大きいのである。「持つところ」が伸びて、お花のように大きく傘が開いている間を通るのである。

傘のとんねるであるな。

「あつ、これすーい」

はたてが言ったのである。吾輩がみると傘に桜の花びらが付いているのであるな。吾輩ははたてに近づいて行って、持っている傘から桜をとろうとして見るのである。取れぬ。綺麗なのに残念である。

「あはは。これは絵よ。赤い傘に桜の花びらが描かれてるだけって……なんで猫に説明しているのかしらねえ」

絵であるか。うむ。不思議である。いっぱい桜の花びらがあるのである。吾輩は桜は好きである。

「わっあああ」

声が出た方を見てみると、こすずが手に傘を持っているのであるな。

紫の傘である。色はこがさと同じようなのであるが、むむむ。なんだかちよつとかっこいいのである。紫に青いアジサイが描かれているのである。

あれは絵であるな！ ちゃんとわかったのである。こすずはくるくるとそれを回しながら「大人っぽいなー」と言っているのである。吾輩も大人であるからして、傘を使うべきかもしれぬ……。

「……」

うむ？ もみじようしたのであるうか。おお。今度は紅葉が付いている傘であるな。吾輩は気に入ったのである。吾輩はそれをもみじに伝えようとしてにやーと言っ

て傘にばんちをしてみるのである。

「あ、こら。だめだ」

止められたのである。吾輩はすぐにやめるのである。怒られたら止めた方がいいのである。最近分かってきたのである。なんで止められたのかはわからぬ。

しかし、吾輩のばんちで傘がころころと転がるのである。紅葉が動いているのである。なんとなくいいのである。

「……これいいなあ」

「ふふふ。これが傘の魅力ですよ。なんとと言っても私たちは天気だつて変えられるんですから」

こがさがやってきくら椀に話かけたのである。

「わつ。突然なんだ。それに天気を変えるだど？ そんな大それたことを付喪神いや小傘ができるわけないじゃないか」

「ふつふつふつ。椀も分かかってないわー。私の真の力をみよー」

みよーと、言つてからこがさはきよろきよろして、閉じられた傘を見つけてとてとてもどつてきたのである。青い傘であるな。そこに白いものが描かれているのである。

こがさは椀と吾輩が入るように傘をさしたのである。

ぱつと青い傘が開かれるのである。

雪である。

おお、天気が変わったのである。こがさともみじが傘に描かれた雪を見ているのである。

「…………おどろいた!？」

「…………うん…………。あ、いや。その大きな声にびつくりする。少しは落ち着きを持ったらどうだ」

もみじはふんとどこかに行くのである。こがさは吾輩を見て片目をつむって「べー」と舌を出したのである。

「なんとなく最近権がわかってきたわ。猫さんもそう思う?」

吾輩も分かっているのである。もみじはいいやつなのである。

だからにやーと答えるところがさも傘を手でくるくる回して言うのである。

「にやー」

そういえば今日は一年が経ったやもしれぬ。桜とアジサイと紅葉と雪が見られると傘とは不思議である。

「あ、そうそう。はたてさん」

「小傘。あー。別にはたてでいいんだけど。ここはいい店ね。ところで何?」

「さつきお店の人と話をつけたわ安くしておくって。これくらいですね」

「…っ。け、けっこうするわね。…もしかして、あんた、ここへの案内料なんて入っていないわよねー」

「まさかまさか!」

「そうよねー。あはは」

くるりところがさは後ろを振り向いたのである。こがさは青い傘で顔を隠して、ベート舌だけ出しているのである。

かさのしたでおさんぽである

3つの傘が並んでいるのである。

いや、はたてともみじとこすずが並んで歩いているのである。吾輩はその後ろをとてとてついていくのである。

はたては桜の傘であるな。吾輩はその下に入って、上を見上げてみるのである。桃色の傘に桜の花びらが浮かんでいるのである。うむうむ、これは「絵」なのである。吾輩はちやーンとわかつているのである。

「んーんー」

はたてが何か歌っているのである。手元でくるくる傘を回しているのであるな。ごきげんなのはいいことなのである。吾輩は安心したのである。

少しゆつくりいくと、はたてが先に行つて今度はもみじの足元に来たのである。わがはいの周りがほんのり赤くなつたのである。吾輩が見上げるともみじの大きなおめめが吾輩を見ているのである。

手には紅葉の描いてある傘を、だいじそうに両手で持つているのである。傘の下に来たから周りがほんのり色が変わったのであるな。不思議である。

もみじは吾輩を見下ろしながら、ぱちぱちと瞬きをしているのである。吾輩に何か言いたいことがあるのであるな！ 吾輩はちゃんとわかっているのである。

「歩くのに……じやま」

すまぬ。吾輩は紳士であるからして、ちよつと横にそれたのである。

もみじは吾輩の横を歩いて前に行くのである。その時ちよつと小さな声で何か言っていたのである。

「いま……言葉が通じた？ まさかなあ」

よく聞こえなかったのである。もみじが吾輩を振り返りながら見ているのである。手の傘を少し傾けて小首をかしげているのである。そういえば小首とはなんであろうか。吾輩は首は一つしかないのであるが……もみじにはじつは大首もあるのかもしれない……。

「猫さん猫さん」

おお。こすずであるな。吾輩はそちらを見てみるのである。

につこりとこすずが笑っているのである。吾輩は、にやあおと答えてみるのである。こすずも「にやおにやお」と言っているのである。

！

にやおにやおとは新しいのである！ 吾輩もちよつと真似をしてみるのである。ぐ

る、うまく声が出せぬ。なかなかこうどな技であるな。こすずを見直したのである。こんど集会に呼んでもいいやもしれぬ。

こすずはアジサイを描いた青っぱい傘をさしているのである。「えへへ」とこすずもごきげんであるな。吾輩もうれしいのである。しかし、うれしいことをちゃんと伝えることは難しいのである。吾輩はなやましいのである。

「猫さんも傘を買ってもらったらよかつたのにねえ」

うむうむ。こすずの言う通りなのである。

……いや、やっぱいいのである。吾輩には傘は大きいのである。もらっても吾輩は啜えて引きずることしかできぬ。いや、そうであろうか、くふうをすれば意外といけるやもしれぬ……。

吾輩ははたてたちの後ろを歩きながら深く考えてみるのである。

傘を持つにはどうすればよいであろうか。

背中に乗せても大きいのである。

尻尾でこう、引つ張つてみてはどうであろうか。

いや、ううむ。それより啜えてみればいいやもしれぬ。

難題である。こんなに悩んだのはやまめを頭から食べるか尻尾から食べるか悩んだ時以来である……ううむ。ううむ。難しいのである。

カラカラ。

吾輩はその足音に気が付いて後ろを振り向くと、こがさがいたのである。不思議そうな顔をしているのであるがなんであろう？

「猫さん。なんか遅れてるわよ？」

うむ？ おお、考えている間にはたてたちがずっと前にいるのである。恥ずかしいのである。吾輩はすごく遅れてしまったのである。少し早く歩くのである……。おお宙に浮いているのである。

「ほら、だっこだっこ」

こがさがだっこしてくれたのである。

ちようどいいのである。こがさは傘に詳しいのである。こがさよ、吾輩が傘を持つためにはどうすればよいのであろうか。吾輩は前足をこうふりふりしたり、にやあーにやーと言ってみたりしてこみゆにけーしよんをとってみるのである。

「んー？ 猫さんどうしたのかしら」

きよとんとしているのであるな。こがさの眼は大きいのである。こがさは「んー」と言つて少し考えているのである。吾輩の気持ちをわかつてほしいのである。

「ふふ、私もそろそろ猫さんが何を想っているのかわかつてきたわ」

吾輩は騙されぬ。そう言つて吾輩の気持ちをちやーんとわかってくれる者はあまり

おらなかったのである……。

「傘がほしかったのね？」

??

こがさとこみゆにけーしょんができたのやもしれぬ……こがさよ、そうである！ 傘を持つには吾輩はどうすればよいであろうか？ いやそれよりもこがさとこみゆにけーしょんができてうれしいのである。

「私みたいなの！」

……………。

ふいつ。

「あ、あれ？ 猫さん？ なんでそつぽをむくの？」

……………。

「ちよ、ちよつともみじいー！」

たつたつたつとこがさが吾輩を抱きかかえたままもみじに泣きついたのである。

「なんだ」

「猫さんがそつぽをむいちゃった」

「な、何をしたんだ？ おい」

もみじは吾輩をなでなでしてくれるのである。うむ。こがさを許すのである。ほん

とはこがさとこみゆにけーしよんがとれて嬉しかったのであるが、やつぱりあまりわかつておらなんだのがちよつぴりがっかりだったのである。

とりあえず吾輩はみゃーと鳴いてみるのである。もみじはなんだか優し気に笑っているのである。もみじのなでなでは優しいのである。

「なんだ。撫でてほしかつただけじゃないか」

「ええ？ 私……私みたいな傘がほしいの猫さんって聞いたら……そつぽむかれちやつただけぞ」

「……あー。それは小傘が全面的に悪い」

「な、なんでえ？」

「悪逆非道だな」

「え!!?! 私みたいな傘って来たらそ、そこまで、むむしろ私の方が傷つくわ」
くすくすともみじが笑っているのである。

そこにはたてがややってきたのである。

「はい。ちーずー！」

ばしや。

吾輩とこがさともみじを写真に撮ったのであるな。はたては手元の「ケイタイ」を見ながらうんと頷いたのである。

「な、なにするんだはたて」

「椀が普通に冗談を言うなんてあれね。小傘と仲がいいのね。あ、あと何をするんだつてもともと今日の目的って記事用の写真とか取ることだしね。仲良さげな写真を撮つてあげたのよ、地底に行つたトリオの今つて感じだね」

「こがさよ。気になることがあるのである。ちーずとは何であろうか？　こがさは吾輩をみてなでなでしてくれたのである。いや、そうではない。

「あの一。はたてさん。なんで『チーズ』つていうんですか？　確か西洋の食べものですよね」

「こすずよ。ありがとうなのである。あとこがさよ首筋のあたりがなでてほしいのである。

「えっ？　そりゃあ、あれよ。……なんでかしらね。あー、んー。わからないわ」

「へー。天狗でもわからないことつてあるんですね」

「はたてともみじがこすずを挟み込んで、ほつぺたを両側からつねつたのである。

「にやにするんですかー」

「こすずが抗議しているのである。はたてともみじは両側から何か言っているのだ。「悪い口はこれかしら」とはたてが言っているのだ。

それよりも3人は傘を手持っているのであるからして、桜と紅葉とアジサイが重

なっているのである。こがさよ、今である、こがさも仲間にはい……らなくていいのである！

「あ、はたてさん！」

こがさがはたてから携帯をとったのである。それから片手で構えたのである。吾輩にも携帯に映ってる画面が見えるのである。

はたてともみじが仲良くほつぺたをつねっているのである。

「はい、ちーず」

ぱしやと、音がしたのである。

みずあそびである！

「うーん、結構写真をとったわねー。でもこう、パンチが弱い気がするわ」

はたてが立ち止まって何かを言っているのである。困っているのであろうか？ 吾輩も一緒に考えるのである。あとばんちも任せるのである。

そう思つて吾輩ははたての足に吾輩の前足をかけて、背伸びを試みるのである。はたては吾輩を見てくすりとしているのである。

「どうしたのよ？ そろそろおなかでも減ったのかしら？」

なんだか吾輩はいつもはらぺこのように思われている気がするのである……。はたてはしゃがみこんで吾輩と目を合わせたのである。吾輩も負けずにじーとみてみるのである。

じー

じー

「ぶっ。負けたわ」

よくわからぬがはたてに勝つたのである！ ううむ、少しうれいのである。はたて

よ、まだまだであるな。うむうむ。

「あ、そうだ。水辺とかがってどうかしら」

ぱちんと指をはたてが鳴らしたのである。

……それはどうやって鳴らすのであろうか！ 吾輩もこうやってみたいのである。吾輩は肉球をこう、こうくにくにと……ならぬ！

★

川である！ 吾輩は駆けだしたのである。

吾輩は河原はなかなか好きなのである。きらきらと水が流れていくのである。

吾輩は水の中を覗き込んでみるのである。小さな魚がいるのである。吾輩はここままで小さいものを食べたりはせぬ。ただ、前足をちよつといれてみるのである。

冷たいのである、ううむ。

……おう。よさげな石があるのである。吾輩はひよいと飛び乗ってみるのである。ううむ、その先にまた別の石があるのである。吾輩はさらに飛び乗るのである。

おお。すべるのである。吾輩は少し立ち止まったのである。こういう時は落ち着いて首筋を搔くのである。

「えへー」

吾輩がさつきまで乗っていたところにこがさが立っているのである。なんでかわか

らぬが笑顔であるな。

吾輩はにやおと答えておいて次の石に飛んだのである。

「よつと」

こがさがついてくるのである。なんでついてくるのであろうか。

まだ先に石があるようであるが小さくなっているのである。吾輩は川の流れを見ているのである。きらきら光りながら水が流れているのである。何か光っているのであらうか？

ううむ。わからぬ。吾輩はちよつと前足で水を搔いてみるのである。冷たいのである。吾輩は泳げぬわけではないのであるが、冷たいのはあんまり好きではないのである。

「お魚を探しているの？」

こがさが聞いてくるのである。別に探しているわけではないのであるが……うむ。やまめもどこかにおるやもしれぬ。きよろきよろと探してみるのであるが、蟹がいるのであるな。

「あ、カニさんだー」

こがさは蟹とも知り合いなのであろうか？ なら、吾輩も挨拶をしていた方がよいやもしれない。吾輩はそう思って、赤くて小さな蟹の前でにやあと鳴いてみたのである。

蟹がハサミをあげたのである!

おお。挨拶を返してくれたのである。ううむ。こがさのともだちにしては礼儀正しいのである。

「あれ? 猫さん、そのカニさんとお友達なの?」

挨拶をすれば友達といつてもいいやもしれぬ。

こがさは石の上でしゃがんで吾輩を抱っこしたのである。じつとこがさが吾輩を見て、にこつと笑ったのである。吾輩もなんとなくうれいのである。

「猫さんっていつも楽しそうなおおしてますねー」

そうであろうか? 吾輩はこがさのほうが楽しそうに見えるのである。

「よつと」

うむ? 後ろでもみじが近づいてきたのである。こがさと同じように吾輩が飛んできた石に乗っているのである。こがさは……。

「にやあにやあ」

何を鳴いているのであろうか? 後ろにもみじがいるのである。

もみじはやれやれとした顔をしているのである。吾輩はもみじのことなら何でも

わかるのである。もみじが手を伸ばしてきているのである。

「あ、あれ」

もみじがぐらつて。こがさの肩を押しした……

おお、空が見えるのである！

こがさが「あああ！」と変な声を出しているのである。

ばっしやーん。

冷たいのである！ 吾輩はあわてて、すぐに上がってふるふるふるとしたのである。

ふるふるふるふる。水を飛ばすのはこうするのである。もみじよ、びっくりしたので

ある。

そう抗議しようとしたのであるが、もみじはなんだかあわわわしているのである。

うむ？ 吾輩はもみじが見ている方にふりかかったのである。

「ふふ、うふふふふ」

こがさが川に腰までつかりながら笑っているのである。

前髪で目元がかくれて見えぬ。

「ふふふふふ……うふふふ」

しかし、笑っているのであるからして大丈夫であろう。それでも早く上がらねば風邪をひくのである！ 吾輩はもみじの裾を口でひっぱって、早くこがさを助けるようにあ

びーるするのである。

「あ、ああ、ああ、……その。こ、こがさ。わ、わざとじゃない」

じゃばーとこがさは立ち上がったたのである。ほっぺたが膨らんでいるのである。

「もんどーむよー!!」

こがさが手に水をいれて飛ばしてきたのである。ううむ。吾輩にかかったのである。もみじは「きやあ」と言っているのである。

「それーそれー」

ばしやばしやとこがさが水を掬ってはとばしてくるのである。ばしやばしやの間にはたてがばしやばしやと何か撮っているのがみえるのである。

「こら、やめろ、こ、こがさ。も、もう」

「それー」

もみじとこがさよ……。吾輩は、吾輩は……。一緒に遊びたいのである！

吾輩も川に入つてばしやばしやと前足を動かしてみるのであるが、こがさのようにうまくはいかぬ。こがさは水あそびのてんさいであるな。

「い、いーかげんにしろー」

もみじが水を手にためて投げたのである！ すごいのである。こがさの顔にぶつかつてぱーんと音がしたのである。

「い、いたーい。て、天狗のくせに本気でやったわねー」

「そ、それはお前が調子にのるからだ」

「私だつてまけませんよ」

「や、やめ」

今度はもみじの顔にお水がかかったのである。吾輩もやりたいたのである。うむ？

あれは……さっきの蟹であるな。一緒に遊びに来たのであろうか。こがさよ、こがさの友達が遊びたいようであるぞ。

「にゃ!!?」

もみじがぼしやーとこがさに水をかけたのである。

こがさはびしょ濡れであるな。服が肌にはりついているのである。吾輩も毛並みがこう張り付いたりするのであろうか？ 蟹よ、どう思うであろうか。いや、泡を出されても分からないのである。

「あんたたちー。もう十分に写真を撮ったから、そろそろ上がったら？」

おお、はたてである。吾輩は岸に上がってふるふるふると水気を飛ばすのである。

「ううー」

「おまえ……なんで。私がこんなことに」

びしよ濡れのこがさともみじがそれぞれ上がってきたのである。ふるふるするといのであるぞ、こうである。

こがさは顔をふるふると振って、青い髪から水を飛ばすのである。

「あんたたち、子供かー」

はたてが笑いながら言ったのである。もみじは「いや、だってこがさが」と言っているのである。

「いや、その言い訳の仕方こどもっほいわ」

くすくすとはたてが笑っているのである。そこに後ろからこすずがやってきたのである。こすずははーと言いながら、両方の掌を上にあげて。

「皆さん、こどもですわねー」

と言ったのである。

吾輩が振り向くとこがさともみじはお互いに顔を見合わせているのである。

★

「にや、にやにするんですかー！」

もみじとこがさが仲良く両側からこすずのほっぺたをつねっているのである。こすずのほっぺたはお餅のようである。吾輩もこう、引っ張ってみたいのである。

みことおはなしをしたいのである

お天道様がだんだんとオレンジ色になってきたのである。

吾輩は知っているのである。この時間の時はとてもとても……

影が長くなるのである！ 不思議であるな。影もこの時間は頑張るのであるうか、吾輩は後ろを振り返って長くなった影を見るのである。のびのびしているのやもしれぬ。

地面に寝転んでいる影を見ると、それがひとつ、ふたつ、みつつ、よつつに増えたのである。吾輩は逆に振り返ってみるとはたてともみじとこがさとこすずがいたのである。

遠くで鴉が鳴いているのである。

「結構いろんなどころにいったわね」

はたてが言うのである。うむうむ。今日も楽しかったのである。川遊びした後もしお散歩したのである。

「あつ！ 私もう帰らないと」

うむ？ こすずがいきなり大声をだしたので、吾輩はびくつとしたのである。こすずははたてに頭を下げているのである。

「今日はありがとうございます」

「ああ、おつかれさん。また今度貸本屋にいくかもしれないわ。その時はよろしくね」
「次はお金もつて本を借りてくださいいね！」

にっこりとこすずがいうのである。笑顔は大事である。はたては「やつぱ、あんたはつきりした性格ね」と言っているのである。はつきりは大切である。もみじとこがさにも挨拶してから、お昼にもらった傘を手に夕日の中に走って行くのである。
遠くで手を振っているのである。声は聞こえぬ。何となく寂しいのである。

「私もこれから用事があるの」

こがさが小さく手をあげて言うのである。もみじが言うのである。

「暇人なのに用事があるのか？」

「ひ、ひどい！ 私はこれでもとつても忙しいのよ？」

「ほう、じゃあ何の用事なんだ？」

「お墓に行つて、来た人を驚かせるの」

「……暇人」

「な、なによお！ これでも結構驚いてくれる人いるのよ。お墓の陰に隠れて、来た人に向らめしやくつていうとね」

「……ま、頑張れ」

もみじはそっぽを向いてはあと息を吐いているのである。うむうむ。こがさよ頑張るのである。

「な、なんかどうでもいい感じ……ま、まあいいですよ。毎日私にきよーふする人間達がいるんだから。今日は子供達も来るらしいしね。肝試しの引率だつてするのよ」

はたてともみじがなんだか憐みの顔でこがさを見ているのである。なんのでであろうか。

こがさはふふんと鼻を鳴らして、胸を反らしているのである。吾輩はその足元でにやあと声をかけるとこがさがなでなでしてくれたのである。それから片目をぱちんとういんくして、べつと舌を出したのである。

「じゃ、またね。猫さん」

吾輩の耳元でそう言うところこがさはからからと下駄を鳴らしながらどこかに走って行ったのである。遠くでこけたのである！ おお、頑張つて立ち上がっているのであるな。

「はたて。今日はもういいんじゃない？」

「あー、そうね。結構写真も撮れたし、ま、楽しかったしね。椀も楽しかったでしょ」

「……まあ……それなりに」

「あー、素直じゃないわね」。そこらへん文とそつくりよ」

「……………面と向かつて悪口を言わないでください」

「たぶん、あなたの方がひどいこと言っているわ」

はたては吾輩のまえでしゃがんだのである。それからにつこりと笑って、なでなでしてくるのである。

「あなたも今日はありがとね」

にやー。こちらこそである。

「どうせまた、会うんだろうけどな」

もみじが何か言っているのである。だんだんと周りが暗くなってきたのである。お月様が顔を出そうとしているのである。もみじとはたても何か話しながら、どこかに帰ろうとしているのである。

……………うむ。吾輩も帰るのである。なんとなく寂しいのである。間違っではたて達の後ろをついていこうとしてしまったのである。なんでかはわからぬ。

お天道様もおうちに帰ってしまったのである。吾輩はくしくしと足で首元をかいてみるのである。ううむ、どこに行くか悩みどころである。吾輩は近くにある良さそうな草の上で丸くなって考えるのである。

いろいろと考えてみるのである。いろんなものの顔が浮かんでは消えるのである。

……………お月様が見えたのである。内緒であるぞ。吾輩は少し寂しいのである。吾

輩は絶対にほかに言わないようにお月様にやあと言っておくのである。

うむ。これできつと秘密は守ってくれるのである。吾輩は毛並みのめんでなんすをしながら、ふと思いついたのである。巫女の顔が頭に浮かんだのである。

立ち上がって、伸びをして、吾輩はとことこ歩き出すのである。

なんだか久々に吾輩だけであるな。いや、コオロギの声が聞こえるのである。吾輩はまだ話したことはないのであるが、夜になるとおしゃべりになるのである。

今日は星もよく見えるのである。一度聞いたことがあるのであるが、空にも川があつて星が流れているそうである。ほんとは知らぬ。吾輩は空を見上げて、そんな星の川がないか探してみるのである。

見当たらぬ。いやいや、いかぬそれよりも吾輩は神社に行かなければならぬ。巫女は意外と早く寝るのである。吾輩はちゃんと知っているのである。

☆

神社の石段をとてとて登るのである。

石段を上ってから振り向くと結構眺めが良いのである。ただ今日はなんとなく振り返るよりも巫女の顔がみたい気がするのである。吾輩は段を登り切ったのである。

神社の境内には誰もおらぬ。虫の声しか聞こえぬ。ただ、吾輩は巫女がどこにいるのかは知っているのである。吾輩は神社の縁側に回って、とんと乗るのである。廊下にも

誰もおらぬ。

「ぐーぐー」

こまのが寝ている以外は誰もいないのである。こまのにはおふとんがかけてあるのである。たぶん巫女であろう。吾輩は巫女がやさしいのは知っているのである。

おお、明かりのついてる部屋があるのである。障子ごしに影は見えるのである。吾輩はとてとて歩いていくのである。障子は破つてはいかぬ。それをしたら怒られるのである。しかし、開け方がわからぬ。

にゃー

吾輩は障子の前でそういうのである。すると少しだけ開いて、巫女の目が見えたのである。

「何の用？」

よう……：そういうえば特に何もないのである。でもいいのである。吾輩はじつと巫女を見るのである。

「……：そ、そこにいられても困るんだけど、はあ、もう寝るんだけど。あんた夜に来ること多いわね。まあ猫に言つても仕方ないことだけど」

からつと障子が開いたのである。巫女は白いねまきになつているのである。おお、いつも結んでいる髪を下ろしているのであるな。毛を縛るのは辛そうであつたからいい

ことである。吾輩なら毛並みを結ばれるのはいやである。

「……………」

じつと見るのである。巫女は怪訝な顔をしているのであるな。どうしたのであるか？

「……………あんた、寂しいの？」

巫女よ、もしかしてお月様に聞いたのであろうか？　ううむ、ううむ、あれは秘密であつたはずである。

「……………あー」

巫女は頭を掻いているのである。

「なんで猫の表情なんて読んでいるのかしら、いつも変わらないのにさ」

巫女は吾輩を抱き上げるというのである。

「あんた、今日泊まりたいなら足をちゃんと洗いなさい。たまに廊下に肉球の跡が残っているんだからね。あれ、絶対あんたしかいないから」

覚えておらぬがすまぬ。吾輩は紳士であるからして素直に謝るのである。巫女に抱かれたまま廊下に行くのである。

「今日はどこに行つてきたの？　あんた無駄に顔広いからどうせ誰かと遊んだんでしょ？」

今日も楽しかったのである。それを伝えるために、吾輩は鳴くのである。

あのとのおれいなのである

ちやぶちやぶ。

吾輩は巫女に出されたお水を飲むのである。お茶碗にいれられたお水はおいしいのである。

「あんたって美味しそうに飲むわよね」

巫女が吾輩を見下ろしながら言っているのである。吾輩は振り向いてじつと巫女を見てから、またお水がほしくなったので飲み始めたのである。ちやぶちやぶ。こう舌をなんども出したるするのは楽しくなってくるのである。

吾輩と巫女は縁側にいるのである。今日は思ったよりも温かいのである。

巫女はごろんと寝転がって空を見ているのである。吾輩はお水を飲み終わって振り向いたのである。

みゃー。

ごちそうさまである。巫女は吾輩を見るのである。

「なによ？ おかわりなんて持ってこないわよ」

じろつと見てきたのであるが、吾輩はおかわりなんて頼んだわけではないのである。

ううむ。まあいいのである。吾輩は毛並みのめんでなんすをするのだ。はむはむ、ゆっくりしたときにやるのがいいのである。

ペロペロ、はむはむ、ごろんごろん。

うむ？ 巫女よ、なんで吾輩を見ているのであろうか。吾輩は……なんとなく恥ずかしいのである。巫女はうつぶせになって吾輩を見てくるのである。ほつぺたを縁側で押し付けているのであるが、なんとなくやわらかそうであるな。

「……………」

巫女が吾輩を見ているのである。なんであろうか、吾輩はじつと巫女を見ているのである。

「何見てんのよ」

吾輩のセリフである。巫女は肘でずりずり吾輩に近寄ってきたのである。むむむ、なんであろうか、吾輩を真剣に見ているのである。なんであろうか？ まあ、うむ。巫女である、変なことはすまい。

巫女が吾輩に手を伸ばしてきたのである。ゆっくりと吾輩の頭に手を置いて、なでなで。

おお、なかなかいいのである。なんだか珍しいのである。巫女は無表情で吾輩を撫でているのである。おお、もう終わりであるか？ 寂しいのである。

「…………ふん」

巫女はまたごろんと寝転がっているのである。うむ、吾輩はちよつと思つたのであるが、とことこ近づいてみるのである。それから黒い髪をペロペロと毛づくろいしてあげるのである。

「わつ…………あんた…………な、なんのつもりよ」

毛づくろいである。何もおかしくはないのである。なぜ怒つたのであろうか？ 吾輩にはわからぬ。でも、吾輩は紳士であるからして悪いことをしたらちゃんと謝るのである。

わがはいは巫女の横にごろんと寝転がって、のびのびするのである。体を伸ばしておくと走る時には調子が良いのである。

「…………」

空を見ると今日はお星さまがいっぱいいるのである。何かお祭りでもあるのであるうか？ 吾輩はみやあつと聞いてみるのであるが、返事をしてもらつたことがないのである。巫女をみると黙って空を見ているのである。

「猫のあんたに言つても仕方ないけど、星つてどれくらい遠くにあるのかな？」

巫女が吾輩を見ずに言うのである。ううむ、どうであろうか。隣町よりも遠いかもしれぬ…………。巫女が手を伸ばしてぐーぱーぐーぱーしているのである。じゃんけんであ

ろうか？ 吾輩はじゃんけんは得意である。

「星を手につかむ、なんて」

おお。巫女はお星様を手につかめるのであるか、さすがであるな。吾輩にも見せてほしいのである。とんと巫女の上ののって、手を見てみるのである。うむ？ 何も持つておらぬ。

「あんたねえ」

なぜか巫女が怒っているのである、吾輩はまたわからぬ。ううむ。難しいのである。しかし、巫女よ。吾輩にも見せてほしいのである、きつときらきらして綺麗なはずであるな。巫女は体を起こしたので、吾輩もとんつと降りたのである。

巫女は吾輩をじとつと見ているのである。何か言いたそうであるが、吾輩に言ってみるのである、吾輩はちゃんと聞くのである。吾輩はちゃんと前足について体をぴんとのばして、尻尾を体に巻いて姿勢よくするのである。

「……」

巫女は何も言わずに立ち上がったのである。それから部屋に戻っていくのである。途中縁側に寝ていたあうんを蹴って「風邪ひくわよ」と起こしていたのである。優しいのであるな。

吾輩はその後ろをとてとてついていくのである。

部屋に入ると巫女の布団が敷かれているのである。吾輩は畳の上でノビノビしてゐるのである。気持ちいいのである。巫女は部屋にろうそくの明かりをつけて布団に入ったのであろう。

布団の中からごそごそと何かを出しているのである、本であるな！ うむうむ。吾輩にはちやんとわかるのである。巫女は寝転がってそれを読み始めたのである。吾輩にも読ませてほしいのである。

近寄つて本の上に乗つてみるのである。

ふむふむ。わからぬ。いつか読めるようになればいいのであるが、よくわからぬ。

「ちよつとどきなきさいよ」

巫女は吾輩の両脇を掴んで脇にどけたのである。なんだか恥ずかしいのであるが、巫女はまた本を読んでいるのである。ずるいのである、吾輩も読むのである。

そう思つて本の上のもう一度乗つてみるのである。巫女はほつぺたを少し膨らませているのである。なんでであらうか？

「……」

吾輩はまた脇を掴まれて横にどけられたのである。

「なんで邪魔するのよ」

邪魔なんてしてないのである。吾輩も勉強したいだけであるな。吾輩はこうにやあ

と抗議するのであるが、巫女は言ったのである。

「遊びたいのはわかるけど、泊めてやるんだからおとなしく寝てなさい」

遊びたいと言っているわけではないのであるが、まあ仕方ないのである。吾輩は毛並みのめんでなんすでもするのである。ペロペロ。

ふるふる。

ごろんごろん。ふみふみと毛布を試してみるのである。なかなかいいのである。そろそろ眠たくなってきた気がするのである。そういえば巫女よ、何を読んでいるのだろうか？

『吾輩は猫である』

なんと書いてあるかわからぬ。巫女はたまに吾輩を見てくるのである。なんでであろうか？

「ねえ、あんたも名前はまだないの？」

わがはいわがはいである。変なことを聞くのであるな。巫女も巫女である。

「猫にそんなことを聞いても無駄よね。化け猫でもない限りは……ふあーあ」

巫女が大きなあくびをしているのである。吾輩もつられてあくびをするのである。眠たくなってきたのであるな。吾輩は体を丸めて目をつぶろうとしたのである。すると体がふわつと浮いたのである。

目を開けると巫女がいるのである。布団の中に入れてくれたのである。なるほど温かいのであるな。

「なんで猫なんかと寝るのかしら？」

なんかとはひどいのである。巫女は布団の中の吾輩を見ながら、布団を頭まで被つたのである。布団の中で巫女は吾輩に笑顔を見せたのである。吾輩は巫女が優しいことはちゃんとわかつているのである。

「一応言つとくけど、あんたは酒なんて飲んだりするんじゃないわよ」

お酒であるか。飲んだことないのである。

「濡れたつて知らないからね」

濡れるのであるか……。よくわからぬが、わかつたのである。

「そういえばあんた、いつの間にか蝶ネクタイなんてしているわけ。寝るときは外しなさいよ。ほら。誰に着けられたんだか」

それはこいしに着けてもらったのである。さとりがくれたらしいのである。

「ん？　これなんか裏に書いてある。読めないし」

巫女はおきあがつて明かりの下にネクタイを持って行つたのである。巫女よ何を見ているのであろうか？

『みこよ　ありがとう　なので　ある』

「……なにこれ？ 私に……お礼？ ああ？」

巫女が首をひねっているのである。吾輩はさどりの顔を思い出して、うれしくなったのである。

こまのもいくのである

びくびく

びくびく

うむ。

吾輩は耳をびくびくさせて起き上がったのである。体をしっかりと伸ばして、すくつと立ち上がるのである。吾輩は紳士であるからして、おねぼうさんはいけないのである。

「ん」

巫女はまだ眠っているようであるな。吾輩は起こさないようにお布団から抜け出すのである。吾輩は抜け出すのは得意だ。

「んん」

しまった……吾輩の尻尾が巫女の鼻をくすぐっているのである。いや、わざとではない。吾輩はその場で巫女の顔を覗き込むと起きてはおらぬ。幸せそうに眠っているのである。

雨の音がするのである。吾輩は外に出ようとして、部屋をぐるぐるしてみるのであるが、障子が閉まっかけて出られぬ。吾輩はじーと白いそれをみてるのである。

ばしいところ、破いてもよいのであろうか。

いや、巫女に怒られたことがあるからしてやめておくのである。

しかし、出られぬ。吾輩はその場でぐるぐる回ってみるのであるが、いい考えが浮かばぬので横になってみた。

尻尾でばしんばしんと床をを叩いてみるのであるが、巫女は起きる気配がないのである。吾輩は外に出たいのである。

焦ってはいかぬ。のんびり行くのである。吾輩は毛並みのメンテナンスをするのである。

ぺろぺろ。かりかり、はむはむ。

指の間をこう口でハムハムしておく綺麗になるのである。それにしても巫女はおきぬ。ねぼすけさんであるな。おなかをかいているのであるが、吾輩もなでなでしてもやぶさかではないのである。

吾輩は巫女の顔の前に行ったのである。ほつぺたが柔らかそうである。少しさわつてもいいとおもうのである。吾輩はパンチしてみるのである。おお、柔らかい。

「ん、ん」

巫女が何か唸っているのである。じーと吾輩が見てもそれでもおきぬ。軽く触ってみるのであるが、やはりおきぬ。

……………うむ。

吾輩は振り返って障子の前に来たのである。吾輩はぱりいつと破れるのが好きであるからして……でも前にけいねに怒られてしまったのである。ううむ、吾輩はしようじとにらめっこである。

少しくらい触ってもよいかもしれぬ。吾輩は手を伸ばそうとしたのである。

「んん、あんた何やってんの？」

何もやっておらぬ。吾輩はゆっくりと振り返って巫女にやーと挨拶するのである。

巫女は体を起こして吾輩を見ているのである。

そのままずいといと膝をすすめてきたのである。吾輩を持ち上げて聞いてきたのである。

「あんた、なんか悪さしようとしてなかった？」

目の前に巫女の顔があるのである。悪さなどしておらぬ。ただ少し障子をこう、触ってみようとしただけである。吾輩はじーと巫女の目を見ているのである。

「まったく」

巫女がため息をついたのである。

「あんた、人の言葉がわかってそうでわかってない気がするわね」

そうであろうか……吾輩はちやんと巫女の言っていることを聞いているのである。こみゆにけーしょんはなかなか難しいのであるが、吾輩は覚えているのである。

かららと巫女が戸を開けたのである。吾輩がその隙間からのぞくとやはり雨が降っているのである。こういう日はのんびりと神社にいるのがいいのである。

「あー、雨降ってるし。今日は確か紅魔館でパーティーだったんじゃないかしら。屋内だっけ？」

吾輩は巫女の開けたところからとこと外に出て、廊下でこてんと横になってみるのである。おお、良く雨が降っているのである。地面がバシバシなっているのである。

「あんた、雨の間だけだからね。ちゃんと明日にはでていきなさいよ」

わかつているのである。吾輩は振り返ると。巫女は吾輩のうしろでしゃがんでじつと見てきているのである。なんであろうか。手を伸ばしてきたのである。

なでなで。

なでなで。

なでなで。

うーむ。なかなかうまいのである。吾輩は巫女のことをほめるのである。ちゃんとなでなでができて偉いのであるな。

「まあ、雨なら逃げないでしょ、レミリアのやつもあんたを連れてこいつで前言つてた気がするからちようどいいかも。パーティーに連れていくつて……そういえばどうやって連れていこう」

安心するのである。後ろについていくのである。どこに行くのかはよくわからぬが、きつと楽しいのである。

吾輩は毛並みのメンテナンスにもどるのである。あたりを見回すと、遠くで顔半分だけ「こまの」が見えるのである。なんか羨ましそうであるな。

「霊夢さん……私にもなでなでしていいんですよ……？」

なんか言っているのである。

「なに、あれ？」

知らないのである。巫女よ、なでなでしてあげるのである。巫女はうーんと体を伸ばして部屋に戻っていったのである。

「着替えるからね。あんた後でご飯あげるから逃げないのよ」

ごはんであるか！ 楽しみである。吾輩は待っているのである。

そういえば昔どこかでちゅーるといふ美味しいものがあると聞いたことがあるのであるが、きつとやまめであろう。

「ずるいですよー」

こまのが廊下を滑って吾輩の前に来たのである。……！ 楽しそうである。吾輩も滑ってみたいのである。

「猫さんだけ。霊夢さんになでなでしてもらってずるです。私はたまに家事とか手伝っているのに！」

かじ、かじとは何であろうか。よくわからぬ。こまのは吾輩を抱き上げてぷくつとほつぺたを膨らませているのである。吾輩はこまの手をべろべろと舐めてみるのである。

「あーあ、私もパーティーにいきたいなー」

大きな声であるな。

「あーあー。れーむさんが私も連れて行ってくれたらー。私たまに家事もお手伝いして、お掃除もしているんですけどねー。あーあー」

「うっさい!!」

ばしいと戸があいてびっくりしたのである。そこにはいつもの赤い服を着た巫女居たのである。

「あんたは、くどくどとわざとらしく……」

「こ、こうぎですよー。霊夢さん猫さんのお世話をしますから私もつれていってくださいー」

「……………あー？」

巫女よ、こまのいいこである。吾輩がちゃんと面倒を見るから連れて行ってあげるのである。吾輩は迷子の扱いには慣れてるのである。

「どうせレミリアも細かいことは言わないだろうから、別にいいけど」
「やったー！」

「こまの吾輩をぎゅーとしてきたのである。

「ふわふわな毛並みですね——」

それほどでもないのである。

「それはそうとあんだ。連れて行ってあげるんだから数日、神社の前の掃除をするのよ
ね」

「え？」

「なに？ 嫌なの？」

「お、おうぼう。ま、まあ。任せておいてください」

「こまのは吾輩を床においてどんと胸を叩いたのである。

「あらっ？」

巫女はそれを見ずにこまの後ろを見ているのである。

吾輩も振り向くと雨が弱まっていたのである。こまも振り返ったのである。

青空がちよつと見えているのである。

「雨、やみそうね。通り雨だったのかしら」

「そうみたいですわねー」

「そうだ、レミリアとか咲夜がその猫を連れてくるように言つてたから、あんた逃げないように見張つてなさいよ」

「はーい」

吾輩は逃げぬ。すつと立ち上がつて、尻尾を体に巻きつけて背筋を伸ばすのである。

「ご飯持つてくるから待つてなさい、あ、あうんは自分用意するのよ」

「ふふふ、霊夢さん。私が台所にいくと猫ちゃんにげちやうかもしれませんよ。だから、ゴハンは持つてきても罰は当たりませんよ」

「そ、じゃあ。あんたは飯抜きね」

「そ、そんなあー」

「どうせ狛犬なんだから平気でしょ」

「そ、それはそうかもしれませんけどー!」

吾輩はとことこと歩いていくのである。巫女の部屋でくつろぐのである。

ぱーてーのじゅんびである

あうんの頭の上に吾輩は乗っているのである。

普段よりも高いところにいると新しい発見があるのである。うむ……たとえば……うむ。あうんの髪は柔らかいのである。

「猫さん。逃げないでくださいねー。私が霊夢さんに怒られますからね」

「うるさいんだけど」

巫女はずんずんと前を歩いているのである。あうんとその上に乗った吾輩には背中しか見えぬ。

それにしてもらくちんである。吾輩は自分で歩くのも好きであるが、こういうのもいいと思うのである。そう思ったら巫女が振り返ってきたのである。むむ、怖い顔をしているのだ。

「いい？ あうん？ 今日紅魔館でパーティーをするっていうけど、ちゃんとおなか一杯食べるのよ。数日は食べなくていいように」

「は、はい。で、でも霊夢さん。最悪ご飯を食べなくてもなんとかなりますけど、できれば毎日食べたいです」

「ちっ」

「し、舌打ち!?!」

そうである。ごはんは毎日食べなければならぬ。元気がなくてはよい遊びはできぬ。あうんも「ひどいですー」と言っているのであるからして、わがはいもちゃんと言つておくのである。

「なによあんたら……なんでそんなに息があっているのよ?」

吾輩とあうんは仲良しである。

……

しばらくあうんが歩いていると吾輩は眠たくなってきたのである。ゆらゆら揺られて、たまに毛並みのめんでなんすを舌で行っていると大きな建物が見えてきたのである。

おお、大きいのである。

赤い建物の周りを黒い柵が囲んでいるのである。どれくらい大きいのかというと、うーむ。そうであるな。どういつていいのであろうか。こう、うむ。大きなヤマメがこう100匹並ぶより大きいやもしれぬ。

吾輩はあうんの頭に乗ったまま入り口から入ったのである。庭であるな。背中に羽の生えためいどが大勢いるのである。どこからかい匂いもしてくるのを吾輩はきよ

ろきよろして探すのである。

「なによまだ準備中？ おら、そこ」

羽の生えためいどを巫女がけたのである。

「わっ？ なんですか？」

「レミリアはどこよ」

「お屋敷の方だと思います」

巫女はそれですんずん歩いていくのである。

「猫さん。ああいう建物をせーよー建築っていうのですよ」

あうんがお屋敷を指さしながら言ったのである。ふむふむ。せーよーけんちくであるな覚えたのである。それはなんであろうか。

「神社みたいに木造じゃなくて、レンガっていうかたーくて、頑丈なものでできているんですよ。粘土とかをこんがり窯で焼いて作るらしいです」

うーむ。こんがり焼いてできたおうちであるか……うむうむ。吾輩は知っているのである。正月に巫女がおもちをこんがり焼いているのであるからして、同じ作り方であるな。……もしかしたらおいしいやもしれぬ。

吾輩とあうんは巫女の後を追って建物の中に入っていくのである。中はかなり広いのである。天井が高いのはさとのところみたいである。

「あ、レミリア」

吾輩は巫女が叫んだ時にほんとあうんの頭から地面に降りたのである。……!!! おお、地面が柔らかい。それにふかふかである。!!! お

「ああ、絨毯ですねー。これはいいですねー」

吾輩とあうんは地面でごろごろしていた、さくやの腕の中にいたのである

!???

吾輩が見上げるとさくやがほほ笑んでいるのである。なでなでしてきて、おおそこ、そこ。……いや違うのである。いつの間にかさくやが現れて吾輩はなでなでされているのはわけがわからぬ。

吾輩はももぞとして地面におりたのである。さくやの腕の中にいる。

?????

吾輩は意味が分からぬ。みゃーと巫女に言ってみると、巫女はこめかみを抑えているのである。

「あんたねえ、猫に能力使ってんじやないわよ」

「あら、別に構わないでしょう?」

さくやと巫女の言うことがよくわからぬ。詳しく教えてほしいものである。ただ、ぱんと音がしてびくつと吾輩はそちらを見ると、れみりあが手をたたいた音であった。

「はいはい。まあ、よく来たわね霊夢。今日はゆつくりしていくといいわ。まあ、まだパーティーの準備中だけど」

「早く来て損をしたわ」

「……………そんなことはないわよ、霊夢」

「なによ」

れみりあが巫女ににじり寄るのである。ニコニコしておる。…………うむ？　そういえばあうんはどこに行ったのであろうか？　どこにもおらぬ。

「ふー。重いものを外に捨てるのは疲れるわ」

さくやはなぜか疲れておるようであるな。さくやはあうんがどこに行ったかしらぬのであろうか。聞いてみてもほほ笑むだけであった。

「ふつ、霊夢、今日のパーティーはドレスコードを採用している」

「どれす、こーど。何よそれ。新しいスペルカードかしら」

「いいえ。外の世界ではよくあるしきたりよ。決まった服装をしないとパーティーには参加できないのよ」

「なによそれ」

れみりあは両手を組んでにこりとしたのである。

「安心して霊夢。ちゃんとあなたのためにドレスを用意したわ。さあ、咲夜。案内して

あげなさい」

「ちよつと待ちなさい。私はわけのわからないものを着る気はないわ!」

巫女よ。よくわからぬが頑張るのである。

「いやあ。あきらめたほうがいいですよ」

うむ? 赤い髪の背の高い女性が来たのだ。

「あ? 美鈴。あんた」

巫女も振り向いたのである。

「そうそう、レミイの思い付きでも、この場はあんたが不利ね」

むむ、また誰か来たのである。ふわつとした帽子をかぶった紫の髪の少女である。

「パチュリー……」

巫女がつぶやくのである。

「あんたたち。何私を困んでんのよ」

「困むなんて人間きが悪いわ霊夢。何も取って食おうっていうわけじゃないわ」

れみりあが言うのである。そうであるとして食べるのはいかぬ。

「パチエのいう通り思い付きみたいなものだけど。この幻想郷に我々の文化を広げる必要があると気が付いたのよ霊夢」

「ああ? 何を意味の分からないことを言ってるのよ」

「別に難しいことじゃないわ。幻想郷はもともと我々がいた場所とは全く違う文化があるからこそ、小さな不満がいっぱいあるのよ。例えばお米なんて私は食べないし、紅茶を手に入れるだけでも一苦労だけど、苦い抹茶は売ってたりね」

「はあ〜？」

巫女が胡散臭そうな顔をしているのだ。

「ああ、別に霊夢が理解する必要はないわ。この機会にドレスに聞かざる紅魔館の豪華絢爛なパーティーで幻想郷全体の雰囲気をご臭くて貧乏な感じから変えるのよ。それにはとりあえず霊夢。あなたからドレスアップする必要があるわ」

「……………それで、あんたら全員出てきたの？ いい!? そんなものを絶対着たり……………だせー！ なにこれー！」

いつのまにか巫女が車輪のついた檻に入れられているのである。それをさくやがきゆるきゆる車輪の音を鳴らしながら持つていくのである。

うむ!? 吾輩はいつの間にか地面に降りているのである。なんだかほつとするのである。さくやが霊夢に話しかけるのである。

「戦闘態勢になつてない巫女なんてこんなものね霊夢。そう暴れないの。まあ、あんたなら本気になればこれくらい壊せるかもしれないけど。お嬢様のもうそ……………構想はともかくただ外の世界のかわいいドレスを着てみるのはいい経験と思うわ」

廊下の向こうかられみりあの声がしたのである。

「咲夜！ さっさと終わらせなさい。他のお客の相手もこれからいっぱいあるんだからね」

「はい！ お嬢様」

巫女は檻の中で黙っているのである。ちよつとほつぺたが膨らんでいるのである。吾輩は檻の隙間から入ってその膝の上で寝そべったのである。

どれすをきるのである

うむうむ。

絨毯の上は柔らかいのである。吾輩はなかなか気に入ったところであるな。しかし、寝そべって毛並みをなめるといつもよりきれいにすることができるといふような気がするのである。

しゅっしゅつと、音がして吾輩はそちらを見るのである。

大きな鏡の前に巫女が座っていて、その黒い髪をさくやがブラシでこう、しゅっしゅつとしているのである。こうなんといつていいであろうか、あれは毛並みのめんとなんすであるな。

吾輩はちゃんとブラシは知っているのである。前にふとにやつてもらったのである。

「ふん」

巫女は不機嫌そうであるな。吾輩はさくやの前に行つてじーつと見るのである。吾輩はもぶらっしんぐをしてほしいというわけではないのである。ただ、見ているのである。

「ふふ。猫さんはあとでね」

うむうむ。

いや、別に催促したわけではない。だがこう、ブラシでしゅっしゅしてもらうのはやぶさかではない。

「とりあえずこの目つきの悪い巫女の着替えから終わらせないとね。さ、お嬢様が用意したドレスをどれでも選んでいいわよ」

「私はこれでいいわよ」

巫女が自分の服をつまんでいるのである。

「それじゃ意味がないでしょ。こつちの部屋よ。早く」

「ひ、ひっぱるんじゃないわよ」

巫女がさくやに連れていかれるのである。吾輩はそれにとことこついていこうとして、巫女が振り返ったのである。

「あんたはここにいなさい！」

ううむ。なぜであろうか、吾輩は止められてしまったのである。

やることがない。仕方がないので、後ろ足で顎をかいてみるのである。おお、いい気持がよい。

☆

吾輩はあくびをしたのである。退屈であるな。巫女もさくやも戻ってこぬ。

吾輩はすくつと立ち上がってから、のびのびして体をほぐすのである。体を動かす前にはちゃんとのびのびをするのが必要なのである。今度こがさにも教えてあげねばならぬ。

とことこ。吾輩は巫女の歩いて行ったほうに向かうのである。小さなドアの前にさくやが椅子に座っていたのである。

「あら、猫さん。こつちに來たのね。あなたのご主人様は中でドレスを選んでいるわ。猫さんもついてこないように言われたけど、私も追い出されてしまったわ」

ご主人？ 何のことであろうか？ 吾輩はよくわからぬが、にやあとあいさつをしてから、ドアをかりかりしてみるのである。

「なにかしら。入りたいの？」

入りたいというよりも体が勝手に動いたのである。

しかし、さくやがちよつとだけドアを開けてくれたのであるからして、吾輩はちゃんとお礼を言つてから中にするりと入つたのである。

ううむ。いい匂いにする部屋であるな。服が並んでいるのである。……ちゃんとわかつているのである。これがどれすであるな！ 吾輩もたまには着たほうがいいのか？ しかし大きすぎる気もするのである。

物音がしたのであるからそちらに歩いていく。吾輩は用心深いのであるから物陰か

ら顔を半分だけ出して、様子をうかがったのである。

巫女が赤いどれすを着て鏡の前でくると回っているのだから。黒い髪にはいつものりぼんがないのであるな。すかーとがひらひらとうごいているのである。吾輩は危うくそれに反応して飛び出してしまいそうになったのである。

「……」

なんとなく楽しそうである。鏡に手を置いて少しうれしそうにしている顔が見えるのである。うれしいことはいいことであるな。吾輩は物陰からじっと見ているのである。

巫女はどれすのを両手でつまんでちよつとお辞儀したのである。……むむむ、紳士である吾輩にはわかるのである。あれはあいさつの練習であるな。

吾輩もするのである。とことこと歩いて、巫女にやあーと声をかけてみるのである。挨拶はちゃんと元気よくするものであるな。

「……!!! つー!」

巫女が顔を真っ赤にして吾輩を見たのである。ぐぬぬという顔をして、何も言わぬ。

巫女は吾輩を指さして怒っているような顔をしているのである。しかし吾輩は何もしてはおらぬ。

「あんた……いや、猫に何を言っても仕方ないわね。はあ」

しんがいである。吾輩はなんでも聞くのである。悩みがあるならなんでも言うのである。またたびのいっぱいある場所も教えるのである。

「何か言いたげね。まっ、どうでもいいけど」

巫女は吾輩から目をそらして、手に白い手袋をしたのである。寒いのであろうか？

吾輩も一度だけいねにてぶくろをつけてもらったことがあるのであるが、あれはかりがができないのでいかぬ。

☆

吾輩はお屋敷の中を探検するのである。

巫女とさくやが話し込んでいる間に出てきたのである。ぱーていーとやらはまだ始まらぬようであるな。見れば忙しそうにめいどが準備をしているのである。

吾輩も手伝いたいところであるが、何をすればよいのかわからぬ。仕方ないので絨毯の上で寝そべってじーとみていたのである。いろんなものを持っためいどが歩いているは戻ってくるので楽しいのである。

ふと、刀を持ったものが通りかかったのである。黒い丈の短いズを着ているのであるな。ようむであるな。吾輩を見るなり、剣を抜いて、ふーつといかしてくいたのである。

……まあ、おちつくのである。吾輩は寝そべっているだけである。

「な、なんだ猫か。危うく斬るところだったわ」

よくわからぬが吾輩は危なかつたやもしれぬ。ようむは吾輩の近くでぐるぐる歩き回っているのである。

「くそ。いきなりドレスに着替えさせられるなんて不覚だわ。というか私の服はいったいどこに行つたんだ。こんなに短いスカートなんて正気じゃないわ」

かりかりと爪を噛んで、顔を赤くしているであるな。よくわからぬが落ち着くのである。吾輩はじつと見ながらそう思つたのである。

おお。黒いドレスにはお花の模様がついているのである。なかなか似合っていると思うのである。吾輩はそれを伝えようとしてうまくいかぬ。みゃーといえいいのか、ぐるぐるといえば伝わるのかわからぬ。

こみゆにけーしょんは難しいのであるな。

「はずかしい……」

顔を赤くしたようむはそれだけ言つてどこかに行つてしまったのである。

次に歩いてきたのはなんであろうか。……大きな木の桶が歩いてきたのである。吾輩は興味がわいてそれをじーっと見つめていたのであるが、吾輩の前で木の桶が止まつたのである。

桶が動いて中からふと顔を出したのである。

「おお、猫ではないか」

ふとであるな。吾輩は興味がなくなつて寝そべるのである。

「ふふ。我が来たとなるとそうおなかを見せるとは。なでなでしてほしいのであろう！
そうであらう！」

ふとが吾輩の背中をなでてくるのである。なかなかの手並みであるが、ふとは何をしているのだろうか。

「今日は太子様も来られるからな。先に敵情視察というやつだ、それにしてもおぬしはどこにでもいるのう。高麗野もどこかにいるのか？」

こまの……あうんのであるな。どこかに行ったのである。

ふとはしきりに吾輩をなでなでしていると、後ろから来た数人のめいどに取り押さえられてどこかに連れていかれたのである。「は、はなせー」といつていたのである。

吾輩は頭をふるふるして立ち上がり、首を後ろ足でかいかいしてみるのである。

そこでふと思つたのである。ふと、というのはふとではなく。こう……ふとおもつた。ううむ、ふとのことではない！ 邪魔しないでほしいのであるな。

ようむもふとも来たのであるが、もしかするともつと大勢の吾輩の知り合いがくるやもしれぬ。………楽しみであるな。

ちかしつのしょうじよである

だんだんと人が多くなってきたのである。いや、人かどうかはわからぬ。どちらかという妖怪が多いやもしれぬな。まあどちらでも吾輩はこみゆにけーしよんはとれるのである。

そういうえばおつきさまも呼べばよかつたかもしれぬ。たまには一緒に歩くのはいいのである。吾輩はそう思つて外に出ようと思つたのであるが、よく道がわからぬ。

右に曲がつてから、左に曲がつたりしてみるのである。たまに通るかかるめいどに道を尋ねてみるとなでなでしてくれるのであるが、違うのである。そういうことではない。

巫女もどこに行つたか分からぬ。吾輩は後ろを振り向くと、こいしも吾輩に合わせて後ろを振り向くのであつた。

……？ 吾輩は今何かおかしなことを言つたのではないであらうか。きよろきよろしてみてもおかしいことはないのである。吾輩は安心して歩きだしたのである。

むむ、下に降りる階段があるのである。そばには「危険 降りるな」と書いてあるのである。これは……何と読むのであらうか。けいねに聞けばわかるのやもしれぬが、吾

輩は文字は少ししか読めぬ。いや……あまり読めぬ。

とにかく降りてみるのである。吾輩の足はあまり音をたてぬが、こつこつと階段を下りる音が響いているのである。吾輩が後ろを振り向くとこいしも後ろを振り向いているのである。

おかしいところはないのであるな。

……吾輩はなにかじゅーだいなことを見落としているのやもしれぬ。なんであろうか……。まあ、いいのである。

地下はひんやりしているのである。絨毯ではなく石だたみであるな。これはいいのである。こう、のびのびと寝転がるととても気持ちいいのである。吾輩はこういうことをちゃんと知っているのである。

おつとこうしてはおられぬ。吾輩は探検を続けるのである。ほのかに明かりがあるだけで暗い廊下を歩いていく。ううむ。足音が吾輩のすぐ後ろから聞こえてくると思うのであるが、こいし以外はだれもおられぬな。

「赤い扉だー」

うむうむ。赤い扉であるな。吾輩はかりかりとするのである。こうしていると誰かが明けてくれるのやもしれぬ。吾輩は障子であれば、こう隙間に前足を入れて開けることはできるのであるがドアは難しいのである。

「どうぞー」

おお、一人でにドアが開いたのである。吾輩は中に入ってみるのである。

そこには大きなベットがあったのである。部屋の隅には青い炎がゆらゆらと動いているのであるな。だんすであらうか。

「入ってきたのは誰？」

ベットの上で足を抱えて座っている少女がいるのである。背中から羽が生えて、おお！ 寶石のような羽であるな！ とてもきれいだである。

「猫？ それにあんたはどこの誰？」

「私？ 私は古明地こいしだよ」

おお。こいしである。いつの間にかいたのであらうか。いつもの帽子と、白いドレスにお花をいっぱいつけているのである。なかなか似合っているのであるな。

「……まあ、だれでもいいけど。とりあえず出て行ってくれない？」

座っている少女を見ると金髪で頭の横で髪を結んでいるのであるな。吾輩は思うのであるが、吾輩も結んでみたいのである。

「じゃあ、でていこっか」

こいしが少女の手をつかんで引つ張ったのである。

「ちよ、なにすんだ。出ていくのはあんたと、この……猫！」

こいしは頭を傾けて少女を見ているのである。

「あなたの名前は誰ですか―？」

「……フランドール・スカーレット。ここに来たのならあいつ……お姉さまにもあつたんでしょ。今日は変なお祭りをするから私はここにいますよ」

「じゃあ。フランでいいね。さあ、いこいこ」

「だから！ 私はここにいて、それになれなれしく。押すな！」

こいしがふらんの背中を押して外に出そうとするのである。ふらんはどらの前で外に出ないように壁に手をつけて踏ん張っているのである。

「よいしょ。よいしょ」

こいしよ。頑張るのである。

「お前たちは何が目的だ！」

焦ったようなふらんの声が響くのであるが、吾輩は見ているだけである。しかしふらんよ。ちゃんとお外で遊ばねばならぬ。外は気持ちがいいのである。

「もーおうじようぎわがわるいなー」

「……なんで外に出そうとしているのよ。私は部屋にいて言っているだろ」

うむ？ 吾輩の脇をこいしが持ったのである。そのままふらんに吾輩は渡されたのであるが、吾輩はものではない。ふらんにだっこされたまま目が合ったのである。

えてみるのである。

「嘸むな！」

怒られたのである。吾輩はにやーとちゃんと謝るのである。

「……………フラン！　そういう時はね」

こいしがぐるりと振り返ったのである。ドレスのスカートがふわつとしたのである。

「にやー」

こいしが吾輩に言ったのである。何を言っているのであろうか。吾輩はきよとんとしているところいしがふらんに言うのである。

「猫さんにはちゃんとかやーとかなーって言わないと伝わらないよ」

「……………は？」

「フランも猫さんと会話するならにやーって言わないと」

「いやだ！」

「ほら、にやーって。ね。猫さんにはわかるもんね」

わからぬ。何を言っているのか全然わからぬ。

ふらんが吾輩をちらりと見たのである。ほつぺたをもごもごさせて、顔をそらしながら言ったのである。

「……………にや……………」

おお、ふらんが赤くなつたのである。こいしは「もう少しわかりやすいほうが……」と言っているのであるが、吾輩はどっちでもいいのである。

「も、もういい！ 私は部屋に帰る。ほらあんだの猫でしょ」

吾輩をふらんはこいしに渡そうとするのであるが、吾輩はものではないのである。こいしの胸元から抗議のためにふらんの顔をじーつと見るのである。

「な、なによ。なんでそんな顔で見るのさ」

「猫さんはフランもパーティーに参加してほしいうて言っているんだよ」

「はあ？ いやよ。めんどくさいし」

こいしよ……確かにそれもいと思うのである。ぱーていーにさんかしてほしいのである。吾輩とこいしはじーつとふらんをみたのである。

「なによ。なんでそんな顔で見るの？」

壁際に追い込むのである。ふらんは壁に背中をつけて顔を背けようとしているので、こいしがささつとまわりこんだのである。逃げられぬのである。

「……………お姉さまに叱られても知らないからね！」

「わーいー！」

吾輩を抱いたままこいしがふらんの手をぎゅつと握つて歩き出したのである。

来たときは吾輩だけできたつもりであつたが、帰りはふらんとこいしが増えたのであ

る。

にぎやかになるのはとてもいいことである！

ぱーていーでいろんなどもだちとであうのである

とととと、とこいしが階段を上がるのである。

吾輩もとつとこそのあとを追うのである。

こいしが振り返った。

「ねえ、フライン。早くきてよお」

「……うるさい」

なんだか警戒するようにふらんも吾輩の後を歩いてきたのである。

「あいつ……お姉さまに見つかったら面倒だし」

「お姉ちゃん……私にもお姉ちゃんがいるんだけどとつても優しいよ」

「ふーん。どうでもいいかな」

ふむ、よく考えたら吾輩にも兄弟はいたのであろうか。よく覚えておらぬ。

「ま、いいや、おなか減ったし、いこいこ」

こいしがふらんの手を引いてどんどん行くのである！ 吾輩はふかーく兄弟のことを考えていたのであるからして、あわてて後を追っていくのである。



ぱーていーとはいいいにおいがするものであるな。大きなお庭にてーぶるがいつぱいあるのである。上には見たこともないごちそうが並んでいるのである。その中にやまめもあるやもしれぬから吾輩はつま先立ちをして覗こうとしてみるのだ。

するとこいしが吾輩をすつと抱きかかえてくれたのである。

「ねーさんって、何食べるの？ 骨？」

骨は食べぬ。

「おりんはよく集めていたのは食べる気だったのかしら。まあ、いいや」

こいしが走ると吾輩もらくちんである。うむ？ あれは知った顔である。刀を持った少女がよーむであるな。吾輩は挨拶をしようとしてにやーとあいさつを試みるのだ。

よーむはさつきみたドレスを着ているのである。なかなかよいのであるが、刀はおいできた方がよかつたのである。手に皿を持ってもぐもぐと串に刺さったおにくを食べているのだ。

こいしはとことこ寄って行って、よーむの皿にある串を全部取ってしまった。

「もーらうねー」

「……うーん。おいしい。あれ!? さつきまでここに!? あれ?？」

こいしよよーむが何か探しているようであるが、いいのであろうか。吾輩はこいしの肩によじ登って、地面を探し回っているよーむをじーとみているのである。

「もぐもぐ。あ、フラン、はい」

よーむからごーだつした串をこいしはふらんに与えたのである。分けるのはいいことである。しかしふらんはじつとみてぷいっと横を向いたのである。

「別に要らない」

「はい」

こいしはその口元にお肉を近づけたのである。

「いらぬいって。ぐぐ」

お肉が入ったのである。ふらんはもぐもぐと食べているのである。ううむ少しこいしをにらんでいるのような気がするのであるが、まあいいのである。それよりも吾輩のごはんはどこであらうか。

「あーおなかいっぱい」

舌を出してペロリと唇をなめているこいしに吾輩はこーぎするのである。

「にやーにやー」

こいしも吾輩のこーぎに負けじとなんか「にやーにやー」言っているのであるが、何を言っているのかわからぬ。吾輩はそうやってこいしの手からこーぎのために地面に

降りたのである。

「おお、その猫は」

うむ？ 聞きなれた声があるのである。振り返らずともわかる！ ふとであるな。だから振り向かぬ。

「……いや猫よ。こつちを向いてくれ。おーい？」

振り向かぬ。吾輩はいま忙しいのである。すると頭をなでてこようとする手が見えたので、するりと吾輩は交わしたのである。

「が、がーん」

ふとがしよつくの顔で何か言っているのである。口で「がーん」と言っているのは何を言っているのだろうか？ 吾輩も真似したいところである。にやーん。

「お、おぬし。我との友情を忘れたのか？」

ゆうじよう……？ ふとが涙目で吾輩に何か言ってきているのであるが、よくわからぬ。いや……それよりもその手に握っているのは！ 串にさきつたやまめであるな!!
こんがり焼けているのである。

にやー！

吾輩は言ったのである。ふとは一度手のやまめを見てふふんと鼻を鳴らしたのである。

「ふふ、しかたないのお。これが欲しいようじゃが、我もただでとはいかぬ」

その手からこいしがすつとやまめをとったのである。それからもぐもぐ食べて串だけふとの手に返した……早業である。吾輩も反応できなかった……

やまめを持っておらぬふとに用はない……ふいつと顔をそらしのである。

「お、おい。猫よ。あれ!?!? なんで? 消えているのじや??」

しかしふとがやまめを持っているとすればどこかにあるはずであるな。ううむ。

「な、何よ」

吾輩はつまらなさそうにしているふらんをじつと見るのである。やまめを探してほしいのである。こいしでは先に食べてしまうやもしれぬ。

「何がいいのよ」

やまめを探してほしいのである。吾輩は身振り手振りでこう、なんとか説明するのである。今までこみゆにけーしよんはいっぱいしてきたからしてきつと通じるのである。ふらんはぼんと手を叩いてわかった顔をしたのである。

「はーん。あんたバカなんだ」

全く通じておらぬ。吾輩はばかではないのである!

「ふらん、猫さんあつち行こ」

突然吾輩を抱きかかえて、ふらんの手を取ってこいしがまた歩き出したのである。い

きなりいつも動くから読めぬのである。

「ちよつ、ちよつと」

よく考えたら抱きかかえられているのはらくちんであるな。こうしているとあたりがよく見えるのである。お祭りのように夜なのに明るいのである。いっぱい人がいるのである、いや、背中にも羽があつたりするのであるから、妖怪が多いようであるな。

こいしが大股で楽しそうに歩くのである。何か歌も歌っているのである。

うむ？ ねずみの耳が見えるのである。あれはわかるのである。ナズーリンであるな！

「げつ。なんでまたこの猫がいるんだ」

ナズーリンもきれいな恰好をしているのである。首元に青い宝石が光っているのである。こいしが立ち止まって。

「あー鼠だー」

「鼠……？ なんでそんなのが」

ふらんをナズーリンがきつとにらんでいるのである。

「君が誰か知らないけど、いきなりずいぶん物言いだね。鼠をなめっていると死ぬよ」
ふらんがむつとしているのである。それからはつと笑ったのである。

「鼠なんてなめるわけないじゃん、汚いし」

「……へー。君。本当になめているね」

ナズーリンとフランが顔を近づけてにらみ合っているのである。いかぬ仲良くしななければいけないのである。しかしどうすればいいのであろうか、こいしよ、どうにかするのである……。

こいしがつかつかと歩いて行つてナズーリンとふらんの背中を押したのである。

「わっ!」

「うわっ!」

二人とも後ろから押されたようになっていゝからして、抱き合うようになってしまったのである。うむうむ。仲がいいのはよいことである。

「何をするんだ!! ていうか、君! すごい影が薄いな!!」

「こいし!! あんた意味が分からない行動ばかりしてんじゃないわ!」

「わー。今日はお星さまがきれいだねー」

そうであるな。いい夜である。吾輩はこいしに賛成である。こいしはわたわたと走り去つていこうとするのである。

「ちよ、ちよつと待てー!!」

ふらんも慌てて後を追うのである。ナズーリンはあつけにとられて吾輩を見るのである。

「お前の友達はいつも変なのばかりだな。……類は友を呼ぶというんだろう」

よくわからぬが友達がいいことであるな。ナズーリンは後ろを向いてどこかに行こうとするのである。待つのである。お礼をせねばならぬ……ううむ。足に頭を擦り付けて、ペロツとしたのである。

「ひいー」

いかぬ！ こいしを追わねばならぬ。吾輩は忙しいのである。これ以上ナズーリンと遊んであげる時間はないのである。すまぬのである。

「こらまで！ おまえ！ 毎回毎回!!」

待たぬのである！

せんせんふこくである

ぱーていは初めてかもしれない。

吾輩は走っていくこいしを追っていくのである。吾輩はなかなか足には自信があるのである。毎日にちゃんと毛づくろいをしていからして、マツサージは十分なのである。

けいねも足のマツサージは必要だと吾輩のにくきゆうをもみながら言っていたのである。吾輩はちゃんと覚えているのである。

こいしとふらんもなかなか早いのであるが、吾輩はそれを追い越していくのである！

「猫さん！」

こいしの声があるのである。吾輩はたったか走っていく。なんだから楽しくなってきたしまったのである。追われているのは楽しいのである。

なんだか少し高いところがあるのである。吾輩はぴよんと飛び乗ると、ここからはよくぱーていが見えるのである。むむ、やはりしつている顔が結構いるのだ。吾輩は紳士だからして、挨拶に行かねばならぬ。

「へっへー」

この声はこがさであるな！ 吾輩は振り向くのである。

……？

とんがりなぼうしを被った少女であるな、しかし、目にはお星様のような形のものにかけているのである。手には大きな傘を持つておる。……こがさであろうか、しかし奇妙な恰好である。

「猫さん！ いいでしょ、このサンングラス！」

さんぐらす？ を外すとペーとこがさが顔を出したのである。

違う姿であるな。おしやれは良いことである。

「ふふふ」

さんぐらすをまたかけるのである。黒のマントをつけているこがさは似合っているのである。

「ふふふ、ふははは！ 今日みんな私を怖がる日よ」

うむうむ。楽しそうなのはいいことである。こがさは大きく腕を広げているのである。吾輩もこう、真似してみるのであるが、2本足でたつのは難しいのである。

「何を高笑いしているんだ」

もみじであるな。振り向かずともわかるので振り向かないのである。

「お前ら……いつもいつも一緒にいるな。ところで小傘はなんだその恰好」

こがさはさんぐらすをちよつとずらして上目遣いでもみじを見るのである。

「いやーなんか最近さー、全然人里の人が怖がつてくれなくて……いろいろ考えたらこうなつたの」

「ふーん。血迷っているな」

もみじを振り向くと、着物を着ているのである。うむ似合っているのである。

「まあ、お前がどんな風になろうと私には関係ないしな。せいぜい恥をかかないようにすることだ」

「椀」

「なんだ」

「この写真」

こがさが懐から一枚の紙を取り出したのである。見えぬ。吾輩は見たのである。

「おま！ その写真！」

「へへへー。ほたてさんからもらったんだあ」

「はたてだ！ いや、あいつのことなんてどうでもいい、いやごほん。あの人のことはどうでもいい、その写真を渡せ」

「やーだよー」

しやしんであるか！ 吾輩にも見せてほしいのである。

しかし、こがさは逃げていくのである。もみじも追っていくのであるが、吾輩も走るのである。

パーティーの中を走るのである。みんなもみじたちを見ているのである。

「くそー！ 走りにくい！」

もみじが着物のひもを緩めて、足を出したのである。それから体をいぬのようにかがめたのである！

「唐笠風情が!! なめるな!!」

おお！ もみじがすごい速さで飛んでいくのである。地面がぼこって抉れて、ちよつと土がかかったから体を振って払わねばならぬ。

「うわー!!」

こがさを後ろから押し倒してもみじがしやしんを奪おうとしているのである。吾輩はまだ見ておらぬ！

「早く渡せ、コラ」

「ううー、暴力反対！」

「何が暴力だ！」

「ねー何してんの？」

こいしがいきなりやってきて写真を取ってしまったのである。

「あーかわいいー。猫さんも写っているね」

こいしが吾輩にも見せてくれたのである。これはいつぞやのもみじの恰好であるな。じーとみているといつの間にかこいしが吾輩をなでなでしてくれている。おお、気持ちいい。

「あれ？ いつの間にか手がない！」

「貴様！ どこに落とした！ あんなものが文なんかに見つかつてみる！」

こいしともみじは楽しそうに遊んでいる。吾輩はこいしの手でりらつくすしているのである。すると何となく知つているにおいがしたのである。吾輩が顔を上げると、紅い目をした黒髪のしようじよが見下ろしていたのである。

肩が見える黒いきらきらしたドレスを着ているのである。耳が長いのであるが、……しやめいまるであるな！ 思い出したのである。につこり笑つているのである。

「こんばんは、猫さんとお嬢さん。よかつたら私にもその写真を見せてくれませんか？」

「うんいいよー」

こいしがしやめいまるに見せるとにこにこしているのである。

「あ、あ……あ」

うむ？ もみじよおなががいたのであるか？。

「射命丸……様」

「椛、これ」

もみじはうつと行って後ろに下がったのである。むむむ。これはしやめいまるがもみじをいじめているのやもしれぬ。吾輩は間に入るのである。そうしようとしたら、こがさに抱きかかえられたのである。はなすのだ！

「ど、どーしたの猫さん！ 私のこと嫌いになつたの？」

うーむ。そういわれるとていこうできぬ……もみじよすまぬ。……うむ？ よく見たら周りに大勢集まつてきたのだ。みんな何かたべたり飲んだりしながら何か期待しながら見ているのである。

しやめいまるが言ったのだ。

「椛がかわいい写真を撮つたのなら私にも教えてくれればいいのに」

「……そ、それは無理やり。はたてが……」

「あー。なるほど」

もみじがまた後ろに下がったのである。しやめいまるがいうのだ。

「なるほどなるほど、じゃあ私のモデルにもなつてくれますよね？」

「……………」

もみじよあおいかおをしているのである。

「い、いや、それは。ほら、私の仕事ではありませんし」

「えー？ はたてにはこんなにサービスしてくれたのに、私にはないんですか？」

しやめいまるが手をカメラを持ったのだ。どこから出したのであろうか。

「いい写真は新聞に使いますから！」

「い、いや。わ、私なんかよりほら。周りを見てください！」

きよろきよろ。みんなきよろきよろしているのである。

「今日は幻想郷中からいろんなものが集まっているのですし、ドレスを着ている皆さんを撮った方が絶対にいいですよ」

「それ、いいわね」

うむ？ 今のはしやめいまるではないのである。

みんなが声の方を見ると、紅いドレスを着た少女がたたずんでいたのである。後ろにはさくやがいるのである、いや、吾輩はさくやの手の中にいるのである？ さつきまでこがさのもとにいたはずなのである！ 遠くでこがさの「ねこさーん!? どこー」と泣き声が聞こえるのである。

れみりあは吾輩をちらりと見て言うのである。

「今日はこの幻想郷を華やかにしてやろうと企画したパーティーだったけど、いいこと

を思いついたわ」

れみりあはみんなの前で空に浮かんで腕を組んだのです。

「どうせなら、お前たちと弾幕を含めて美しさを競うのも面白いわ。弾幕とドレスで一番美しかったものが勝ち」

おとみんな言っているのである。その中のひとり……まりさであるな！　が言ったのである。

「賞品はあるのか!?!」

「ええ」

れみりあは言ったのである。

「勝ったやつにはなんかいいものを送るわ!」

ざわざわしているのである。「ふわっとしている」「おお」「すごい」と聞こえてくるのだ。

うむ？　れみりは吾輩を見ているのである。

「その猫でもいいわ」

吾輩であるか。

「なーにー!」

こがさが出てきたのである。言ってやるのだ。

「猫さんは私のものよ！ 勝負してやるわ！」

こがさがなんかせんせんふこくしているのである。そうではない……

だんまぐ(っ)こである

「ふふふ。いいわ。今日こそ私がこわーい妖怪だつておもいらせてやるわー!」

こがさが吾輩にウインクして、傘をくるりと回したのである。するとばあつとあたり
に光る傘がいつぱい出てきたのである。きらきらと光つて周りに飛んでいくのである。
おお、きれいだである!

「弾幕(っ)こなら負けないわ!」

こがさが楽しそうである。周りのみんなもなんだか声を上げているのである。

おお? 空に一人飛び上がったのである。おつきさまを後ろにして大きな何かを振
りかぶつてまつすぐ降りてくるのである。

「いい?? 碇を持つてる!」

こがさがあわてて吾輩を抱き上げたのであるが、吾輩はもう少しみていたいのである
からして、こがさの肩に手をかけた手みるのである。

まつすぐにきやぶてんが落ちてくるのである!

「転覆! 沈没アンカー!!」

どーんと大きな音がして、きやぶてんがつかんだ大きな「いかり」で地面を叩いたのである。ごおんごおんと地面が揺れて、こがさが「わつとつ、村紗！ 手加減」っていつているのである。

「あはははー！」

きやぶてんががれきの上でいかりを肩にかけて笑っているのである。おお、おつきさまも楽しそうにみているのであるな。吾輩とおつきさまは長いつきあいであるからして、すぐにご機嫌かどうかはわかるのである。

きやぶてんだけじゃないのである。なんだかあたりでどんどこ音が鳴って、きれいな光が飛んでいるのである。たまにぴちゅーんと音がするのはなんであろうか？

「小傘さん！ まずは覚悟ねー！」

「ううう、村紗……」

吾輩はちゃんと知っているのである。きやぶてんが来ているのはたきしーどというのである。けいねの本で見たことがあるのである。なかなか似合っているのである。髪も後ろで縛っているのであるな。

「猫さん。つかまってねー！」

こがさが懐から紙を出したのである。なんであろうか。

——後光 『からかさ驚きフラッシュ！』！

こがさが傘を振るのである。傘に大きな舌がある宙を舞うとあつという間にあたり
に光の線がひろがっていくのである。うむ、まるで大きなひかりの傘の中にいるよう
である。

「本気ね！」

きやぶてんにひかりがいつぱいあつまっていくのである。吾輩はにやーと思わず声
を出してしまったのである。するときやぶてんが吾輩をちらつとみて、おやゆびをた
たのである。

ぴちゅーん。

なんかへんな音を出してきやぶてんが光の中に消えて、すぐにぼろぼろになって倒れ
ててしまったのである。こがさはそれを見て「あれ？ 簡単に倒せた。いや、ふふん。
私の実力ね」と言っているのだ。

「自分で砕いたがれきにあしがもつれたー」

なんかきやぶてんが言っているのである。

ぴかーとまた何か光ったのである。吾輩とこがさを両側から大きな光が挟もうとし
ているのである。

「ひゃー！」

吾輩を小こがさが抱いてくるのであるが、今そんな気分ではないのである。前足で

ほつぺたを押しやるのである。

こがさがびゅつと上に飛んだのである。吾輩も一緒に空にいるのである。

「ふふふ。ひよんなことで今までの恨みを晴らせそうだね」

なずーりんも空を飛んでいるのである。なんであろうか、へんてこな棒を持っているのである。吾輩はこがさに抱かれたままみると、なずーりんはその棒を振り回しているのである。

——棒符 ナズーリンロッド！

また光が両側からやってくるのである。

「わわわ」

こがさがあわててよけているのである。頑張るのだ。吾輩はこう、手をなめて、毛並みのめんでなんすをするのである。

「ははは、逃げてても無駄だよー」

なずーりんがわらっているのである。

「あ」

こがさの声がしたのである。その瞬間吾輩は宙に浮かんだのである。おお、落ちていくのである。

「ああー！！！！ ねこさーん！！！！」

こがさの声が遠くになつていくのである。吾輩はまつかさまに落ちていくのである。それをしゅつと抱っこしてくれたものがあるのである。なずーりんであった。

「……あ、危ないじゃないか！　ちゃんとしがみついていないと落ちてしまうぞ！　すまぬのである。」

「まつたく」

「ごめん」

こがさも近づいてきて、吾輩はなずーりんからこがさに空中で渡されたのである。む？　こがさの目がさんぐらすの奥できらつとひかったのである。

「チャンス！　水滴払いスピナー！」

こがさが吾輩を片手に大きく傘を回したのである。青い、おみずのような光がなずーりに飛んでいくのである。

「ひ、ひきようだぞ」

ぴちゅーん。

なずーりんが目をぐるぐる回しているのである。こがさよ！　ひきようはいかぬ。

「二連勝！」

いかぬ。これはせつきようをせねばならぬ。こがさよここに座るのである。けいねも説教の時にはよくすわるように言うのである。しかし、浮きながら座れるのであろう

か……？

「見ていましたよー！」

今度はおそれからからおつきなげんこつが降ってきたのである。桃色の煙みたいである。こがさはわーつと逃げるのである。あたりに桃色の煙がもーとしてきて、そこから青い髪的女性が腕を組んで立っているのである。

紫のどれすをきいているのであるな。肩が出ているのはよーむのと似ているやもしれぬ。両手にはなんであろうか、何か丸い円のようなものを持っているのである。あれは遊ぶと楽しいやもしれぬ。

「小傘さん。村紗にナズーリンとうちのものをよくも倒してくれたわね。今度は私が相手よー！」

「う、う、さ、三連戦」

こがさが疲れているのである。はあはあと息を吐いているのである。ううむ、吾輩は何か手伝えないであろうか。とりあえずあれはいちりんであるな。吾輩は挨拶をしたのである。

「あ、あのときの猫さん！ ……あ。こ、こがささん、攻撃できないからひ、卑怯ですよー！」

何かよくわからぬが何か動揺しているのである。

「と、とりあえず。逃げよ！」

こがさがびゅーと下に降りたのである。

「あ、待って！ うわ」

おお、何かわからぬが追ってきたいちりんが大きな光に飲み込まれたのである。こがさがうしろをみると「流れ弾……いや流れましたーすぱーく」と言っているのである。

いちりんを飲み込んだ大きなひかりは七色で虹がそらにのぼっていくようである。お月様にも届くやもしれぬ。うむ？ ということはあの中に入ったらお月様に近づけるやもしれぬ。……いちりんはお月様に会いに行つたのであろうか？ うらやましいのである。

「なむあみだぶつー」

こがさよそれはなんであろうか。

地面に降りるとあたりでみんなきらきらと光ったりして遊んでいるのである。吾輩も地面に降りてくしくしと顔を足でかくのである。こがさは傘を杖にしてぐったりしているのである。頑張るのである。

「猫さん……よーし！ この調子でこの弾幕ごっこに勝ち残ってやるわ！」

「ぎゃー」

！ びつくりしたのである。なんか飛んできたのである。こがさと吾輩の前に誰か

倒れて、めをぐるぐる回しているのである。来ているドレスがぼろぼろであるな。

「響子！ 誰にやられたの？」

こがさが抱き上げると、腕の中で少女が指をさすのである。おお、こがさの仲間である。一目見てわかるのである。なんといつても傘をさしているのである。

にこにこしながらこちらに近づいてくるのであるな。あかーいドレスで白いうわぎをつけている緑のかみのじよせいと遠くから見てもわかるのである。

「う、うとうう」

こがさが涙目になっているのである。どこか痛いのであろうか？ 吾輩がなめてもいいのである。

「こんばんは」

近づいてくるとじよせいが挨拶をしたのである。挨拶は大切である！

おんがくはたのしくするのである

……歩いてくる姿を見て思い出した！ あれはゆーかであるな。

お祭りの時にいろいろと一緒にまわったことが昨日のことのように思い出せるのである。うむうむ。よくよく考えたらゆーかもこがさも同じようにかさをもっているからして、きつと友達なのであろう。

「こんばんは。猫さん。お久しぶりね？」

みゃー。

吾輩はちゃーんとあいさつをするのである。……こがさよ、こがさも挨拶をせねばならぬ。そういうことをちゃんと吾輩が教えてあげなければならぬのやもしれぬ。みゃーと吾輩はこがさの足に頭を擦り付けながらあいさつをするように言うのである。

「……ああ」

こがさがすぐく汗をかいているのである。挨拶が苦手なのであろうか……？ 心配いらぬ。にゃーとあいさつが苦手であれば、吾輩たちはお鼻をくつつけてあいさつすることもするのであるからして、こがさもゆーかにしてくるのである。

「なんだろう、あいつ、すっごく強いような気配がする気がするわ」

こがさがなんかいいながら後ろに下がるのである。ゆうかはえがおで近づいてくるのである。笑顔はいいことである。

「吸血鬼の思い付きでいきなりのことだけど、こんなことになってあなたも災難よね？
えっと、傘のおばけさん」

「……多々良小傘よ」

「ふーん」

ゆうかが指をパッチンとしたのである！ あれはすごい。吾輩もやりたいのである。こう手を、こう、ペロペロ。はっ、なんとなく手を見たらなめてしまったのである。

いつの間にか吾輩とこがさは花畑にいたのである。白い花がいっぱい咲いている。お月様の光をですごくきれいである。しかしゆうかが傘をゆっくりふると光る花びらが舞い始めたのである。

「……猫さん」

こがさが吾輩をこわきに抱えたのである。遠慮がないのであるな。

「逃げよー」

こがさが走り出したのである。周りの光る花びらが渦を巻いて降りてくるのである。まるで光のトンネルであるな。きらきらしてきれいだである。

「わーーーー、ひいひいーーーー！」

こがさがうるさいのである……。ふわりと浮いて、びゅーんと飛び始めたのである。花びらも追ってくるのである。こがさが物陰に隠れるとどーんと音がして花びらが突っ込んできたのである。

「はあはあはあ。に、にげきった」

こがさが首元をばたばたしながら言っているのである。疲れているのである……。吾輩は首をなめてみるのである。

「ひっ」

吾輩を見てくるのである。ちよつとほつぺたが膨れているのである。なんで怒っているのだろうか……。む、そんなことより空から降りてきたのである。

「……こんばんは、おひさしぶり」

「ひっ」

傘をもつてゆつくりと地面におりてきたゆーかが言ったのである。久しぶり……。これは挨拶であるな、さつき会った気もするが、何度も挨拶をすることはいいことである！

こがさが涙目でがたがた震えて、吾輩をだっこしているのである。ううむ。よくわからぬがゆーかよわいものいじめはよくないのである。

「弱い者いじめ良くありませんよ」

おお、あの妙な金色にむらさきを混ぜたような髪をしているのは、聖であるな！ ひさしぶりである。聖はいつものかっこうではなく黒いどれすとひらひらのすかーとをはいているのである。その後ろには金髪の少女がいたのである……たしか、星……じょーであるな。

聖が言ったのである。

「私の弟子である、一輪に村紗、それにナズーリンまでやられたと聞いてまさか巫女の仕業かと驚きましたが、貴方ならさもありなんといいたところね。……その上に小傘さんまで手にかけてようとは……」

「……」

ゆーかがこがさを見たのである。こがさは「え、えへへ」とか言っているのである。さっきの三人はこがさが倒した気がするのであるが……。ゆーかはにやりと笑ったのである。

「へえ、もしそうならどうだというのかしら？」

「弟子の仇を取らせてもらうわ」

じょーが「いや、死んでませんよ」と言っているのである。……吾輩の目の錯覚であるな、くしくしするのである、聖とゆーかの間空間がゆがんで見えるのである。

「と、とりあえず猫さん、い、今のうちに逃げよっか」

こがさが吾輩を掴んでまた走り出したのである。吾輩たちの後ろでドーンと大きな音が立て続けに起こって、大きくてきれいな光がとんでいくのである。

☆

どんどこ崩れたばーていー会場の中庭に吾輩たちは戻ったのである。がれきの間に隙間があるの遊びがいがありそうである。あとで探検してもいいかもしれぬ。とりあえず、こがさが迷子にならぬように今は見張っておかねばならぬ。

「やってらんないわー！」

ぐびぐびと何か飲んでいる赤毛のしょうじよがいたのである。なんとなくゆーかと似ているのであるな、その後ろに赤と白と黒の少女がしゅんとしているのである。

「なにかしらあれ」

さつきこがさがばーていーの会場に残っていた串をもぐもぐしているのである。吾輩もやまめを食べさせてくれたのである。食べた後に口を舌で舐めると意外と味がするのである。

「どうしたのー?」

赤毛がきつとにらんできたのである。

「どーしたもこーしたもないわー！　いきなり予定が変わっちゃったから、今日の演奏会が弾幕ごっこになっちゃった！　どんぱちしているし、飲まないとやってられないわ。リリカもメルラン、ルナサもやることがないし」

赤毛がぐびぐびと飲んでるのである。ネクタイをしているのであるな！　吾輩それを知っているのである。3人組はリリカとめるらんとるなさというらしいのである。難しい名前であるな。

楽器を持つているのである。吾輩はそれを扱うことはできぬが、なんとか音を鳴らししているのを見たことがあるのである。いい鳴き声をするのである。

どーん、

またどこかで音がしたのである。空を見るとおーきな花火のようなものはじけたのである。きれいだであるな。

「たーまーやー！」

こがさが嬉しそうに言うのである。にやーと吾輩も言うておくのである。

「はー。今日はとりあえず、演奏はなさそうね」

赤毛が言うのである。吾輩はその膝の上に載ってみるのである。

「わー！　何?!　この猫」

よくわからぬが吾輩は聞くのである、吾輩はじーと赤毛を見てみるのである。なぞー

りんなどとは違ってひっかけるところがあるからして、前足を置きやすいのである。「もしかして猫さん。演奏聞きたいの?」

こがさが言ったのである。赤毛が、はあ?と吾輩の目を覗き込んできたのである。それから抱っこして。じーと見つめあうのである。

ふつと赤毛が笑ったのである。それから吾輩のほつぺたにちゅつとしたのである。吾輩もなめるべきかもしれぬ! しかし赤毛は吾輩を地面におろして、両手を握りこんだのである。

「よーし。どうせなら思いっきり、ド派手な演奏をしてやるわ! ドンパチしている連中にも負けないくらいにね! あなたも聞いていくでしょ!?!」

「……」

「なんでふくれっ面なの?」

こがさがふくれっつらなのである! ぶにぶにしてみたいのである。

「私の猫さん」

「! あはは、ごめんごめん。そういえばまだ名乗ってなかったわね。私は堀川 雷鼓よ。たぶんあなたもそうだと思うけど、付喪神よ。お仲間さん」

らいごは立って、ウインクするのである。白い上着を着ていつの間にか後ろに三人も立っているのである。

「さあ。夜のクライマックスに向けて思いつきり暴れてやるわ！ 楽しんでいってね！

なすびの付喪神さんと猫ちゃん！」

こがさはなすびであったか！

「ち、ちがううう!!」

こがさの叫びがうるさいのである。

おさけをのむのである

「さー、ノっていくよー！」

らいこが叫んだのである。

周りにたいこがいっぱい現れて、とんとんだんとりずむに乗っているのである。らいこは大きなたいこに乗っているのであるな、ううむ、空を飛べるたいこ……がんばりやさんであるな……吾輩も頑張れば空を飛べるやもしれぬ。

だんまくごっこできらきら光るよぞらでらいこは刻むのである。

それに「りりか」と「めるらん」と「るなさ」も演奏を始めたのである。楽しそうであるな。こがさよ、こがさもなんかできぬのであろうか？

「え？ 何その目。私……私になんか期待している……!? 楽器とはできないけど……猫さん！」

ぱあつとこがさは傘を開くのである。うむ、吾輩はそこにぴよんと乗るのである。おんがくが聞こえる中で傘の上をくるくる歩くのは初めてであるな。

「よーし『大輪 からかさ後光』！」

光の中に傘がいつぱい現れたのである。吾輩はそれにびよんぴよんと乗っていくのである。地底いらいであるな！

「おー！ いいね。リズムを上げるよ！」

らいこが言うのと音楽が早くなったのである。それを聞いて、なんだなんだと段々とひと……ようかいもいつぱい集まってきたのである。ようむもふともみじもあやも……みーんなである。全員のなまえを言っていてはおれぬ！ いつぱいみんなである！

「わっ」

こがさが足を滑らせてわがはいも足が滑ったのである。おお、落ちそうになるところをキャッチされるのである。みればこいしがにこつと笑っていたのである。

いつの間にかこいしがやってきて吾輩を前足をやさしくつかんだのである。

「ねこさんねこさん♪」

そのまま傘の上でだんすを踊るのである。わがはいはこれで2度目であるな。

「そーれ！ ふらーん！」

!! こいしがわがはいを投げたのである！ 大変である。着地をせねばならぬ。下にはびかぴかの羽をはやした……ふらんがいるのである。

「な、こ、こつちくるな」

来るなど言われても吾輩はくうちゅうではどうしようもない。風に頼んでほしいのである。

だつこ。

ふらんはやーんとつかんでくれたのである。勢いあまつてそのままふらんもくるくる回るのである。これもだんすであるな。

だからみんなの前でふらんをえすこーとするのである。吾輩は前足を出すとどこからこいしが言ったのである。

「ふらん。くるくる、くるくる回って」

「……なんで、こんなところで」

ふらんもぎこちなくおどるのである、ここはこう、こうである。周りからは応援が聞こえるのである。

「あーもう」

ふらんも投げたのである。しかしわがはいはちやーんと着地をするのである。

「」「おおー！」

はちはちはちと拍手が聞こえるのである。むむむ、吾輩は紳士であるからして簡単に

は喜ばぬのである。きちつと姿勢を整えねばならぬ。きまつたのである。

今日はいっぱいだんすのえすこーとをしたのである。これはがんばったのである、けーねにやまめをもらつてもいいのやもしれぬ。

吾輩はそう思つてふいつと走り出したのである。

「あ、猫さん！」

後ろでこがさの音がするのであるが、あとでいいのである。吾輩は壊れたいろんなところを走つてけーねを探してみるのであるがおらぬ……。

遠くでは楽しい気な音楽とこえが聞こえてくるのである。おそらくこ達がもつとがんばっているであろう。

何となく今日は疲れた気もするのである。ここで休むのである。ふあーとあくびをしてしまったのであるが、だれにもみられてないことを吾輩はちやーんと確認するのである。すこしおながが減つた気もするのである。なにかないのであるか？

吾輩は歩き回るとつくえ……だつたようなものがあるのである。さかながおいであるな！ なんのさかなかわからぬがもぐもぐするとなかなかである。やまめといひ勝負ができるやもしれぬ。それにしてもだんまぐごっこでくずれている隙間に潜り込むのは結構楽しいのである。

「おーい」

むむ？ 誰かが呼んでいる気がするのである。誰であろうか。

吾輩はあたりを見回してみるのであるが、なかなか見つからぬ。そうであるな、高いところに上つてみたらいいのである。あの樽がいいのである。ひよいと乗ってみると。あしがぬけたのである。吾輩は割れた樽の中にドボンと入りこんでしまったのである。中には赤いみずがいつぱい入っているのである。

……

もがくのである。

うえもしたもわからぬ。

いきもできぬ

……わがはいはなんとか外に出ようと思うのであるが、でられぬ。
くるしいのである。

……。

何かの音がするのである。

水音がしてわがはいをつかむなにかがひきあげるのである。

「……してんの?!?」

だれであろうか。目の前に誰かたっているきがするのであるが……よくみえぬ。

「何してんのよあんた?!?」

そこにはしんばいそうなかおをした『みこ』がいたのである。吾輩はみやーというとはあーと息を吐いてへなへなと座ったのである。

「心配させるんじゃないわよ。こんなぼろぼろになったレミアアの屋敷のどつか逃げたら困ると思ったから追いかけてきたら……」

ぎゅつとみこはだっこしてくれたのである。きれいなどれすに吾輩についた赤い水がついてしまっているのである。

「さげくさい。あんた」

すまぬのである。みこは文句を言いながら吾輩をなでてくれたのである。

吾輩を地面に下ろしてくれたのであるが、おお、ううむ、まっすぐに歩けぬ。なんであろうか？

「……………帰るわよ」

うむ？

「猫が酒に酔っていいことなんてたぶんないわ」

☆

お月様がでているのである。吾輩は巫女にだっこされながらそれを見るのである。

「あんたさあ、いつもうちの神社に来るけど、なんで来るの？」

りーんりーんと虫も演奏しているのであるな。

「聞いている？」

おお、すまぬのである。吾輩が神社に来る理由であるか？なぜであろうか、なんとなくである。

「そう思ったらふらつといなくなったり、普段あんたつてどこに行つてんの？」

いろんなところに行つているのである。かわに……………やまに……………てらに……………あといろいろいっぱいであるな。吾輩は顔が広いのである。

「みゃーじゃわかんないのよ？」

吾輩はしっかりと答えたのであるが、こみゆにけーしよんは難しいのであるな。

しばらくするとじんじやに到着したのである。みこは吾輩を布でごしごしした後、水をくれたのである。

「二日酔いには水がいいって思うけど、猫の場合どうなのかな？」

みこもねまきに着替えているのである。髪を下ろしてふとんを敷いているのである。吾輩はどこで寝るべきであろうか。今日の寝床を探そうと思つたら、みこに捕まったのである。そのままふとんに連れていかれたのである。

「あんたさ、本当に大丈夫？」

みこは心配そうに聞いてくるのである。

「気分が悪かつたらすぐって……いつても猫はなんにも言えないか」

じつとみこが吾輩を見てくるのである。

「あんたがさいなくなると寂しい気もするわ」

吾輩もみこがいなくて寂しいのである。吾輩はふとんのなかでまーるくなつてすやすやと眠るのである。そういえばぱーていはどうなったのであろうか。きつとみんな楽しんでくれているのである。

みこは吾輩の背中をやさしくなでてくれているのである。そうしてくれると今日の

楽しい思い出がずーとゆっくり、思い出すことができるのである。

「猫の医者とか……いるのかな」

何かをみこが言っているのであるが……吾輩はだんだんと眠たくなってきたのである。うむ、ふとんの中はあったかいのである。

おやすみなのである。

私の神社によく来る猫

私の神社にはよく来る猫がいる。

縁側に座っているといつの間にか足元にやってきてじつと見てくる。餌なんてやらないって言っても、その場であくびしたりするふてぶてしい奴。

今日は単なる気まぐれで膝の上ののせてやる。こいつ顎を撫でるところごろごろと喉を鳴らすことがある。

ごろごろ。

今日はその日みたいだった。

「あんたさ、いつもどこからきてんの?」

それには「にゃー」と答えてくる。

「まあ、猫に言葉なんてわかるはずもないか」

すくつと猫が立ち上がってじつと見てくる。丸い目が少しかわい……いや、なんでもない。

頭をなでてやると気持ちよさそうに目を細めている。

みゃー。

何が言いたいのかさっぱりわからない。たまに猫って話しかけているんじゃないかって思うこともあるけど、そんなのは妖怪の猫。こいつはただの猫だからそんなのはいない。

「お、今日はお揃いなものね」

見れば白沢がいた。上白沢慧音という人里で寺子屋をやっている物好きなやつ。神社に来るなんて珍しい。

「お揃いつて何よ」

「いや、その猫」

私かなでている猫を指さす慧音。ん？ こいつ慧音をみて立ち上がった。なーおつて鳴く。なにそれ、挨拶のつもり？ ふふ。

ん？ 慧音が私を見て目をぱちくりさせている。

「なによ？」

「いや……巫女にもそんな優しい顔ができたんだなって」

「……は？」

はあ？ この妖怪は何を言っているのだろうか。いつ私がそんな顔をしたのだろうか。

……なんか慧音が横に座ってきた。

「こんにちは猫さん。今日は神社に泊まるの?」

「あんたも知り合いだっけ? こいつ、意外と顔が広いのよ」

「ああ、知り合い」

慧音はそういつて私の膝から猫をひよいととると自分の膝に乗せる。

「この子はあごの下が好きなんだ」

「知ってる」

「……へえ」

ズゴロズゴロ。

たわいのない会話の途中でも猫は気持ちよさそうに顎を撫でられている。

「この子はたまに言葉がわかるんじゃないかって思うような時があるんだ」

それには同感。さっき思った。それにしてもあごの下といい思うことと言い、結構みんな同じように思っているのかもしれない。

それにしてもいい日だ。暖かくてただ座っているだけで気持ちがいい。すこしうとうとしそうになる。

見れば猫もあくびをしてから手をペろペろなめている。猫はきれい好きというけど、

こいつの毛並みはきれいだ。そう思つて手を伸ばすと、私の手をなめてくる。ざらざらした猫の下特有の感触。

「こいつつて名前とかあるのかしら？」

ふと思つた。ただの野良だから、いつもてきとうに呼んでいた。

猫がじつと私を見て、みゃーと言つた。何それ。

「あんたの名前はにゃーつて言うの？」

じーつと見てくる。何か言いたげな顔のようにも見えるがふつと私は笑つてしまつた。なんでだろう。

「あはは」

「ふふふ」

慧音と笑つた。彼女は猫を抱っこして言う。

「この子は紳士だからな。意外とかっこいい名前があるのかもしれない」

「しんし？　なによそれ」

「いや、いつもちゃーんということを聞いてくれる時もあるから紳士のようにしなさいつて教えている」

「ますます訳が分からないわ」

猫の奴もなんかふんぞり返っているように見える。

「じつはうむなんて思っているんじゃないわよね」

私はそう言つて猫のおなかを触る。ふさふさで心地よい。でも猫は少し身をよじつてとんと縁側に降りた。それからひよいと奥に入つていく。私は焦つた。

「あー！　こら。勝手に上がり込むんじゃないわよ」

どたどたと追うと猫もしゆたたと逃げる。コラまで。いつの間にか寝室に来てまだ畳んでなかつた布団の中にさつと猫が入つた。私はふとんをばさつとはねのけると猫はそのすきに布団の間から走り去つていく。

「すばしつこい！」

そんな感じの望まない追いかけてつこをしてから、やっと捕まえたときには少し疲れた。私は猫を抱いて縁側に連行する。そこでは慧音が笑つていた。

「なかなか愉快ね」

「……あー？」

「そんな顔しないで」

慧音はそう言つて立ち上がった。

「そろそろ帰るかな」

「そもそも何をしに来たのよ」

「……お参り?」

少し考えてとつてつけたようなことを言った妖怪をじろつと見る。

「お賽銭は?」

「現金ね」

くすくすと慧音は笑う。私ははあとため息をついてなんとなく猫の肉球をくにくにと指で触る。みゃーみゃーこの子は言っているけど、逃げた罰だ。猫はくすぐったりでさるのかよくわからないから、こうしてやる。ほらほら。……いや、これ嫌なのだろうか? よくわからない。

「それじゃあね」

慧音は本当にそれだけで帰っていく。散歩がてらに来たんだろうとおもうけどちやんとお賽銭を入れていきなさいよ! それにしても今日は暇だ。慧音が帰ってから縁側にごろんと横たわる。あ、これ気持ちいい。神社の庭を見ながらあったかい中で少しずつ、眠りに落ちていく……。

いつの間にか猫も横で丸くなっている。私はその背中をなでながら……くう……。

☆

ここはどこだろう。

私の前を一匹の猫が歩いている。

その猫は

朝も

昼も

夜も

楽しそうに前を歩いていく。私はその後ろを何となくついていく。

山の中や川に落ちそうになつたりしたり。

ああ、ここはどこだろう。いや、一度行ったことがある、地底の底だ。

温泉の湯けむりがもうもうと立ち込める。鬼や妖怪が楽し気に笑う声がある。

そうおもったら花火が上がった。これは人里のお祭りだ。出店が多く並んで、楽し気に大勢が行きかう。

次の瞬間には夜の空の中……星空の下を歩いている。

きれいな星の瞬く中をあつ猫はどんどん歩いていく、でもたまに振り返つてにやーと私がちゃんとしてきているかを聞いてくる。

聞いてくるって言い方はおかしいかもしれないけど、まあいいや。

「どこに行くの?」

そう言うとき猫は言う。

——どこでも吾輩のにわである!

私は耳を疑った。猫がしゃべったように思った。でも足元に来た猫が見上げてくる。ふっと笑う。

「あんたさあ、何よそのしゃべり方」

☆☆

はっと目を覚ます。あれからどれくらい寝ていたのだろうか。いつの間にか猫のふさふさのしっぽが顔の前にあつた。それに鼻をくすぐられて起きたみたい……あー変な夢を見た。

猫はすやすやと眠っている。寝顔は結構……あー、うん。……かわいい。

頭をなでるとすりすりとこすりつけてくる。寝ぼけているのだろうか? そう思っただけど、猫は目をぱちりと開けて立ち上がって体を伸ばす。猫の体って柔らかいっていつも思う。

猫がぱつと縁側から飛び降りる。それからたつたと神社の鳥居に向かって走り出した。

どこに行くのだろうか。

だんだんと猫が小さくなっていく。なんでかわからないけど、その時不意に寂しさを覚えた。いつの間にか靴も履かずに縁側から飛び降りた。

小さくなっていく猫の背中に向かって私は言った。

「どこに行くの？」

猫は遠くで振り返った。

少しだけ私のことを見てくる。それからにゃーと返事をするように言ってくれた。……言ってくれた？ 変な感じだけど、でもあの夢と同じで、安心した気がする。

猫は走っていく。そうして鳥居をくぐって見えなくなった。

ざああと風に揺られた木が鳴る音がする。

……でも、どうせまたやってくる。あいつは食いしん坊で気まぐれな奴だから。

今日くらいは人里でやまめを買ってやってもいいかもしれない。

あいつは今日はどこで遊んでくるのだろう。私はすでに背中の見えなくなった猫に向かって語りかけた。

「いつていつしゃい」

あんまり遠くには行かないようにしなさいよって、続けようとしてやめた――